

星と楓の異世界戦記 (旧 2019年打ち切り)

ミュラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如として転移した科学文明国家

地球とのつながりを一切失ったことで経済・金融・貿易・外資系企業・観光業・サービス業・ITなど多くの企業に大打撃を受けた。

転移したことで現代国家が持つ戦力も世界中へ展開していた戦力を失ったことで膨大な戦力を再建する

星条旗とメイプルリーフフラッグは何か国家を維持しようと外交方針を決定し、異世界国家との外交を繋げていく

しかし、そこで待ち受けるあらゆる考え・文化・価値観・常識など異なる世界

転移・魔法・魔獣・侵略など異世界の荒波に両国は飲み込まれていく・・・

目次

1 超大国と異世界との接触

2 未知の国家

3 魔法

4 交渉

5 戦乱

6 凶行

7 派兵

8 ロデニウス沖海戦

9 真相か、嘘か？

10 クワトイネ救助作戦

11 未知の軍団

12 砲弾の咆哮

1

23

49

67

92

113

132

146

173

190

210

228

13 獄炎

14 異世界王国の陥落

15 諜報員

16 ロウリア国復興

17 異界の漂流国家

18 皇族が住まう国家

19 迫る悪意

20 フェン軍VSパーパルディア軍

374

21 海の狩人

22 獣人国家

23 フェン沖海戦前編

24 フェン沖海戦後編

248

264

283

300

319

343

360

390

410

426

445

25	樽	467
26	侵略	493
27	方針	536
28	機械文明国家	556
29	星の戦士	586
30	それぞれの思案と事情	606
31	試作兵器	627
32	魔王軍爆誕	642

1 超大国と異世界との接触

ある日突如、当たり前のように使っているインターネットや回線、通信が全て消失するなんて想像したことがあるだろうか？

世界中から発信される電波や信号、インターネット回線が全て消失するなど、強力な太陽嵐による地球規模で発生した磁場か、核兵器による第三次世界大戦が勃発した時くらいだろう。

だが、全ての電波や信号、回線は消えることは必ず前兆が起きるが、前兆もない。

ましてや国家間で使用されるホットラインや軍事通信も同時に消えるということは繋がっている『相手』が存在しないか、だ。

そんな非日常的なことは起こるはずもない出来事が発生し、突如として起きた、それは星条旗を掲げる超大国を中心とする北米大陸国家群

『アメリカ合衆国』と『カナダ連邦』であった

某所

『こちら防空管制センター！全ての衛星からの信号が消えた！』

『こちら海軍司令部！世界中に展開している駐留軍およびNATO同盟国からの信号途絶！！』

『こちらジョンソン宇宙センター、ISSの信号が消えた！』

アメリカ各地から届くホワイトハウスでは鳴り止まない電話とトラブルで大混乱になつていた。

突如、世界中からの信号や衛星からの回線、ホットラインすら切れてしまった上、民間企業にも証券・金融・通信・航空関係・船舶関係・電話などにも影響が大きく、アメリカ中が大パニックとなつていた。

『どうなつているんだ、世界中からの信号が消え、衛星からも何も反応がないなんて…』
『わからねえ…民間企業や民間人が使用する通信や回線だけじゃなくて軍部や宇宙センターにまで同時に消えるなんてあり得ないはずだ…』

『ま、まさか！ロシアか中国の新型兵器か！それかサイバー攻撃か』

『いや、それもあり得ない。いくらロシアや中国のサイバーチームが優秀でも世界中の通信や回線、ホットラインまで遮断することはアメリカ合衆国でも不可能だ。』

『じ、じゃあ、太陽嵐とかか？ほら、太陽フレヤとかあるだろ』

「それも有り得ない、そもそも太陽フレヤが発生する兆候が必ずあるし、それは数年太陽活動に何も報告には上がっていない……だが、もしかすると」

「な、なんだ？」

「これはあくまで推測だが……そもそも通信や回線そのものが消えるということは今、受信しているカナダ以外の国家が消滅したと言った方が正しいのかもしれない」

「おいおい……やめてくれよ……エイプリルフールはまだだぜ……」

「ならば、この事態をどう説明する？」

オペレーターが黙る、誰もが理解していないのは当たり前だから、それを調査しているのが現状であった。

未曾有の出来事にアメリカ政府や国内は大混乱になりながらも何とか対応していた。突如として通信や信号、ホットラインすら消失し、ニューヨークのウォール街では金融・証券関係の企業も突如の通信途絶に混乱状態となった。

ロサンゼルス・シカゴ・ボストンなどの大都市では混乱に乗じて火事泥棒によって少なくない被害も出ていた。

唯一カナダ連邦とデンマーク領グリーンランドとハワイ諸島しか連絡がつかなかった。カナダ連邦でも同様、混乱状態となっていた。

更にアメリカ合衆国の政府関係者と軍関係者を恐怖のどん底へ陥れたのは世界中に駐留していたアメリカ軍とアメリカNATO軍、他国へ派遣していた戦力が全て消失したことだ。

消失した戦力は総兵力39%、海軍力35%、陸軍力32%、空軍力12%という決して少なくない戦力が消失した。

消失した戦力は痛い、主力部隊や精鋭部隊がアメリカに居たため一緒に轉移したことがまだ救いだとしても、この出来事にアメリカ軍関係者は卒倒した。特に4個空母打撃群や複数の戦略潜水艦を失うことが痛手であった。

アメリカ政府は未曾有の騒動に急遽危機管理委員会を開き、調査部隊を編成した。

未曾有の轉移に対応するために国内の混乱を治めるために直ちに州軍が出動し、暴徒化する市民や経済打撃と混乱、あらゆる面で制御が難しい状態であった。

更にアメリカ・カナダは轉移したが、本来存在するはずのメキシコやキューバも消失し、元のメキシコやキューバには海しかなかった。

国境付近のアメリカ軍兵士も驚愕した、目の前に普通に存在していたメキシコ領土に濃霧が発生したと思えば綺麗さっぱりなくなつたからだ。

その風景は決して自然が作り出すことができないう光景が広がり、まさしくメキシコの国境線で綺麗に切られ、断層が海底まで見えるというのだから。

その影響でかつて存在していた地層が消失することで、小規模であるが、国境付近で地滑りや土砂崩れが発生した。

アメリカ政府は急遽、南アメリカへ偵察機や潜水艦で調査するがその場所にも南米は存在せず、更なる調査を進めるために調査部隊へ早期警戒機や哨戒機なども組み込み、発信させるので合った。

とにかく事態の收拾に情報が集めることが先決だ。
事態を重く見た政府は西方、日本国へ向けて調査隊の範囲を広げるのであった。

青く広い上空を飛ぶ大型飛行機、灰色の機体に星のマークが付いた主翼、胴体の上には黒い円盤のリーダーが一定の速度で回る。

アメリカ空軍が発進した早期警戒機「E-7」だ。

西方方面にはE-7の他にも潜水艦、哨戒機なども動員して搜索され、その中でもコードネーム『ランドワン』は本来であれば日本領海小笠原諸島上空を通過する予定であつたが、一向に離島や陸地、小島さえ発見できずにいた。

早期警戒機「E-7」は2027年アメリカ空軍で開発された新型早期警戒機

本来であれば日本領海へ侵入したら日本国か自衛隊が通信してくるはずが、全く無音であった。

これに搭乗員や調査員は不安を隠せず、緊張した表情で目の前の海を眺めていた。

早期警戒機「E-7」

「H Q、こちらランドワン一番機、指定された海域を調査しているが、陸地は見えず、何もなし」

『H Qよりランドワン、了解、その辺りを旋回した後、基地へ帰投せよ』

「了解、通信アウト」

「全く大陸は見えないですね…本当ならヨーロッパ大陸が見えるはずなのに、何もなし…」

「ああ…いったいどうなってやがる？同盟国や海外へ派兵した味方との信号や衛星からも通信が切れちゃったし、大陸は消えるわ、わけがわからねえよ」

「…とにかく、この海域もあと少し飛行して、基地へ帰ったら、飲みましようよ」

「ああ、バーボンか、ウイスキーあたりあればいいのだがな…」

「ええ」

と機長と副機長が話していたとき、調査員から通信が入った

「レーダーに反応があり！これは…陸地……陸地です！陸地がありました！！！！」

「！それは本当か！」

「はい、そのまま飛行してください！H Qへはこちらで伝えておきます！」

「よし、フルスロットで行くぞ！エンジン全開！」

E-7はジェットエンジン特有の高音をあげながら目的地へ飛行する。

ロデニウス大陸北東部

空に浮かぶ雲が晴れる頃、目の前に広がる緑と茶色の陸地、それも広大であった。

そんな光景に思わず搭乗員や調査員は歓喜した。

「見えた…見えたぞ！陸地だ！やったぞ！」

「こちらランドワン、H Q陸地を発見した、陸地を発見した！」

『こちらH Q、それは本当か？誤認ではないな？』

「間違いない、それもかなり大きい」

『了解、ランドワンはそのまま大陸の上空を飛行し、調査せよ』

「ランドワン、了解」

E-7は陸地へ真っ直ぐ飛行するとレーダーに小さな反応が出た。

「！12時の方向に飛行物体を発見！IFF反応なし！これは…飛行機なのか？」

「どうした？まさかスーパーマンでも出たわけでは無いだろ？」

「いや、違う、速度200キロ以上で飛行中、真っ直ぐ本機へ向かっています！」
「200キロ？プロペラ機かヘリコプターなのか？民間機の農薬散布機でも飛行しているのか」

「いや、わからない。レーダーにははつきり映つてはいるのですが、あまりの小型に照合する機種がありません…」

「なるほど…よし、近づいてみよう、それでわかるだろう」

レーダーに映る目標が映るまで飛行すると徐々に視認可能圏内となった、目標の全貌が映ってきた。

それはアメリカ…現実世界では決して見ることができない架空の生物

大きな恐竜を連想させる主翼にトカゲのような尻尾、そして胴体周りには人工物の鎧を身にまとっていた。

「！目標、目視しました！あれは……?!」

「……嘘だろう、なぜ、ファンタジーに出てくるドラゴンがいるだよ！」

「目標ドラゴンに人も乗っているようですよ！」

「大方ドラゴンライダーってやつか？」

「まるでお伽の世界だな…」

「通信は？」

「いや、ドラゴンに通信機器やIFFがありますかね…」

『通信・IFFにも反応なし!』

「・・・機長、流石にドラゴンライダーに通信機があるようには見えませんが…」

「うるさい! 目標を横切った後、陸地の方も観察するぞ」

「し、しかし、それでは領空侵犯になりませんか?」

「今回の任務は海域の調査、陸地を発見次第相手に文明があるのか、どうかを調査することが任務だ、陸地の内部まで見ないと相手のこともわからない。情報を持ち帰ることが合衆国にとって今後の生命に直結する事態かもしれない。燃料も長時間飛行したせいで、それほど長くは滞空することはできない。できる限り情報を持ち帰る」

「了解」

E-7はジェットエンジンを鳴らしつつ速度を上げ、ドラゴンを横切った後、陸地へまっすぐ飛行する。

快晴な空が広がる中、一匹の竜が飛んでいた。

その竜の背中には竜騎士と呼ばれる兵士が乗っており、竜騎士の名前はマールパティ

ア、クワトイネ公国軍ワイバーン部隊に所属する

マールパティアは公国北東部付近の警戒任務に就いていた。

クワトイネはロウリア王国とクイラ王国以外海で囲まれており、国家は存在しない。四方海ばかりで、幾多の冒険者や航海者が東方面へ新天地を求めて旅立ったが、誰一人として戻ってきた人はいない。

近年、ロウリア王国との情勢悪化の影響で国家との関係が冷え切っている状態だ。情勢悪化と共にクワトイネ公国とロウリア王国は非常に緊張とした状態が続いている。

万一、ロウリア軍の侵攻・奇襲する艦隊を発見した場合、早期に探知し、対策を取ることになっていた。

彼はこの先で未知との遭遇になるとはこの時想像すらしていなかった。

気持ちよく空を飛行していると視界に何か小さな黒い点が出た。

「？」

彼は何かを見つけた。

「なんだ、あれは？」

自分以外にいるはずの無い空に、何かが見える。通常、味方のワイバーン以外に考え

られない。ロウリアからここまで、ワイバーンでは航続距離が絶対的に不足している。それに何か聞こえてくる

おかしい……ここは海上だ、飛んできた飛行騎の方角からロウリア王国はあり得ない、クイラ王国とも違う。

ならば、あれは一体なんだ？

三大文明圏には、竜母と呼ばれる正規竜母艦があるらしいが、この文明圏から外れた地にあるはずがない。

粒のように見えた飛行物体は、どんどんこちらに進んで来た。

それが近づくとつれ、聞こえてくる音が大きくなり、シルエットが少しずつ見えてきた。

とりあえず味方のワイバーンでは無いことを確信する。

「羽ばたいていない？」

彼は、すぐに通信用魔法具を用いて司令部に報告する。

「我マールパティア、未確認騎を確認、これより要撃し、確認を行う。現在地……!？」

目の前で見えている未確認騎は信じられない速度で接近したと思うと、一瞬ですれ違う。

高度差はほとんど無い。彼は一度すれ違ってから、距離を詰めるつもりだった。

しかし、未確認騎は強烈な風と騒音を生み出してから通り過ぎる。
「な、なんとという速さ!!!」

その物体は、彼の認識によれば、とてつもなく大きかった。羽ばたいておらず、翼に付いた4つ筒状の中で何かがぐるぐる回っていた。

胴体と翼の先端がピカピカ滅し、光り輝いている。

胴体の上には黒い円盤状のものがぐるぐると回っている。

機体は灰色、胴体と翼に白い星マークが描かれていた。

彼は、反転して、愛騎を羽ばたかせる。風圧が重くのしかかり、飛ばされそうになる。一気に距離を詰める……つもりだったが、全く追いつけない。ワイバーンの最高速度時速235km。生物の中では、ほぼ最強の速度を誇り、馬より速く、機動性に富んだ空の覇者（三大文明圏にはさらに品種改良を加えた上位種が存在するらしいが）が全く追いつけない。

速い……!?あれは飛行機械なのか!?

相手は、生物なのか何なのかも全く解らない。

「くつつつ!!なんだ、あいつは!!」

早く司令部に連絡しないと!!!

「司令部!!司令部!!我、飛行騎を確認しようとするも、速度が違いすぎる。追いつけな

い。飛行騎は本土マイハーク方向へ進行、繰り返す！マイハーク方向へ進行した!!!」

報告を受けた司令部では、蜂の巣をついたような騒ぎになっていた。

ワイバーンでも追いつけない未確認騎がよりによって、クワトイネ公国の経済の中樞都市マイハークに向かって飛んで来ると言う。

万が一攻撃を受けたら、軍の威信に関わる。

機は速度からおそらくすでに本土領空へ進入しているはず。

通信魔法で、指令が流れる。

「第六飛龍隊は全騎発進せよ、未確認騎がマイハークへ接近中、領空へ進入したと思われる。発見次第撃墜せよ、繰り返し発見次第撃墜せよ！これは訓練ではない！」

滑走路から、どンドンワイバーンが発進する。その数12騎、全力出撃である。

かれらは透き通るような青い空に向かい、目標を撃墜するために舞い上がっていった。

第六飛龍隊は、運良く未確認騎の正面に正対した。報告に寄れば、相手は超高速飛行が可能な者のようだ。

相手が速すぎる場合、チャンスはすれ違う一瞬のみ。

飛龍隊12騎が横一線に並び、口を開ける。

火炎弾の一斉射撃。これが当たれば、落ちない飛龍はいない。

口の中に徐々に火球が形成されていく。その時、未確認騎が上昇を始めた。すでにワイバーンの最大高度4000mを飛んでいた彼らにとって、それは想定外の事態であった。

しかも未確認騎の加速能力や速度は明らかにワイバーンを超えていた。すさまじい上昇能力でぐんぐん高度が上がっていく。

第六飛龍隊は、未確認騎をその射程にとらえる事無く、引き離された。

「ば、バカな！ワイバーンが追いつかないだど!?」

「な、なんとという速さ!?あれは本当にワイバーンなのか!」

我、未確認騎を発見、攻撃態勢に入るも、未確認騎は上昇し、超高々度でマイハーク方向へ進行した。繰り返す……

「
マイハーク防衛騎士団、団長イーネは、第六飛龍隊からの報告を受け、上空を見上げた。」

一般的に、飛龍から地上への攻撃方法は、口から吐く火炎弾である。矢を放つか、岩を落とす方法も過去には検討されたが、空を飛ぶ生き物は重たい物を運ぶ事が出来な

い。

単騎で来るなら、攻撃されても大した被害は出ない。おそらく敵の目的は偵察と思慮される。

しかし、いったいなんなのだろうか？

飛龍でも追いつけない正体不明の物。1飛龍の上昇限度を超えて飛行していく恐るべき物、それがまもなく経済都市マイハーク上空に現れる。

団長イーネは、空を睨んでいた。

遠くの方から音が聞こえ始めた。キューーンといった聞き慣れない音、しばらくして、それはマイハーク上空に現れた。

飛龍隊は撃墜すべく速度を上げるが、その飛行物体は飛龍隊を避けるように進路を向けて、飛行し、飛龍隊へ攻撃する暇もなく、通り過ぎた。

「!?は、速い!早く他の飛龍隊も奴に追いつくのだ!」

『だ、ダメだ!速すぎてこれ以上速度を出せない!』

『な、なんて速度と機動力だ:ワイバーン以上だ:』

「くー!」

イーネは悔しげに飛行物体へ険しい表情しながら視線を向ける。

物体は高度を落とし、上空を旋回した。

奇妙異な物体、大きくて灰色機体、羽ばたかない翼、怪奇な音、胴体の上には黒い円盤状がくるくると回り、翼と胴体に白い星が描かれている。

明らかな領空侵犯、しかし、飛龍は遙か遠くからこちらへ向かっている最中、攻撃手段はあることにはあるが、今回は接近が速すぎて、何も準備が出来ていない。

事実上現時点では無い。

物体は、マイハーク上空を何度も旋回し、北東方向へ飛び去った。

謎の物体がマイハークに轟音を鳴らしながら接近したことで街は大混乱となった。

E-7 早期警戒機

E-7はクワトイネ公国へ侵入後、経済都市マイハーク上空を高度3000mほどで飛行し、観察した。

そこには自分たちの知っているような近代都市ではなく、古代都市のようなヨーロッパの古い街光景が広がっていた。

岩をくりぬいて敵からの侵入を防ぐことを目的とされたのか、人工的な建物が並ぶ岩山、緑溢れる低い建物ばかりが並ぶ中心街

上空には架空の生物が連携して組織的行動を行う。

などこれらだけでも驚愕としか表せない。

「おい、見たか？」

「はい、ドラゴンの編隊や都市部は形成されていましたが、近代的な建造物は一切ありませんでしたね、むしろヨーロッパのような旧市街地のようでした。」

「ああ、それに街を防空していると思われるドラゴンがさらに12匹が連携して、こちらへ攻撃するとはな」

「さすがに迂闊すぎましたかね？」

「いや……ドラゴンとはいいい、ここはヨーロッパなのか？」

「あり得ません、そもそも現在飛行している場所は本当なら日本国九州に位置するはずです、日本にはヨーロッパの旧市街地はありませんし、そもそもドラゴンもいませんよ。」

「それにあの岩山をくりぬいた要塞は中東の古代遺跡を連想しますね」

「わけがわからないことになったものだ……」

「はい、これは本部でも報告が多くなりそうですね」

「はあくこんな訳がわからないことを考えるより酒でも飲みたい……」

「……今日の酒はお預けですね、帰ったら報告書作成や更なる調査任務が待っていますし」

「……………は!？」

その日、機長はシクシクと酒はお預けとなり、報告書を作成したのであった。

アメリカ・カナダ政府はランドワンや他の調査隊からの報告を見ると驚愕の一言しか出なかった。

- ・ 中世のヨーロッパのような建物や港湾設備を多数発見
- ・ 架空生物と呼ぶドラゴンの遭遇
- ・ ドラゴンの搭乗員が組織的な連携とした攻撃をする。
- ・ 港湾設備には帆船など近代的な建物や船舶は一切見られず

沿岸警備隊からも東海岸海域で首長竜と思われる生物の発見

両国は謎の国家へ接触するか、議会の中でも賛成派と反対派で別れたが、カナダはともかくアメリカは一カ国で自給自足が可能とはいえず、経済や国内の問題を早く解決するために自国のみで解決するには時間がかかりすぎた。

第一に経済や貿易に関しては相手がいなければ何も意味はなく、ゆっくりと国内の衰退することを危惧した両国はクワトイネ公国側へ外交団を派遣することが決定した。

賛成派の中でも国民や企業の資本家たちなどの後押しが大きく一番他国へスムーズに接触できたこともあってクワトイネ側にはすぐに外交団を派遣した。

クワトイネ公国 政治部会

国の代表が集まるこの会議で、首相のカナタは悩んでいた。昨日の事、クワトイネ公国の防衛、軍務を司る軍務郷から、正体不明の物体が、マイハークに空から進入し、町上空を旋回して去っていったとの報告が上がる。

空の飛龍が全く追いつけないほどの高速、高空を侵攻してきたという。

国籍は全く不明、機体に白い星が書いてあったとの事であったが、白い星だけの国旗を持つ国など、この世界には存在しない。

カナタは発言する。

「皆のもの、この報告について、どう思う、どう解釈する」

情報分析部が手を挙げ、発言する

「情報分析部によれば、同物体は、三大文明圏の一つ、西方第2文明圏の大国、ムーが開発している飛行機械に酷似しているとのことです。しかし、ムーにおいて開発されている飛行機械は、最新の物でも最高速度が時速350kmとの事、今回の飛行物体は、推定!8!00kmを超えています。ただ…。」

!!!!!!!

は、800だど!?

なんだその速度は…

「ただ、なんだ?」

「はい、ムーの遙か西、文明圏から外れた西の果てに新興国家が出現し、付近の国家を配下に置き、暴れ回っているとの報告があります。かれらは、自らを第八帝国と名乗り、第2文明圏の大陸国家群連合に対して、宣戦を布告したと、昨日諜報部に情報が入っています。彼らの武器については、全く不明です。」

会場にわずかな笑いが巻き起こる。文明圏から外れた新興国家が、3大文明圏5列強国のうち2列強国が存在する第2文明圏のすべてを敵に回して宣戦布告したという事実。

無謀にも程がある。

「しかし、第八帝国は、ムーから遙か西にあるとの事、ムーまでの距離でさえ、我が国から2万km以上離れています。今回の物体が、それであることは考えにくいのです」

会議は振り出しに戻る、結局解らないのだ。

ただでさえ、ロウリア王国との緊張状態が続き、準有事体制のこの状態で、頭の痛いこの情報は、首脳部を悩ませた。

味方なら、接触してくれば良いだけの話、わざわざ領空侵犯といった敵対行為を行う

という事自体敵である可能性が高い

その時、政治部会に、外交部の若手幹部が息を切らせて入ってきた。

通常は考えられない。明らかに緊急時であった。

「何事か!!」

外務郷が声を張り上げる。

「報告します!!」

若手幹部が報告を始める。要約すると、下記の内容になる。

本日朝、クワトイネ公国の北側海上に、長さ300mクラス、200mクラスの巨大船の艦隊が現れた。

海軍により、臨検を行ったところ、アメリカ合衆国という国の特使がおり、敵対の意思は無い旨伝えてきた。

捜査を行ったところ、下記の事項が判明した。なお、発言は本人の申し立てである。

・ アメリカという国は、突如としてこの世界に転移してきた。

・ 元の世界との全てが断絶されたため、哨戒機により、付近の哨戒を行っていた。その際、陸地があることを発見した。

哨戒活動の一環として、貴国に進入しており、その際領空を侵犯したことについて

ては、深く謝罪する。

・ クワトイネ公国と会談を行いたい。

突拍子もない話、政治部会の誰も、信じられない思いでした。

い
そもそもアメリカという国なんて聞いたこともないし、そんな国文明圏にも存在しない

300mや200mの艦隊で来るということは砲艦外交なのか？

しかし、昨日都市上空にあっさり進入されたのは事実であり、信じられないことに300mという規格外の大きさの船も、報告に上がってきている。

る。
国ごと転移などは、神話には登場することはあるが、現実にはありえないと思っ

しかし、そのアメリカという国の力は本物なので、まずは特使と会うこととした。

超大国と異世界国家との接触し、アメリカやカナダは戦乱を巻き起こす世界へ転移したのであった。

2 未知の国家

アメリカ合衆国 首都ワシントンDC、ホワイトハウス

ホワイトハウスの大統領執務室で複数の政府関係者が集まっていた

その中でも窓際の高級な椅子にもたれ掛けるように金髪の痩せ形、青いスーツを身に纏う男性

アメリカ合衆国大統領、ハリー・ウイストン

彼は合衆国が転移する数ヶ月前に当選したアメリカ大統領だが、不運にも大統領として初めて転移騒動が起きたことで彼は今までにない苦難を待ち受けていた。

ホワイトハウスの政府関係者も同様で何名も胃炎や精神病、過労で倒れていた。

そんな彼らは転移してから数ヶ月経ったあと、調査隊を外海へ送り出し、大陸を発見、その後文明国の存在も確認された時はハリーや政府関係者は両手をあげて、歓喜した。

だが、そのあとの報告で一気に膠着する。

それは未知なる生物や文明レベルが低い国家

未知なる生物とはドラゴンだ。

ドラゴン？なぜ、架空の生物が？と最初は騒然としていたが、次々と入ってくる報告

に驚愕する。

その後も調査を続行することへ方針は決まり、接触することを決断した大統領は直ちに護衛艦隊を引き連れて未知なる国家へ派遣する。

結果、その国はクワトイネ公国と言い、接触は大成功を納め、アメリカ合衆国とカナダ連邦へ使節団が派遣されることが決定された。

「諸君、いよいよ今週の金曜日にクワトイネ公国から使節団が我がアメリカ合衆国へ招待される。準備は整っているだろうか？」

「はい、歓迎の準備は整っております。」

今回のクワトイネ公国と後に派遣される予定のクイラ王国の使節団には我が国の文化や経済力、軍事力を見てもらい友好国になつてもらうため最大限の歓迎をさせてもらいます。」

「うむ…彼らには我がアメリカ合衆国とカナダ連邦にとつて友好国となつてもらう国だからな、異世界とはいえ、貴族を相手にするのは少々骨が折れるかもしれん、CIAからは？」

「はい、クワトイネ公国ならびにクイラ王国は第一陣報告書でも記載がありましたように人種に関してはほとんど白人が占めており、東洋人・黒人などの人種は極めて少数で

あります。

政治体制・経済・流通・生産体制は異世界報告書の4ページに書かれております。

CAIと海兵隊武装偵察隊などが調査した結果、中世ヨーロッパ時代に非常に酷似しており、政治体制も絶対王政が主流です。

この世界では文明圏以外の国家を蛮地か蛮族と評価されることが一般的ということ、我が国を蛮国と評価する人々もいるくらいです。

商人からの情報では文明圏は遥かに発達した文明を持っていると聞いております。

文明圏も第1・第2・第3文明圏が存在し、我が国が訪問した場所は第3文明圏ロデニウス大陸と呼ばれる東方に位置するようで第1・第2文明圏は遥か西側に点在していることです。

CAIや国務省としては文明圏についても近々発射される予定の軍事偵察衛星・軍事通信衛星・観測衛星などからこの星の全容を明らかにしたいという姿勢で進めております。」

「中世か、今後の外交方針として今まで通りで通じる相手であることを祈ろう……衛星についてもNASAと協力し、今週に第一陣で10基打ち上げる予定だったはずだ、それで多少わかるようになるだろ。」

それで魔法や亜人族については、何かわかったかね？」

「クワトイネ公国を中心に見られるエルフ・ドワーフ・獣人族・龍人族などが確認され、彼らと友好関係を築き遺伝子情報などを解析する方針です。

魔法に関しては今の所研究成果はありません……魔法は我が国とカナダにとつても、元の世界にとつてもおとぎ話でしかない力ですから、慎重に魔導師や魔法を扱う動植物を捕獲し、解析していきます。」

「そうか……それぞれの種族に関しては慎重に行うように、この世界では我々にどんな影響をもたらすのか、全く未知の世界だ。

今後も諸君の活躍に期待する。」

「はっ、ありがとうございます。全力をあげて調査します。」

「……神は我々を試しているのかもしれないな、おとぎ話にしか存在しない、ディズニーのようなキャラクターも出るとはな……」

「現在も調査が進められていますが、更なる発見も多く存在するでしょう、何せこの世界は未知なる異世界ですから」

「うむ……全く、一体全体どうなっているだが……本日の会議はここまでだ。後は5時間後に行われる国家安全保障会議にて進めようではないか」

「わかりました。大統領閣下」

大統領はコーヒーを飲みながらようやく落ち着いていた首都の様子を窓から眺める。

かつておとぎ話でしか存在しなかった生物の出現、魔法…そして亜人族…彼らはまるで我々が想像するような姿ではなく、どちらかというところジャパニーズアニメに登場するキャラクターに似ている…

さらにエルフも登場するとはな…

神は我々に一体何を求める？

存在しない生物、亜人族に魔法、中世の国家が支配する世界…

これではまるでアニメの世界だ…一体どんな試練が待ち受けているのか想像するだけ…う…また、胃が…

クワトイネ公国 外務局——

数多くの国とのやりとりを行うこの場所は、現在、新たに現れた新興国家、アメリカ合衆国とカナダ連邦との国交を開くための事前準備のため、使節団派遣の事前準備を進めていた。

「ヤゴウ！アメリカとかいう新興国家に使節団の1人として行くらしいじゃないか！うらやましいいな。俺も行ってみたいよ。」

同僚の1人が話しかけてくる。使節団派遣は、別に珍しいことではない。

数多の国が存在するこの世界では、国の主権者が入れ替わり、国名が変わることは珍しい事ではなく、中程度の国家では良くあること。

さらに、大国家が分裂して中小国になることも珍しくはない。

ただ……。

治安が悪いことが多く、使節団に被害者が出ることも珍しくは無く、使節団派遣の任務にあたることは、皆が嫌がる仕事であった。

さらに、クワトイネ公国のあるロデニウス大陸は、第3文明圏の影響を多少は受けているため、文明圏からは「蛮地」と馬鹿にされるが、「蛮地」と蔑まれる中では、かなり上位の生活レベルを維持し、食事に関しては、文明圏に負けないほどの良い食事をしている。

文化に関しては文明国レベルであると自信を持って言える。

大概では使節団派遣となる対象地域は、クワトイネ公国よりも生活水準が極端に下がる場合も多く、衛生面でも問題があり、疫病に感染する使節団も多く、治安も悪いことがほとんどである。

それで使節団が常に危うい状況と隣り合わせであり、死亡する使節団もいるくらいだ。

しかし、今回の使節団が派遣される対象となる国は、色々と注目を浴びている。派遣される使節団に配布された事前資料に目を通すと、にわかには信じられない事が記載してある。

事の始まりは、中央歴1639年1月24日の朝、わが国の第六飛龍隊の騎士、マーパティマが、公国北東方面の海上を警戒飛行中に、金属で出来ていると思われる飛龍を発見、しかし、全く追いつけずに引き離されたという。

さらに、その鉄龍を迎撃するために出撃した第六飛龍隊は、ワイバーンの武器、導力火炎弾の射程に捕らえる事無く引き離されたという。

報告書では、全く信じられない事に、時速900kmを超えていたとある。

しかも、相手はこちらよりも遥かに大きいにも関わらず。

最初の海からの接触は、300mクラスという、想像できないほどの金属製の帆が無い巨大船で来たという。

そのほかにも200mという大型艦も多数見られ、どれもこれも我が国で見たことのないものばかりだ。

「信じられないな……。」

ヤゴウは思考を巡らす。

ワイバーンは軍事力の中でも高い戦闘能力を持ち、ワイバーン1騎で戦局が変わるほど戦術兵器でもある。

最高の兵器であるが高価な兵器であり、竜騎士はエリート中のエリート、兵なら誰しも一度は憧れる空の覇者と言える。

歩兵よりは騎馬隊の騎士が格上であり、騎士よりも竜騎士は圧倒的に格上、ワイバーン1騎で1個騎士団を翻弄できる。

時速230kmクラスの高速で飛翔し、弓の届かない高空から、ワイバーン自身の間とは隔絶した魔力によって放たれる導力火炎弾は、人間の作り出した武器とは比較にならない威力を有し、さらに、硬い鱗は弓をも跳ね返し、対人用の刃物を通さないほど強靱である。

ワイバーンよりも強力な生物といえば、三大文明圏で少数作られているといわれる、ワイバーンロードくらいしか思い浮かばない。

いや、人間が制御できない存在であれば、各種属性龍や、古龍、神龍がいるが、人間が扱うのは、夢のまた夢、天災のような存在だ。

そんなワイバーンを超える「物」を実用化し、しかも異常に大きい飛行物を飛ばすなんて、第2文明圏のムーでも無理ではなからうか。

しかも、それは金属でできており、中に人が乗っているとなればなおさらだ。実物は見たことはないが、ムーでも金属は使用しているらしいが、木製と紙でできているらしく、とても、全身金属製の飛行物は到底夢の中でしかない。

中央世界には金属製の大型機も存在するとは噂であるらしいが、信じがたい：

信じられないが、アメリカの飛行物が経済都市マイハーク上空に達したのは事実であり、彼はアメリカという国に非常に興味を持ち始めていた。

(今回の使節団の派遣……。私は歴史に名を刻むかもしれない……。)

「これより会議を始める」

不意に、彼の思考は号令により中断させられた。

小さな会議室で、使節団の団長が説明を始める。今回派遣される使節団は5人、全て外務局の肩書きがあるが、軍務局の將軍ハンキも外務局への出向という形で、使節団に入っている。

団長が話し始める。

「今回の我々の一番の目的は、アメリカが我が国の脅威となるかを判断する事にある。知つてのとおり、我が国の防空網がアメリカの鉄龍によってあっさりと破られた。

今のところ、我が国に鉄龍を防ぐ手段は無い。

現在アメリカは我が国と国交を結びたいとの意思を示しているが、何を考えているのか解らないというのが正直なところである。

覇権国家なのか、もしくはロウリアのように亜人に対して極端な差別意識を持っているのか、何のために我が国と国交を結ぼうとしているのか、真意を調査する必要がある。のちにカナダ連邦というもう一つの国家も訪問する予定だ。」

皆が頷く

「アメリカ・カナダがどの程度の国なのかは不明だが、技術の高い軍事力を持っていると思われる。理解しているとは思いますが、毅然とした態度で接することも必要だが、相手を刺激しないように、言動には十分配慮すること。」

あと1点、アメリカは何か強くて何が弱いのかを調べ、我々が彼らに対して優位に立てる部分を探してほしい。

それでは、皆に配布されたレジユメを見てほしい」

新たに配布された資料に目をおす。

使節団の片眉毛がつりあがる。

・・・・・国ごと転移??

説明が始まる。

「驚いたと思うが、彼らの言い分によれば、国家ごと突然この世界に飛ばされたと言っているそうだ。真意はなんともいえない」

たしかにそうだ。アメリカ・カナダの主張する国土のある位置は、群島はあれど、海流や風が乱れる海域であり、かつては無人だった。

いきなり新興国家が出来上がったとしても、突然の高度文明が育つとは思えない。

国ごとの転移か：まるで、ムーの神話みたいだ。

第2文明圏の列強国、ムーには、1万2千年前に「大陸大転移」が起きたといわれる神話が残っている。

正式な当時の政府記録として残っており、ムーの人々は信じているが、他の文明圏の人々は、ただの御伽噺として認識していた。

「アメリカ側の説明によれば、レジユメのとおり、今回はアメリカが移動手段と船舶を提供する。

出発は1週間後の昼、みな準備をしつかりしておくこと。

そして、出発から5日後の夕方にはアメリカの西側に位置する都市、ロサンゼルス市に上陸し、宿で3泊する。ロサンゼルス市の宿で、アメリカで行動する上での常識を教えこまれる。アメリカの国務省によれば、アメリカの常識を知らずに勝手に勝手に外出すると、車と呼ばれる馬車のようなものに、踏まれて死んでしまう可能性があるらしい。

上陸から5日後の昼には、ロサンゼルス市を出発、国内線の飛行機と呼ばれる輸送システムで、その日の夕方にはアメリカの首都ワシントンDCに付き、翌日アメリカ合衆国政府の人間と会談が行われる」

・・・・・・？

おかしい、時系列がおかしい。配布資料によれば、出発から2日後の夕方にはアメリカの西側に位置する都市にたどりつくところである。しかし、アメリカとクワトイネ公国は、9000km以上の距離がある。船でたった2日で到着する距離ではない。

さらに、ロサンゼルス市からワシントンDCまでの距離も、4200kmを軽く超えているにもかかわらず、5時間ほどで到着予定とはどういった事だろうか。

ワイバーンを例え使用したとしてもワイバーンは最強兵器とはいえ、あくまでも生き物であるため途中で休ませるなど休息は必要である。

それで大体7日以上といったところだ。

我が国の上空に現れた鉄龍でも、4200kmを超えるのは難しいはず、国内線は、飛行機で移動すると、配布資料にはある。

どうやら、我々の常識が通用しない国のようである。

会議は終わった。

1週間後――

使節団の面々は、クワトイネ公国で一番大きいマイハーク港に集まっていた。

雲は高く、きれいな青空が広がり、少し涼しい。

スーツを着た男性が話し始める。

「お集まりの皆様、本日は、アメリカへ使節団としてきていただけるとの事で、感謝の言葉を述べます。私は、皆様の今回の派遣を少しでも快適にお過ごしただくため派遣された、アメリカ合衆国国務省のスミスです。

いわゆるお世話役になります。

不便な点があれば、どうぞお申し付け下さい。」

そんな中、1人憂鬱な顔をした使節団員が1名

「今から船旅か……。」

「ハンキ將軍、顔色が優れません、どうされましたか？」

「ヤゴウ殿、今は外務局出向の身、將軍はやめてくれたまえ」

「解りました。では、ハンキ様、どうされたんですか？」

「いや、今から船旅と思うと、気が重くてな……。船旅は良いものではないぞ。いつ転覆するかも解らないし、船の中は光が行き届かないので、暗く、湿気が多く、臭い。しかも、長旅になると疫病にかかる者も多く、食べ者が腐らないための保存食しかないので、塩辛いものしか食べられない。」

何よりも水の確保が非常に大変じゃ。喉が渴いても節約節約、まあ、今回はアメリカが5日で着くと言っているとの事なので、我慢は短くて住むが、正直5日というのは、外務局とアメリカ合衆国で、何らかのやり取りのミスがあったとわしは思っておるよ。

ありえない速度でいかないと、無理じゃ。」

「私も、時系列がおかしいと思っております。ただ、鉄龍を飛ばしたアメリカであるので、もしかすると我々の常識では図ってはいけないのかもしれないかもしれません」

間もなく時間になる。

島の影から、島のように大きい白い船……？

!!!!!!!!
 ぞかい!!しかも帆が無い!!

!!、一体どのくらいの大きさなんだ!?300……いや、もつとか!!
 船体は黒く、構造物は白と黒のラインが並び、上部の突起物は赤い……

う、美しい……なんて、船だ

まるでお伽の世界の城みたいだ……あんな城をアメリカは作れるというのか……

使節団はかつて世界有数の豪華客船、クイーンメリー2を見て、感動していた。

中には使節団を送るクワトイネ公国の政府関係者に羨ましそう視線で使節団を見る

人もいた。

世界有数の豪華客船と美しさを持つクイーンメリー2は異世界の人間でも十分魅了させるほどであった

*クイーンメリー2はアメリカ合衆国、カーニバル・コーポレーション傘下のイギリスの海運会社キュナード・ライン社が運用していたが、2020年、船籍をアメリカへ変え、アメリカとヨーロッパを結ぶ豪華客船として運行していた。

しかし、転移後航行先を失ったクイーンメリー2は港で停泊する日々であったが、アメリカ政府が今回のクワトイネ歓迎のために急遽貸切としたのだ。

極大に大きな船は、沖合で停船した。

スミスが説明を始める。

「今回は、あの沖合に停船中の船に乗って、アメリカ合衆国へ向かいます。本当は、この港に直接接岸したかったのですが、残念ながら、港の水深が不足しているため、あそこに停船しました。皆様には、小船に乗って、移っていただきます」

やがて、その船から、小船が3隻現れ、これまた信じられない速度で港に向かって爆走してきた。

その船にも、帆は無かった。

「スミス殿、スミス殿」

ハンキが呼びかける。

「はい、なんででしょうか？」

「あの……。あの船は、見たところ帆が無いようであるが、どうやって動いているのじゃ？小船に關しても、オールが無いようじゃが、どうやってたらあんな速度で走れるのじゃ？ま、まさか、第一文明圏の魔導船みたいな物か？」

「第一文明圏の魔導船というのが、どういふものか存じ上げませんが、クイーンメリー2はディーゼル機関によって動いています」

「でいーぜるきかん？」

「はい、いわゆる科学の技術です。重油を爆発させることによって、そのエネルギーを吸収し、スクリューを回すことによって、推進しています。」

「うーむ、科学……。良く解らないが、すごいほう。」

じゆうゆ？すくりゆう？わからないものだ……

やがて、皆は小船に分乗し、大型客船に向かった。

大型客船に乗船する。

客船内部に入ると、皆が驚く、

明るい。光の精霊でも飼っているのだろうか。

「……この船、鉄で出来ている、いつたいどうやって浮いているのだ……。しかも中が明るいし、広い。そして清潔感があり、豪華だ……」

こんな豪華さは王宮レベルだ……

各々に割り当てられた部屋へ案内され、一堂はくつろぎのひと時を過ごした。
その日のヤゴウの日記より

なんとという事だろうか、私は驚きを隠せない。このような大きな船は、見た事が無いし、聞いたことも、文献で読んだ事もない。

しかも、中は快適で、明るく、信じられない事に、温度が一定に保たれている。

このような大きな船にも関わらず、海上を矢のような速度で進んでいく。

さらに中には様々な娯楽施設もあり、全く揺れない、私が経験した中で最も優雅で圧倒されている

このような物を作り出してしまふ国、アメリカとは、いつたいどのような国なのであろうか

外務局の中には、新興国家の蛮国に違いないと言う者もいたが、いまのところ、言いたくはないし、認めたくもないが、彼らから我々は、蛮族に写っているのではないだろうか。

少なくともこんな巨大な船を作る国家は少なくとも蛮国ではない。

蛮国でこんな技術を有していれば今頃世界は大混乱となっているだろう

もしかしたら、アメリカは文明圏の列強国に匹敵する力を持っているのかもしれない。

一体本国ではどうなっているのか

5日後——

「皆様、ロサンゼルス市が見えてまいりました。ロサンゼルス市は、カルフォニア地方、西海岸の中でも有数都市になります。あそこに見えるのがロサンゼルス港であり、ロサンゼルス港からは、リムジンバスで、ホテルまで移動していただき、アメリカについての基礎知識を学んでいただけます。」

ロサンゼルス港が見えてきた。人工物が広がり、高層建築物が立ち並び、都市高速が走っている。

港には大型船が出入りし、全てにおいて開いた口が閉じないほど、驚愕した。

やがて、リムジンバスに乗り、ホテルへ移動する。

船の上で、スミスから、車と呼ばれるものが、内燃機関によって動いているということを聞かされていたが、まさかこんなに量が多いとは思わなかった。

圧倒的広大な人工物の景色に使節団は言葉を失い、ロサンゼルス市のダウンタウンL

Aへ近づくと今まで見たことのない高層ビル、石の建造物が並び、クワトイネ公国の首都が田舎でしかないレベルと認識せざるおえないほどの文明力

話を聞くと、国民1世帯1台は、ほぼ車を持っており、20代そこそこの日雇い労働者であってもグレードの差はあれ、車を購入する事が出来るという。

呆れるほどの豊かさ。

ホテルにおいて、アメリカの基礎知識を学ぶ。信号システム、自動販売機、自動改札機、鉄道システム。

彼らの説明によると、色々不思議なように見えるが、これは科学であり、仕組みが理解できれば誰しもが作れると言っている。

魔法と違い、誰でも扱うことができるという点は画期的と言えるだろう。

今まで職人によって作られる日用品や武器などはこの科学という仕組みを理解することができれば、もしかすると将来的に計り知れない国益を生むこととなるかもしれない……

なるほど、信号というのが無いと、あの車たちが好き勝手動いたら、車は動かなくなるだろう。

「スミス殿、スミス殿」

ハンキが話しかける。

「何でしょうか？ハンキ様」

「ここは、ずいぶん発展しているようだが、首都はまだ発展しているのかね？」

「そうですね、首都はロサンゼルスよりは規模は小さいかもしれませんが、歴史的な建造物や遺産などを見学することができ、アメリカという国を理解することもできるでしょう。

街並みもワシントンの方が自然豊かでとても綺麗ですよ。」

うむ…それは意外なことを聞いたな…：…通常、国家は首都を中心とし、栄え商業・交易などや軍事的に重要な場所などで発展するものである。

しかし、アメリカという国は少し変わった一面も持つものだな…：…いや、首都をあえて政府組織を中心とする街にすることで万が一侵略を受けても被害を少なくする構造なのかもしれない…

「スマス殿、このロサンゼルスはアメリカで最も栄えている街なのかね？」

「いえ、ロサンゼルス以外でもアメリカ合衆国の有数都市はいくつかあり、その中でもニューヨークが最も栄えております。」

な…：…だと…：…このロサンゼルスよりも大きく、栄えている街があるだと
 この街を例え文明圏の国家が全力をあげて作り上げてもここまでの栄えた街を作
 るのは不可能だ！

何もかも次元が違う…

最早見た時から思っていたが、こんな国が蛮国な訳がない、下手すれば中央世界以上の文明だ…

「うーむ……。スミス殿、アメリカ軍を見学したいのじゃが、無理じやろうか？」

「そうですね、少々お待ち下さい。」

スミスが、光る小さな板のような物を出し、独り言を言い始める。通信用魔法具のようなものだろうか、異常に小さいが…。

「ハンキ様、アンドルーズ空軍基地で訓練が行われますので、それでよければ手配できますが。」

「おお、すまんおう、たのむ、たのむ」

ハンキは、アメリカ軍見学の機会を得て、上機嫌であった。

「他にアンドルーズ基地に行きたい方はおられますか？来賓席を手配いたしますが。」

「私も行きます」

ヤゴウが手を上げ、結局翌日は、ハンキとヤゴウで航空祭へ行くこととなる。

翌日——

ハンキとヤゴウは、アンドルーズ基地の来賓席にいた。

(正直、高速道路では、目を回しそうになったが、やっと鉄龍基地で、龍たちのデモンストレーションが見られる)

やがて、訓練が開始された。

横にいるアメリカ軍人が護衛としているが、目の前には様々な鉄龍がいた

そこにはまさしく政府専用機エアフォースワンやステルス戦闘機F-22、双発戦闘機F-15、輸送機C-130などが待機しており、大中小置かれる飛行機に驚愕していた。

こ、こんなにアメリカ軍は鉄龍を保有するというのか!?それに大中小とあるが、それぞれに役割があるだろうか?

見たことがない軍用機にハンキとヤゴウは冷や汗を流しながら見ていた。

「ただいまより、アメリカ第42飛行団による訓練が行われます。右側の空をご覧ください。訓練中のF-15Dが3機時速900Kmで飛行してきました。」

「F-15!!!今900kmといったか?聞き間違えではないか?」

ハンキが興奮して話しかける。

「はい、時速900km言いました。」

右を見る。

無音で、飛行物は、近づいてきた。来賓席に、近づいた時、ようやく音が聞こえ始める。

「音速に近い!!!」

ハンキが吼える。

ゴオオオオオオオオオオ

戦闘機F-15Dは垂直に近いのではないかと思うほどの上昇を始める。主翼上部には一部剥離した空気が白い雲を作り、翼端では、主翼下部から上部へ回り込む空気により、白い航跡を引く。

雷鳴のような轟きがあたりを包み、エンジンの後ろからは、赤い炎が二つ見える。アフターバーナーの点火。

その飛行機は、短時間のうちに、青空に消えていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハンキは絶句している。

「左の空をご覧下さい。先ほどのF-15Dが戻ってまいりました」

「え!?!もう?」

「F-15Dは時速600kmほどで侵入し、皆様の前で旋廻します。この間、パイロットは旋回中、大きなGがかかります」

F-15Dは二人の前で大きく旋廻する。

い、今までのワイバーンではない、ワイバーンすら可愛く見えるほどの圧倒的機動力、スピード、加速力、旋回能力どれをとってもワイバーンは追い抜くことは不可能だろう
「これほどの機動が可能なのか……。」

そのまま上昇

「あの体制から、これほどの上昇力があるのか」

「なあ、スミス殿、あの鉄龍は、とてつもなく早い、いつたいどのくらいか、速度が出るのじゃ？」

(・・・F-15Dの戦闘機性能は機密ではなかったな?)

(はい、既に書物に乗っている程度であれば問題ないとのこと。一応ホワイトハウ
スからは規制が掛かっておりますので簡単なものであれば)

「F15Dは、我が国の主力戦闘機の訓練用であります、速度はマッハ2.5ほど出ま
す。音速の2.5倍ですね。音速を超えると衝撃波がでるため、今日の飛行は、時速9
00kmくらいに押さえていたみたいですが」

「……………」

く、訓練用……これが戦闘用だとどれほど違うのか、想像すらできなかつた……

その日のハンキの日記より

この国の町にあふれる高層建築物、そして巨大な上空道路、鉄道と呼ばれる大規模流通システム。

夜でも明るい夢の都市、常に綺麗なお湯や水が出る浄水システム

これらの凄まじいまでの建造物群を作るアメリカという国が私は恐ろしい。

しかも、ここは、アメリカの首都ではなく、一つの都市に過ぎないという事実。驚愕よりも上の驚きを表す言葉がほしくらいである。

豊か過ぎる国アメリカ、彼らはその強力な国力にふさわしい、凄まじいまでの軍事技術を有している。

戦闘用の鉄龍は、音の速さの2.5倍で飛行し、上昇力もとてつもない。

戦闘行動半径は、1000kmを超えるという化け物だ。

彼らから見れば、我が国のワイバーンは、止まっている的に見えることだろう。

案内役のスミスに聴取したところ、鉄龍は海上攻撃や、陸上攻撃の支援にも使用可能だそう。

マイハークに進入した鉄龍には脅威を感じたが、彼らの実力はそんなものではない。

戦闘用鉄龍であれば、マイハークに進入した鉄龍は、すぐに落とせる。つまり、彼らのマイハークへの侵入は、本当に哨戒活動であったと推測できる。

彼らとは友好関係を構築しなければならぬ。

彼らを敵にまわすということは、文明圏の列強国を敵にまわすよりも恐ろしい事である。

彼らと敵対してはならない。

もし、敵対することになれば我が国は文字通り破滅するだろう

3 魔法

アメリカ合衆国西海岸ロサンゼルス、ホテル食堂

使節団がロサンゼルスに到着してから、ロサンゼルスの発展具合、高層ビル街の摩天楼、広大な人工物で敷き詰められた巨大都市、走る自動車、ホテルの設備など驚愕する内容を言えばキリがない。

しかも大都市にも関わらず首都ではない。

これだけの大規模など中央世界でも存在しないだろう。

さらにロサンゼルスくらいであれば西海岸だけでサンフランシスコ、ラスベガスなど大都市は複数あるのだと

正直に言えばこれを聞いた使節団は頭を抱えた。

蛮国だと思い、派遣された国家を実際で見ると超大国であった。

もしかすると古の魔法帝国に匹敵する文明レベルではないか？

だとすればもし、この国が領土拡大の野心を抱いていればクワトイネ公国・クイラ王国・ロウリア王国なんて簡単に捻り潰されるだろう。

パーパルティア皇国がいい例と言える。

パーパルティア皇国は皇帝が変わってから領土拡張の野心が強く、幾多の国家が飲み込まれた。

いずれパーパルティア皇国はこちらにも地理的に考慮すれば十分侵攻する可能性が高い。

味方にしなければクワトイネはパーパルティア以前にロウリア王国に滅ぼされる可能性が高い。

ヤゴウとハンキはこれから行われる会談に不安を抱きながら

「なあ、ヤゴウ殿」

「なんででしょうか」

「この国をどう思う」

「そうですね…一言で表すとすれば、豊かと言えます。

圧倒的な技術力や国力、軍事力、文化、どれを比較しても比較対象になりません。

現にこのホテルは高級ホテルとは言え、温度が常に一定に保たれています。これだけの超巨大建造物の空間の温度を保たせるのにどれほどのエネルギー量が必要とするのか。想像すらできません。しかも、この建物だけではなく、ほぼ全ての建造物に空気が常に調節されています。

常に捻るだけで暖かいお湯や冷たい水の温度を調節する機械、膨大な清潔な水を常に供給する上水構造、トイレも勝手に流してくれるまで実現されています。

ここまででも驚愕の一言しかありませんが、夜間でも普通に物資を購入する無人の販売機械、物資を常に供給する流通。

これだけの広大な広さの都市を常に明るく照らし、治安も信じられないほど良いです。

我が国や他国でも誘拐・殺人・暴行・レイプなどがありますが、そういった事件が発生してもすぐに駆けつけてくる警察という警備隊組織

まさしく異世界から転移した国家です。

さらに空軍基地でも見せてもらった、あの鉄龍は練習用であれほどの能力を持っています。

戦闘用となれば一体どんな能力を持つのか、想像すらできません。

この国は魔法へ依存せず、科学だけで発展しましたが、逆に魔法へ依存しなくてもこれだけの文明を築ける。

個人的には絶対に敵に回してはいけないう国家だと思いました。

下手をすれば古の魔法帝国並みの文明力を持つと思われまます。」

「ちよ、ちよつと待て、この国の文明レベルが高いことはわかったが、流石に古の魔法帝國ほど大げさではないか？もし、それが本当だとするとアメリカは中央世界よりも先進国になるぞ」

「はつきり申し上げますと中央世界よりもアメリカとの外交が重要だと思います。昨日見せて貰った鉄龍とはいいい、300mの巨大船、アメリカにはもつと強力な兵器を持っている可能性すらあります。

今後としても決して絶対に敵に回してはいけません。

カナダも恐らくアメリカ同様の国力を持っていると見て間違い無いでしょう。」

「そうか、やはり同じ思いか……。あの練習型の鉄龍であれほどの性能を持つのだから、戦闘用はさらに高い性能だろう。

あれらが来られた日にはワイバーンの空中戦術は役にたたないだろうと私も思う。明日は首都に出発じやな。この国は心臓に悪いよ」

「私はワクワクしていますよ。このような国が、近くに突然現れ、しかも自分たち以外を見下しきっている文明圏よりも高度な文明をもっている。その最初の接触国が我が国とは……。彼らに覇を唱える性質がないのなら、これは幸運です」

「ああ、クワトイネのために明日は何としても成功させねば我が国の命運に関わるだろう。」

ヤゴウとハンキは、深夜まで語り続けた。

クワトイネ側の使節団は当初アメリカやカナダを見下す姿勢もあったが、彼らの文明を見た瞬間、そんな考えなんてどうの昔に吹っ飛び、できるだけこちらに不利にならない外交へ持つていくことを決めた。

翌日

「みなさん、おはようございます。昨日は良く眠れましたか？」

スミスが集まった使節団に話しかける。

「本日は、朝食の後、午前10時00分から首都での行事について説明があり、11時30分にホテルを出発、12時00分にロサンゼルス発の飛行機に乗ってもらい

16時20分にはワシントンDC、ダレスへ付きますその後は……」

説明が続く

アメリカに来て思う事は、時を刻む概念がはつきりしている事だ。

腕時計と呼ばれる精密な機戒が使節団に配られている。

秒単位で時を刻む事ができ、それが簡単に持ち運び出来るという事は、軍において、時差の無い一斉攻撃が可能ということだ。

軍の効果的運用という意味合いにおいて、これは凄まじい事である。

さらに驚くべきことは、今配られた時計は「でんぱそーらーうおっち」と言うらしい

が、

これは光ある限り動き続け、誤差は10万年に1秒しか無いという。

なんと形容していいのか解らない。

「スミス殿、ロサンゼルスとワシントンDCは、4200km以上離れていると聞いていましたが…。」

「はい、そうですが」

「今日乗る飛行機と言われる乗り物は、人を運ぶ鉄龍のような乗り物とは聞いておりませんが」

ヤゴウは話を続ける。

「16時20分着というのはなんですか？そんなに、分まで正確に着くのですか？」

「はい、災害や事故が無ければ、時間どおりに着きます」

・・・どうやら、本当に我々の知識でアメリカを図ろうとしてはいけないらしい

4200kmも長距離で一体どうやっていくのだろうか、4200kmなんてワイバーンでも3分の1も飛行できない距離だ。

そんなにも正確に着くものだろうか…

「解りました。ありがとうございます」

「いいえ」

スミスは、満面の笑みで笑いかける。

キイイイイイ……ガシャアアアアン!!! ドン!!!

何かが激しくぶつかり合う轟音が響き、使節団は何事か、と動揺する中、ヤゴウは窓から通りを見た。

そこには赤い車?と細長い金属の筒状に乗せた大型の車が止まっており、付近には事故に巻き込まれたのか、複数の負傷者が見られる。

さらに赤い車から火が出ており、非常に危険な状態だということは認識できた。

「!?いかん!タンクローリーが爆発するぞ!早く使節団を避難させるんだ!!!」

とスミスは慌てるように避難させようとするが、ヤゴウや他の魔導師が緊急事態だと認識し、現場へ急行した。

それに焦るかのようにはしくレットサーピスや外交官は後を追いかける。

「ちよ、ミスターヤゴウ氏!危険です!すぐに退避をお願いします!もうすぐ消防車とレスキュー隊が来ますから!」

「今治癒せねば、あの者たちは助からん!スミス殿には悪いが救える命は救わないと手遅れになる!」

「し、しかし…」

となおも引き留めようとするが、魔導師やヤゴウはそんな制止を振り切り、負傷者の治癒に取り掛かる。

負傷者はうなだれており、頭に開いた傷口からは、脈打つたびに、激しく出血していた。

「いかな…：。v m t a i b a, e o.; b, a; w s o e 4 i g a m o i s e o」

ヤゴウは何かを唱え始め、両手が淡い光を放つ。何もない場所から発生した光は太陽光よりも強く、一瞬見えない光景になったが、次の瞬間信じられない光景が広がっていた。

「!!!き…傷口が!!」

!!!負傷者の頭の傷が、みるみるうちに塞がっていく。数ヶ月以上かかる再生が瞬間的に再生された光景にスマスやボディーガード、大衆が目丸くしていた。

周囲には人だかりが出来ていた。

さらに魔導師も燃え盛る車に接近し、呪文を唱える。

炎の勢いは強く、タンクローリーに積まれている大量のガソリンに引火すれば大惨事になるだろう。

しかし、若い女性魔導師が燃え盛る炎に対し両手を向けた。

「g a v a t o . t o . y u h y u a r o . . .」

水が出現し、水は燃え盛る炎の中心でパンパンに詰まった風船がいきなり爆発するよ
うに水が爆発し、周辺の火をあつという間に消した。

この光景に周りの野次馬も驚愕した声を出す。

「す……すごい!!!見たか!?!今の」

「見た!!あの人が何かを唱えたら、傷が塞がっていった!!」

「oh……信じられない。まるで魔法みたいだ!!」

誰かが叫ぶ。

「?魔法ですが、何が珍しいのですか?」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ

何気なく答えた言葉に、周囲が沸き立つ。きよとんとするヤゴウ。周囲は喧騒に包ま
れた。

凄い…あれが魔法か

とスミスはヤゴウたちを急いで車へ誘導する最中に考えていた。

魔法はかつて伝説の空想上でしか存在しなかった。

だが、この世界に転移してから合衆国は空想上でしか存在しない生物や魔法と対面することになり、逆に合衆国が空想世界へ転送されたのではないのか？とデイズニーのよ
うな展開を思い浮かべてしまう。

空想上でしか存在しない魔法を目の前で見る事ができたスミスはある意味興奮していた。

子供の頃はデイズニーの魔法や日本のアニメや漫画も見て一時は魔法に憧れた。

当然、アメリカどころか、空想上しか存在しない魔法を実現することなんて不可能なものを夢見ていたが、大人になるにつれ薄れた。

しかし、この世界に来てから見る事ができない魔法を実際に見たことで、彼は魔法に対して興味を一層強く抱いた。

(合衆国でも魔法に対して調査されているが、まだまだ未知の領域が多く、うまくいけばクワトイネから魔法を扱える者を派遣してもらいたいものだ：我々でも魔法を扱うことが果たしてできるのだろうか：?)

と気分を高揚させながら使節団を急いでチャーター機へ乗せ、離陸する。

そんな遠くへ飛行する飛行機を眺めながら黒いスーツを見にまとう人々が車から見ていた。

「おい記録は撮ったか？」

「はい、バッチリと」

「まさか魔法を早速使ってくれるとは思わなかったが良い資料が撮れた」

「本当に魔法が存在するですね…」

「よし、それをペンタゴンへ送れ」

「了解です。」

アメリカやカナダ政府は最初に接触した調査隊の調査によりドラゴンの存在、中世のヨーロッパ、異種族などファンタジーの世界に出てくるような単語ばかりで最初は驚愕した。

接触した外交団からクワトイネ側からワイバーンを着艦するとき、風を操ってミニッツ級に着艦した時はすぐに政府に報告した。

これに魔法の存在を認識した合衆国はすぐに魔法について調査を進めると同時に機会があればクワトイネ使節団から情報を得るようCIAに調査させていた。そして

交通事故で起きた魔法は何もない場所から何十リットルという水が発生したと思えばあつという間に消し飛び、けが人も治療した。

C I A が録画した映像資料にC I A 上層部は仰天することとなった。

飛行機の中にて

「いやはや、驚きました。資料には書いてありましたが、実際に魔法を見ることが出来るとは……。その上負傷者の手当に消火まで貴国には感謝の言葉をかけます。」

スミスが褒め称える。

「アメリカでは、回復系の魔法は珍しいのですか？」

ヤゴウは、褒められて悪い気はしなかった。今までは驚いてばかりだったが、初めてアメリカ人を驚かすことが出来、内心少し自慢してやりたい気分になっていた。

「いえ、回復系もなにも、魔法そのものが我が国にとつておとぎの世界でしか存在しないものですから」

「え!!!」

スミスの何気ない一言に、使節団の一同は口をそろえて驚く。

「しかし、あの鉄龍やこの大型鉄龍との地上のやりとりは、魔信でなければ、なんなので

すかな?」

ハンキが問う

「あれは電波を使用しています。…何と申しますか、前にも一度ご説明申し上げたかもしれませんが、アメリカの発展は、すべて科学によるものです」

「全てかがく?」

「はい、アメリカは物理……。物の理ごとわりをとことん追求しています。これにより、作られた物により、アメリカは国を維持しています。

カナダも同様です。」

使節団にとって、国家機密級の発言をさらつと言われた瞬間だった。

アメリカに魔法が無いのなら、我が国の魔法技術を良い条件で輸出できる。

例えば、簡易式の外科を開設し、小さな傷や肩こりを治すことも出来るし、今回のような事故による救急外来でも需要はあるだろう。

一時的な傷の回復は、魔法が相当効果的だ。

また、魔法学校を開設して、授業料をとることも出来るだろう。

クワトイネ公国を発展させる上で、アメリカが科学のみに頼っているのは重要な発見だった。

戦闘に使えるほどの個人の魔導士を大量にそろえるのは、そもそも素質の問題があ

り、魔法技術、人的資源がものをいうが、アメリカの言う「科学」で、理を知っていれば作ることが出来るのなら、我々にもある程度の模倣ができる。つまり、「国力」の基本値を上げることが出来る。

魔法がないアメリカにとって魔法は飛びつかないはずがない、彼らの技術を導入しつつ交渉せねば・・・

「スミス殿、物のことわり。∴科学や物理を技術輸出してくれることは、可能だろうか？」

「我が国とカナダには最近、新世界技術流出防止法という法律が出来ました。中核的な技術の輸出は禁止されていますので、難しいとは思いますが、制限付きで物理だけなら、そのへんの本屋で売っています。ただ、翻訳作業が全く進んでいないので、あなた方の言葉に翻訳するのは、難しいと思います。合衆国との国交が締結されれば後に翻訳が進み次第買うことができるでしょう。」

この世界は、不可解なことが多く、言葉に関しても、言葉は通じるのに、文字にする と全く違う言語、文法になる。アメリカやカナダはこの世界に転移して間が無く、又、現時点どの国とも使節団派遣のレベルであり、国交が無いため、翻訳作業は様々な分野で急ピッチに進められている。

幸い言語の壁がないことで、お互いの翻訳作業はかなりの進行速度で進んでおり、ク

ワトイネ以外でも接触した異世界も言語の壁はなく、全て英語であった。英語は地域によつて異なるがクワトイネはアメリカ英語に近い。

ヤゴウは、物理、科学の本をなるべく多く持ち帰る事を心に決めた。

ただし、アメリカは異世界との圧倒的技術格差があることに気づき、なるべく中核的な技術や軍事技術、歴史資料、武器の資料、科学の発達について書かれている書籍について制限をかけた。

少しでも中国のように急激な発達しないよう制限するつもりでいた。

インターネットも後少して復旧する見込みであり、インターネットの Wikipedia や中核的技術に間する内容は規制をかける予定であった。

2020年、急激な成長によつて国力と軍事力がついた中国は南シナ海・東シナ海・インドの一部などへ武力を用いた実効支配を本格化させ、結果アジアへ派遣していたアメリカ軍と軍事衝突を繰り返した。アメリカやカナダ側としても圧倒的技術格差があるのならば、技術については慎重に取り扱っていた。

なぜなら一つの情報で日常だけではなく戦場も変える代物など多くあるのだから。

もちろん、情報は存在する限りいざ知られるだろうが、タイミングの問題であった。

現在アメリカやカナダが友好を目的とした外交でも相手が情報を持っているのといないでは外交のやり方が異なる。

簡単に言うなら、相手の情報を知っていると当然その情報を元に外交を進めるのだから、優位的に外交を進めたいアメリカやカナダ側にとって不都合になるからこそ、慎重に進めている。

飛行機は順調に走行していた。

「ハンキ様、それにしても、飛行機は速いですね」

「そうじゃな、これほどの速度で飛行しているのに、中はほとんど揺れず、快適そのものじゃ。しかし、これほどの速度で飛行するなら、事故が怖いのもう」

「飛行機は人為的事故以外で事故を起こすことは滅多になく、快適な空間で旅ができる安全な乗り物とのことです。」

「うーん、信じられんのう。そう聞いてもやっぱり不安じゃ」

そんなことを話しながら、飛行機は進んだ。

ヤゴウの日記

鉄龍：いや飛行機はとんでもない速度で飛行しているのに関わらず快適で空中で食事をする事になったことに驚愕した。

アメリカの飛行機は超大型であり、これを作ることは我が国にも、文明圏の国家でも

ほぼ不可能だろう。

ロサンゼルスという大都市とはいいい、この国は異常だ…

飛行機はワシントンDCへ到着した。

ワシントンにはロサンゼルスと違い、緑豊かで我々がよく目にする建造物もあるが豊かである。

一見ロサンゼルスほど巨大なこうそうびるといものが少ないが、政府組織だけなら十分すぎるほどである。

ここにはアメリカを代表する歴史や文化が充実しており、いい街だと思った。映像で見せてもらったニューヨークというものは信じられないものであった。

ロサンゼルスよりも人の数、鉄龍が飛び交い、天を貫くビルが多くあった。

我が国の有名な山脈エージエイ山（海拔高度539m）を凌ぐ建造物がアメリカには多く存在する。

もはや文明圏列強の首都を遥かに凌ぐ規模であり、何もかもが次元が違った。

しかも彼らの話によれば転移してから接触した国は我が国が初めてらしく我が国の国益に叶うよう、最大限の努力をするつもりだ。

私はこの歴史的瞬間に立ち会えることに非常に感激してやまない。

初めてのこの歴史的瞬間は我が国にとって将来大国へ仲間入りできる機会を有効に

使わなければならぬだろう。

4 交渉

アメリカ合衆国、首都ワシントンDC 国務省

翌日

ワシントンDCへ到着した使節団はホテルへ一泊したのちに国務省の会議室へ案内された。

クワトイネの外交官たちはアメリカ外交団と会議を始めた。

会議室には接待用の高級な装飾と机と椅子が用意され、机にはワインボトルやグラスがいくつか置いてある。

会議には国務省から数名の外交官とカナダから派遣された外交官を含めた国務長官が進めた。

「初めまして私はアメリカ合衆国、国務省長官マイク・ボンサンと申します。」

「私はカナダ連邦代表の外交官ジュリー・ペイジレットと申します。」

「は、初めまして私はクワトイネ公国使節団ヤゴウと申します。」

「わ、私はロポルト卿の…」

とクワトイネ側も紹介が終わるとマイクは両手を広げ歓迎の形を表す。

「我が国へようこそ、クワトイネ公国の使節団のみなさま、どうぞ最高級カルフォルニアワインをご用意いたしましたので、おかけください。」

と使節団と外交団は座り、まずはお互い社交辞令を交わす。

クワトイネ側ではこの会議でアメリカがクワトイネ側へ何を要望したいのか、具体的に決める場と聞いており、最も警戒していた。

ロサンゼルス市、超大型飛行機、圧倒的流通システム、文明力など見させられたあとで、どんな要望が来るか、予測できないでいた。

もしかすると服従か？ 属国：植民地：

悔しい話であるが、我が国が逆立ちしても圧倒的差がついており、まず勝つことはあらゆる面で不可能である。

もはや使節団の頭の中で蛮族と認識するものは一人もおらず、先日この国の代表アメリカ大統領に会った時は蛇に睨まれたカエルの状態であった。

もちろん、今までの対応からして、決めつけるのは早計ではあるが、それでもどうしても不安がよぎっていた。

さあ…何が来る…と不安を持ちながらしんみりとした雰囲気を出していた。

「では世間話はここまでにして、本題に入りましょう。農務省ビル担当官よろしくお願ひします。」

「農務省のビルと申します。単刀直入で揭示いたしますと我々は自給できるだけの食料は生産しておりますが、一部の食料は供給が足りず、食料を求めています。必要なりストをまとめた書類は2ページの上の欄に載っております。」

書類にはアメリカでは生産できないヨーロッパ・アジア・アフリカ・南米・オーストラリアなどしか生産できない食料が載っていた。

アメリカには世界中の植物の種や情報を豊富に持っていることは有名ではあるが、一から生産することは相当な投資をしなければならず、それなら他国から輸入したコストが安くなるという点と異世界の動植物を輸入する名目ができるということが考慮され、輸入が決定された。

例えば南米で生産されているコーヒー豆類、東南アジアで生産される野菜や果実などが圧倒的に不足している状態だ。

クワトイネでは天然資源は少ないが、良質な野菜・魚類・果実・肉類・穀物製品が生産され、生産される食料の幅が広いことは事前の情報でわかっていた。

さらにそれらが全く品種改良もしないまま、勝手に育つというのだから食糧生産大国のアメリカ側としても注目していた。

「うむ……年間あたりの総トン数も1500万トンですか」

「はい、貴国は農業が非常に盛んな国と伺っております。食料自給率が100パーセントを超えているので、どのくらい輸出可能なのか、知りたいと思っております。お互いの理解をもう少し時間をかけられればよかったです。いかがでしょうか？時間を改めて聞いた方がよろしいでしょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ、そうですね……現段階でいくつかの小目に該当する食料は我が国では良くわかりませんが、水産資源でも我が国の技術では到底供給を確保できるほどの量が獲得できないのも理由の背景にはありますが、それ以外でしたら十分輸出することは可能です。もちろん国王の許可が入りますが……」

「が？」

（ほう、食料の名前は地球のものであるが、どうやら名前も一緒みたいだな……）

「我が国にはこれほどの食料を貴国へ運ぶ手段を持ち合わせておりません。内陸の方へ大穀倉地帯が集中しており、それらを港へ運ぶだけの交通手段がありません。たとえ港へ運べたとしても、それらを積載するだけの大型船はありません。」

アメリカからの要望は供給するだけの量を確保するだけは可能だ。

だが年間1500万トンの食料を輸出するのは非常に困難であり、例えば自国の軍船、商船を全て動員しても運ぶことは不可能である。

「なるほど……では、インフラ関係が問題解決すれば輸出は可能ということですか？」

「はい、もちろんです。」

マイクはジュリーへ目配せした。

アメリカとカナダ3側として予測した通りと言えた。

中世の時代で1500万トンの食料を安全に新鮮な状態でアメリカへ運ぶことが不可能なことは最初の段階で知っていた。

なぜなら、いくら魔法があっても船舶は金属製ではなく、木製の戦列艦やガレオンなど帆船しかないからだ。

そんなもので運ぶのも不可能だし、運ばれても非常に困ることであった。

投資はかかるが港湾施設やインフラはアメリカ側が進めることで有利な企業進出や将来的にアメリカ製品に依存する。

クワトイネ公国側にとってこのことは気付くことはなかった。

そもそもアメリカやカナダにとって通商条約の方が重要であり食料などはクワトイネと貿易しやすいよう設定しただけにすぎない。

「クワトイネ公国側さえよければ港湾施設の改築とクワトイネ国内の穀倉地帯へ進むインフラ、鉄道関係の整備は我が国とカナダから政府援助資金を出し、我が国で整備いたしますが、いかがでしょうか？」

「

!!!!!!!!!!!!!!
 クワトイネ使節団がざわつく。水と食糧はタダを言われるクワトイネ公国において、食料輸出により、国が潤い、さらに、港と鉄道のインフラ整備をアメリカが買って出た。これほどの好条件があるうか。

会議はその後も続き、港湾施設の改築やインフラ関係の企業を進出させることにも好意的であり、調査によりクワトイネ側にとって必要ない資源地帯へ工場進出させるなどいくつかの条件も快諾した。

もともと農業が中心の工業などは第一次産業ほどしかない、クワトイネは農業、林業、漁業（水産業）が中心で、第二次産業は全くない。

*第一次産業は農業、林業、漁業（水産業）を中心とする産業を示す

*第二次産業は、第一次産業が採取・生産した原材料を加工して富を作り出す産業を示すことだが、具体的には電気・ガスなどを生み出す発電所や精製施設などが該当される。

これによつて第二次産業を主な業種とする企業はいくつか候補が上がり、アメリカの凍りついた経済を動かすための第一歩となった。

後に建設したインフラや港湾施設、公共施設についていくつかの条件を出されたが、何事も順調に進んだ。

会議は良好に終了した。

10日後……。

クワトイネ公国とアメリカ・カナダは以下の条約を締結した。

クワトイネ公国ならびにアメリカ合衆国・カナダ連邦における同意事項。

○ クワトイネ公国は、アメリカ・カナダに必要とする食料を輸出する。

○ アメリカ・カナダはクワトイネ公国のマイハーク港の拡充、マイハークから穀倉地帯へのインフラを、両国の資金により整備する。

○ アメリカ合衆国・カナダ連邦及びクワトイネ公国は、国交樹立に向けた話し合いを継続する。

○ 為替レートを早急に整備する。

○ アメリカ・カナダはクワトイネ公国からの食糧一括購入の見返りとして、今後1年間はクワトイネ公国内のインフラ（水道、電気、ガス）の整備を行う。

その後は、為替レートによる食料額に応じた対応を行う。

○ アメリカ・カナダ、クワトイネ公国は、不可侵条約締結に向けた話し合いを継続する。

○ クワトイネは整備された公共施設やインフラ関係のメンテナンスや維持費の負担額を3年後に話し合いにより負担すること。

使節団にとつては、とても良い条件で、アメリカ・カナダと良好な関係を構築することを實現し、アメリカとカナダ、クワトイネは、今後切つても切れない友好関係を築き、運命共同体となつて、この世界の奔流に挑むこととなる。

クワトイネ側としては今後の会談次第ではアメリカ・カナダとの軍事同盟・安全保障条約も視野に入つており、仮想敵国ロウリア王国に対抗すべく、日夜暗躍することになつた。

クワトイネ公国との国交締結が順調に進み、アメリカとカナダは異世界の国家との外交は順調そのものだった。

クワトイネ公国の隣国であるロウリア王国やクイラ王国とも外交官を送る予定であつた。

外交が順調に進んだことを報告として聞いた大統領執務室で座る人物はほくそ笑むのであつた。

ホワイトハウス安全保障会議

クワトイネとの外交成功はアメリカ側にとって異世界国家との貿易確立の前進となった。

クワトイネは中世時代の文明レベルでしかないが数年かけてアメリカとカナダが支援すれば立派なインフラや公共施設を持つようになり、食品・インフラ・公共設備関係の企業やサービス業界、自動車業界などが進出予定であった。

会議室の一番最も周りを見渡せる席にいるのはアメリカ大統領であった。

「以上トワトイネ公国と友好関係を築くことに成功し、将来的に企業進出が可能な国家となりました。」

「おー…」

「さすがですな…」

「これで少しは希望が見えますな」

「しかし、まだ安心はできませんぞ、海外事業を中心に大打撃を受けた企業は金融的危機でもあるのだ。この異世界をもっと接触しなければ我々にとって有利な条件で外交を

進めることは今後難しくなるだろう。」

と経済界の議員は発言する

「はい、諸君、我が国で生産できない食料を確保したことと友好国を得られたことは非常に大きい。」

今後二カ国の他に文明圏の国家、中央世界と呼ばれるこの世界をまとめる列強と呼ばれる国家との繋がりも今後として注目しており、私はこれに積極的に推進したいと思う。」

「文明圏？」

「中央世界？たいそれた名前だな……」

「まさに異世界ですな……」

「大統領、一つご質問よろしいでしょうか？」

「なんだね、国防長官」

「この世界は中世のヨーロッパ同様と聞きます、そんな世界で果たして友好は順調に続くものでしょうか？」

「いえ、クワトイネやクイラではうまく行きましたが、当然断った国もあります。中には我々を蛮族と罵り追い払った国家もいました。」

「蛮族？」

「彼らにとって我が国とカナダは転移したのだから、知らないのも当然と言える。今後の外交方針の中では我が国を知ってもらうことで最悪の事態を避けることとし、彼らと対話することが今後の大きく影響するでしょう。」

「大統領：最悪の事態とは一体何でしょうか？」

「戦争です。この世界は中世同様であるならば歴史をよく知っておられる方はお分かりでしょう。」

紛争・内乱・戦争・革命は当たり前の世界において地球のように我々が持つ価値観・考え方・思想・概念が通用しない場面も存在します。

事実、訪問したロウリア王国という国は我が国がクワトイネと国交を締結したため、我が国へ属国を宣言し、外交官を斬り捨てられる寸前まで状況が発生しました。

我が国民を守るためにできる限り戦争は外交の最終手段とし、話し合いで解決することを目標としています。」

「戦争ですか：：お言葉ですが大統領、中世の技術力・国力・軍事力程度しか持たない国家であれば戦争が起きても問題がないのでは？そのような国であれば我が国の沿岸警備隊でも対処が可能ではないでしょうか？」

「そうとも行きません。なぜなら彼らだけではなくこの世界には魔法や竜、巫人、海獣がいるからです。」

我々の常識が全く通用しないものが溢れている世界において技術的格差があつても安全とは言えません。

亜人の方は友好的な付き合いはできませんが、竜・海獣などは言葉が通用せず、中には脅威を持つものも現れる可能性があります。

現在、我が国は国内問題が多く抱えております。

アメリカ総戦力のうち3割が消失した今や再建に多くの時間を有します。

例え短期間で再建できたとしても大規模な国家総力戦など我が国の負担でしかありません。」

議会は事前には知っているとはいへ、騒然となった。

「現在、調査中にはありますが、万一魔法による侵略や攻撃に備え、対策中であります。」
「失った戦力を回復するだけではなく、増強する必要もあるのではないのですか？ 相手がどんな手段を用いるか、わかりません。しかし、それらを調査しつつ対策として軍備を増強する方がいいのでは？」

「確かに…」

「未知の世界において我がアメリカは国内問題を一刻も収束させ、この世界を知ることである。」

アメリカ力を回復させるために最大の努力をすることを私は全力を注いで回復させる。

そのためにも現段階ではまだ、情報が少ない状況の中、憶測で判断するのは早計というものだ。

軍備や魔法については次の議会とし、方針としてカナダと連携し、世界の全容を掴み、文明圏との接触という形式でよろしいですか？」

議会のあちらこちらから拍手が上がる。

アメリカは数週間ようやく暴動や大混乱から立ち直りつつあるが、まだまだ傷は深く、かつてのアメリカを回復させるために奮闘するのであった。

クワトイネ公国からクイラ王国やロウリア王国の情報が入ってくるにつれホワイトハウスはロウリア王国との交流は厳しいと分析した。

なぜならロウリア王国とクワトイネ公国・クイラ王国は敵対関係であり、ロウリア王国が亜人殲滅のために近々戦争するかもしれないからだ。

流星にこの状況にアメリカ政府内でもクワトイネ公国との国交締結は早期ではないのか？という意見も出たが、アメリカに鎖国という文字はない。

確かに自給するだけならアメリカ国内だけで十分可能だ。

だが、モンロー主義でやっていけるほど国内は余裕がなく、ゆっくりと衰退してしまおうだろう。

後のクイラ王国となら十分、国交締結に値する国となった。

さらにクワトイネ公国からいくつかの面白い情報も得られた。

それはクイラ王国には作物が育つ土壌はなく、植物すら育たない土地

しかも鉱脈は豊富にあるが鉱物の屑ばかりで、金銀銅鉄はあまり産出されない。

さらに平地には燃える黒い水が溢れているということだ。

これにアメリカ・カナダ外交官は注目した。

北米の原油埋蔵量は採掘されていない原油は多く存在するが、できれば他国から輸入したい。

地球でもアメリカは大量の原油を輸入することで国内の原油埋蔵量を温存する政策意図もある。

なので、クワトイネ側にクイラ王国へ仲介役として頼み、クワトイネ側はそれを了承した。

クイラ王国 王都バルラート

クイラ王国は中東のような岩山と砂漠、高原ばかりが広がり、特に産業は全くと言っていいほどない。

クワトイネ公国のように緑の自然には恵まれず、作物も燃える黒い水や屑鉱石の鉱脈のせいで全く育たない。

特に産業がない、クイラ王国はクワトイネ公国などを中心に優秀な戦闘団を抱えており、傭兵や人材派遣によって外貨を得る。

そして、その外貨でクワトイネから食料を購入することで何とか食料を得ていた。

ロウリア王国との関係は冷え切っているため、クイラ王国側もクワトイネは国家の生命線と言えるものであった。

クイラ王国の外交を司る王宮貴族メツサルは、『急な要件』ということで会談を希望してきたクワトイネ公国の大使を部屋で待つ。

（急な要件とは一体何だろうか？ まさかロウリア王国に変化が？）

彼の頭の中を、様々な可能性が駆け巡る。

ロウリア王国は、人間種以外の種を亜人（人間に満たない存在）と蔑む人類至上主義の国である。ロウリア、クワトイネ、クイラが存在するロデニウス大陸の統一を目論む覇権主義国で、特に最近では緊張状態が続いている。

メツサル自身もドーフと呼ばれる種なので、もしロウリア王国の支配に陥ればどうなるか、わかったものではない。

会談内容について思いを巡らせていると、部屋の扉が開いた。クワトイネ公国の外交

官ペインが、緊張の面持ちで入室してくる。

メツサルも立って出迎え、挨拶もそこそこに二人は席に着いた。

「急な要件とは一体何でしょうか？」

「実は我が国へ『アメリカ合衆国』と『カナダ連邦』という国家が我が国へ来訪し、我が国はアメリカへ使節団を派遣しました。」

「アメリカ合衆国？カナダ連邦？それがどうかしたのですか？」

「国家と国交を締結することは珍しいことではない。ロデニウス大陸以外にも訪れる国家は存在する。」

ペインは話を続ける

「我が国は両国との国交を締結いたしました。」

「…なるほど」

「国交を締結するならば一声かけてもらいたかったのだが、と少し不満があったが、気にせず進める。」

「そこで貴国へ是非ともご相談したいことがあって、今回秘密裏に会談を申し込みました。」

「両国はクイラ王国とも国交を結びたいらしく、我が国に仲介してほしいと頼んで来たので参りました」

まだ『急な要件』とは言えず、それが引つかかっていたメツサルが切り出した。

「して、当初お急ぎのお話だったようですが……何か特異な事態でも？」

先手を打たれたペインは、しばし沈黙する。ややあつて、重い口を開いた。

「実は……そのアメリカとカナダという国があまりにも特殊すぎるのです」

身構えていたメツサルだが、『特殊な国家』という形容が理解できず肩透かしを食らう。

ペインはクワトイネ公国とアメリカ合衆国との接触から使節団の話をした。

メツサルはにわかに信じられず、目を剥いた。

「……信じられません。その話が本当だとすると、文明圏内国家……いや、列強国と同等……もしかしたらそれすら超える国ということになる。そんな国が今まで知られなかったはずがない!!」

超大国科学文明国家、ペインが持ってきた上質な絵（写真）にはニューヨークのビル街や工業地帯などが写っており、その絵が信じがたいものが写っている光景に驚愕するのと同時にあり得ないという頭の常識が邪魔をする。

さらにカナダ連邦の写真にはカナダ オンタリオ州トロント市のシンボルタワーCNタワーが載っており、圧倒的高さに驚愕する

*CNタワー 高さ553.33mという世界有数の電波塔

「その通りです。しかし彼らは『突如、異世界から国ごと転移してきた』と申し立てているようですが、彼らの国は本当です。魔法を一切使わず、科学という力が彼らの文明の源のようです。」

「魔法を…ありがとうございます。しかし新たな脅威ですな、アメリカとカナダの種族構成はどのようになっていくのかはご存じでしょうか？」

メツサルは人間種以外の比率が気になって尋ねた。

仮に人間種の比率が多い国の場合、他種を迫害している可能性も考慮する必要がある。

「それが……人間種のみで構成されているようなのです」

「な……なんと!!ではドワーフや獣人族、エルフは存在しないのでしょうか？」

「……はい」

「ロウリア王国のように人間種以外は迫害しているのか、もしくは攻め滅ぼしたのかもしれません。そんな国とは関わりたくないものです。」

メツサルの強まった語気を、ペインは穏やかに制する。

「ご安心ください、彼らは確かに人間種しかおりませんが、ほかの種族に対して非常に寛容的です。」

国力や技術、軍事力も全てにおいて列強国を超えているというのは確かです。

そんな彼らがこちらへ友好的に興味を持っておりますゆえ、決して敵対関係にならないことを強くクワトイネ側としてご忠告申し上げます。」

「そこまで、か…」

一国の外交を預かる身として、メツサルは冷静さを取り戻す。

「む……少々熱くなりすぎたようです。では私どもも、アメリカ・カナダの使者を受け入れ、まずは話だけでも聞いてみようと思います。忠告に感謝します。」

後日、クイラ王国とアメリカ・カナダのファーストコンタクトとして、会談の場が設けられることとなった。

■ 約1週間後

クイラ王国とアメリカ合衆国・カナダ連邦の初会談の日がやってきた。

両国は海岸から離れた内陸部に位置する王都パルラートへ来るために、事前に飛行許可を取った後、海上の大型船から飛行機械が飛んできた（後にアメリカのオスプレイ、ヘリコプターという名前を後から聞いた。）

突如現れた見たことのない飛行物体を初めて見たときの王都は、すべての軍民が驚愕につつまれた。

両国との会談はクイラ外務局の応接室に移動し、お互い社交辞令から入った。

「初めまして、私はアメリカ合衆国の國務省から来ましたマイケルと言います。この度は貴国とのこのような機会に巡り会えて光栄です。」

「同じく、私はカナダ連邦から来ましたジョージと言います。本日はよろしくお願います。」

丁寧な挨拶に警戒心を解かないメツサルは、無表情で相手を観察していた。

「ご丁寧な挨拶ありがとうございます。両国のことはクワトイネ公国から噂は聞いております。技術的に非常に高く、高度な文明力を誇る国家とお聞きしました。」

「ご存知の通り、我が国は大きな産業や名産物ありません。そのような貧しい我が国に何をお望みなのですかな？」

もし、ここで両国からの要望が「生贄のための人的資源がほしい」や、「政治体制に対する介入」もしくは「領土的野心」があれば、追いつ返す気でいた。

この国は自然が非常に少なく、クワトイネ側から流れる水源も土地の環境によつて乏しい。

そのため食糧生産どころか、鉱物資源すらほぼない我が国は非常に貧しく恵まれた領土を持っていないせいで第一次産業すらほぼ成り立っていない。

その状態で何とか国家としての形があるのも今まで我が国の不毛な土地を欲しがる国が居なかつたおかげで侵攻されたことが建国以来ほぼないが、敵対勢力が居なかつた

わけではない。それがロウリア王国

ロウリア王国はクワトイネ公国とクイラ王国が持っている特性を持った王国で、人的資源や食糧生産に関しては2カ国を凌駕している。

その為日々侵攻に怯えながら軍事に何とか少ない資金を抽出し、軍拡を行なつて居たが、国民全体で今日すら生き残ることへ必死な状態で軍事力も増えるわけもなかった。

そんな国家として何とか成り立っている国だ。

「我々としては、友人となる予定の国家から卑劣な手段で奪うつもりも、領土的野心も一切ありません。

我々が求めるのは友人となる友好国です。

国交を締結することにより、できるだけ多くの友好国を欲しております。

また、クワトイネ公国大使からお聞きした情報で、貴国には『燃える黒い水』と『金銀銅にならない屑鉱石や鉱脈』が存在すると…

クワトイネ側から貴国で採掘されたサンプルを拝見しました。

是非ともこれらを我が国へ輸出してもらいたい。

為替——お金のレートが未決定なので、これらが決定するまでの間、我々は『インフラ』を輸出いたします」

ほう…随分と超文明国家にしては優しく丁寧でこちらに不利益となる要素は一切な

い。

だが、逆に彼らが求めている対象物がクズ扱いとなつている鉱石や燃える水だとは一體どういふことなのだ？

だが、これらを輸出するだけで我が国には長年問題であつた交通網や水道も解決し、さらに彼らは「はつでんしよ」や「てつどう」といふ彼らの持つてゐる技術を入手することができる。

まさに夢のような内容であつた。

しかし、これらを輸出するには大きな問題があつた。

「確かに……作物を作るのには使えぬ燃える水は、我が国に大量に噴き出しています。

ただ、あれは液体状の異臭を放つものであつて、樽や桶で保存しようにも入れ物自体が染み出し、ダメになつてしまいます。

あれらを仮に管道設備を建設し、吸い上げようにも石垣、木材のつなぎ目からも液体が漏れ出し、とても輸出は困難です。

鉱山で一応『燃える石』がございしますが、そちらはいかがでしょうか？」

「(管道設備？パイプラインのことか？) いえ、石も素晴らしいものでありますが、あくまでも我々が求めていますのは『燃える水』の方でございまして、燃える水の採掘や輸送などの必要な設備や施設はこちらで作りますよう。

詳しい施設の内容は、こちらの用紙を見ていただければお分かりになられると思います。」

「屑鉱石に関しましても、そちらで扱われる金銀銅以外のもの全てを我々は欲しております。」

1枚はメツサルが読めない字で書かれていた。もう1枚は大陸共通言語のいくつかが記載された対訳表らしく、アメリカ合衆国は本来言葉が通じて文字や文法などが違うのだと初めて気づく。

クワトイネ公国でも英語で通じたのだが、どちらかというところらの世界の英語はイギリス寄りが多く、聞きなれない英語もあった。

対訳に沿って読み進めると、その条件はクイラ王国にとって苦痛の種であった各種インフラの整備内容が書かれ、にわかには信じられないような好条件の内容だった。

(す、す)い：国内の異臭の放つ、燃える黒い液体と池、屑鉱石を差し出すだけで、これほどの技術を輸出してくれるとは：これは確実に国が豊かとなる。

ここに書いてあるリストに乗っているインフラだけでもかなり大規模工事となる。

まさか、ここに使う労働力を我が国から？

というか、とてもこれほどの事業が実現するとは思えない。

例え100年ほどの歳月をかけても無理だろう。

「・・・この条件は本当なのでしようか？これほどのインフラを完成させるまでに多くの時間と人的資源が必要としますが・・・」

メツサルが少し不安な気持ちで尋ねると

「はい、我が国とカナダ連邦について紹介資料を作成しましたので、ご簡単にお説明いたしますしょう。」

ジョージは空間投影型立体映像をパソコンから展開し、クイラ王国側に見せる。

見たことのない現象が起きたため、ビクついた人も出たが、両国は構わず続ける。

天を貫かんとする高層建設物、豊かな自然、そして美しい四季。インフラ整備のための工事方法や順序を納めたその映像を見て、メツサルは驚愕につつまれる。

ペインが持つてきた絵と同じ光景：いや、もつとだ・・・

どれもこれも見たこともないような風景、技術であり、『アメリカ合衆国』と『カナダ連邦』という国が、世界の列強国に匹敵するほどの国だと理解するに至る。

映像の真偽を確かめなくとも先ほど見た飛行騎、映像技術

未知の領域ではあるが、確実に言えることは蛮国ではないということだ。

人間種以外の種族は元々国内におらず、差別が原因ではないと知って、メツサルはようやくクイラ王への上申を決めた。

後日、クイラ王国はアメリカ・カナダとの国交を結び、両国からのあらゆる支援によつ

て、クイラ王国史の中でも類を見ない発展した。

さらにアメリカ・カナダの自然再生機関により、クイラ王国は一度も緑を誕生させたことがない土地から植物を植林し、未来クイラ王国は自国では到底望めなかった農業という産業を生み出すことになり、数十年後のクイラ王国は一度も親米国家として崩さず、クイラ王国民からも親しまれることになった。

なお、緑化に成功したのはカナダの機関により、クイラ王国には多くのカナダ人が訪れることになったという。

クイラ王国はクワトイネ公国に並ぶアメリカとカナダの友好国として、世界に名を轟かせることとなる。

アメリカとカナダの企業はクイラ王国から屑鉱石として捨てられていた鉱山や鉱脈を発掘し、クイラにはアメリカが必要とする原油・天然ガス・シェールガス・レアアース・レアメタルさらには石材など天然資源にアラスカより小さな領土にアメリカやカナダの年間消費量の数百年分が埋蔵されていることに政府関係者や科学者、資源関係企業は驚愕し、クイラ王国は両国にとって最重要貿易国として認定された。

さらにクイラ王国のレアメタル・レアアース地帯の地層には未知の鉱物なども発見され、これが後になって大きな影響を及ぼすことになる。

5 戦乱

中央暦1639年

アメリカとカナダという国が転移してから、数ヶ月が経とうとしていた。

彼らと国交を結んでから2ヶ月、クワ・トイネは、今までの歴史上最も変化した数ヶ月であった。

アメリカ合衆国とカナダ連邦は、クワ・トイネ公国と、クイラ王国両方に同時に接触し、双方と国交を結んだ。

アメリカ・カナダからの、食料の買い付けや工業進出などには、食料はともかく土地は余っているクワ・トイネは、アメリカからの要求に応える事が出た。

カナダの要求も食料は問題なく輸出することが可能だ。

クイラ王国にあっても、元々作物が育たない不毛の土地であったが、両国によれば、資源の宝庫であるらしく、戦略資源である原油・ウラン・レアメタル・レアアースなども埋蔵され、未知の鉱物も発掘された、クイラ王国は、大量の資源をアメリカに輸出するための施設建設ラッシュが開始されていた。

一方、アメリカ・カナダは、これらを輸出してもらおう変わりに、インフラや企業進出による膨大な雇用を輸出してきた。

大都市間を結ぶ、石畳の進化したような継ぎ目の無い道路、そして鉄道と呼ばれる大規模流通システムを構築しようとしていた。これが完成すると、各国の流通が活発になり、今までと比較にならない発展を遂げるだろうとの、試算が議会から上がってきている。

両国では今まで中国などへ進出、日本・ヨーロッパなどの電子部品、精密機械に頼っていた大企業や多国籍企業などは大打撃を受け、これよりアメリカとカナダ全体の経済が大混乱となった。

大混乱となった国内では何とか州軍を出撃させるなど落ち着きは取り戻しているが、かつて地球時のアメリカ合衆国を再建するには莫大なコストと労力が必要となった。

ましてや、発展途上国どころか、産業革命すら迎えていない欧州の暗黒時代のような国家へ精密機械や工業品を売りつけてもインフラや発電所、工業品を扱ったことがない彼らにとって無用な存在であった。

政府はクワ・トイネ公国やクイラ王国をサウジアラビアのように莫大な富を大量に使わせるために近代的な国家建設に全面サポートをする計画も立っていた。

コストや多大な労力を必要とするが、それでも何もしなければアメリカ・カナダの経

済はリーマンショック並みにダメージを受けている状態でさらに悪化し、世界恐慌以上の大打撃を負う事になる。

そうなればアメリカやカナダはゆっくりと国内から衰退し、再建に更なる時間がかかってしまうことは間違いない。

それだけは何とか避けるためにも両国は必死であった。

アメリカ同様転移したカナダも大混乱となっているが、政府はアメリカに追従する姿勢で方針を決めている。

莫大なインフラを輸出することで効率よく天然資源や物資をクワ・トイネとクイラから輸入できる。

両国へ柔軟に交通網を構想すれば将来的にアメリカは再建するだけではなく成長する見込みが十分考えられた。

アメリカの駐留軍と中東へ派兵した軍の損失は、いくら超大国と呼ばれるアメリカでも顔色が真っ青になるものである。

アメリカ軍全戦力のうち32%、総兵力29%少ないと見えるが兵力の140万人のうち24万人以上ほどである。

原子力艦艇も空母5隻、潜水艦14隻以上を損失した。

他にも金融業界など大混乱となっている。

まさしく転移現象はアメリカ合衆国全体を恐怖へ叩き落とす現象であった。

* 転移した範囲は北米大陸アメリカ合衆国・カナダ・ハワイ諸島・アリーシャン列島・グリーランドのみが転移しただけであり、アジアと中東を中心に駐留していた戦力を全て失ったこととなる。特にもつとも被害が大きいのはアメリカ欧州海軍第6艦隊、中東へ展開した第5艦隊、日本へ派遣していた第7艦隊の5割以上失った。つまりアメリカ海軍で即時作戦行動を可能とする艦隊は第1艦隊から第4艦隊。

幸いの点は消失した艦隊はいくつか、対中国戦争によって国内へ集結したことで、全ての第5艦隊から第7艦隊全てを失うことはなかったことで残存する艦艇を集めた第5艦隊編成にも加わることになった。

しかし、これによってアメリカ海軍は再建に奮闘することになる。

異世界国家側は各種中核的技術の提供も求めたが、両国には新たに、「異世界技術流出防止法」と呼ばれる法律が出来たため、中核的技術は貰えなかった。

また、武器の輸出も求めたが、前述の「異世界技術流出防止法」で「軍用兵器」輸出は禁止されている。

近代兵器は機密と戦略的に禁止されているが、猟銃・リボルバー程度などの民間の銃

器類は輸出を検討することになった。

アメリカ・カナダから入ってくる便利な物は、明らかに彼らの国の生活様式を根底から変えるレベルのものばかりであった。

いつでも清潔な水が飲めるようになる水道技術（もともと水道技術はあったが、真水ではとても飲めたものではなかった）、夜でも昼のように明るく出来、さらに各種動力となる電気技術、手をひねるだけで、火を起こせ、かつ一瞬で温かいお湯を出すことが出来るプロパンガス、これだけでも生活はとてつもなく楽になる。

両国はすべての分野において中世レベルなので、アメリカ・カナダは文化的支援も行い、各分野の向上させるためにも国力の基礎である教育システムや生活の質の向上など全面サポートに努めた。

しかし、どうしても連携することが難しい宗教や利権とのトラブルは跡を絶えなかった。

根本的に民主主義の政治・資本主義経済ではないことが仇となり、緩やかな資本主義形態へ移行することに政府や各企業も方針を固めた。

衣服や女性関係用品なども異世界の国家とは比較にならないほどの高品質であり、衣服関係や化粧品、女性生理用品などの大手企業を中心とした企業は異世界の事情を知り、積極的に企業進出させる計画もある。

まだまだ、数ヶ月しか経っていないので、普及はしていないが、それらのサンプルを見た経済部の担当者は、驚愕で、放心状態になったという。

国がとてつもなく豊かになると・・・

クワトイネとクイラはアメリカとカナダの全面支援の元次々とインフラや港湾整備され、真つ先に整備された港湾設備は見たことのない巨大な赤い金属製の超重機が設置され、海岸には繋ぎ目のない石で覆われ、超大型船でも停泊できる近代的な港湾設備へたった2ヶ月で変貌した。

これにはアメリカの資本が積極的に投入され、将来異世界国家との貿易市場拡大に狙いをつけている傾向が多くあったことが建設速度促進に繋がった。

その後、インフラ系企業が進出し、インフラの発電所・変電所・水道関係・アスファルト製の道路が建設された。

工事スピードは異世界側から見れば10年ほどはかかる工程をたった数ヶ月でやり遂げるアメリカやカナダに驚愕する声が上がった。

さらにアメリカは鉄道という線路を引いた上を走る金属の列車を走らせる事も計画されていた。

「すごいものだな、アメリカとカナダという国は…。明らかに3大文明圏を超えている。

もしかしたら、我が国も生活水準において、3大文明圏を超えるやもしれぬぞ…」

クワトイネ公国首相カナタは、秘書に語りかける。

まだ見ぬ国の劇的發展を、彼は見据えていた。

「はっ。しかし、彼らが友好的な国家で助かりました。強大な軍事力を保有しているのに関わらず、彼らの技術で覇を唱えられたらと思うと、ぞつとします。」

「そうだな、しかし、軍用武器を輸出してくれないのは残念だったな…それでも民間用ではあるが武器を売ってもらえる事に感謝だ、少しはロウリア王国の脅威も低減するだろう…」

「はっ！彼らの民間用とはいえ販売予定の『リボルバー』や『ショットガン』という銃器は素晴らしいものです。」

「うむ…あれを軍に配備できればロウリアを蹴散らすこともできるのかもしれない…：：：貴族たちの様子はどうか？」

「はい…最初はアメリカやカナダの政治形態を見て反抗する動きもありましたが、両国の素早い対応と政治には一切口を出さない姿勢を見せてくれたおかげで、沈静化しました。」

「そうか…しかし、アメリカやカナダという国…あの国には王族や貴族といったものが存在しないと聞いた時は驚愕よりも恐ろしさが舞い上がっていた…」

カナタは万が一アメリカやカナダと貴族や王族がいなかったことの影響によって貴族による妨害や過激的な行動に移すのではないかと冷や冷やしていた…

もし、何かしらアメリカやカナダの外交官などに危機があれば、両国が持つ海軍力だけでなくロデニウス大陸では対抗できない…

一瞬で滅ぼされ、貴族や王族は全て処刑されることも考えられなくはない。

特にクイラ王国は今の所悪政は全くないが、つい数十年ほど前はポルポラート・クイラ29世王によってかなり荒れ、現ジルト・クイラ30世によって非常に国民から親しまれている。

はあ…まだまだロウリア王国の件もある…安心できない状態だが、アメリカやカナダが助けてくれることを祈ろう…

とりあえずカナダから輸入したカナダ産メープルシロップ漬けのリングケーキでも食べよう…

アメリカの菓子料理は美味いが何分にも味が濃く、少し毎日というわけにはいかない…

しかし、カナダ産のメープルシロップ系のお菓子というものは非常に美味しく、今では貴族だけではなく国民にも徐々に広まって大人気名物となっている。

ふふふ…今日も仕事が終わったら、早速ケーキを…

「カナタ首相？」

「う、うむ？どうしたのじゃ？」

秘書である獣人族熊族の女性がモジモジとしながらこちらを見る

「今日カナタ首相の秘書を務めさせて頂いた私めに「メープルシロップのお菓子」を少し頂くことは可能でしょうか？是非ともお願いします！」

「き、君も好きだったのか…良いともカナタ産のメープルは美味いからのう」

カナタは、夕日を見ながら、そう嘆いた。

やはりアメリカやカナダと国交を締結してよかった…

両国の多民族に対しての反応は非常に良好で、全く差別しないアメリカ人やカナダ人に獣人族、翼人族、エルフなどが興味を持ち、特にドワーフは興奮しながらアメリカの土木企業関係者に詰め寄っていた。

『そなたたちの建設技術は一体どうなっているのだ！是非ともその技術を学ばせてくれ！！頼む！』

アメリカ人やカナダ人も多民族に対し非常に友好的でアメリカの自由の国というものに惹かれ、渡航希望者も後を絶たない程多く出ていた。

特にアメリカやカナダ系の料理で最も流行し始めた「メープル系の料理」は獣人族に

人氣が爆発し、上品なサトウカエデの幹に傷をつけ、そこから溢れ出す濃厚な樹液から生まれる味わいが人氣を増長させていた。

『な、なんだこの甘さは!!!』

『こんなものは今まで味わったことがないにやーーー!!!』

『もっと欲しいです!村のみんなにあげたい!』

『カナダに行かせてください!!!』

とアメリカやカナダ側を困らせる事態も起きたが、両国の法律の整備が終わるまで、両国へ行きたい人々は待つことになった。

ロウリア王国

王都ジン・ハーク ハーク城 御前会議

月の綺麗な夜、秋になり、少し涼しくなったこの日の夕方、城では松明が集れ、薄暗い部屋の中、王の御前でこの国の行く末を決める会議が行われていた。

「ロウリア王、準備はすべて整いました」

白銀の鎧に身を包み、筋肉が鎧の上からでも確認出来るほどのマッチョで黒髭を生や

した30代くらいの男が王に跪き、報告する。

彼の名は、将軍。パタジン

「2国を同時に敵に回して、勝てるか？」

威厳を持つ34代ロウリア王国、大王ハーク・ロウリア34世はその男に尋ねる。

「二国は、農民の集まりであり、もう一国は不毛の地に住まう者、どちらも亜人比率が多い国などに、負けることはありません。」

「宰相よ、1ヶ月ほど前接触してきたアメリカとカナダという国の情報はるか？」

アメリカ・カナダは、クワ・トイネ公国国交締結後、ロウリア王国にも接触してきたが、事前にクワ・トイネ公国と、クイラ王国と国交を結んでいたため、敵性勢力と判断され、ロウリアには門前払いを受けていた。

何か黒い服を基調とし、どこか清潔感溢れる格好であったが、両国が持ち込む献上品にはハークも目を引いた。

あれほどの技術や文化があるのならば忌まわしいクワトイネとクイラを殲滅した後、攻め入るのも悪くはないだろう。

「情報ではロデニウス大陸のクワトイネから北東に約9000kmの所にある、新興国家です。9000kmも離れていることから、軍事的に影響があるとは考えられませ

ん。

また、奴らは我が部隊のワイバーンを見て、初めて見たと驚いていました。竜騎士の存在しない蛮族の国と思われれます。その他の情報はあまりありませんが」

ワイバーンの無い軍隊は、ワイバーンの火力支援が受けられない分、弱い。

空爆だけで、騎士団は壊滅しないが、常に火炎弾の驚異にさらされ続けるため、精神力が持たない。

「そうか…。しかし、ついにこのロデニウス大陸が統一され、忌々しい亜人どもが、根絶やしにされると思うと、私は嬉しいぞ」

「大王様、統一の暁には、あの約束も、お忘れ無く…クッククック」

真つ黒のローブをかぶった男が王に向かってささやく。気持ちの悪い声だ。

「解っておるわ!!」

王は、怒気をはらんだ声で、言い返す。

(ちっ、3大文明圏外の蛮地と思つてバカにしおつて。ロデニウスを統一しアメリカとカナダを攻め滅ぼした後はフィルアレス大陸にも攻め込んでやるわ)

9000kmという情報もどうせ超長距離という情報で攻め込まれないようにするための偽情報だろう。

どうせ、どこかの島国に決まっている。(

「將軍、今回の概要を説明せよ」

「はっ！説明致します。今回の作戦用総兵力は50万人、本作戦では、クワ・トイネ公国に差し向ける兵力は、40万、残りは本土防衛用兵力となります。

海軍としても4400隻以上の戦艦でクワトイネ沿岸地域を制圧する予定です。

クワトイネについては、国境から近い人口10万人の都市、ギムを強襲制圧します。

兵站については、あの国は、どこもかしこも畑であり、家畜でさえ旨い飯をたべております。現地調達いたします。

ギム制圧後、その東方250kmの位置にある公都クワ・トイネを一気に物量をもつて制圧します。

彼らは、我が国のような、町ごと壁で覆うといった城壁を持ちません。

せいぜい町の中に建てられた城程度です。籠城されたとしても、包囲するだけで干上がります。

これらの航空兵力は、我が方のワイバーンで数的にも十分対応可能です。

それと平行して、海からは、艦船4400隻の大艦隊にて、北方向を迂回、マイハーク北岸に上陸し、経済都市を制圧します。

なお、食料を完全に輸入に頼っているクイラ王国は、クワトイネからの輸出を止めるだけで、干上がります。」

終わるが、戦力差は圧倒的であり、どう対抗しようにも軍事力差は覆せない。

公国は何とか勝機を導き出すため、動き出すのだった：

アメリカ合衆国大使館

「と、言うわけでロウリア王国と戦闘が始まったら、貴国に対して約束された量の食料品の輸出と工場進出計画が白紙になるかもしれません。」

クワトイネとロウリア国境にて、ロウリア王国の兵力が集結しており、戦闘が近いと判断したクワトイネ側は、アメリカ大使館に説明に来ていた。

国務省のジェフは、その言葉を聞いて絶句する。

突然の国ごとの転移、地球から遮断され、国務省に科せられた使命、それはかつてのアメリカ再建であった。

大穀倉地帯で、肥沃な土地を持つクワトイネ公国と友好関係を結べ、かつ貿易候補となる国家が見つかったことは奇跡であった。

さらに、アメリカの幸運は続き、クイラ王国にはアメリカが必要とする資源をほぼ一カ国でまかなえるほどの埋蔵量が確認おり、エネルギー関係の企業関係の倒産やアメリカでは採掘できない資源は解決できた。

それでも、二カ国が軌道に乗るまでアメリカが負担をしなければならぬが、それでも国があるだけマシだった。

それが、ここに来ていきなり、食料や工場進出計画が途絶える可能性がある事を知らされる。

もしも、クワトイネからの輸入が途絶えても、国民が飢え死にすることは無いが調理バリエーションが大きく減ってしまう上、経済活性化のための工場進出計画がなくなる、経済がまた悪化するだろう。

ただでさえ、経済や金融などがリーマンショック以上のダメージが入っている状況で、先延ばしする猶予はアメリカにはなかった。

最悪の場合、政権が潰れ、さらなる大混乱となる。

「なんとかありませんか？我が国は、輸入や工場進出計画が途絶えると、非常に困ります。」

「わが国としても非常に心苦しいことではありますが、ロウリア王国は我が国やクイラ王国の総合戦力だけでも圧倒的な軍事力を保有しています。

彼らは、現在国境付近で、軍の集結が確認されています。

我が軍としては圧倒的な物量の差に対抗するため都市や穀倉地帯などを放棄し、戦略的撤退を繰り返すことも考えられます。

そのような戦況で、流通や食料を確保し続けることは非常に困難だと判断し、同盟国の貿易を停止することは同盟国として大変遺憾だと思っております。」

「つまり、既にロウリア王国の脅威によつて貿易が難しいということですか？」

「そうですね…我が国としても貴国との貿易は是非とも今後続けたいと思っております。が、忌まわしいロウリア王国軍によつて我が国は国家存亡の危機を迎えている状況でもあります。」

もし、貴国から援軍があると助かるのですが……。」

（頼む…アメリカやカナダからの援軍があれば我が国は間違いなく、この戦争に勝利できる！）

ロウリア王国の脅威は時が経つごとに迫る一方、何としても早く行動しなければ我が国は消滅する！」

「援軍ですか…わかりました、この件は大統領へ報告し、前向きに検討させていただきます。」

「おお！それは助かります！ぜひともよろしく願います！」

「こちらこそ輸入や工場進出計画についてはよろしく願います。」

一国を見捨てて、また、新しい国と国交を締結するか、クワ・トイネ公国を危機から

救うのか。

議会はアメリカ合衆国の再建途中でもあり、再建を最優先に行うべし、と声も上り議会はスムーズに進み海外派兵へ検討するのであった。

中央暦1639年4月11日午前——ロウリア・クワトイネ

国境付近

ロウリア王国東方討伐軍 本陣

クワ・トイネ公国外務部から、何度も国境から兵を引くよう魔法通信にて連絡があった。

すべてを無視する。

もう戦争することは、決定しているのだ。

「明日、ギムを落とすぞ」

Bクラス将軍。パンドールは、ギムに攻め込む先遣隊約3万の指揮官の任を与えられていた。歩兵2万、重装歩兵5千、騎兵2千、特化兵（攻城兵器や、投射機等、特殊任務に特化した兵）1500、遊撃兵1000、魔獣使い250、魔導師100、そして、竜騎兵150である。

数の上では、歩兵が多いが、竜騎兵は1部隊（10騎）いれば、1万の歩兵を足止め

出来る空の覇者である。それが150騎もいる。

パンドールは、満面の笑みを浮かべ、部隊を見つめていた。

ワイバーンは高価な兵器である。ロウリア王国の国力であれば、本来国全てをかき集めても、200騎そろえるのがやっとである。

しかし、今回は、対クワ・トイネ公国戦に、500騎のワイバーンが参加している。

噂では、第三文明圏、フィルアデス大陸の列強国、パーパルディア皇国から軍事物資の支援があつたとされている。

真実なのか、不明ではあるが…。

いずれにせよ、先遣隊だけに150騎のワイバーンという戦力を投入できることに、パンドールは満足だった。

「ギムでの戦利品はいかがでしょうか？」

副将のアデムが話しかける。彼は、冷酷な騎士であり、ロウリア王国が、領地拡大のために、他の小国を統合した時代、占領地での残虐性は、語るに耐えない。

「副将アデムよ、お前に任せろ。」

「了解いたしました。」

アデムは、將軍に一礼すると、後ろを振り返り、すぐさま部下に命じる。

「ギムでは、略奪を咎めない、好きにしてい。女は虜つてもいいが、使い終わったらす

べて処分するように。

一人も生きて町を出すな。

奴隷を希望する将校や軍人、民間人が居れば許可する。ただし亜人族は徹底的に皆殺しにしろ。

建造物は全て焼き払い、全てを破壊するのだ！

奴らの文化を一つも残してはならん！

浄化するのだ!!!

全軍へ伝えよ!!!

「はっ!!!」

アデムの部下は、すぐさま天幕を出ようとする。

アデムはたつた今思い付いたかのように兵士を制止する。

「いや、待て!!!」

アデムに呼び止められる。

「やはり、翳つてもいいが、100人ばかりを生かして解き放て、恐怖を伝染させるのだ。

それと…

敵騎士団の家族がギムにいた場合は、なるべく残虐に処分すること。

「そうだな、串刺し刑とし広場に見世物として飾ってやればクワトイネ軍も戦意を失うだろう。」

部下は、天幕を飛び出し、命令を忠実に伝えた。

ロウリア王国はクワトイネとの本格的な戦争へ突入し、楽に勝てる相手だと認識していた。

それが大きな間違いであったことが知るのは大分先となるのだった。

余談ではあるが、アメリカの金融関係で最も難航したのは『金』の価値であった。

金はいつの時代でも常に高価な価値を持ち、価値の変動が少ない。

それは金そのものが非常に貴重であり、世界中で金の埋蔵量は採掘できる範囲で50mプール一杯分ということ。

その金が異世界に転移したことによって異世界でどれほどの金が埋蔵されているのか、わからず、アメリカの金融関係の企業や担当官は寝る暇もなく、資本家や金を保有する国民の対応で忙殺された。

6 凶行

クワトイネ公国、西部国境付近 貿易都市ギム

クワトイネ軍西部方面騎士団、第一飛龍隊、第二飛龍隊を管轄する司令官西部方面騎士団団長モイジは、焦燥感と緊張感にかられていた。

西部方面の国境付近に配備されている戦力は歩兵隊2500人、弓兵隊2000、重装歩兵隊5000、騎兵隊2000、軽騎兵1000、飛龍隊合計24騎、魔導師30人、鉄砲隊10人

ロウリア王国は国境付近に軍を集結させているという情報が入ったときからクワトイネ側は警戒体制となり、準有事体制へ移行した。

国境付近に集結しているロウリア軍勢はこちらの戦力を優に上回り凌駕していた。

さらにロウリア王国側はこちらの通信を一切遮断し、無視されていた。

既にギムでは外国人を中心に避難が開始されているが、まだギムには9割の住民が住んでいる。

クワトイネ公国政府も、市民を避難させていたが、まだ時間がかかっていた。

ロウリア軍の戦力は歩兵隊2万、重装歩兵隊5千、騎兵隊2千、特化兵隊（攻城兵器や、投射機等、特殊任務に特化した兵）1500、遊撃兵隊1000、魔獣使い250、魔導師100、そして、竜騎兵隊150である。

これだけの戦力差に加えてワイバーンが150騎という圧倒的差である。できれば、この場から早く逃げ出したいと思っていた。

目の前の軍勢はどう考えても勝てない。

我々ができることは精々相手に出血を負わせるくらいしかできないだろう。

モイジはそんな気持ちを抑えて、気品溢れる声で部下に尋ねる。

「ロウリアからの通信はないか？」

モイジは魔力通信士に尋ねる。

「こちらからの通信は、確かに届いているはずですが、現在のところ、返信はありません。それどころか、こちらからの通信を無視し続けています。」

多少の兵力差なら作戦で、善戦はできる。

しかし、今回は圧倒的すぎる差がある。いったいどうすれば良い？

こんなものただの一方的な虐殺となる！

何とか司令部から増援が出ないものか…

「司令部からの、増援要請の回答はどうなっている?」

「司令部には、再三に渡り、要請してはいますが、「現在非常召集中」とのみ回答が着ており、具体的な回答はありません」

「ちっ!!のんびりしている暇は無いというのに!!! さっさと今ある兵力だけでも増援をもらわないと、ギムを放棄することになるぞ!!! 奴らはどんどん侵攻することになる! 畜生!!」

くそ! これだけの戦力差で敗北することは既にわかっている! ならばアメリカから導入したショットガンという新式銃で何とか相手にできるだけ出血を負わせてやる!

司令官として戦を始める前から負けることを認め、諦めることは間違いなのかもしれない。

だが、どうせ、敗北するというのならば、クワトイネ公国軍の誇りを見せてやる!!!

配備された鉄砲隊はアメリカから導入されたショットガンM37イカサヤリボルバーの扱い方を教え込まれた鉄砲隊だ。

クワトイネの中でも最強の部隊であり、近距離ならばワイバーンすら勝利できるとい

う画期的な武器だった。

ただし、アメリカから導入された鉄砲隊は導入されて2ヶ月ほどの部隊だ。

練度もそれほど高くはなく、高火力を有するが、まともに戦えるか、どうか：

元々弓矢や剣で戦う兵士に近代兵器の扱いを教え込むことは非常に難しく、そもそも常識が全く異なるところから壁が立っていた。

最初の段階でリボルバーの反動や発砲音に怯え、驚きを抑えるところから始まり、次の問題も馬がりボルバーやショットガンの放つ射撃音にびつくりし、使えなくなるといふ事態も発生した。

文明圏を持つ銃や大砲によって文明圏外の国家が運用する騎兵を発砲音のみで使えなくなったことは非常に有名な話で、まさしく課題も多かった。

それでもアメリカの企業や軍人は分かりやすく、簡単な整備や撃ち方などを教え込んだが、戦術についてはたった2ヶ月で教えるなんて焼け石に水だ。

それでも何とか形になり、優秀な人材を選別したメンバーだが、それでも不安な気持ちに駆られながら準備を着々と進めるのであった。

クワトイネが導入したアメリカ製の武器はクワトイネ公国を驚かせるのに十分な武

器であつた。

今までの戦争は隊列を組み、槍兵、大砲、弓兵、歩兵隊、ワイバーンなどが主役であつたが、ショットガンやリボルバーというものは恐ろしく効率よく敵を殺すことができ、一人の兵士から放たれる火力は魔導師の火力に匹敵する。

それが何発も連続で撃つのであるから、敵からすれば絶望する火力だ。

さらに威力も重装歩兵を一撃で吹き飛ばすほどで、もし、市街戦、森林戦、洞窟など範囲が狭い地域でこの兵器を導入すれば圧倒的な制圧力で敵兵は肉片となる。

銃というものはパーパルティア皇国やロウリア王国でも導入しているマスケット銃があるから知っているが、非常に高価で維持費、製造費、火薬の確保などの問題から多くの武器を導入することはクワトイネやクイラ王国は財政的に厳しかった。

もともとお世辞にも裕福とは言えない二カ国がアメリカとカナダとの国交締結できたことは幸運だった。

ショットガンは射程150m、リボルバーは100mと従来のマスケット銃とは一線を画する。

ショットガンは水平連装式ショットガンとイカサM37、リボルバーはシングルアークシオンアーミーといった比較的整備の簡単な武器をアメリカ側は無償提供した。

本当であればもつと欲しかったが、無償提供された以上の量を買おうとすれば、価格

はクワトイネ側から見てマスケット銃の5丁分ほどの値段だったため、少数にしか配備できなかった。

最終的に配備できた数は全部でショットガン50丁、リボルバー150丁だった。そのうち扱えた兵士は50人ほど。

シングルアクションアーミーは100年以上前のリボルバーで、現在では美術品としての価値が高く、少数ではあるが、生産されている。

だが、もし、時間と資金があればアメリカから導入したりリボルバーやショットガンだけで戦争のあり方を変える武器に匹敵するものだった。

それぞれの思いを乗せ、無常にも時は過ぎていった。

中央歴1639年5月早朝

国境から20kmの町、ギム

突如として、ギムの西側国境から、赤い煙が上がる。と、同時に通信用魔法から、緊迫した通信が入る。

『こちららホークス!!』ロウリアのワイバーン多数がギム方向へ侵攻!!』同時に歩兵：数万が国境を越え、侵攻を開始した！繰り返す、はっ!?クソ！背後からワイバーン接近！回避……ぐああああ！』

魔法通信が突如途絶える。

赤いのろし、ロウリアがクワトイネに侵攻した合図、それを目撃した西部方面騎士団団長モイジは吼えた。

くそ！ついにきたか！

「第一飛龍隊及び第二飛龍隊は全騎上がり、敵ワイバーンにあたれ!!軽騎兵は、右側側面から、かく乱しろ!!騎兵200は遊撃とする、指示あるまで待機!!最前列に重装歩兵、鉄砲隊その後歩兵を配置、隊列を乱すな。弓兵は、その後ろにつけ、最大射程で支援しろ！」

魔道士は、攻撃しなくて良い、全員で、風向きをこちらへ風上としろ。」

飛龍が舞い上がる。全力出撃の24騎、高度を上げる。隊を2隊に分け、1隊を水平飛行、2隊目に上昇限度まで高度を上げさせる。

やがて、ロウリア王国の方向の空に黒い点が大量に現れる。その量に、クワトイネの飛龍部隊は驚愕する。

ロウリア王国東方討伐軍先遣隊 飛龍第一次攻撃隊 その数75騎

クワトイネの飛龍部隊は、勇猛果敢に、ロウリア側の飛龍へ突っ込んでいった。

ロウリア王国の飛龍部隊75騎は、クワトイネの飛龍を視界に捕らえた。

ロウリア軍第一飛龍部隊 部隊長

「火炎弾の空間制圧射撃を実施する。」

飛龍を指揮する竜騎士団長アルデバラン、彼は一気にケリをつけるつもりだった。

75騎のワイバーンが、面のように、並び、口を開ける。

口の中には、徐々に火球が形成されていく。

「発射5秒前、4, 3, 2, 1, 発射!!」

75騎のワイバーンの火炎弾一斉射撃、火炎弾の回転方向により、面の内側の火球は推進力を経て射程距離が面外側よりも伸びる。

この特性を使い、クワトイネの龍が射撃を開始する前に、一斉射撃を実施。

クワトイネの飛龍12騎に直撃、落ちていく。

「隊を2つに分けていたか…。上空に警戒せよ」

アルデバランが指揮をした40秒後、太陽を背に、上空から12騎のワイバーンが1列になって突っ込んでくる。

彼らは、すれ違いざまに、火炎弾を発射した。

3騎の飛龍がこれに直撃し、落ちていく。

彼らはすぐに乱戦となった。ロウリア側は、5騎1騎にあたる。バタバタと、クワトイネの飛龍が落ちて行き、数分ほどで、クワトイネ公国飛龍部隊は全滅した、まさしく圧倒的だった。

「地上部隊を支援する。全騎、支援射撃を実施せよ」

ワイバーンたちは、クワトイネの地上軍に襲い掛かった。

「ち……ちくしょう!!!敵の飛龍は、量も多い上に、技量も高い!!!」

クワトイネ公国西部方面騎士団団長モイジは壁に拳を打ち付け、体を震わせていた。「まさかこんなに早く竜騎士団が全滅するとは」

これが圧倒的差というものか!

敵の飛龍は、攻撃目標を地上軍に絞り、空から火炎弾を打ち下ろしていた。

被害が拡大する。

こちらからの反撃方法は、ただ一つ、風の魔法によって射程距離と威力を上げた付与した大弓を打ち上げるのみ。

しかし、基本的に魔力を滞留させる技術は難しく、数がそろえられない。

せいぜい10発程度であり、しかも誘導魔法もない。

対空の大弓は、空しく空を切る。

この世界の対空攻撃は、ほとんど当たらない。気持ち程度である。

(三大文明圏には、もう少し効果的な兵器があるらしいが・・・)

だが、できるだけ奴らに一撃を入れてやる!

「鉄砲隊! 前方のロウリア歩兵隊へ射撃開始せよ! 進みながらで構わん!」

鉄砲隊はショットガンとリボルバーを構える。ショットガン兵士4名、リボルバー6名

(しつかりと構える…構えは腰だめ…衝撃を逃すように…)

と鉄砲隊はアメリカ軍に教えてもらった銃の作法を何度も頭の中でシミュレーションしながら構え、引き金を引く

引き金を引かれたショットガンとリボルバーから大きな射撃音が響く、散弾銃から放たれる弾丸は広範囲に飛び、ロウリア軍へ命中する。

リボルバーからもバアン!と発砲音を鳴らす。

そして、2秒もしないうちに次弾も発射される。

「グアアアアアア!!!」

「ゴフツ!!」

「グッ!」

と6名ほどのロウリア兵士が倒れ、さらにショットガンの薬莖を排出し、次弾装填し

たシヨットガンの銃口から火が吹く。

カランカランと葉莖が地面に落ちる

銃口の火が吹くたびにロウリアは死傷する。中には馬から体ごと吹き飛ばされる兵士もいた。

さらにリボルバーはシヨットガンよりも早い連射能力で次々と攻撃する。

ロウリア側はクワトイネ側の鉄砲に驚愕していた。

「なっ!?バカな、どうして蛮族が『銃』を持つている!?クワトイネ軍にはなかったはず…」と啞然とした表情になるが、その間にもクワトイネ軍は被害を増やそうとシヨットガンやリボルバーの弾薬を装填し再び発砲僅か数分の間で50名のロウリア兵が倒れた。中には頭部がミンチになるといふ馬鹿げた威力も持っていた。

「ええい!ワイバーン部隊!こいつらを焼き払ってしまえ!歩兵隊もこいつらを囲むのだ!」

「は、はい!」

とワイバーン部隊にも伝わり、鉄砲隊に向けて波状攻撃を仕掛ける

「くそ!もう残り3発しかない!」

「俺もだ!」

「せめてもう少し戦いたかったが、これも定めか……」

「くそ！来るなら来い！」

と残りの残弾を全て出し切るように撃った弾丸がワイバーンとの距離が300mほど離れた上空で命中せず、ワイバーン部隊は鉄砲隊へ火炎弾を放つ

「……ここまでか！アメリカの鉄砲があればほど効果を出すとは驚いた……」

だが、まだ、負ける訳にはいかない！せめて、住民を……家内が逃げ切るまで戦う！
祖国はアメリカやカナダが助けしてくれることを祈ろう」

「モイジ様！危ない！」

「ーゴフツー！」

と彼の意識はここで途切れてしまった

激しくクワトイネ騎士団は抵抗するが大量のワイバーンの対地支援で終止を打った。

真つ先に狙われた鉄砲隊は火だるまになりながら最終的に自身が持つシヨットガンの弾薬が火災により暴発したことで死亡する者や残弾が切れたところで歩兵隊や重装歩兵に滅多打ちされるといふ光景が広がった

その後軍勢はクワトイネ全軍へ攻撃を移したことでクワトイネの騎士団は大打撃を受けていた。

すでに戦力の3分の1が失われている。そこへ、ロウリア先遣隊歩兵、重装歩兵合わ

せて2万5千がなだれ込む。

30分で、クワトイネ騎士団は壊滅、動く者はいなくなつた。

西部方面騎士団団長モイジは、氣絶していたところで後ろに繩をかけられ、捕虜となつていた。ギムは、すでにロウリア先遣隊により包囲されている。

「あのモイジもこうなると形無しだな、弱い。魔獣を投入するまでもなかつた」

ロウリア先遣隊副将アダムは、モイジを見下し、勝ち誇つている。

「そういえば、お前の妻と娘はギムにいたな」

「何をする気だ!」

「おい!」

アダムは部下に命じる。

「モイジの妻と娘は、ここに連れてこい。こいつの前で、散々翳つた後に、魔獣に生きて
まま食わせろ…ああ、!!それと娘は兵士たちのおもちやにしていいたいだろう。」

「き、きさまああああ!!!」

モイジは飛び掛ろうとするが、すぐに取り押さえられる。

「大丈夫だ。全て見届けた後で!!!お前も魔獣の餌にしてやるから」

「おのれええええええええええ!!!」

アダムの恐怖の命令は、その日のうちに実行され、町のあらゆる所で、強盗殺人、強

姦、略奪、暴行が行われ、モデムの一族も、悲惨な運命をたどる。

さらに処刑された住民は全て串刺しとし、街の周辺に晒された。

生きて解き放たれた100人は、その惨状を、各都市に伝えた。

ギムの出来事が終わったあと、アデムは一人で思案していた。

まさか、クワトイネゴときが銃を持っていたとはな…それも連射を可能とする銃なぞ、第三文明圏でも見たことがない。

できれば回収しなかったが、ワイバーンの攻撃によって黒焦げになった銃はとても解析できる状態ではなかった。

銃によって歩兵隊45名、騎兵隊34名という戦死者を出した。

全体で見れば79名は戦況に全く影響のない数値だが、たった10人に僅か10分間の間での戦闘で出た戦死者の数としては異常であった。

そして、負傷者は65名、合計死傷者144名

一体奴らはどこから仕入れたのだ？

その様子を空から見下ろす存在がいた。

高度1万m

灰色の巨大な航空機、アメリカ空軍が保有するグローバルホークだった。

無人機から送られる映像はまさしく凄惨・残虐・地獄という単語があっているものだった。

ロウリア軍はギムの住民を片っ端から殺害し、男性は手足を切り取られ、生きた状態で魔獣にゆつくりと殺され、兵士たちが面白半分にナイフの的となり、何本ものナイフを刺され死亡した人

女性は若い女性はほぼ全てと言っていいほどレイプされ、魔獣に食われたり、体の一部をゆつくり切り取られ、最後には心臓をくり抜かれる

子供に至っては馬で首を縄で縛られた状態で町中引きずられる。

まさしく地獄であった。

「ひでえ……子供まで殺してやがるよ」

「こいつら人間じゃねえよ、獣に生きたまま食わしている」

「これじゃあ、民族浄化と変わらないじゃないか！」

と無人機から送られる映像にオペレーターや司令官は険しく睨みつけていた。

映像で行われている虐殺はまさに悲惨、地獄絵図だった。

これはすぐにアメリカ政府へ伝えられ、衝撃的な出来事であった。

政府は直ちにメディアなどを通じ、ギムの大虐殺について規制は入っているものの大々的に公開した。

そのあまりの残虐な行為と虐殺に偵察していたアメリカ軍を中心に国内に戦争より再建を優先させる声がクワトイネ救出とロウリア戦争を望む声がり、一気に参戦へ世論は傾くのであった。

「卑劣で野蛮な絶対王政のロウリアを許すな！」

と国民の声も大きくなり、アメリカ政府はロウリア王国を敵国と認知し、派遣することが決定した。

中央歴1639年 クワトイネ公国 政治部会

西の町、ギムはロウリア王国に落ちた。しかも、町のほとんどの民が虐殺されるといった大惨事、政治部会は重苦しい雰囲気にも包まれた。

「現状を報告せよ」

首相カナタの命令に、冷や汗をかいた軍務卿が答える。

「はっ！現在ギム以西は、ロウリア王国の勢力圏となっております。奴らの総兵力は、先遣隊だけで3万を超え、スパイの情報によると、作戦兵力は40万に達する模様です。」

また、第三文明圏、フィルアデス大陸の列強国、パーパルディア皇国が、彼らに軍事支援をしているとの未確認情報もあり、現に今回500騎のワイバーンを投入してきております。また、4000隻以上の艦隊が港を出航した模様です。」

絶句——

会議の誰もが息を飲み、その情報を頭の中で繰り返す。50万という数値、これは、クワトイネの予備兵力も入れた総兵力の10倍、しかも、ワイバーンが500騎もいる。さらに、何処にいったか分からない4000隻以上の艦隊。彼らは本気で国を取りに来ている。そして、自分たちにそれを防ぐ力が無い。

絶望…

会場は、静粛に包まれた。

その時、外務卿が手を挙げる。

「首相、よろしいでしょうか？」

「何だ？」

「実は、政治部会が始まる寸前に、アメリカ大使館から連絡がありました…。」

「内容は？」

「はい、全文を読み上げます。」

（アメリカ合衆国とカナダ連邦は、クワトイネ公国、貿易都市ギムでの発生したロウリア

王国による組織的虐殺、民族浄化は極めて残酷的なものであり、アメリカ・カナダは軍を対ロウリア王国戦に派兵の用意がある」とのことです。」

「よし！よし！！援軍を出してくれるということなんだな？！」

「はい、こちらが要望すれば更なる戦力を送ることも可能であり、我が国からの食料輸出やインフラ・工場計画が白紙になると困るようです。」

会場がざわつく。

絶望の淵を、静かに朝日が上ろうとしていた。

「よし！！すぐにアメリカに応援を要請しろ！援軍の食料はこちらで準備するとも伝えろ！また、領土、領空、領海での行き来を、対ロウリア戦終結までの間、自由に往來を認めるとも伝えるように、そして軍務卿！」

「はっ！」

「全騎士団及び飛龍部隊に、アメリカ軍に協力するよう伝えろ！」

「

了解しました！」

援軍要請を受け、アメリカ政府は直ちに派遣する軍を送るのであった。

援軍を送るのは再建中の艦隊からイージス艦22隻、原子力空母1隻、補給艦2隻、潜水艦2隻、アメリカ級強襲揚陸艦3隻、LCAC—1級エア・クッション型揚陸艇6隻、航空兵力200機、多数の戦闘車両・人員を派遣すること決定。

しかし、アメリカ軍は潜水艦に関してはロウリア海軍の実力を図るのとロウリア王国へスパイを送るために別働隊として動員し、クワトイネ側には伝えなかった。

これが後にアメリカ・カナダにとってロデニウス戦争と呼ばれる戦争の始まりだった。

異世界で初めて星条旗とメイプルリーフフラッグは牙を向くのだった…

7 派兵

アメリカ合衆国サンディエゴ海軍基地

海軍基地には海外派兵のために出撃する艦隊が集結していた。

ロデニウス派遣艦隊と呼ばれる艦隊はアメリカにとって初となる異世界派遣だった。

派遣される艦隊は空母1隻、イージス艦22隻、貨物弾薬補給艦2隻、原子力潜水艦2隻、強襲揚陸艦3隻、航空兵団170機、海兵隊も載せた大艦隊。

ロデニウス派遣艦隊

旗艦原子力空母ジェラルド・R・フォード級3番艦エンタープライズ

アーレイバーク級駆逐艦22隻

ドニー・ブローニング級貨物弾薬補給艦2隻

バージニア級攻撃型原子力潜水艦2隻

アメリカ級強襲揚陸艦3隻

L C A C ー1級エア・クッション型揚陸艇6隻

航空兵力

空母所属

F/A—18E/F、F—35C、E—2C/D、EA—18G、MH—60R/S
80機

強襲揚陸艦所属

F—35C、MV—22D型、CH—53E/K、UH—1Y、MH—60S、AH
—1Z ヴァイパー合計90機

合計170機

海兵隊装備

エイブラムスM1A3主力戦車、HMMWV、ストライカー装甲車、M2/M3ブラッ
ドレー、MLRS、MRAPなどが多く搭載されている。

クワ・トイネ公国のギム虐殺はアメリカとカナダ国内に大きな反響を与えた。

まさしくこの世の地獄と言える光景に徐々に落ち着きを取り戻していたアメリカ、カナダ国民は『ギムを思い出せ！卑劣で野蛮な絶対王政ロウリアを許すな！』と異世界の残虐性に驚愕し、軍が救済すべき！と声をあげた。

政府内の中には軍の再建が始まってもない段階で派兵することに難色を示すもの

もいたが、圧倒的過半数で可決された。

政府は大規模艦隊を派遣することを決定。

軍部でも異世界の軍事力は例え魔法があつても、中世と変わらず、ワイバーンもたかが300kも飛べないのであれば脅威にならないと判断し、海軍は空母1隻、強襲揚陸艦3隻派遣した。

通常相手がミサイルや空母を保有していた場合、空母1隻のみでは少ないが相手は航空母艦を保有しておらず、異世界海軍とはいえ中世の軍隊には十分と判断された。

また、ロウリア軍はギム侵攻後、大規模艦隊を派遣することが偵察衛星で判明し、これを撃滅、撃退することが最優先となった。

相手の数は4400隻とかなり多く、駆逐艦の数を多くした編成となった。

旗艦エンタープライズ

派遣艦隊司令官。パターソン少将が軍港に浮かぶ艦隊を艦橋から見ている。

「いきなり異世界へ転移したのか、と思えばすぐに戦争になるとはこの世界は思ったよりも物騒だな…合衆国はどうやらとんでもない世界に来てしまった…」

とため息を吐く

ギム虐殺によってアメリカ軍はクワトイネへ支援するために派兵が決定した。

今の合衆国はかつての地球にいた頃のように気軽に軍隊を派遣できるほどない。

消失した艦隊や軍隊の再建、経済はクワトイネ公国やクイラ王国との貿易によって一部は回復の兆しがあるが、まだまだ転移騒動のダメージは大きい。

今回の艦隊も合衆国海軍第二艦隊から抽出された戦力で編成された。

本なら第二艦隊が派遣される予定であったが、この世界に転移したことで北米大陸付近の海洋生物の生態系というものは大きく変化した。

今まで世界最大の海洋生物は鯨であったが、この世界では先ほど東海岸で未知の巨大海洋生物出現によって漁業に支障が出ているという。

とても沿岸警備隊では対処しきれないと政府は判断し、急遽第二艦隊を当てた。

第一艦隊は南洋海域調査隊の護衛、第三艦隊はメキシコ湾の警備、第四艦隊はアラスカ州の警備として置かれている。

第五・第六・第七艦隊はヨーロッパや中東、日本などに派遣されている艦隊で全体の5割以上が消失した。

それらの艦隊は残った艦艇で再び再編成中ではあるが、まだ時間がかかる。

それらの艦隊は残った艦艇で再編成中ではあるが、まだ時間がかかる。

こうして何とか市民の今まで通りの日常が送れているのも政府の適切な対処と海外との接触が成功し、アメリカやカナダにとつて必要とする資源や食料を確保でき、凍結した経済を何とか立て直すことに成功しているからだ。

そして、ようやく企業が海外へ進出できる兆しが見えたというところで戦争である。アメリカ政府としてロウリア王国との戦争は早期終結を願っており、ロウリア軍の艦隊や侵攻部隊を撃滅し、電撃作戦で首都を占領すれば早期終結は可能だろうと踏み込んでいた。

そのため、派遣艦隊は最新鋭艦ではないが、強力な艦隊となった。

「あと10分すれば艦隊は出撃する、それまで各艦隊は問題がないようにチェックを行うように、と伝えよ」

「イエス・サー！」

「はあ…できるだけ死者が出ないうちに終わることを祈るばかりか…」

ホワイトハウス

「そうか、派遣艦隊は出港したのだな？」

「はい、先ほどクワトイネに向けて出港いたしました。」

「まさか合衆国初となる異世界の戦争になるとは…この世界は我々が思った以上に野蛮な世界のようなだな」

「ギム虐殺以外でもロウリア軍は村町を襲い、ギムと同様の光景が各地で広がっているとのことですよ。」

「クワトイネ軍は何もできないのかね？いくら数の差がつけられようと村町くらいを守ることができないのではないかね？」

「それは非常に厳しいかと思われます。ロウリア軍にはワイバーン部隊や魔獣兵器、攻城兵器など多く確認されており、クワトイネ軍にはそれらを防ぐ手段がありません。」

「先月我が国からの手土産を使っても難しいのか？」

「さすがにシヨットガンやリボルバーだけでは無理があると思われます。クワトイネは今でもインフラを中心に開発されていますが、まだまだ時間がかかるとのことです、自分で満足に整備・製造・調達ができない状況では仕方がないと思います。本当であれば整備に使用される道具類も輸送する予定でしたが、東海岸を襲った未知の生物によって思ったように輸送が進んでいないことが仇となりましたね」

「・・・やはり先月でも発生した東海岸を襲った未確認生命物体も痛いものだな、名前はタナトスだったか？」

「はい、タナトスは白亜紀に生存している首長竜の一種と思われ、全長50mはあります、とスクリップス海洋研究所から報告がありました。移動速度も20ノット以上と非常に早く、この世界の生態系は地球とは異なる自然界ですから」

タナトス、それは古代の地球では化石となり、既に絶滅した生物と言われていた首長竜と酷似していた。

異世界に転移したことで海洋生態系というものは地球の生物もいたが、同時に未知の生物が多く存在し、その中でも最も危険生物とされているのはアメリカ東海岸を襲ったタナトス

当初、政府は沿岸警備隊に命じ、駆除しようとしたが、沿岸警備隊の装備では倒すことはできてもタナトスからの体当たりや高度な知能で集団襲撃通称ウルフパック戦術によって、沿岸警備隊の6隻が撃沈された。

当初、政府は沿岸警備隊に命じて駆除しようとしたが、沿岸警備隊の装備ではタナトス単体を倒すことはできてもタナトスからの体当たりや高度な知能で集団襲撃通称ウルフパック戦術によって、沿岸警備隊の6隻が撃沈された。

しかし、徐々に駆逐艦などの旧式アーレイバーク級が損傷するなど無傷では済んでいない。

タナトスは大型海洋生物のため、ソナーや水上レーダーなどで探知は可能だが、一度深くまで潜行されると攻撃ができなくなるといふ事態も起きている。

原子力潜水艦も魚雷や爆雷などで対処しているが、相手が大型海洋生物のため、スクリーナーに死骸が巻き込まれ、行動不能に陥る潜水艦もいた。

*ウルフパックとは第二次世界大戦時、ドイツ海軍潜水艦隊司令 カール・デーニッツ少将が考案した通商破壊戦術の一つ。一つの目標に対し複数の潜水艦が周囲を囲み、協力し同時に攻撃し、艦隊を攻撃する戦法。

そのほかにも見たことのない毒を持つ海洋生物によって沿岸地域のビーチや漁業組合でも被害が出ていた。

「まさか、白亜紀に存在する生物がこの世に存在するとはな…この調子だとジュラシツク・パークも夢ではないかもな」

「大統領、流星にそれはないか、と…」

「いや、わからないぞ、先月、打ち上げたNASAの衛星からの情報ではこの地球は我々がいた地球よりも数倍ほどの大きさがあるという報告もある。」

「我々としては存在して欲しくもないことですが」

「ハハハハ!!!存在して欲しくもない、か、私としては恐竜をこの目で見たいものだ。」

「……その話はさておき、先ほどお話してもありましたクワトイネのことですが、今回はたったショットガン50丁、リボルバー150丁ではクワトイネ単独でロウリア軍を撃退することは難しいでしょう。今後どうなるか、はロデニウス派遣艦隊によるでしょう。」

「そうか、わかった。今日の予定は何があつたかな?」

「はい、午後1時から未知の海洋生物対策について会議、3時からNASAへ訪問し、局長との会議、7時からは国防長官との会議が」

「やけに会議が多いな…そうか、わかった。」

星条旗国家のリーダーは転移騒動から今日までなんとかアメリカ国内のトラブルに対処し、異世界国家との対応に胃を痛めながらも働くのだった

アメリカ派遣艦隊はクワトイネ公国に向けて、ロウリア軍を撃破すべく目的地へ進む。

クワ・トイネ公国、現ロウリア軍占領下シユリアナート市

「お母さん、お腹が空いたよ…」

「うう…私たちはこれからどうなるのだろうか…」

「ああ…神様…」

シユリアナート市の郊外に位置する村から疎開してきた獣人族の村人はギムでの出来事を聞くと村長は直ちに疎開を決断し、村人全員で避難したが道中でロウリア軍に捕

まっってしまった。

捕まった村人たちの男性はその場で処刑され、女性や子供は余興のために近くの占領下であつた街に連れてこられた

毎晩何名かの容姿の良い女性や子供が連れて行かれ、戻ってくることはなかった。

時折叫び声と兵士たちの笑い声が響いた

收容されている建物の中には街の住人もいた。

そして、朝になると兵士たちは村人や住人に見せつけるか、のように連れて行つた子供や女性を惨殺、串刺し、魔獣に食べさせるといふ場面も時々あつた。

その時のロウリア兵士たちはまるで自分たちを人間ではなく、家畜同然で見ていた。

日々ロウリア兵士から行われる苦痛に目を背けるように伏せると近くにいた仲の良い幼い少女が話しかける

「ねえ……リリシア姉ちゃん、どうしてあの人たちは私たちを殺したりするの？」

「……ロウリアの兵士たちは私たちを家畜同然に見ているからよ……彼らは私たちを獣人とも思っていないからね」

「……ロウリアの兵士たちは私たちを家畜同然に見ているからよ……彼らは私たち獣人をも思っていないからね」

「家畜……私たちは違うのに……」

「あいつらの宗教上だと私たちは殲滅される存在だからね…」

「……そんな…じゃあ、私たちはただ殺されるのを待っているしかないの?」

「……クワトイネ軍が助けてくれるまではそうなるわね…あいつらは脱走した住民も例外なく処刑しているから…」

当然、このような状況で脱走する人もいたが、その人たちは捕まった朝方に收容所の前まで連れてこられ、女性なら見せしめに兵士たちに遊ばれた後、惨殺され、子供は魔獣に食われる。

たとえ收容所の人数が少なくなっても、また新たな「犠牲者」が連れてこられる

兵士たちの断片的な話によれば後少してクワトイネの要塞都市エジエイまで侵攻しているらしい

クワトイネからの救援は期待できない、か…

この絶望的状况から打開することはできないか、とりりシアは考えるが、全く思いつかない。

クワ・トイネ公国には悪いけど、ロウリア軍を退ける軍事力を保有していないクワトイネ軍にはもはや勝ち目は無い。

かつて自分はロウリアの奴隷商人によって雇われた人攫いに誘拐され、奴隷として売

り払われた。

主人は奴隷を徹底的に酷使し、時によっては気まぐれに刺し殺し、汚い作業もさせられる。

そんな状況が続く中、自分はようやくやく隙をついて脱出し、クワトイネまで逃げ込んだのはいいもの、まさかのロウリア侵攻であった。

これに流石に気づくのが遅かったリリシアは村人とともに捕まってしまったのだ。

ロウリア軍は亜人である自分たちを決して生かしてはくれず、例外なく殺すか、奴隷とする。

まさしく悪魔のような存在だった。

(クイラ王国へ貿易商人として付き添い、行動していたが、捕まるなんてね…エルモン家として恥ずかしいわ…妹のマミュやお父様、お母様が恋しい…会いたい…なんで…なんで私ばかりこんなことになるの…)

と冷たい床の上で密かに泣いていた。

そんな出来事とは変わって、兵士休憩室では今日も兵士たちによって遊ばれクワトイネの女性の悲鳴が響く中、外に二人の兵士たちが葉巻を吸っていた。

「ふう、やっぱりクワトイネの葉巻は良い葉っぱを使っているからうまい、これが癖になるぜ」

「へ、そうか、俺としては昨日可愛がった獣人の猫耳娘がよかったな」

「昨日も楽しんでいやがったな？」

「当たり前さ、俺らはもうエジエイまで侵攻している、クワトイネとの戦力差は圧倒的、クイラ王国軍が参戦してきても勝てるロウリア王国に敵無し！」

第3文明圏の力を借りたとはいえ、圧倒的な力を持つ俺らに敵はいねえよ

楽しめる時に楽しまないといっつ楽しむんだ！」

「へいへい、そうかい、だが、ほどほどにしろよ？先週なんて楽しんだ兵士が変な病気にかかってしまったなんてあったからな」

「ああ、第15騎馬隊だろ？あいつらはバカなだけさ、病気持ちなんて一目でわかるのに」

「確かにな、まああいつらは馬鹿ばかりを集めた部隊だから仕方ないさ」

「そのせいで怒り狂った兵士が10人以上住民を殺しまくったから抑えるのに苦労したがね」

「ああ、まあ、その後そいつは最前線へ送られたらしいが、楽しむための住民を殺してどうするんだってな」

「まあ、今では新しく毎日のように入ってくるけどな」

「ははは!!楽しみは尽きねえってな！」

「今までだけでも10万は殺したからな…亜人どもはもつとか？ああもつとこねえかな」

「落ち着けて、俺らもエジエイ攻略戦には行くのだから、もつと楽しめるさ」

「それもそうか！ああ、楽しみだぜ…ぐへへ」

と彼らの会話は夜遅くまで続く。

ロウリア軍によつて侵攻された各地では同じような光景が広がっており、彼らもまさか今援軍が向かっている彼らにとつての異世界軍との最初の戦いに遭遇するなんて思つてもいなかった…

8 ロデニウス沖海戦

中央歴1639年　マイハーク港

ロウリア王国が、4000隻以上の大艦隊を出港させたという情報が伝達され、マイハーク港の海軍基地へ、クワ・トイネ公国海軍第2艦隊が集結していた。

各艦は、来たる決戦のために準備し、各兵士が敵船へ切り込むための梯子や剣などの装備をチエツクする。

艦艇へダメージを与えるための爆弾や矢、鯨油などが続々と船舶へ積み込まれる。

艦隊数は50隻、クワトイネ海軍が用意できる最大の艦艇数であった。

「壮観な風景だな」

提督。パンカーレは、海を眺めながら、ささやく。

「しかし…敵は4000隻を超える大艦隊、彼らは何人生き残る事ができるだろうか」

側近に本音を漏らす。圧倒的な物量の前にどうしようもない気持ちがかみ上げる。

「提督、海軍本部から、魔伝が届いています」

側近であり、若き幹部ブルーアイが報告する。

「読め」

「はっ！本日夕刻、アメリカ合衆国ロデニウス派遣艦隊20隻が援軍として、マイハーク沖に到着する。」

彼らは、我が軍より先にロウリア艦隊に攻撃を行うため、観戦武官1名を彼らの旗艦に搭乗させるように要請する…との事です。」

「何だ?! たったの20隻?! 200隻の間違いではないのか?! あまりにも少な過ぎるぞ！」

「間違いではありません」

「なんて奴らだ、やる気はあるのか……。しかも観戦武官だと? 20隻しか来ないなら、観戦武官に死ねと言っているようなものではないか!! 明らかに死地と解っていて、部下を送るような真似は出来ないぞ！」

沈黙が流れる。

「…私が行きます」

ブルーアイが発言する。

「しかし…。」

「私は剣術ではN.O.1で一番生存率が高いのは私です。それに、あの鉄龍を飛ばして来

たアメリカの事です。もしかしたら勝算があるのかもしれませんが……

それに彼らから輸出された武器の性能には目を見張るものがあり、あれらを開発する彼らには何か切り札があるのかもしれませんが。

我が国に訪問した時も200m、300mの艦艇は確認されたことから戦闘艦の戦闘能力は高いのかもしれませんが。」

あれらとは米国が輸出した民間で使用されるリボルバーや猟銃などだ。

米国の企業としてはもつと売り込みたいというのも本音であったが、新世界技術流出防止法があるのと高性能な銃器を輸出してもそれらを維持、修理能力の皆無な国家へ売っても意味がないからだ。

当たり前ではあるが、現代武器兵器はきちんとしたメンテナンス・整備・修理、部品を供給、乗り物を動かすための燃料

これらを支える工業いわゆる基礎工業力がなければ全く意味がない。

自動車一つにしてもガソリンスタンドどころか、製油所すら存在しない地域に売ってもガソリンが切れれば動かない。

これらを全てアメリカとカナダがカバーしようにも転移騒動のダメージが大きい状況ですぐにはできない。

なので、整備の簡単であらゆる環境下にも対応しやすいのがリボルバーやショットガンなどだ。

リボルバーは6発入りの旧式ではあるが、部品も少なく扱いやすい銃と5発装填可能な、高い威力を持つショットガンだ。

クワトイネやクイラはこれに驚愕し、ただでさえ前装式のマスケット銃は一発しか装填できない上、射程は50メートルくらいだ。

それが、リボルバーは射程200メートル、装弾数6発、連続で撃てるということに軍務関係者は驚愕と民間用で作られるアメリカに戦慄したという

その上、ショットガンはイカサM37を中心にとする散弾銃、装弾数4＋1発、射程150メートルもあり、威力はマスケット銃と比べものにはならず、重武装の兵士を一発で吹き飛ばすという実験結果も出ていた。

彼らを一番驚愕させたのはワイバーンを近距離であればショットガンを5発撃てば倒せるということだ。

パリスタを数十発も撃ち込まないと倒せない敵がたった5発で倒せるということだから。

それを見越してブルーアイは進言した。

「すまない……。頼んだ……」
「はつつつ！」

その日の夕刻

ブルーアイは、目を疑っていた。

その船は、彼の常識からすれば、とてつもなく大きかった。アメリカとの接触の際に、第一海軍が、200mクラスの船を臨検したという話を聞いていたが、自分たちの仕事の成果を誇張するために、嘘をついていると思っていた。

しかし、今彼が見ている船たちは、遠くの沖合いに停泊しているにも関わらず、とてつもなく大きく、そして帆が付いていない。

やがて、一際大きな船から、剣、竹トンボのような金属でできた飛行物体が飛んできた。

事前に連絡は受けていたが、どうやら乗り物らしい。それが近づくにつれ、大きな風を受ける。

理解不能な乗り物に乗り、沖へ移動した。

フワフワのシートに座り、ほとんど揺れずに「それ」は進んだ。ワイバーンよりも遅

いが、遙かに快適で、人が大量に運べる。

それだけでなく、銃らしき武装も搭載しているようであった。

やがて、母船が見えてくる。

その大きさに驚愕する。

(一体何だ！この大きさは!!)

そうか、これだけ大きければ、人員もたくさん搭載できる。切り込みの際は、中から大勢の人が出てきて一気に一隻ずつ制圧していくのだろう。

これなら、一回の戦闘に投入できる人数が多いから、1隻あたりの戦力は大きいだろう)

彼は、自分の理解の範疇で、空母を理解しようとしていた。

ジェラルド・R・フォード級原子力空母3番艦「エンタープライズ」

全長333 m

全幅41 m

吃水12 m

乗員

操艦要員：2、180名

航空要員：2、480名

基準排水量80,000t以上

満載排水量10,1600t

艦載機ジェット機やヘリコプター合計90機以上、同時に戦闘機を4機同時発艦させることができるアメリカ海軍最大の戦闘艦である。

これは……。鉄で出来ているのか？どうやって海に浮いている？

あの剣のような飛行物体は一体どうやって飛ぶ？

あの建造物の上に建っている、くるくると回る黒い板は？

なぜ、戦列艦よりも速い速度で進む？

疑問は尽きない。彼は、アメリカ軍に言われるがまま、艦内に入っていった。

……中が…明るい。

何か燃やしているのか？それとも、光の魔法？これは魔導船か？

彼はやがて提督と出会う。

「ロデニウス派遣艦隊のパターソン提督です」

「クワトイネ公国第2海軍観戦武官のブルーアイです。このたびは、援軍感謝いたします」

「早速ですが、我々は、ロウリア軍の船の位置をすでに把握しており、ここより西側500kmの位置に彼らはおります。船足は、5ノット程度と非常に遅くはありますが、こ

ちらに向かつてきております。我々は明日の朝出航し、ロウリア軍へ攻撃を開始します。

明日までは、ゆつくりとさせていただきます。

ちようど今日はチキンの日ですので、よければ食堂へ行ってください。」
ブルーアイは驚く。

彼らは、自分たちだけで、クワトイネ海軍の協力を得ずに、4400隻の大艦隊に挑むつもりなのだ。

自殺行為だ！と叫ぶところだったが、寸でのところで思いとどまる

確かに艦は大きく、切り込み用水夫を大人数収容できるだろう。それにこれほどの巨大な船体であれば敵艦に体当たりし、そのまま粉碎する攻撃方法を持っているのかもしれない。

それにあれほどの大量の鉄龍がいればなんとか戦局を有利に進めるのかもしれない。それでも、やはりたったの20隻で、4400隻に挑んでいくのは、自殺行為にならないだろうか？

また、お馴染みの対艦バリスタや、火矢を防ぐ木盾、大砲すらないことに不安に駆られた。

一応第二艦隊にはアーレイ・バーク級駆逐艦やタイコンデロガ級巡洋艦なども含まれ、5インチ主砲やC W I Sなども搭載しているが、あまりの規格外と見たことの無い装備だったため、ブルーアイはそれらが武器であることを認識できなかった。

不安に駆られながら、食堂で出される食事のポリュームを見た途端一気に吹き飛ぶ。

は？何だ…この量は…それに美味しい!!!

とブルーアイはチキンを片手にガツガツと食べる。

まさか…船の中でこれほど美味しい料理が食べられるなんて!!!

翌日早朝

ロデニウス派遣艦隊は出航した。

ブルーアイは驚愕する。

(一体何回驚愕すればいいのだ!?)

艦隊速度が速い！我が軍の帆船最大速度を遥かに凌駕している。そして…他の艦と

の距離が遠すぎる。密集する必要はないのか？

先ほど轟音とともに飛び出した剣の金属飛行物体も何だったんだろうか？

艦隊は約25ノットで西へ向かう。

先ほど鉄龍が轟音を鳴らしながら空へ舞い上がった。

そして変な羽が上向きに取り付けられた鉄龍も飛び立っていった。

見たことも無い飛行物体の発艦姿に見惚れていたが、すぐに意識を切り替える。

私は戦闘状況をもっと前線で知るために駆逐艦という船に乗船した。

先ほどの超大型正規：竜母艦？と呼んでいいのだろうか：竜母艦は前線には出ず、後方から支援することになっている。

飛び出した飛行物体、「F/A-18」は偵察用カメラとミサイルを搭載した状態でロウリア軍へ真っ直ぐ飛行するのであった。

ロウリア王国東方討伐海軍 海将 シャークン

「良い景色だ。美しい…」

大海原を美しい帆船が風をいっぱい受け、進行する。

その数4400隻、大量の水夫と、揚陸軍を乗せ、彼らはクワトイネ公国経済都市マイハークに向かっていった。

見渡す限り船ばかりである。

海が見えない。そう表現したほうが正しいのかもしれない。

6年をかけた準備期間、パールディア皇国からの軍事援助を経て、ようやく完成した大艦隊。これだけの大艦隊を防ぐ手立ては、ロデニウス大陸には無い。

いや、もしかしたら、パールディア皇国でさえ制圧できそうな気がする。

今回は新型の大砲を備えた軍船も配備した。

艦隊には新型の戦列艦・輸送船・快速船・揚陸船などを加えている。

揚陸船団には物資や上陸地点を確保するために必要な資材、魔獣などが収納されている。

野心が燃える

ふふふ…圧倒的ではないか、我が軍は

いや、パールディア皇国には、大砲を多く積んだ砲艦という船ごと破壊可能な兵器があるらしいな…。

彼は、一瞬出てきた野心の炎を理性で打ち消す。第3文明圏の列強国に挑むのは、やはり危険が大きい、か…

彼は東の海を見据えた

すると上空から何か聞き慣れない轟音が響き始める。

……ん？

何だ、この音は？

何かがこちらに飛んでくる。

まさか、飛龍か？…いや、違う。何だ！あれは!?

剣のような形をした灰色の物体が、キューンと耳が痛くなるような音を立てながら接近してきた。

見たことのない物体は、こちらを見下ろすように飛ぶ光景に、表情には出さなかったが、内心恐怖の心が芽生えた。

「…いかん！直ちにあれを撃ち落とせ！敵の竜騎兵だ！」

剣のような形をした無機質な物体が、1つ

「ゴオオオオー……!!」と音をたて、こちらに飛んでくる。「それ」に向かって弓矢が射られるが、「それ」には当たらず見当はずれの場所に飛んでいく。

お返しと言わんばかりに何かを放ってきた

それは矢のような形状で光を放ちながら寸分もなくこちらへ迫った。

あれは何だ!? 光…? 光の矢? それに速い!!!

それが命中した戦列艦は、轟音とともに一瞬で兵士が、部品が、大砲がバラバラとなり、轟沈した。

さらに集中運用が仇となり、付近の戦列艦にも飛び火や破片が降りかかる。

やがて、それは撃ち尽くしたのか、そのまま去って行ったが、たった一つの何かによって10隻の戦列艦が僅か数分という短期間で沈められた。

あれは一体なんだ? 剣のような形をした飛行物体が光の矢を放つ度に、それは正確に戦列艦に命中した。

命中した戦列艦は木っ端微塵となり、それが連続して続いた。

あの速度…ワイバーンよりも速かった、一体あれは…

シャークンは不安が出てきた。

しばらくすると、海の向こうに複数小島が見えてきた。

島が動いている……!まさか、船か!?

その船は灰色の全長200mもある……あんな巨大な船をマストなしで一体どうやって動かしているんだ!?

いや、その前にあの巨大な大砲が一門だけとはいえ、先ほどの飛行物体が起こした出来事を思い出し、不安は更に増大した。

イージス護衛艦バリーの前方に設置された、5インチ砲が敵船に向かい旋廻する。目の良いシャークンは、バリーのわずかな変化に気が付く。

「あの棒はなんだ?」

次の瞬間、轟音と共に破壊が吐き出された。

距離は5km、至近距離射撃

「なんだ?勝手に燃え始めたのか?」

シャークンが疑問に思った瞬間、最前方を走る帆船が突然大爆発を起こす。爆散した木や、船の備品、兵士の遺体があたりに撒き散らされ、密集隊形にあった味方の船上に、人間のパーツと共に降り注ぐ。それも5隻同時に吹き飛ばされた。

「!!なんだ、あの威力は!それにあの距離から当てやがったのか?」

経験したことの無い威力に、それを見ていた船団全員が驚愕する。

船は、無事だった乗員を乗せたまま、自重に耐え切れなくなり、沈んでいく。

砲弾は、さらに最前列に居た船を直撃し、1発でその船は爆散、轟沈した。

凡そ20隻撃沈されたところで、砲撃が止む。

巨大船から赤トンボのような飛行物体がバタバタと音を鳴らしながら接近してきた。

「こちらはアメリカ海軍、ロデニウス派遣艦隊である！」

ロウリア艦隊に告ぐ！降伏せよ！我々は既に貴軍を射程内に収めている！これ以上の戦闘は無益であり、無意味だ！

直ちに降伏せよ！」

警告をしてきた、しかし、巨大船だからと言って圧倒的物量を持つ我らに降伏という文字はなかった。

アメリカ？今まで聞いたこともない国家だ……

やがて、味方艦艇が飛行物体へ火矢の攻撃を行うが、飛行物体はあつという間に避け、巨大船へ帰った。

射程内だと？あんなものはまぐれだ！そうだ……蛮族があんなものを持つはずなんてない。

「やったぞ！敵の竜騎兵を追い払ったぞ！この大艦隊にビビったんだ！」

「ふ……あれほどの威力の魔導、そう連射は出来ないようだな……。」

ロウリア王国、海将シャーコンは、バリーがそれ以上撃つてこないため、このように判断していた。

「艦隊行動前進微速！艦隊の速度落とせ、ワイバーンの航空支援と同時に、一気にたたみかけるぞ、航空支援を要請しろ！」

「はっ！」と水兵が魔伝で伝える

するとイージス艦が最前列に一列となった。

「マーク3が敵艦からの攻撃を受けました！」

「ちっ！こちらへ攻撃したぞ！奴らに礼儀というものを教え込むぞ！海軍魂を叩き込んでやれ!!!」

「イエスサー！」

ロウリア王国　ワイバーン本陣

「ロウリア王国東方討伐海軍より魔伝入りました。敵主力艦隊と思われる船と現在交戦

中、敵船は巨大であり、航空支援を要請する」

「ほう、敵主力か……。よろしい。350騎全騎を差し向けよ」

「し……しかし、先遣隊に150騎ほど分けてあるため、本隊からワイバーンがいなくなりますが……。」

「聞こえなかったか？全騎だ。敵主力なら、大戦果となろう。戦力の逐次投入はすべきではない」

「了解しました」

ワイバーンは、次々と、大空に飛び上がった。

イージス艦のCICでは、すでに「それ」を捕らえていた。

「ほう……こいつらが噂のドラゴンというやつが来やがったか……」

「敵編隊、二手に別れました、目標群Aは北西から、目標群Bは南西から急速接近中！」

レーダーに現れた飛行物体は300を超えており、敵は徹底抗戦を認識するのであった。

「射程距離に入りしだい、全力で迎撃せよ、敵部隊に容赦はいらない。ただ攻撃せよ、対空ミサイルも全て使い切る勢いで撃てええええ!!」

「イエッサー!!!」

彼らにとってもギムの出来事は衝撃的であり、絶対に許さないと言わんばかりに返事をした。

突如、5 km先の巨大艦隊から煙が上がる。そして、何かが光の尾を引きながら、ウリア艦隊上空を通過していく。

!?どうした、味方はまだ発砲していないぞ？自爆か？

さらに、光の矢は後方へ、(艦は見えないが)複数の何かがすさまじい速度で飛んでいくのが見える。

海将 シャークンに嫌な予感が過ぎるが、彼の経験上最良の選択を命じる

「奴らは何をしたかったのだろうか……そろそろ、ワイバーン部隊がこの海域に到達する。全軍突撃せよ」

ワイバーン部隊には、悲劇が襲いかかった。

18隻のイージス艦から離れた合計45基以上のミサイルはワイバーン部隊へ迫った。

いきなり仲間45騎が爆散し、黒い塊となって海に落ちていく。何が起こったのか、全く解らないまま、十数秒後に40騎、さらに数秒後に40騎、と、次々と落ちていく。こんなことは、歴史上1度も無い。

ましては高速で接近する光の矢はまるで意思を持つかのように旋回する味方ワイバーンを木つ端微塵にした

そのまま撃破されたワイバーンは竜騎士と共に人間の部位やワイバーンの肉片が落ちていた。

しばらく光の矢は約5波に渡って繰り返された。

一通りの嵐が去ると、ワイバーンは数を350騎から1000騎まで減らしていた。部隊はパニック状態になったが、その時、船団が見える。

1000騎のワイバーンがロウリア艦隊上空に到達する。

その先に見えるのが、一際大きい灰色の船。

彼らは、その船に襲い掛かろうとしたその時、船から光の矢が立て続けに発射され、直撃したワイバーンが雨のように落ちていく。

彼らは次から次に数を減らし、バリーに近づく。

なんとか、船まで7kmまで近づいたとき、ワイバーンは残り数十騎まで数を減らし

ていた。

不意に、艦が大砲を放つ。1発あたり1騎が大砲に絡め取られて落ちていく。装填がこちらのより遥かに早い！

さらに、見えないところから光の矢が降り注ぐ。

彼らの距離が3 kmまで近づいたとき、砲弾の嵐が止む。

その頃、数を3騎まで減らしていた。

「バカめ！魔導が切れたか、仲間たちの無念を晴らしてやる!!」

ワイバーン3騎が口を開け、火球を形成する。その時、2騎が突如としてミンチになり、黒い雨を降らす。

残り!!!!
残りの1騎も、すぐに彼らの後を追った。

CIWS毎分3000発（1秒に50発）の20 mmバルカンファランクス。

CIWSはモーター音を鳴らしながら一瞬にして強力な20 mm弾幕をワイバーンへ打ち込み、彼らの生命は絶えた。

静粛が大海原を支配した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰もが信じられずに、声が出ない。

ワイバーンは、1騎落とすだけでも、船にとっては至難の技、それが見ている範囲だけでも100騎以上!!

300騎以上の数が、精鋭のワイバーンが血の雨を降らせながら落ちていった。

夢? いや、違う。

しかもここまでかかった時間は僅か20分間だけだ

「わ、我々は、悪魔を相手に戦っているのか?」

海将シャークンは、悲壮な心境でつぶやく。

なんと表現していいのか解らない。

しかし、悲劇は自分たちだけを見逃してはくれなかった。

やがて、目の前にある巨大船と後方に控えている艦隊も前列へ進んだ。

その全てに、帆船をなぎ払った魔導兵器が付いている。

18隻は、破壊の嵐を打ち出した。

後にロデニウス沖大海戦と呼ばれる歴史を動かした海戦が始まろうとしていた。

ドン! ドン! ドン! ドン! ドン!

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

途切れもない砲撃音が響き、例え一つの艦が装填に入っても、それをカバーするかのよう
ように撃ち出される砲弾の雨

ゴシヤアアアアア！！！！

何かが爆発する音もまるで音程を取るかのように途切れない音が響く

中には逃げる戦列艦もいたが、その艦も破壊する。

「ば、バカな…：我がロウリア艦隊が長年かけて作り上げた艦隊が…：いとも簡単に潰されるなんて…」

しかし、無慈悲にも砲弾は降り注ぎ、1分間で100隻の戦列艦が消滅することもあった。

ロデニウス大陸の歴史において、海戦を決するのは、水夫の切り込みである。

バリスタ（大型弩弓）等により、ある程度船にダメージを与え、火矢で燃え上がることも稀にあるが、船を根本的に破壊できない。

最後は、切り込みによる白兵戦になるため、結局は水夫の数がものをいう。

それを4400隻そろえている。

三大文明圏の列強相手ならともかく、辺境で負ける訳がない。

いや、これほどの数があると、三大文明圏の列強相手でも、ある程度渡り合えると思っ

ていた。

駆逐艦・巡洋艦18隻の打ち出した砲弾は、1発あたり、1隻を沈めていく。

完全なアウトレンジであり、射撃演習状態であった。

それでも4400隻は多い。

2100隻を海の藻屑に葬った時、主砲弾切れが近くなる。

「撃ち方やめ！これより接近し、敵艦隊に近接攻撃を行う！各艦！気を引き締めて攻撃せよ!!!」

「よっしゃー!!!」

「奴らに本当の地獄を教えてやるぞ!!!」

「まだまだテロリストどもがうようよしてやがるぜ！」

あたりにはかつて船だった残骸が海を漂う。

バリー1隻が敵艦隊との距離を詰める。

距離が400mまで近づき、ブローニング12.7mm機銃とCWIS、M4カービンなどを武装した兵士が甲板に出て、直接打ち込み、確実に1隻ずつ沈めていく。

ダダダダダダダダ!!!

トトトトトト!!!

と戦列艦には鉛玉が撃ち込まれ、船体を穴だらけにする。

さらに悲劇は続く。

原子力空母に搭載してあった、アメリカ海軍F/A-18戦闘機航空兵団が襲い掛かったのだ。その数40機ほど。

あたりは狩場の様相を呈し、ロウリア王国海軍は恐怖に包まれた。

「ちくしょう!! 化け物どもめ! あんなのに勝てる訳がねえ! 畜生! ぐあああああ」

一隻、また一隻と、時間を追うごとに信じられない速さで味方の船が撃沈されていく。

「……………これは戦争なのか?」

海将シャークンは、絶望していた。どうやつても勝てない。

このままでは、部下の命をただいたずらにすり減らすだけである。しかし、降参して捕虜になった場合、ギムでの大虐殺をしているロウリア人が、許されるわけが無い。

彼に残された道は、撤退の二文字であった。

ロデニウス大陸の歴史上最大の艦隊の2分の1を失っての大敗北、国に帰ったら、死刑は免れないだろうし、歴史書に、無能の將軍として名が残るだろう。

しかし、部下を全て死なす訳にはいかない。この一方的な虐殺から逃げなければならぬ。

これはもはや戦争ではない、ただの虐殺でしかない！
虐殺をしてきた自分たちが虐殺されるとはなんと滑稽な話か：

「全軍撤退せよ！繰り返す、全軍撤退せよ!!!」

魔法通信が各艦に流れる。

彼の旗艦も撤退を始めようとしたその時、船に砲弾が直撃した。

海に投げ出される。

海上に浮かびながら見た光景、彼の乗っていた船は、真つ二つに割れ、沈んでいく。

「敵艦隊は撤退を開始しました。」

攻撃を控えるよう命令が飛ぶ。

「ほう…海に浮かんでいる仲間を見捨てて撤退したか……全艦戦闘停止！海上に浮遊している者たちで、生存者を救助せよ」

「アイアイサーー！」

一つの海戦が終わった。

原子力空母に同乗していたクワトイネ公国の観戦武官ブルーアイは、実感が無かった。

彼は、艦橋でアメリカ軍人のやりとりを聞いていたが、いまひとつ実感がわかなかった。

黒い薄い板に映し出される戦闘の様子は、まさしく地獄としか言いようの無い光景であつた。

あれが彼らの戦い方なのか？ 戦術も戦法も装備も練度も何もかもが違いすぎる。

しかし、救助者多数のため、海戦のあつた海域を目にしたとき、じわじわと実感が出てくる。

海に浮かぶ浮遊物の数は、海を覆いつくさんばかりであつた。

海戦は目視できなかつたが、圧倒的攻撃力で一方的に破壊したのは理解出来た。

異世界の軍との初戦は圧倒的勝利で終結するのであつた。

ロウリア王国北部沿岸部

真夜中、美しい海を照らす月光、マングローブの茂みに見たことのない鉄の塊が海から浮上する。

海から浮上したそれはやがて、上部ハッチが開く。

『クリア』

『クリア』

『こちらSEALs a群、目標地点へ上陸完了：周辺に敵兵見当たらず』

『こちらシーウルフ、了解、これよりオペレーションステッドを開始せよ、「探知」された目標はロウリア王国・シン・ハーク市内にあると思われる。これを調査せよ』

『こちらSEALs a群、了解、これより任務を開始する。』

『了解、我々シーウルフの任務は、君たちの作戦が完了するまでサポート・撤退支援を行うこととされている。何かあれば報告せよ、アウト』

「さて……この世界はどんな光景を見せてくれるかな」

「異世界の飯って美味いですかね」

「分かん、無駄話は置いとけ、作戦内容は各自聞いたな？目標まで80kmはある、気を引き締めて行くぞ」

「イエツサー」

黒い服を身に纏ったアメリカ海軍の特殊部隊はある作戦のため、上陸を成功させる。

9 真相か、嘘か？

ロデニウス派遣艦隊、旗艦ジエラルド・R・フォード級3番艦エンタープライズ
ロデニウス沖海戦に圧倒的勝利を収めたアメリカ軍は2300隻以上の敵艦を撃沈
した。

海戦終結後、パターソン提督は漂流者の救助を指示した。
各艦で小型ボートやゴムボードなどを動員し、全員を救助した。
救助した負傷者は重症の兵士から治療が行われた。

「そうか…生存者は8798人ほどか…」

「はい、パターソン提督、救助した生存者もほとんどが負傷しており、現状我が艦隊だけ
では対応が困難となっています。」

本国から病院船を要請する必要があるか、と思われまます。」

「分かった伝えておこう、捕虜の様子はどうか？」

「はい、大人しいものですが、貴族と思われる士官クラスの対応に乗組員も手を焼いてい
るようです。」

「貴族、か：我らにはあまり縁のないものだからな、丁寧に対応するように、彼らは仮にも我々より遅れていようと軍人であることに変わりはない：ましてや原子力空母やイージス艦を含む艦隊に帆船で挑むのだから勇敢な軍人だ。」

「イエス・サー！」

「……これで奴らは暫く動けないはず、あとは海兵隊、陸軍と空軍の仕事だな。」

恐らく地上戦も一方的な戦いとなるだろう。

相手は近代兵器を待たない、中世の軍隊だが合衆国が最も警戒しているのは魔法・魔術。

魔法・魔術はクワトイネからの協力を得て、合衆国に新設した研究所で研究しているが、目覚ましい成果は出ていない。

先の海戦も攻撃魔法はあったものの、こちらの艦艇には一切被害を受けず、航空部隊に至っては上空へ打ち上げている花火でしかなかった。

クワトイネの魔導士でも、最も威力のある攻撃魔法で対戦車ミサイルに相当すると研究機関は報告書を出しているが、嚴重な警戒は必要だな：

ロデニウス派遣艦隊は生存者を救助し、そのままクワトイネへ帰投した。

中央暦1639年6月3日

ロウリア王国東方討伐海軍

残存するロウリア艦隊は何とかロウリア王国交易の中心地であるマームロット市へ帰還した。

マームロット市とは王都ジン・ハークより北西部数百沿岸部の軍港を備えた軍事的に重要な拠点だ。

ここには軍港のみならず他国からの貿易船や輸送船で常に停泊している。

規模としては第3文明圏のパーパルティアほどではないが、それでもロデニウス大陸の中で最大級と言える。

満身創痍となった艦隊にマームロットの住民は驚愕した。

無敵艦隊と謳われた艦隊が実に6割撃沈され、3割が大破寸前まで追い込まれた状態で帰ってきたのだから。

最終的にロウリア艦隊は帰還中に船体のダメージに耐えられず沈没した艦艇を含めると2400隻以上が損失した事となる。

船内には未知の軍による攻撃で負傷した兵士で溢れかえり、着いた港湾施設の医療関係施設では混乱も起きるほど負傷者が運ばれる。

しかし、最も驚愕したのは王や軍部だった。

戦力のほとんどが実質消失するなど古の魔法帝国との戦争でもない限りあり得ない。これを受けた軍部は対策を練っていた。

(実際のところ生き残りの兵士から得られた情報が信じられないものばかりで対策立てようがなかった。)

ロウリア王国海軍の敗退は交易する商人から周囲の地域へ知れ渡った。

艦隊が軍港へ戻り、大使館で震えていた人物がいた。

パーパルディア皇国の観戦武官ヴァルハルだった。

彼の乗る戦列艦は運よく撃沈されなかった。

彼の任務はロウリアの4400隻の艦隊がどのようにクワ・トイネ公国を消滅させ、記録することだった。

蛮族に相応しいバリスタと、切り込みといった原始的戦法でこれだけの数をそろえたらどうなるのか、個人的興味もあり、彼はこの任務が楽しくなり、希望した。

しかし、現れた船は、彼の常識をも遥かに超えたものだった。

見たことのない鉄龍の登場、赤トンボのような飛行物体

帆船を増速させる「風神の涙」を使った形跡が無いのに、圧倒的に速い。

そもそも帆が無い。

100門級戦列艦よりも、大きい船であるにも関わらず、巨大な大砲を1門しか積んでいないのを見て思う。

何かの冗談か？

蛮地に無いはずの大砲があつた事には感心したが、大砲はそう当たるものでは無い。

命中性能の低い大砲だからこそ、100門級の戦列艦が存在するのだ。

しかし、そんな常識はあつさりど破られた。

彼らの船は、3 km 放れているにも関わらず、1発で命中させる。しかも巨大な大砲であるため、1撃で船が撃沈する。

さらに驚くべきは、ワイバーンの波状攻撃を防いだ事。

我が軍であれば、竜母を使用し、ワイバーンにはワイバーンをもって対抗する。

地上からワイバーンを確実に撃墜する方法はない。

蛮地よりも性能が遥かに良いため、多数の差があつても確実に勝つ。

そもそも、大砲は空を飛ぶ物に当たるはずが無い。

それが常識だった。

しかし、彼らはワイバーンにさえ、初弾で命中させた。とても人間業ではない。

飛行機械はムー国の飛行機械よりも遥かに高速で大きく、ワイバーンを一方的に気散

らした。

速度もワイバーンを遙かに超え、気がついたときには既に真上を飛んだ後であった。

あの飛行機械は最低でも500kmは出ていただろう。

そうでなければあの光景に映る圧倒的な機動力・速度・加速能力・聞いたことのない

音：

ムーのように二枚の主翼とプロペラがなかった：

もしかするとミルシアルから援助を受けている…？

さらにあの飛行機械は東方から接近してきた。

東方は海ばかりで飛行場を建設できる場所はない。

つまり、奴らは我々と同じ竜母艦：いや、ムーやミルシアルと同じ航空母艦を？

あのめちやくちやな命中性と連射能力：

恐らく第一文明圏国家が技術提供していることも考えられる。

クワトイネにとんでもない化物が味方に付いた。

それもただの蛮国だけではなく下手すれば文明圏にも影響を及ぼす強大な軍勢力を

持った国

これでは我が国の戦略が根底から崩される!!!

彼らの存在を知らずに、事を進めると、パーパルディア皇国を脅かすかもしれない……いや、必ず脅かす……

……容易には信じてもらえないだろうな……だが、信じてもらえなければ、滅ぼされる。

……痙攣が止まらない手を必死に抑え、見た光景がフラッシュバックする

一方的な虐殺

あの地獄を本国で起こさせてはいけない……

ヴァルハルは、魔伝によりロデニウス沖海戦の戦闘記録を本国に報告した。

一方少し時を遡った陸軍陣営では……

ロウリア王国　ワイバーン本陣

敵主力艦隊発見の報を受け、その攻撃に飛び立った350騎、悲鳴と共に通信を途絶して3時間が経過した。

司令部に重苦しい沈黙が流れる。

何故通信が無いのか？そして、時間になっても全く帰ってこない竜騎士達、司令部は焦燥に包まれていた。

「何故帰ってこないのだ？」

問い合わせに答える者はいない。

通信では…

『何だ、あれは…?!?』

『ここ、こつちにくるぞ! 旋回しろ!』

『何でついてくるんだ!?!? ギャあああああああ』

『は、早く散開せよ! 避けるおお!!』

『こちらエローラ隊一番騎! 部隊は壊滅! 敵は誘導魔法を使用した光の矢で攻撃してきた模様! 我、これより敵艦隊を視認!』

大型戦闘艦へ突っ込む!!』

一体、何が起こっている…

まさか? 全滅!?

ロデニウス大陸の歴史において、ワイバーンは最強の生物である。しかし、貴重な種でもあり、数が揃えられない。

ロウリア王国の500騎というのは、ロデニウス征服を前提に、パールディア皇国からの援助を得て、6年かけてようやくこの数に達した。

圧倒的戦力であり、確実にロデニウス大陸を征服できるはずであった。

そして、敵主力の報を受け、飛び立っていった精鋭350騎は圧倒的に歴史に残る大

戦果を挙げて帰ってくるはずだった。

しかし、現実は一騎たりとも帰ってこない。

考えたくない。考えたくないが、全滅した可能性が高い。

常識的に考えて、敵が大艦隊だったとしても、350騎のワイバーンを全滅できるとは考えられない。

まさか、敵は伝説の神龍バハムートでも使役しているのだろうか？

ハーク様になんと報告したらいいのか、解らない。

そもそもどうやって全滅させるというのだ…？

あまりにも常識はずれの出来事に頭を痛めながら次の指令を出すのであった。

「…先遣隊へ連絡、竜騎士団のうち、半分を緊急に本陣に寄越せと伝えろ、急げ！ 作戦の見直しが必要なようだな…」

中央歴1639年4月30日 クワトイネ公国 政治部会

「…以上が、ロデニウス大陸沖大海戦の、戦果報告になります」

参考人招致された観戦武官ブルーアイが、政治部会において報告する。

政治部会の各々の手元には、戦果の記載された印刷物が配布してある。

付近に沈黙が流れる。

「で、では、何かね？アメリカ海軍はたったの20隻で、ロウリア艦隊4400隻に挑み、2300隻以上を海の藻屑とし、撃退。さらに、ワイバーン300騎以上の空襲も、上空支援無しで全て退け、撃墜し、その上、20隻には全く被害が無かったというのかね？」

人的被害ゼロと記載がある。死者どころか、負傷者もなしだと!?

わが国の艦隊は出る幕が無かったと…。

戦闘開始から60分で約2300隻の船が破壊されただと!?

そんな御伽噺でも出来すぎた話だ：政治部会で、観戦武官の君がわざわざ嘘をつくとも思えないが、あまりにも現実離れしすぎて、信じられないのだよ」

「アメリカ軍の被害は無傷だと!?!馬鹿も休み休み言え!」

誰もが同じ思いだった。観戦武官の彼でさえ、信じられない戦果だった。

まだ20隻で挑み、数百隻を海の藻屑にしたということなら常識範囲と言える。

彼らは一体、どうやって戦った？本当に犠牲なしなのか？と疑問が抱く中、外側に座っていた貴族が発言した。

「外務卿！大体、彼らは必要最低限度の戦力しか持っていないのではなかったのか？」

野次が飛ぶ。

本来は、ロウリアの侵攻を防ぎ、国の危機が少し去ったので、喜ぶべきところが多いのだが、あまりにも1会戦の戦果としてはすさまじすぎるので、政治部会にはある種の恐怖が宿っていた。

首相カナタが発言する。

「いずれにせよ、今回の海からの侵攻は防げた。まだ2100隻残っているが、たった20隻にここまでやられては、警戒して海からの再侵攻には時間がかかるだろう。

それに彼らは20隻だけでも2300隻以上の艦艇を無傷で撃沈し、ワイバーンすら手も足も出なかつたような相手だ。彼らはそれで十分と判断しからこそ派遣してきたのだろう。陸のほうはどうなっている？軍務卿？」

「現在ロウリア王国は、ギムの周辺で陣地の構築を行っております。海からの進撃が失敗に終わったため、ギムの守りを固めてから再度進出してくるものと思われます。我がほうでは、電撃作戦は無くなったと分析しております」

軍務卿は続ける

「アメリカとカナダ軍の動向については、先週から上陸したアメリカ海兵隊は首都クワトイネの西側30kmの地点にあるダイタル平野の縦横3kmの貸し出し許可を求めてきております」

「ギムと首都の直線上だな…。陣地を構築するつもりなのか？」

「前線基地を構築したいとの申し入れがありました。」

「あそこは何も無い平野で、土地も痩せていたな……よし！外務卿、アメリカに対して、基地構築の許可を与えよ。好きに使えと」

政治部会内でわずかな反発もあつたが、アメリカの力無くしてロウリアを撃退できない事は誰もが理解しており、さらにこれほどの力を持つアメリカが万が一牙をむいてきたらどうしようもないことも理解していた。

アメリカの要請を断る理由は無く、アメリカ軍は莫大な兵站能力を發揮し、強襲揚陸艦を中継基地に次々と物資が輸送され、L C A C ー1級エア・クツション型揚陸艇によつてあつという間に空港、前線基地が建設されていた。

ロウリア王国

王都 ジン・ハーク ハーク城

34代ロウリア王国、大王、ハーク・ロウリア34世は、ベッドの中で震えていた。

先刻発生したロデニウス沖大海戦で、アメリカ合衆国と名乗る新興国が参戦し、ワイバーン350騎が全滅し、さらに、艦船2300隻が撃沈された。

生き残った艦隊も7割以上が中破か大破しており、到底海軍が動ける状態ではなかつた。

しかも、こちらからの攻撃による被害は一切確認されていない。ほぼ皆無である。報告には荒唐無稽な部分が多い。

曰く、光の矢が飛んできて、避けても追って来る。

ワイバーンはこれらにより、そのほとんどが撃墜されている。

これは、何らかの新しい魔導兵器と解される。

しかし、次の、距離7km以内に接近した際、に、何かに撃墜されたとある。

何かって何だ？

しかも、敵は一発でこちらの船を破壊する魔導を連続で打ち出した。どれほどの魔法力が必要か、想像も付かない。

さらに剣のような形をした飛行物体が轟音を鳴りながら、通った場所に居た戦列艦が船ごとミンチになったという。

僅か戦闘開始から数十分で戦力5割以上の損失である。

常識に考えれば伝説級の魔導師か、神龍でもないかと不可能である。

いや：4400隻いる艦隊へ挑んで、僅か数十分で5割以上撃沈することなんて可能なのか!?

・・・無理だ：いくら伝説の神龍でも倒すこと自体はできるが、時間がどうしてもかかってしまう。

なら、我らは何と戦っている!?! 亜人族を根絶やしにし、さらなる勢力拡大をするのではなかったのか!!!

神話に登場する古の魔法帝国でも復活したのだろうか? 何を相手に戦っているのか解らない。

ロウリア王国は、昔から人口とにかく多いが、人的な質が悪かった。

しかし、この6年間で、ロデニウス征服のため、そこそこの質で、圧倒的数をそろえることが出来た。

しかし、自分たちの兵器が全く通用しない可能性がある。

質がものを言う海と空、しかし、陸戦は数がものを言う。陸戦で、なんとかなるかもしれないが…。王は、その日、眠れない夜を過ごした。

第三文明圏 列強国 パーパルディア皇国

薄暗い部屋

光の精霊の力により、ガラスの玉がオレンジ色にほのかに輝き、影を映し出す。その数は2つ

男達は、国の行く末に関わる話をしていた。

「……………何? アメリカ? カナダ? 聞いたことの無い名前だが……………」

「ロデニウス大陸の北東方向にある大陸国です。」

「いや、それは報告書を見れば解るが、今までこのような国はあったか？大体、ロデニウス大陸から9000km程はなれた場所にある国だと？それほど離れているのなら発見されないのもわかるが、大陸だと？あり得ない。」

「あの付近は、海流も風も乱れておりますので、船の難所となっております。なるべく近寄らなかつたので、解らなかつただけではないでしょうか？」

「どうだか、近いうちに調査させるのもいいだろう。だが、この報告書は何だ!？」

いくら文明圏から離れた蛮地で、海戦の方法も野蛮なロウリア王国とはいえ、たったの20隻に2300隻も撃沈されるとは、いささか現実離れしていないか？」

「しかも、1000発1000中の大砲、ワイバーンよりも高機動力に動く剣の飛行物体、観戦武官も、長い蛮地生活で精神異常をきたしたのかもしれない。今度交代をさせてやりましょう。」

「閣下、我が海軍最新鋭100門級戦列艦フィシャヌスが仮に、ロウリアと戦ったら、相手から沈められる事はありません。」

距離2kmで、大砲の弾の続く限りロウリアを撃沈できます。いずれにせよ、アメリカがどれほどの艦艇数でロウリアを撃退したのかは、解りませんが、彼らも大砲を作れる技術水準に達していると判断するべきなのでしょうね。」

「ほう、蛮族の分際で、大砲か……。今までロデニウスや周辺国家に侵攻してこなかった事実を考えるに、ようやく大砲を作れる技術に達したと判断するのが適当かもしれんな。」
「ところで、ロウリアがまさか負けることはあるまいな？ 我々の、資源獲得の国家戦略に支障をきたす」

「陸戦は、海と違い、数が物を言います。ロウリアは人口だけとはかく多いので、大砲を持ち始めたレベルの国を前にして、大敗することはありますまい。」

「今回の海戦の報告は荒唐無稽だ。真偽を確かめるまでは、陛下に報告はしない。解つたな」

「了解いたしました。」

その後、パーパルティア皇国観戦武官ヴァルハルは精神的に異常がありと判断され、その任を解かれ、魔法精神医用療法を受けることになったのだ。

本人はずっとアメリカやカナダの脅威について唱え、パーパルティア皇国は二力国との接触と同等の国交を締結すべきと訴え、我が皇国は滅亡するとまで喚びた。

結局彼の話を貸そうと思う人もおらず、その一週間後に治療院送りとなった。

皇国にとってここが最も重要な分岐点であったが、時すでに遅く、ヴァルハルもその時が来るまでずっと魔法精神治療を受けるのであった

10クワトイネ救助作戦

ロデニウス沖大海戦以降アメリカ・カナダ軍はロウリア軍が占領した地域制圧のために部隊の展開を開始

クワトイネへ侵攻するロウリア軍の威力偵察部隊や先遣隊への攻撃を積極的に行つた。

陸上戦力をアメリカ級強襲揚陸艦からLCAC—1級エア・クツション型揚陸艇で揚陸させた後に揚陸艦からヘリ部隊がロウリア軍の掃討を行なっていた。

ロウリア軍はギム侵攻後、そのままギムを中心とするソルトラーテ地方を制圧し、村人を虐殺する光景が広がった。

これに対しアメリカ軍はロウリア軍撃滅とクワトイネ国民救助を目的に活動していた。

そして、ある地域でも、村人がロウリア軍の侵略軍から逃れるために、疎開していた

村人の集団があった。

ギムの東へ約20km、ある名も無き小さなエルフの村、外界からの交流は少なく、ギムの大虐殺の報が来るのが遅れた。

村人全員が疎開を開始したが、付近にクワトイネ軍はすでに無く、ロウリアの勢力圏での生死をかけた疎開活動になった。

現在の位置、村から東へ10km

長の短い緑の草原が広がる大地、小鳥は歌い、野生の牛は草原で美味しそうに草を食べている。

どこまでも長閑な光景。

進みやすいが、遮蔽物が少なく、見つかりやすいため、風景とは裏腹に、本人達にとっては、生死を賭けた行進、その数200名。

少年は、妹の手を引いて東へ向かっていた。

少年の母は、病気で早期に他界し、父と3人暮らしただったが、ロウリア侵攻によって父は、予備役招集の軍務に着いた。

「パルンよ、アーシヤを頼んだぞ。お兄ちゃん何だからな…」

父は笑って、全てを少年に託して家を出て行った。

疎開集団の速度はなかなか速くならない。

若者が、集団の後方警戒をしている。

軍の召集で残された数少ない若者たち、10名
あと25km、あと25km東へ進めば、クワトイネ軍の前線基地がある。

突如として、集団の後方で、叫び声が聞こえた。

「ロウリアの騎馬隊だ!!!」

少年が振り返ると、ロウリアの騎兵隊100人が、約3km後方から、こちらに向かってくる。

巫人の殲滅をとなえるロウリア王国、その軍隊が向かってくる。

村人たちは、悲鳴をあげ、東へ走る。しかし、騎兵の足には遥かに及ばず、軍はどんどん近づく。

ロウリアのホーク騎士団所属、第15騎馬隊隊長、赤目のジョーヴは、目の前の獲物に舌なめずりをした。

「獲物…：発見」

200名くらい、女、子供が草原を東へ歩いて向かっていた。3kmくらいはなれているが、遮蔽物が無く、余裕で見通せる。

ギムでは良い思いをした。飄つて良い、好きにしろという上からの命令は最高だった。

ギムにいた猫耳の亜人を思い出す。

親が娘を必死に殺さないでくれと、懇願していたが、娘と母親を父親の前で集団強姦し、犯し尽くしたところで娘を魔獣の餌に食わせた。

猫耳の亜人は、わめき散らかして泣いていたが、その悲鳴がたまらなかつた。

特に娘が無残にも内臓や肉片を撒き散らしながら食われる光景に絶望した表情で、ゆつくりとすぐに殺さないように仲間とどこまで死なないか、賭け事までして殺した時は最高だった。

赤目のジョーヴは獲物を見てどす黒い感情が駆け巡る。

ロウリア王国東部諸侯団所属の中でも精鋭と言われ、一騎当千を謳われるホーク騎士団、その中の第15騎馬隊は荒くれ者の集まりと言われている。

山賊、海賊がロウリア王国拡大期に活躍し、爵位を賜り、貴族となった者達。

隊長、赤目のジョーヴは、その中でも特に残虐な性格だった。彼は気に入らないと、戦場において部下を殺し、戦死扱いする。

「さてと……狩るか」

「おい！あの亜人どもを、皆殺しにするぞ！！獲物だ！突撃！！」

「ひゃっはー！！！！」

第15騎馬隊は奇声を発し、エルフの集団に向かって走り出した。

少年、パルンは、妹アーシヤの手を引いて走った。

「大丈夫、お兄ちゃんが必ず守ってやるからな！心配するなよ！」

「うん」

必死で走る。

ずっと村を出てから休まず歩いたため、足が重かった。

自分たちを本気で殺しにくる悪魔の集団。僕たちが何か悪いことをしたのか？神様は助けてくれないのか？

なんとかしなきゃ！なんとかか…。

せめて、アーシヤだけでも守らなきゃ…

パルンは思い出していた。お母さんの暖かさ、包み込まれるような愛、そういえば、お母さんはこんなことを聞かせてくれた事があった。

その昔、国という概念が存在しないほどの遠い昔、エルフ族が魔族と戦っていた時代、魔族はエルフの神が住む神森の殲滅に乗り出した。

多くのエルフが殺され、歴戦の戦士たちが散った。生き残りのエルフはエルフの神へ祈りを捧げた。

エルフの神（緑の神）は、自分たちの創造主であり、最高神である創造神に祈った。創造神は、エルフの神（緑の神）に対し、星の戦士をこの世に降臨させる。

星の戦士たちは、多くの空を飛ぶ神の船や、鋼鉄の地竜を使い、雷鳴のような轟きと共に大地を焼く強大な魔導、圧倒的物量をもって、魔族を焼き払った。

主力軍を焼き払われた魔族は、神森より撤退した。

エルフ達は、助けてもらったお礼に、金銀財宝を、星の戦士に渡そうとしたが、決して受け取らずに、神の船に乗って去っていった。

エルフ族は救われ、この世界に広がっていった。

数多くあった神の船や鋼鉄の地竜などは、そのうち何個かは故障し、この地に残された。

残った神の船、鋼鉄の地竜、鋼鉄の海獣などが時空遅延式保管魔法をかけられ、クワトイネ公国内の聖地リーン・ノウの森の祠の中に大切に保管されているという。

特にその中で鋼鉄の海獣は圧倒的な雷鳴のような轟きと共に大地を焼く強大な魔導を放つことができ、星の戦士の中で中心的な船だったと伝説にはあった。

その船もどういいうわけか、星の戦士が消えたが、その船は残った。

巨大な船体に大砲を多く積んで、中の状態もそのままであった。

エルフ達は恩人であり、英雄であり、力の象徴であった船にも時空遅延式保管魔法がかけられ、その船の『時間』が止まって朽ちることもなく保管されているという：

星の戦士が乗るものには白い星マークが刻まれていた。

お母さんは、本当にあつた話だと言つた。

パルンは、走りながら祈る。

神様、神様！創造神!!星の戦士！本当にいるのなら、今助けてください!!!

僕は生贄になつても良い。どうか：妹を助けたいのです。

神様、僕たちを殺そうとしているロウリア軍の魔の手から、僕たちを救い出して下さい。
い。

・・・何も起きない。

ロウリア兵が迫る。

声も聞こえるようになってきた。

まだ、見渡す限り草原であり、絶対に間に合わない。

戦つて勝つか、虐殺されるか：。しかし、武器は対獣用の弓くらいのもので、あとは

農機具のみ。

村人の中には、諦めてへたり込む者たちも出てきた。

距離は500mを切る。

誰もが諦めた。

パルンは天を向いて叫ぶ。

「カミサマアアアアアああああああああああお願い!!! 助けてええええええええええ!!!」
少年の上空を光が通り過ぎた。

蛮族たちとの距離は500mを切った。

彼らの顔は恐怖に引きつり、必死に逃げている。

剣を抜く、これより殺戮の宴が始まる。ギムの再来、良い女も混じって逃げている。今から始まる悲劇の未来を想像し、赤目のジョーヴの顔がにやける。

「突撃いいいいいい!!!」

うおおおおおおおおおおおお!!!

騎士団は歓声をあげ、馬の走る影響で大量の土埃を撒き散らし、駆け寄っていった。

「隊長! 何か光が前方の空から向かってきます!!!」

不意に隊で一番目の良い部下が、空を指差し、叫ぶ。

ジョーヴは空を見上げた。

「な……なんだ!? ありゃ?」

光の槍がまつすぐこちらに向かつて飛んでくる。本能的に危険を察知する。

速い!

「逃げろおおおおお
!!!!!!」

ロウリア王国クワト! イネ征伐軍先遣隊東部諸侯団所属、ホーク騎士団第15騎馬隊に、避ける間もなく、光の槍が突き刺さった。

パルンは夢を見ているようだった。

神様をお願いした時、彼の上空を光の槍が飛んでいった。

光が弾ける

!!???

直後に耳を劈く轟音

!!!!

大地が噴火したかのような煙に包まれ、ロウリア軍を包み込む。

さらに、光の槍は降ってくる。

閃光が走り、雷鳴が轟く。

轟音——

さらに、光の槍が断続的に降り注ぎ、大地が焼き尽くされた。

「ろ、ロウリア軍の騎馬隊のほとんどが消滅しただど!？」

誰かが叫ぶ。

ロウリア兵は、恐れ慄き、撤退を開始する。

今度は、光の雨がロウリアを襲う。

光の雨が敵兵に当たると、馬もろともバラバラに吹き飛ばす。

エルフを襲おうとしていたロウリア兵は全滅した。

やがて、東の空に、空を飛ぶ船が多数。

バタバタバタバタ

恐怖をそそる音を響かせ、大地を焼いた強大な魔導を放ったそれらは、村人の上空を
通り過ぎる。

パルンはそれを見上げる。

様々な形を持った特殊な箱舟、目を奪われる。

それは色んな何種類か、居たけどロウリア軍を倒した空の船は灰色で上と後ろの横に

何か回っている…

体の横には何か筒をぶら下げて、前の下の部分にも細長い筒があった…

そして、体の横には白い星が描かれていた。

「!!!星!!!星のシンボルが書いてある!!創造神の星の戦士が本当に着てくれたんだ!!」
やがて、村人の前に多数、空の船が舞い降りる。

中から、灰色の服を着た異形の者たちが降り立つ。

恐怖——

「お怪我のある方はおられませんか?」

拡声器を使っているため、エルフにとっては人間とは思えないほどの声で、1人の指揮官らしき人物が声を張り上げる。

村人たちは、恐怖で何もいえない。

恐怖の口ウリアの騎馬隊を一瞬で消滅させるほどの強大な魔導を持った者たち。

怪我をした役にたたない労働力は、強大な魔導を放つ魔獣の生贄にでもされるのであるか?」

更に上空ではバタバタと音を鳴らせながら旋回する空の船

パルンが進み出る。

「助けてくれてありがとう。おじちゃん達は、星の戦士ですか?」

「(?星の戦士?アメリカ軍なのか?を聞かれているのか?確かに星条旗には星マークがあるし、兵士をこちらでは騎士や戦士と呼ぶのだったな) ああ、そうだが…」

どよどよどよ

場がどよめく。

突如、村人たちが、大地にひれ伏す。

救助に来た米軍は、村人全員にひれ伏され、説明にさらに時間を要することになる。

現ロウリア軍占領下シュリアナート市

「おい、そろそろ交代の時間だ。ご苦労だったな」

「うん？ ああ、そろそろか、最近は動物すら出てこないから静かで不気味だぜ……」

「まあ、そんな時は女遊びでもしていればいいさ、どうせ新しく入って来るだからな」

「へへへ、そうだな、ありがとうよ」

「ああ、さっさと寝てこい」

とロウリア兵が親指を横に向けながら言う

カラン、カラララ……

とその時、近くから何かが落ちるような音がした

「うん？ なんだこの音は？」

「ちよつと確認して来る、猫か？」

と警備室を出るが、何もそこにはなく、いつもの静かな風景が写っていた。

「……気のせい、か、おーい！大丈夫だ、お前はさっさと『グシュ!!』『ゴフツ!』仲間を声をかけている途中で言葉が出なかった。氣道が何かに遮られて空気が通らなくなつたからだ。

一瞬で自分の首を掴み、差し込まれた強烈な痛みと共に襲つて来る恐怖心

意識も途切れ途切れになり、視線を下へ向けると鋭利なナイフの先端が胸から突き出ている様子が視界に映り、そのナイフは真つ赤に染まつていた。

そこで兵士の意識が切れた。

ドサツ

兵士の死体をそのまま放し、床に倒れる。

別の兵士は口を塞がれ、身動きを取れぬまま目の前の状況に恐怖していた。

いきなり斑模様の服装に見たことのないヘルメット、銃、そして手慣れた様子で仲間の首を刺した。

「んーんんっー!!!」

兵士は恐怖心から必死で抵抗するが、関節を決められた状態で兵士にできることはなかった。

すると仲間を殺した斑模様の男性が話しかけて来た。

「命を助けて欲しければ質問に答えろ、騒げばお前も仲間のようになる、いいな？ 一回しか言わないぞ？」

兵士は涙目で何度も頷く

「わ、わかった、質問に答えるから命は助けてくれ！」

「騒ぐな、お前たちが捕まえたクワトイネ民間人はどこに收容している？」

「れ、連中は町の一番大きい貿易商の建物に收容されている、た、頼む！ 命だけは」

「分かった。暫く眠てろ。」

「はあ!? ど、どういこう」

と斑模様の男性はすぐに麻酔銃を兵士に撃ち込むと兵士はそのまま倒れるように眠った。

「フォックスよりH Q、民間人の收容されている建物が特定できた、そっちでも確認してくれ

一番大きい貿易商の建物だ。」

『H Qよりフォックス、確認した。各部隊は敵部隊を無力化しつつ、收容所の民間人を救出せよ』

「アルファ了解」

と無線を切る。

兵士たちを襲撃したのはアメリカ軍海兵隊所属第12部隊だ。

海兵隊や陸軍はロウリア軍が占領した地域を徐々に解放しながら進撃しており、その進軍速度も常識的に考えれば凄まじく早い

それも海兵隊は町や村へ侵入した後警備の薄い場所から襲撃し、浸透戦術によつて民間人も解放されていた。

今回もシユリアナート市は住民数十万ほどの規模があつたため、いきなり戦車部隊や歩兵大隊を突入させるのではなく、生き残りの民間人の救出とロウリア軍を他の部隊へ知らせる伝令を出す暇を与えずに撃滅していた。

「よし、みんな聞いたな？プレゼントが一番大きい建物だ、各部隊と10分後に合流する」

「了解」

と部隊は前方を警戒しながら、町の中心街へ到着し、遭遇した敵兵士は全てサブレッツサーで仕留める。

「な、なんだ!?!」バシユ

「!!?!」バシユ

「こいつらどこから湧いて来T」バシユ

と兵士の叫び声を全てを聞かず、容赦なくサブレッツサーを備えたハンドガンやアサル

トライフルで制圧する

中心街を突っ切ると、そこには報告のあった建物が見えた。

建物の周囲には死体となった兵士ばかりで既にドアの前には別の部隊がいた

「こつちだ」

「海兵隊第2海兵師団所属第12部隊から来たフォックス部隊だ」

「ああ、海兵隊第2海兵師団所属14部隊のウイスキー部隊だ、今から突入を行う。」

「分かった、やけに見張りが多かったが：まさかバレたか？」

「それはない。でなければあんなに宴の準備をしないからな」

「・・・よし、目的地は見つかった。突入するぞ」

「了解です」

「よし、爆薬を設置しろ」

隊員はどこか手慣れた様子で爆薬を設置する。

「よし、合図するぞ」

「了解」

「爆破！」

ピッ！ドオオオオオン
!!!!!!!!!!!!

ドアは爆発のエネルギィに耐えられず、粉碎された。

突入した部隊は一瞬で中にいたロウリア兵士たちを射殺する。

アルファ部隊はそのまま部屋の真ん中で女性に跨っている男性に銃を向けた

「な、なんだ、お前たちは！我々をロウリア軍と知っての上か！」

「うるさい」

とアルファ部隊隊長は貴族と思われる半分裸状態の男性を蹴飛ばし、女性から遠ざけた。

女性は耳に獣人族の特徴である耳と尻尾があり、怯えた状態で隊長を見上げていた

「怪我はないか？助けに来た」

と隊長が言いながら手を差し出す

獣人族の女性は何度も手とラミネスの顔を相互に見た後、実感が湧いたのか、泣いていた

『こちらウイスキー部隊、地下室から多数の民間人を救助した』

「フォックス了解、こちらも一階フロアを制圧した。」

「あ、あなたたちは一体」

「我々はアメリカ軍です。」

「あ、アメリカ軍…聞いたことのない国ね…」

「詳しい話は後だ、君の名前はなんて言うのだ？」

「エルモン・リリシアと申します。この度は助けてくれてありがとうございます……」
「礼には及ばん、他の階でも既に民間人は保護している。とりあえず……これでも羽織つてくれないか？ちよつとな」

とリリシアは何を意味するのか、理解が遅れたが、すぐに状況を理解した。
リリシアはまさしく犯される寸前であつたのだ。

つまり服は破られ、大きな胸を曝け出し、スカートはギリギリ保っているか、保っていないか、だ。

すぐにラミネスは話ながらその辺に脱ぎ捨てられた上着を彼女に渡す
彼女も顔を赤面させながら着る

「あ、ありがとうございます……」

「いや、無事ならよかつた」

後ろで蹴飛ばされた後、隊員に拘束されている小太り中年貴族に目を向ける

「おい、貴様がここの総督だな？この建物以外に民間人はどこへ隠している？吐かないなら吐かせるまでだ」

「ま、待ってくれ！わかつた！亜人族は奴隷としてロウリアへ輸送中だ！他の民間人はいない！た、頼む！命だけは助けてくれ！わ、私はロウリアの貴族だ！金なら用意できる！うっ」ガン！

「わかった。もう黙っている。」（見事な手の平返しだな…）

アサルトライフルのストックで後頭部を打ち付け、気絶させる。

『H.Qよりフォックス及びウイスキーへ、他の部隊はシユリアナート市周辺に展開しているロウリア軍を完全無力化したとのことだ。そちらはどうだ？』

「こちら隊長のラミネス、民間人を確保、ついでに敵の総督も確保した。」

『了解、今日はどうやらアルファ部隊とフォックス部隊が金星を飾ったようだな、ご苦労だった。』

「こちらからヘリコプター部隊を派遣したから引き続き、民間人の保護と総督を護衛せよ、アウト』

「フォックス了解」

異世界軍とは初めて戦ったが、ここまで連中ははつきり言えば中世の軍事力と同じ程度で魔法の脅威も一切なかった。

争
ロウリア王国は列強国でもないのだから、当たり前かもしれないが、国際法のない戦争

しかも中世と同じく虐殺やレイプ、強姦、虐待なんて当たり前の時代

合衆国軍はここまで幾多の村や町を解放したが、必ず目にするのが、死体の山だ。

解放後、軍は死体を埋める、焼くなどして疫病の蔓延を防いでいるが、はつきり言え

ば気持ちがいいものではないし、異世界軍は地球にいたアフリカや中国軍、中東のテロリストよりも残酷で狂っている。

逆に異世界からすれば俺たちの常識が異常と言えるのかもしれない。

だが、俺たちは、合衆国はそんな常識になんて飲み込まれてたまるか：

この先も更なる試練が待ち受けるだろう。

後少しでロウリア軍は要塞都市エジエイを侵攻すると司令部は予想している。

エジエイには第一騎兵師団が派遣されていたな：

と、アメリカ軍よるクワトイネ民間人や捕虜の解放は順調に進んでいた。

敵の貴族や高官、軍人の戦争犯罪者となった人々は後に合衆国とクワトイネで逮捕され、クワトイネによって処刑されることとなる。

11 未知の軍団

ロデニウス沖海戦の結果はロウリア王国に大きな震撼を与えた。

派遣した無敵艦隊が突如出現した第三勢力によって簡単に打ち砕かれたのだから、その衝撃は大きい。

ロデニウス沖大海戦での大敗北は、前線での士気低下を招く懸念から、最前線の兵に對して、その情報は遮蔽された。一部の高級幹部を除いて派遣軍には一切情報が漏れないよう隠蔽しようとしたが、敗北は噂となって流出した。

ホーク騎士団の所属するロウリア王国東部諸侯団クワトイネ先遣隊でも混乱状態となっていた。

威力偵察に出たホーク騎士団第15騎馬隊を中心とする小隊規模の偵察部隊などが、ギムの東方約25km付近で消息を絶った。

生き残った魔導師によると、敵部隊の魔力は一切探知されていない。

高威力の魔法が発せられた形跡が無いにも関わらず、誰一人帰らないことに司令官は不審に思っていた。

威力偵察に出ている騎馬隊は精鋭部隊であり、大軍に包囲殲滅された可能性はあるが、全ての部隊が全滅することなんて考えられなかった。

通常、部隊が例え7割が全滅したとしても必ず伝令係を送るよう訓練されている。

2000人ほどの兵士が一夜にして消息を絶った地域もある。

さらに占領下であったシュリアナート市を中心に報告が途絶えていた。

「どうなっている!?我々は本当にクワトイネの亜人と戦っているのだろうか!導師ワツシューナよ:どう思う?意見を述べよ」

東部諸侯団を取りまとめるジューンフィルア伯爵が問い糺す。

「魔力探知には、一切反応が無く、誰も気がつかなかったのです、ワイバーン等の高魔力生物の使用は無かったものと思われまます」

「では何だと思おう?」

「まさかとは思いますが:。」

「何だー！」

「最近、導師の間で…導師魔信掲示板に記載されていたのですが…あまりにも現実離れしており、荒唐無稽な書き込みなので…」

魔導師ワツシューナは冷や汗をかきながら冷静に言う。

「うむ」

「マイハーク攻略部隊が、第三勢力によって船団の三分二を失い大敗、さらに敵船に向かっていたワイバーン350騎が全滅し、作戦は失敗に終わったと噂が流れています…!!!。」

!!の場にいた全員に衝撃が走る。

「いや、ちよつと待て！今回の派遣船団とワイバーンは、それだけでクワトイネを征服出来るほどの大部隊だった。」

仮にその戦力で列強パーパルディア皇国に攻め入ったとしても、彼らの艦隊包囲網を力でこじ開け、上陸させられるだけの量と戦力だ。1海戦の戦力としては、フィルアデス大陸史上最大かもしれない。それが負けただど？たかがクワトイネに!?!あり得ない！」

「いえ……ギムの肅清後に、アメリカという国が参戦してきたらしいのですが、彼らの操

る船は、とてつもなく大きく轟音と共に船を1撃で沈めるほどの魔導を連続して放ち、ワイバーンに対しては、追尾してくる光の槍を使い、光の槍が当たったワイバーンは粉々に吹き飛び、更にワイバーンよりも圧倒的機動力と高速性能を持った飛行物体も確認されていると…導師掲示板に、私の同期生が書き込んでいました。

もしかすると今回もアメリカが関係しているのかもしれませんが…」

一同は考え込む。よくある戦場伝説なのか、突拍子も無い話だが、まさか本当なのか。船を一撃で沈めるほどの性能を持つ船、ワイバーンに追尾してくる光の槍、ワイバーンより圧倒的な性能を持つ飛行物体…どれも信じがたいものである。

もし、そんなものが実在するとするなら、それは古の魔法帝国に登場する兵器だ。

だが、古の魔法帝国は存在しないし、魔帝軍の技術は神聖ミリシアル帝国が全て独占しているはず

一体アメリカやカナダ軍は何なのだ!?

異質、未知の軍であるアメリカ・カナダ軍にワッシュューナは恐怖を感じ始めていた。

話はそのまま平行線を辿ってばかりで一向に進歩がなかった。ただ時間ばかりが過ぎた

彼等としても先遣隊配備のワイバーンが150騎から75騎に減らされたことを疑問に思っていたが、話が事実なら納得できる。

「小隊はともかくホーク騎士団といえば勇猛果敢で、全滅した隊の騎士長も戦闘に関してはかなり優秀だ。馬も他の騎士達が使う馬よりはるかに速い。それが簡単に全滅とは……。」

ロウリア王国東部諸侯団クワトイネ先遣隊の将たちを悩ませる事態があと一つあった。本隊からの指令書、指令主は主将名だが、問い合わせは恐怖の副将アテムである。

指令書にはこうある。

『城塞都市エジエイの西側3km先まで兵を集めよ。そこで、本隊合流まで待て』

ジューンフィールアは、指令書を読んで、ますます胃が痛くなっていた。

城塞都市エジエイ、国境の町ギムや、周辺の村々とは訳が違い、クワトイネ公国がその生存を賭け、来るべき対ロウリア王国戦のために作り出した町である。

町そのものが要塞であり、城であり、基地である。

ギムとは防御力の次元がちがう。

城塞都市エジエイはギムから東に約50kmの場所に位置する。

だが、先遣隊として威力偵察部隊を派遣した結果、誰一人残らず全滅。

現在地から東に20km行った場所で全滅!!

しかも占領下であった村やシュリアナート市からの情報が突如遮断された。

何度も確認するために兵士を送ったが、誰一人帰ってこなかった。

つまり、エジエイへ行くための地点に騎馬隊を含む威力偵察部隊を全滅させるほどの強力な敵部隊が潜んでいることになる。

そこへ何も対策をせず、進撃するのは自殺行為であり、少なくとも大損害を負う可能性がある。

しかし、アデムの指令に逆らえば、自分を含め一族全員が死刑となるため、絶対に行かなければならない。

城塞都市へ攻略するにはその施設の倍の人員と兵器が必要となり、膨大な戦力を保てる補給も当然必要となり、結果時間を必要とする。

準備を怠ったわけでもないが、兵力も攻城兵器も満足に揃えてない上、先の先遣隊の全滅である。

ジューンフィルアは不安を抱えたまま、ロウリア王国東部諸侯団クワトイネ先遣隊本隊約2万名の兵は、東方へ進撃し始めた。

城塞都市エジエイ

城塞都市エジエイには、クワトイネ公国軍西部方面師団約3万人が駐屯し、この部隊は西部方面のクワトイネ主力部隊と言ってもよかつた。

エジエイはクワトイネ側にとって最重要軍事拠点であるため、駐屯している戦力も当然ながら、豊富であつた。

内訳は、ワイバーン50騎、騎兵3000人、鉄砲隊80人、弓兵7千人、歩兵2万人という大部隊である。

長年、ロウリア王国に備え、日々訓練し、各部隊精鋭と言える。

將軍ノウは今回のロウリアの進攻をこの城塞都市エジエイで跳ね返せると思つていた。

高さ25メートルにも達する防壁はあらゆる敵の進攻を防ぎ、空からの攻撃に対して、対空用に訓練された精鋭ワイバーンが50騎もいる。

クワトイネ有数の精鋭部隊を豊富に持っているエジエイはいかなる攻撃であつても、攻略することは困難で、難攻不落の城塞だ。

まさに鉄壁、まさに完璧、いかなる大軍をもつてしても、この都市を陥落させることが出来るとは思えなかつた。

「ノウ將軍、アメリカ軍の方々が来られました。」

政府から協力するよう言われているため協力しているが、彼は正直自国に乗り込んで来たアメリカ・カナダ軍が気に入らなかつた。

アメリカは我が国の領空を犯し、力を見せ付けた後に接触してきた。信じてはいないが、ロウリアの4400隻の船の進行も、たつた20隻で撃退したという。

たつた20隻で100倍どころか、200倍以上の勢力に挑み、勝利した？

バカも休み休み言え、というものだ。

一体どんな手段を使って勝利したか、知らない。

しかし、陸戦は何といつても、数がものをいう。今回、アメリカやカナダが送り込んで来たのは、第一騎兵師団や第39カナダ旅団群とかいう、1万6000名弱と2000名弱の兵力だ。

奴らはエジエイの東側約5kmのところ星型の基地を作って駐屯している。

政府が許可を与えたらしいが、国土に他国の軍がいるのは良い気分ではない。

基地からは昼夜奇妙な騒音が鳴り響き、変な飛行物体が飛んでいた。

1万8000名という数も、伝え聞いているカナダは4000万人という人口から考慮すればわからなくないが、アメリカの人口3億人以上という人口からすると、ずいぶ

んやる気の無い兵力だ。

いずれにせよ、自分たちがロウリアを退ける事が出来るので、彼らの出番は無い。

この国は我々が守る

他国に自国を守られたくないという軍人としての意地でもあった。

コンコン

ドアがノックされる。

「どうぞ」

將軍ノウが立ち上がり、彼らを迎える。

「失礼します」

一礼し、室内に入る人間が3名

「アメリカ合衆国アメリカ陸軍、第一騎兵師団のマトビツシユ大佐です」

自分の着ている気品のある服とは違い、シンプルな服を着た人物、こやつが今回のアメリカの派遣軍の將軍というのが、ノウには信じられなかった。

「これはこれは、遠いところから良くおいで下さいました。私はクワトイネ公国西部方面師団將軍ノウといひます。この度は、援軍を派遣して頂きありがとうございます。感謝いたします。」

まずは社交辞令から入る

ノウは挨拶しながらもアメリカ軍の第一印象に派手で豪華な装飾や色でもなく、はっきり言えば地味で全く覇気を感じなかった。

これが派遣軍を率いる軍の長というものなのか？

「アメリカの師団長殿、ロウリア軍はギムを落とし、まもなくこちらエジエイへ向かって来るでしょう。しかし、見てお解かりと思うが、エジエイは鉄壁の城塞都市、我が軍の精鋭部隊が駐屯する上、航空兵力を持っています。これを抜く事はいかに大軍をもつてしても無理でしょう。」

ノウは続ける

「我が国は侵略され、ロウリアに一矢報いようと国の存亡をかけ、立ち向かおうと思いません」

ノウは鋭い視線をアメリカ兵へ向けながら続ける。

「アメリカの方々、東側5kmの位置にある、あなた方が作った基地から出ることもなく、後方支援をしていたいただきたい。ロウリアは我々が退けません。」

ノウは（邪魔者はひっこんでいろ）という意味を込めて言った。相手も国の命令で派遣され、プライドがあることを承知の上で。

そのことはアメリカ側にも意味をしっかりと捉えていた。

（なるほど、邪魔者は引つ込めということか）

マタビツシユは異世界の戦争が中世で行われた伝統を重んじた形式の戦争を元に行われる可能性が高く、異世界の兵士に限らず、王族や貴族もプライドが高い人が多くいるというCIAの情報は確かなようだ。

アメリカ軍としては折角援軍に來たのに邪魔者扱いをされるのは良い気分はしないが、穏便に済ませるために不愉快になるような表情はせず、了承した。

アメリカは異世界に転移してから最初にコンタクトを取ったトワトイネを中心にCIAなどアメリカ諜報機関が探りを入れていたのだ。

アメリカ側にとって、異世界の人種は白人が多く、言語の壁がないことが最も都合がよかった。

なぜ、言語の壁がないのかは全く不明であるが調査では英語は通じるが、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語などは一切通じず、英語のみが通じた。

調査の結果、米国やカナダ以外のこの世界に存在する国家は近世ヨーロッパ時代のような政治体制、部分的にはあるが技術的発達として近代的な兵器、そして何より驚愕したのは魔法だ。

魔法は魔導師と呼ばれる人々やエルフなど素質の高いものにしか扱えないが、外傷を瞬時に回復させるポーションや農業へ農薬・殺虫剤などを一切使用しない魔法による農業政策、一人の人間が対戦車ロケットレベルの火力を扱う攻撃魔法など。

アメリカは魔法を最大限に警戒すると同時に自国に取り込めないか、と研究も始まっている。

今回のロウリアとの戦争には魔法がいかに戦争に使われるのか、調査する目的も背景にはあった。

「解りました。我々は基地から後方支援を行いましょう。一つ要請したいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「なんでしょうか」

「敵の位置、戦局を伝える必要があるので、観測要員と機材を50名ほどエージェイに置かせてもらえませんか？」

「……いいでしょう。」

アメリカの将は退室した。ノウは思う。5km後方から支援してくれとは、皮肉であり、実質的に5kmも離れていたなら、何も出来ない。つまり何もするなという意味である。

彼らにプライドは無いのだろうか？

全く実力も国力もわからない国

3億という人口を持ち、巨大船を建造するだけの技術もあるならばもつと豪華にできるはず

恐らく彼らは広大な国を維持するだけでも精一杯な国なのかもしれない。

だが、これでいい……我が国は我が軍が守り、他国に守られるほど弱くないことを思い知らせてやろう。

ロウリア王国東部諸侯団クワトイネ先遣隊約2万の兵は、特に障害を受ける事なく、城塞都市エジエイの西側約5 kmの位置まで進軍した。

あと3 km進んだ場所が、指示された場所だが、ジューンフィルアはここで野営することにする。

いやな予感がする。彼らはこの場所で1週間待機する事を決めた。

(……まで何も妨害なく進出できた、やはりまぐれダメージをもらっただけなのか？アメリカ軍も一向に姿が見えない……)

ノウは焦りを感じていた。敵兵2万が、エジエイから西側5 kmの位置に布陣している。

ロウリアの兵力からすれば明らかに先遣隊であり、こちらから撃つて出ると、ロウリア軍本隊が到着する前に、戦力をすり減らしてしまう。

では、城に籠れば良いのだが、問題は敵騎兵が300名ほど昼夜問わず城の外で怒声

をあげ、去っていく事をくり返している。

本格的進攻かどうかの判断がつかず、兵が神経をすり減らす。

ワイバーンを使用しての強襲も考えられたが、ワイバーンは夜飛べない上に、着陸時を敵ワイバーンに狙われたら終わりのため、動かせなかった。

このままでは、敵本隊が着くころには、兵はヘトヘトになってしまふ恐れもあった。いくら精鋭とは言っても人間であるため、疲れるし、メンタルも鍛えられていようが、体力には限界がある。

ノウの判断に迷いが出る頃、伝令兵が駆け寄ってくる。

「アメリカ軍から連絡が入りました」

「読め！」

「はっ！我、エジエイ西側5km付近に布陣する軍は、ロウリア軍で間違いないか？ロウリアであるなら、支援攻撃を行ってよろしいか？又、攻撃にクワトイネ兵を巻き込んではいけないため、ロウリア軍から半径2km以内にクワトイネ軍はいないか確認したいとの事であります。」

「基地から出るなど言っているのに……。結局は手柄がほしいのだな、まあ良い。アメリカ軍がどんな戦いをするか、高みの見物をするか……。許可する旨伝えろ！」

「はっ！！」

他国に守られるのは軍人としてプライドに痛に障るが、相手の戦力を見える上、敵本隊が出てくれば多少削れる。

ノウは許可した。

晴れ渡る空、その日は雲の少ない良い天気だった。朝は少し肌寒く、空気は乾燥している。空気に埃などの不純物が無いため、遠くの空まで良く見渡せる。

ジューンフィルアは少し高い丘から2万もの兵を見下し、深呼吸する。

空気がうまい。

彼らは士気旺盛だった。交代で300名ほどの騎士が夜間威嚇に向かう。他のものはしっかりと眠れる。ギムで奪った食料は美味く、申し分ない。

敵はエジェイに引きこもって戦うつもりのようなのだ。密偵の情報によれば、ワイバーンは50騎近くいるらしい。脅威ではあるが、使用してこない。

それに最も懸念していた偵察部隊を葬った敵勢力は確認されておらず、恐らくエジェイに立て籠もっているのだろう。

やはり心配しすぎていたようだ。

このまま本隊の到着まで待てば、ワイバーンによる上空支援を受けられる。圧倒的兵力をもって、エジエイを落とせる。

彼はそう思っていた。

（もうすぐ攻撃が始まるだろう、援軍に來たアメリカ軍とやらがどのような軍か、知らないがこのまま戦闘準備をするか…）

とジューンフェルアは兵士に戦闘準備をするよう発令するのであった。

アメリカ・カナダ軍クワトイネ公国ヤンクト基地

基地の陣地には様々な戦闘車両が同じ方向へ砲身を向けていた。

その光景はまるで戦列する大砲が並んでいるようなものだった。

その中にも自走砲が並ぶ中異質な車両があった。

「お、これも持ってきたのか、流石に中世相手に必要ないものではなかったのか？」

「いや、どうやらロウリアとクワトイネに圧倒的な力を見せることで外交的優位を確保するため、全力でいくらしい」

「剣と鎧、大砲くらいしか持たない中世の兵士たちにか、明らかにオーバーキルだな…」

「こいつの砲撃をこれから経験する敵さんたちが可哀想に見えること外交的優位を確保するよ」

「…剣と鎧、大砲程度の装備しか持たない敵部隊なら、まだ中東のテロリストの方が

遙かに厄介なものだ。」

アメリカ・カナダ政府はロウリア戦争を短期で決着することを目的としていた。

国内の問題は徐々に収束してはいるが、回復はしてはならず、転移の損失は大きい、早く再建するためにロウリアへ圧倒的な戦力で制圧し、ロウリアを民主主義の国家として改変し、ロウリアを親米国家として支援することを目的としていた。

目の前には、アメリカ軍広範囲制圧兵器

M L R S、12発のロケットを内蔵し、1発あたり644個の子弾をばら撒き、サツカー場6面程度をロケット内部に仕込まれた子爆弾が瞬間的に制圧、非装甲物に対して絶大な効果をもたらす。

それが40台西を向いている。さらに、155ミリ自走榴弾砲やM110、203ミリ自走榴弾砲が多数。展開している敵のほぼ全てを効果範囲に納める。

カナダ軍の自走砲部隊も待機している。

観測班からの砲撃地点へ照準が終わった頃

「敵部隊に動きはないのか?」

「隊列を組み、戦闘態勢を整えつつあります。なお、付近にクワトイネ軍は存在しません。」

「よし、奴らに最高の地獄を味合わせてやるぞ！ファイアー………!!!」
轟音と共にロケット弾が連続して発射され、さらに155m、203m榴弾砲が
砲撃を開始した。

12 砲弾の咆哮

クワトイネ公国エジエイ要塞都市付近

ジューンフィルアは、2万の大軍が隊列を整えているのを眺め、満足していた。

壮大な眺めであり、兵の士気、錬度も高い。

補給状態も万全であり、支援部隊ももうすぐ到着する予定だ。

これなら万全の状態である城塞都市でも攻略は十分可能だろう。

アメリカなる国がいかにも強くても、簡単にはやられはしない。

と思っていた時、頭の中で電撃が走るような感覚に襲われた。

!?!? 何か自分の勘が警報を鳴らしていた。不思議な感覚、敵はまだいない…。

何故だろう、確かな死の予感がする。いったい何なのだろうか？

早くその場から離れると感覚が言っている…。

？

ヒューン…

なんだ、この音は…何かが落ちる音？

何か空中と地上で爆散し、煙に包まれる敵、次々と大爆発し、そして小さな黒い花が咲く度に、敵がなぎ倒される。

敵は錬度も高く、隊列も極めて整っていた。整然と整列していた敵の姿が掻き消える。まるで蟻に火炎の魔法をかけたかの如く、文字どおり消滅する。

敵部隊は自身の体が燃え盛る炎を消そうと地面を転んでいた。

しかも規模は小さな範囲で爆発が起こるのではない。

爆音は住民にも悲鳴をあげるほど大きい。

広く、広大な範囲で展開していた敵が！強敵が…己の人生をかけ、長い時間をかけ、鍛えあげてきたであろう武技を發揮する事無く、一方的に虫のように殺される。

そこに華やかな戦いや騎士道は無く、ただただ効率的に殺処分される哀れな敵。

しかも僅か数分の間でだ。

いかなる精鋭部隊であつても大火力の爆発に処理されていく光景にノウは戦慄が走っていた。

「な……な……なんとという高威力の爆裂魔法だ!!なんとという魔力投射量だ!!アメリカ・カナダ軍はすべての兵が大魔導師クラスなのか!?!いや、大魔導師1万8000人でもこの威力は無理だ!アメリカやカナダは……神龍でも味方についているのか!?!」

い、一体何が起こっているというのだ!?

ノウはアメリカ・カナダ軍に対するイメージを180度変えた、たった1万8000人名ほどしか援軍を派遣したのではなく、1万8000人だけでも十分すぎるほど圧倒的火力で薙ぎ払う彼らは一体何者だ……？

城塞都市エジエいの城内から、クワトイネの住民たちは、ただ唾然としてその光景を眺めていた。

「一体…何が起こっているというの？」

「この爆発は…」

「おお…神よ…」

爆発の中、ジューンフィルアは効率的に殺処分される大量の部下を見て絶望していた。

今まで戦ってきた戦友、歴戦の猛者、優秀な將軍、家族ぐるみの付き合いのあった上級騎士、共に強くなるため汗を流した仲間たち。

すべてが虚しくなるほど、泣きたくなるほど、あまりにもあっさり死ぬ。

何かが落ちてくる音と地面、空中で大爆発する爆音、どんなに能力と技能の差があつても、それを嘲笑うかのように平等に死んでいく。

しかも僅か数分という時間で戦力の7割は損失し、断続的に来る高火力の爆発は止まない。

彼らは近代兵器が生み出す地獄を目の当たりにし、呆然となりながらも逃げる。

しかし、砲弾は逃げる彼らにも降り注ぐ。

(そんなバカな…短い時間で戦力のほとんどが壊滅するなんて…なぜだ、なぜこうなった!?クワトイネにはこんな威力の高い爆裂魔法を扱えるものも神龍の情報すらなかった!あれほど6年という歳月をかけた軍が、力が、技術の結晶が崩壊する、一体なぜだ…)

とジューンフィリアは砲弾が降り注ぐ中、状況を見ていた。

彼の手足は震えており、もはや恐怖で腰が抜けていた。

「一体…どこの奴らがこれほどの力を…」

と部下が言っていた言葉を思い出した。

「ま、まさか…アメリカ…カナダ軍か!？」

彼は何かを悟るように言う

しかし、砲弾の嵐は彼だけを逃がしてはくれなかった。

押されたような衝撃とともに、自分の体がバラバラになって飛んでいく姿、それが彼の人生最後の記憶になった。

耕された大地、その強大な魔導が去り、土煙が去った後、ロウリア軍に立っている者は馬を含めて1人もいなかった。

着弾地点より数キロ離れた地点

森の中に潜める、異世界にとつて異質で異様な姿

全身に葉っぱや草を纏い、うつ伏せの状態で、双眼鏡やレーザー照準器を向けていた。

「こちら観測班、着弾地点の敵部隊は壊滅した、敵部隊は壊滅した。これ以上の砲撃は無意味と見る。」

『こちらHQ、了解、引き続き、着弾地点にいた敵部隊の観測を続行せよ、こちらから第25レンジャー部隊を送る。敵部隊が降伏するならば救助活動へ切り替える。』

「了解。」

「・・・酷いものだな…自分たちが何もできず、気づけば全てが終わっているのだから」
「今回の攻撃にはMLRSや対地ミサイルなども使用したからな、粗方敵部隊は生き残っているものはいないだろうよ」

「テロリストながらも同情するぜ…」

と観測班は敵部隊が壊滅する光景を一部始終見ており、敵ながらミサイルと砲弾の雨によって逝ってしまった者に同情する

ノウは眼前の攻撃を目にし、何と形容していいのか解らなかつた。

自分たちの戦闘概念からかけ離れた短時間の猛烈な攻撃により、強力な敵、ロウリア軍は消滅した。

「これが…アメリカ軍の…カナダ軍の…強さだというのか…。」

自分の兵はまだ一人もロウリア軍と戦っておらず、部下に死者は出ていない。

目の前のあり得ない光景に彼だけではなく、他の兵士、住民も呆然とし、焼け野原になつた元ロウリア軍が居た地帯を見ていた。

砲弾が作り出した炎はまるで全てを焼きつくつかのようによつて勢いよく燃え、かつて伝説の炎龍一体によつて滅ぼされた大国が存在し、その国の都市部、自然、あらゆる種族は炎龍から放出される獄炎によつて全て焼かれ、砂漠になつたという

目の前の光景はまさしく伝説に似た地獄を作り出しており、それに恐怖する者や、戦慄が走った者、ただただその光景を見る者など。

本来喜ぶべきこの状況の中で、彼は1人敗北感を味わっていた。

「圧倒的ではないか……我々ではどうしようもない、たつた1万8000人の力がこれならば、彼らが何十万といればどんな戦闘能力になるのだろうか……」

アメリカ軍トワトイネ駐屯地

「撃ち方やめえ！撃ち方やめえ!!」

と中隊長が叫び、自走榴弾砲やMLRSが攻撃をやめた。

「敵部隊の殲滅は完了したと観測班から連絡があつた！これよりキルゾーン地点へ向かい、敵負傷者の救護をする。第25レンジャー部隊のD・F・Oチームは装甲車で向かつてくれ、それ以外の部隊はクワトイネから攻撃許可を承認され次第、ロウリア軍地上部隊を攻撃する！」

準備にかかれ！」

「イエッサー!!!」

とアメリカ軍兵士達は忙しくバタバタとそれぞれの役割へ走り出すのだった。

それを見ていた中隊長は砲撃された地点の方向へ視線を向けながら考える。
(思ったよりも短期間で全滅したな…予想ではもう少しかかるものだと思っていたが、近代戦争を知らない中世の軍団があればほど固まった結果、それが仇となって砲撃の餌食になったのは当然だろうが、2万という人間が僅か10分の間で全滅とは…)

クワ・トイネ公国政治部会

エジエイ城塞都市防衛戦はすぐに政治部会へ報告された。

「……い、以上がアメリカ・カナダ軍と、ロウリア軍の西方方面の戦いの報告になります」

……

「……では、誰もアメリカ・カナダがどうやって高威力爆裂魔法を使用したか、見ていないのか？」

「はい、報告書のとおり、アメリカ・カナダ軍は駐屯地から攻撃を行ったとの事でありません」

「何を言っている！アメリカ・カナダの駐屯地から、今回の高威力爆裂魔法が使用された

戦場まで、13 kmは離れているのだぞ!! 13 kmも! そんな魔法は古代魔法帝国の御伽噺でしか聞いたことが無いわ!!」

「しかもロウリア軍が占領した村やシュリアナート市を数日で解放しただど!! 馬鹿も休みみ言え!」

会場がざわつく。

手を挙げて、首相カナタが会場を静まらせる。

「・・・手元の資料を見てほしい」

アメリカから安く輸入した上質の紙が議員に配布される。

「なんだ、え、えらく上質な紙だな……」と思いながら内容を見ると驚愕した表情になった

ロウリア……首都攻撃許可願い!?

「アメリカは我が国から発進した鉄龍で、ロウリアの首都の一部を強襲し、ロウリア王へ降伏勧告し、手柄を拘束することのこと。併せてエジエイとギムの間に展開する敵、ロウリア王国クワトイネ征伐隊東部諸侯団と、ギムの西側を国境から我が国内を東へ進軍する本隊に対し、鉄龍と共に、地上部隊を投入して攻撃したいとの事。敵主力がギムから出ているため、攻撃がもしも成功すれば、我が国も軍を送り、ギムを奪還したいのとことです。」

ザワザワザワザワ・・・場がざわつき始める。

「べ…別にいいじゃないか？得しかないし」

「いや、しかし他国の地上軍が侵攻するのは……」

「しかし、このままでは我が国は滅ぶ……今回はアメリカとカナダに頼る他ないのではないか？どのみちアメリカ・カナダへ頼る他生き残る道はないのだ、我が国は。」

「敵の首都……うまくいくとは思えないが……」

「しかし、うまくいけば、今回の戦争が終わる……。もつとも被害の少ない方法だ。」

「それに地上部隊もアメリカとカナダ軍の援護があれば我が国は少ない被害でギムを奪還し、被害を拡大させることもなくなる。」

「うーん……戦後の処理が怖いものだが……」

「それに関して両国側は特に要求しないそうだ。賠償はロウリア側に要求し、ロウリア側の戦後処理を任せて欲しいと言われたくらいだ。」

「なるほど……」

「我が国からの要求についてはどうでしょうか？」

「それもあちらの方はロウリア側との交渉をさせてもらえる」

「ふむ…あれほどの力を持つ国に我が国やクイラ王国…いや、ロデニウス大陸全体が総力を上げてアメリカとカナダ軍の足元にも及ばないだろう」

政治部会では、全会一致でアメリカ・カナダ軍の国内及びロウリアでの陸、海、空の戦闘許可を行った。

同時に彼らはアメリカとカナダの実力を理解した。

その実力は決して蛮国が作り出せる軍事力ではなく、超大国の軍事力ということに彼らによればまだ、全力も出していないという。

2万の攻略部隊と数千人の偵察部隊を数日で壊滅させたアメリカ・カナダ部隊のほとんどの艦隊20隻以上、陸上部隊2万、航空作戦動員数100機以上の戦力はアメリカ軍の一部であって全力であれば10倍ほどの戦力も動員可能だと

まさしく魔法帝国並みの国力と軍事力であった。

ロウリア王国クワトイネ征伐隊東部諸侯団

ギム東側20km地点

クワトイネ征伐隊東部諸侯団野営地でイライラしながら、椅子に座っている将校が居た。

「先遣隊に連絡は取れないのか!? どれだけ伝令を送っていると思っ
 ている
 !!!!!!」

副将アテムが、軍の通信隊を怒鳴りつける。

「導師から、魔通信を送っていますが、返信がありません。」

昨日から先遣隊が消息を絶っている。

先遣隊とはいえ、2万もの軍、1師団としては非常に多い大軍だ。通信を送る前に全滅するなんて事は考えられなかった。

例え、全滅するとしても通信を送る時間は確実にあるし、誰一人帰ってこないなんてあまりにも現実離れしている。

それもたった1日で：

「偵察隊はどうなっている？」

アテムは偵察隊として、ワイバーン12騎をエジエイへ向け放っていた。

「間もなく先遣隊の消息を絶った付近の上空です」

くそ、一体どうなっている、先遣隊の中には精鋭部隊も混じっている決してトワトイネごときに敗北するような部隊ではない。

城塞都市エジエイはトワトイネ軍の精鋭部隊が集った難攻不落と呼ばれているが、それでも攻略は十分可能だ。

補給体制もしっかり兵站到不足はないし、士気も上がっていたはず。

おかしい…何かがおかしい…

それに度々報告される第三勢力による軍勢はアメリカ・カナダ連合軍の可能性が高いだろう：

本国からアメリカ合衆国やカナダ連邦が宣戦布告してきたとは聞いたが、どうせ、烏合の衆団が集まったところで何もできまいと高を括っていた：

占領下にあつた部隊との通信途絶、先遣隊の消息不明状態
情報が一切入って来ない：

まさか、これも奴らの仕業か？

アデムは心の中の違和感を感じながら報告を待った。

ロウリア王国クワトイネ征伐隊東部諸侯団所属、ワイバーン小隊 竜騎士ムーラ
「そろそろ……か」

エジエイ周辺の偵察隊12騎は、それぞれ分かれ、様々な方向に向かつていた。ムーラはその中でも先遣隊が消息を断つた付近が割り当てられていた。

今日は少し涼しく、晴れた空ではあるが、雲が多い。少し飛び辛いが気分は良い。

先遣隊が消えた。

彼の任務は状況の確認……。

先遣隊は占領下にあった村、町のみならずエジエイ攻略部隊すら連絡が取れない状況であった。

僅かに生き残った仲間によれば、敵はなぜか、自分隊を見通した動きをされており、恐ろしく不気味で夜間でも100発100中ほどの命中精度を持つ軍勢だった。

「ん？」

何か、人の鎧の跡が見えた気がした……上空に達する。

「な……なんだ!!!これは!!!」

まるで隕石が落ちた後のようなクレーターが多く点在し、多くの場所で人間か、軍馬、装備、攻城兵器の残骸などが放置され、そこにはロウリア王国の悪魔の象徴である漆黒の鳥類がその残骸を目当てに啄ばんでいる。

そこらで火災が発生し、炎は一向に消える様子はなく、あたりの上空には黒煙で黒く染まっている。

そして、燃えた後の灰が降っており、彼がいる地点にも降り注いでいる。

彼はこの世の地獄を見たかのように呆然とした表情で、燃え盛る地上部隊の居た地点を見ている。

「ま、まさか…全…滅だど？」

「H Q、こちら監視部隊、スーパーコブラ7番機

敵機、先遣隊の跡地へ接近を確認。敵偵察隊と思われる。

「これより短距離対空ミサイルで攻撃する。」

『H Q、了解』

「悪く思うなよ…偵察に来たお前さんの運がなかった。よし、ボブ、攻撃用意！」

「了解、対空ミサイル用意！」

とアメリカ軍のスーパーコブラがムーラの乗る竜へ照準するのであった。

そんなバカな……。

先遣隊は2万名もの部隊が居たはず、それが通信もなく全滅……

何がどうなっている……

と頭の中で混乱していたときだった。

グワアツ！グワアツ！

相棒のワイバーンが警戒の鳴き声を発する。

ワイバーンは東の方向を見ている。

バタバタバタ……

微かな音、空気を叩く音が微かに聞こえる。目を凝らす。竜騎士の視力は抜群に良
い。

「あの竜は何だ?！」

遠い……けし粒のような大きさの黒い点が見える。何か、魂の無い者、竜というよりは
むじろ生き物ではない何か。

「!!!」

突如としてその竜から煙が吹き上げ、小さな火炎が音速を超える速度で自分に向かっ
てくる。

「導力火炎弾か!」

遠い……そして速い!自分のワイバーンの導力火炎弾よりも遙かに射程距離は長い
ようだ。これほどまでに遠いとは、ワイバーンロードをも凌駕しているかもしれない。

しかし……

ムーラは飛び立つ。いくら遠くから速い攻撃を受けても、気付いていれば避けること

ができる。こういった攻撃は、不意打ちでこそ効果がある。

敵の目は悪いようだ。

そのまま導力火炎弾の進路とは別の方向へ飛行するが……

「!! ついてくる!!」

敵の火炎弾は曲がって自分についてくる。

「こ、こいつまさか誘導魔法か!」

火炎弾は猛スピードで自分に接近してきた。

湧き上がる恐怖

「うわあああつあああ!!」

全力で飛び立ち、ワイバーンで後ろに付かれた時の戦術、ジグザグ飛行を行う。敵の火炎弾は、その度向きを変える。そんな攻撃は聞いたことが無い。

「こちら偵察隊ムーラ!!! 先遣隊の残骸を発見! 先遣隊は全滅した模様!!!」

導力火炎弾がついてくる!! 来る! 来る!! な、なぜ、列強国でも研究段階であった誘導

魔法がある!」

ムーラは魔通信具に向かって叫ぶ

「ち……ちくしゅう……」

顔に叩きつけられる合成風、死の予感、脳の中を様々な思考が廻る。

「いってらっしゃい」妻は、戦に行く時、笑顔で送り出してくれた。「ほら、お父さんにいってらっしゃいはい？」「あつ、あつ」1歳になったばかりの娘が笑顔で抱きついてくる。「これ…お守り、持っていて」良く解らない軽い金属性の物体を渡された。いつもお守りとして腰に着けている。

「こんなところで死んで…：たまるかああ!!!」

急上昇、導力火炎弾は、やはり軌道修正し、自分に向かってくる。急降下…。

ふと急激な機動に腰に着けた妻からもらった大切なお守りが外れる。

そのお守りば偶然にも火炎弾が迫る。

ダーーン!!!

ムーラの後で火炎弾が何故か爆発した。

（た、助かった…導力火炎弾は明らかにこちらに追尾してきた…確か我が国の魔導研究の中で対象物の生命反応へ魔術により誘導する誘導魔法があつたがクワトイネはまさか実現させているのか？いや、あり得ない。

少なくとも我が国よりも技術・国力の差がついているクワトイネが実現するとは思えない…

クイラ王国も同様だ。

もしかすると海軍が話していた第三勢力とやらの仕業なのか？）

彼とワイバーンは西の空に向かって帰って行った。

13 獄炎

クワ・トイネ公国西方方面

アメリカ軍のスーパーコブラが発射した対空ミサイルは、敵機追尾中、金属製の落ちて来た物体に奇跡的にぶつかり、接触信管が作動したため、竜騎士には命中しなかった。ムーラはできる限りの速度で本部へ飛行していた。何故敵の誘導火炎弾から助かったのか、解らず、いつの間にか妻から貰ったお守りがなくなっていた。

また、急な機動によって通信魔法具も破損してしまい、本部へ通信することができなくなった。

故にムーラは先遣隊の全滅を早く伝えるために向かっていた。

さっきの鉄龍はなぜか、自分を追わなかったが、あんなものがあるなんてアメリカ軍以外考えられず、一刻も早く情報を持ち帰れねば本部に危機が迫るのかもしれない。

「もしかしたら…妻が助けてくれたのかもな」と呟いた瞬間背後に何か接近するよう

な長年、竜騎士の感覚が警報を鳴らしていた

!!?!?!?!
「!?何だ……この胸騒ぎは……何かが来る!?!」

胸騒ぎがおさまらず上を見た。

自分の飛行しているはるか上空を、複数の白い尾を引き、とんでもない速度で何かが多数西へ向かい、飛行していった。

「な、なんだあれは……あんな速度で飛行する生物は今まで見たことがない……あれは一体……」

ロウリア王国東部諸侯団

副将アテムはイライラと不安が増大させていた。

先遣隊との通信途絶によって、前線の様子も分からず、ワイバーンで編成された偵察隊を編成し、放射状に解き放った

しかし、偵察隊は途中まで問題がなかったが、突如悲鳴と共に12騎全ての偵察隊との連絡が途絶した。

ワイバーンは通常、空を飛び、強固な鱗で守られているため撃墜は困難であり、それ

が12騎全て撃墜することなど古の魔法帝国くらいならできらるうが、トワトイネが倒せるはずもない

通信の内容も尋常ではなく、竜騎士の叫びが響いた

『こちら3号！東南方面を現在調査中、未だ敵影は見られず、この………うん？なんだ、あれは？！？な、なんだこいつ』

『本部！国籍不明鉄龍から火炎弾が追ってきている！助けてくれ！助けてくれえええええええ！！』

『な、なんだ！？回避急げ！早く旋回するんだ』

部下たちは冷や汗を掻く。悲鳴と共に12騎の偵察隊とは、連絡が途絶えた。

途絶えてから全く応答はなく、こちらから呼びかけに一切応答がなかった。

通信担当兵士達には頭の中で全滅という文字が浮かび上がった。

ワイバーンで編成された偵察部隊とはいえ、全滅するなんてあり得ない……

なら、この状況を説明することは無理な話であり、兵士たちの中で混乱していた。

先遣隊も全滅していることが確定となった今アデムも通信内容から見て、敵に襲われたことは間違いないだろうが、全滅はあり得えず、通信魔法具の問題と決めつけていた。

それ故、アデムはイライラを隠さず、通信担当兵士たちへ怒鳴りつける

「どうなっているのですかあ！どの竜騎士からも通信がないとは通信魔法具の不具合ではないのか！」

「え、えつと…現在調査中でして……」

「具体的にどんな方法で調査している！ワイバーンで編成された12騎の偵察隊が全滅することなど、あり得ない！急いでこの事態をなんとかするのだ！」

静まり返る。

將軍パンドールが話し始める。

「偵察隊に何かがあったことは間違いない。偵察隊を何としても見つけ出すのだ。本軍の護衛は？」

「ワイバーンが50騎常時直衛に上がります。残りはギムの竜舎で休ませています。もちろん、命令があれば、いつでも出撃いたします。」

「50も？多くないか？戦力的に重要なワイバーンがいざ決戦となったとき、ワイバーンが役に立たないという事態は避けたい。」

「いえ、今までの軍の全滅、偵察隊の通信内容からして、もしかしたら敵はとてつもない力を手に入れたのかもしれませんが。本軍が壊滅したら、今回のクワトイネ攻略作戦は失敗します。」

「そうか……。」

上空には多数のワイバーンが編隊を組み、飛行していた。その光景はどの国家、敵でも圧倒できると言えるほどの威容だ。

偵察隊ではワイバーンの不意をついたただけだろう。

これだけのワイバーンが編成し、精鋭部隊であればどんな敵でも勝てるだろう。

たとえ、伝説の「魔帝軍」にも跳ね返すことが可能だろう。

だが、ワイバーン1騎でさえ、撃墜困難なワイバーンを一体どんな手段で倒したというのか

そして、先遣隊との通信途絶

どうやら、敵はかなりの諜報部隊を編成して妨害を行っているかも知れない

と上空を見ていると何かが光る、その光は真っ直ぐ驚異的な速度で飛行していた。

「うん？あれは…敵騎か？」

パンドールの思考は強制的に一時中断させられた。

上空を飛行していた光はそのままワイバーンのうち、16騎に突如として突っ込んだ後、爆発し煙に包まれ、バラバラに寸断される。さらに8騎！見えない何かによつて24騎がいきなり消える。

「なっ何だ!?何が起こった!竜騎士が!」

やがて、東の空に見たことのない飛行物体12機が信じられない速度で飛行していた。

姿が見えた後で音が聞こえた

ま…まさか、奴らの速度は音速を超えているというのか!?

6機各機が2発ずつ光弾を放つ。

光弾は超高速で飛行し、それを避けようとするワイバーンに喰らい付く。

さらに12騎がバラバラにその肉体を寸断され、落ちていく。

「ああああああああ」

「バカな…バカなあ!」

「た、助けてくれえええ!!」

様々な声が聞こえる。

軍上空を『それ』は凄まじい速度で通り過ぎた。剣のような形、灰色に塗られた機体、後ろから炎を1本吐きながらそれは通り過ぎた。

ヒュー….:.:.:.:.:.:.:.:.:.:.:.:.:.:.:.:!!

衝撃波が彼らを襲う。彼らが見たのは、マツハ2以上という猛烈な速度で軍上空をフライパスしたF-35D型の姿だった。

「は…速すぎる!!!」

「なんなんだ!!!」

恐怖……。

あれは……あんなものは今まで見たことがない……

剣のような形に灰色、後ろから2本の炎を吐き出しながら飛行していた。

ムーのような飛行機械とは全く異なった形状だ……

しかし、悲劇は待ってくれなかった。

先ほど飛び去った複数の敵の鉄龍が戻ってくる。さらに光弾を2発ずつ発射……。

精鋭竜騎士団が一方的に殺戮されていく……。

まるで射的のゲームのように効率よく撃墜され、抵抗さえできないうちにあつという

間であつた

ワイバーンの数こそが軍の力と思っていた。これだけの数のワイバーンがいれば、炎

神竜にさえ勝てると思っていた。

ワイバーンは1騎だけでも歩兵大隊以上の価値を持ち、敵を一方的に攻撃できるはず

だった

それが……こちらが一方的に攻撃され、精鋭ワイバーン部隊は数を減らした。

「ちく……しょおおおおおおおおおお」

上空から精鋭ワイバーン部隊が一掃された。

どんなに精鋭でも、才能を持った者でも、実力者でも平等に撃墜され、なんとか抵抗しようとした竜騎士も血祭りに上げられた。

空の鉄龍はこちらのワイバーンを一掃した後、円を描くように旋回して何かを待つているような姿だった。

轟音を鳴らしながら旋回する。

・・・!?いかん!は、早く兵を散開させなければ、空から一方的に攻撃されて全滅してしまう!

とパンドールはすぐに指示を出そうとした時、さっきの鉄龍とは異なった轟音が響いていた。

東の空から先程とは違う形の鉄龍が編隊を組み、飛んでいた。

翼から何か黒い物を投下する。

黒い何かは細長く、魚を連想させる形だった。

將軍。パンドールの脳裏、先遣隊の消滅が頭によぎる。

ま…まさか…あれのせいで先遣隊は…

「何だ、あれは!何かを落とされたぞ!!」

兵士たち全員が見上げた

誰かが声を上げる。

誰も逃げようとしなない。

本能でわかつてしまったのだ

例え逃げてでも逃げきれないことを

黒い物体は落ちてくる

パンドールは迫ってくる脅威を見つめながら頭の裏で自身の家族が映った

光――。

黒い物体は着弾するのと同時に周囲に人体の骨すら残らないほどの灼熱の炎が広がった

將軍。パンドールは、光と共にこの世を去った。

派遣部隊を襲った鉄龍の正体は空母艦載機F/A-18E/F

投下された爆弾は焼夷弾だった

焼夷弾攻撃により着弾した場所は超高温の熱を持った炎が辺りに広がり、兵士や軍馬、攻城兵器、運搬する補給部隊、精鋭部隊全てが炎に包まれた。

兵士たちは悲鳴をあげながら逃げようとするが、艦載機は先遣隊の逃げ道にも焼夷弾を投下し、爆炎に焼かれる。

全身火達磨となった兵士は気管を焼かれながらも必死に消そうと地面に転がるが、間

も無く苦しみながら死亡した。

騎士も鎧が熱によって溶解し、溶けた金属が皮膚に付着する。

投下された爆弾が生み出した炎は連鎖的に派遣部隊を炎の津波が襲い、馬の速度を追い越す勢いで焼かれる。

ある集団は撤退している最中に後ろを振り返った途端獄炎に包まれた。

その光景は今までロウリア軍が虐殺したクワトイネ軍民の怨念がこもっているかのよう炎はすぐに消えなかった。

アメリカ派遣艦隊エンタープライズ所属第25飛行団

「こちら攻撃隊、荷物を目標へ届けた、繰り返す荷物は配達完了だ、これより帰投する」
『H.Q.、了解』

「・・・中世の奴らに焼夷弾攻撃は悲惨なものだな・・・まさか中世の奴らを相手に爆撃することになるとはな……」

「1000度以上の灼熱の炎が襲いかかってくるからね……あれじゃ、骨すら残りませんよ」

「ああ、だが、忘れるなよ、奴らはギムの虐殺を実行した後、各地で民族浄化していたん

だ。当然の報いだ」

「・・・未だに空軍が無人機で撮影した虐殺の映像が脳裏に残りますよ……まさか国の軍という組織でありながら平気で強姦、虐殺、暴行、リンチをやっていた……あの犬耳の親娘もレイプされた後身体の部位ごとに剣で刺され、最後は斬首ですよ……狂っている……」

「・・・一つ忠告しておく、この世界は異世界だ、俺たちの世界ではない、俺らの考えや価値観で見ればおかしいさ、だがな……」

「この世界は暗黒時代のヨーロッパと同じ、絶対王政時代ではこれが常識なんだ」
「・・・くそつたれ」

と彼は呟くが、もう一人の攻撃手は当然の反応だと思った。

虐殺やレイプ、暴行など国内、アフリカや中東、アジア、南米など各地で起こっているが、ロウリア軍のように軍が組織的に民族浄化を行うことはあり得ない光景であり、自分たちがこの異世界を理解しなければ技術的アドバンテージがあっても、飲み込まれるだけだからだ。

そんな虚しくなる気持ちを抱きながら操縦した。

竜騎士ムーラは、西へ飛行していた。

クワトイネは蛮族と思い、舐めていた。しかし、偵察の際に見たのは、城塞都市エジエの西側にて全滅した先遣隊の姿だった。

さらに見たことのない兵器の登場、アメリカ軍の存在。

クワ・トイネ公国に伝説級のドラゴンや魔王でも味方についたのだろうか？

先遣隊やワイバーンの全滅は伝説級のドラゴンや魔王であれば可能ではある

しかし、あんな短期間に全滅することなんてあり得ない

ま…まさか、古の魔法帝国が復活したというのか!?

ムーラの脳裏に、世界でも知らない者はいないと言われるおとぎ話が思い出される。

かつて、世界を続べた大帝国があった。

古の魔法帝国、絶大なる力をもって、すべての種を統べる者たち。

1人1人が人間より遥かに高い魔力を持ち、高度な知識を有し、超高度文明によって他の種から恐れられた人間の上位種、彼らはその高すぎる文明ゆえに、神に弓を引いた。

他の種族を支配し、超高度文明によって栄え過ぎた彼らに神々の怒りを引き起こした。

怒った神々は、古の魔法帝国のあつたラテイストア大陸に星を落とす。

星の落下を防げないと判断した帝国は、ラティストア大陸すべてに結界を張り、大陸ごと時を超越する魔法をかけ、未来に転移させた。

『復活の刻来たりし時、世界は再び我らにひれ伏す』と記載された不壊の石版を残し…。ラティストア大陸の外れに少数の住んでいた魔帝の生き残りを、なんとか人族は物量で圧倒し、生き残りが持つ技術を全て吸収、絶滅させたのが、誰もが認める世界最強の国、中央世界にある神聖ミリシアル帝国と言われている。

ゆえに、神聖ミリシアル帝国は、古の魔法帝国復活を恐れていると言われている。

古の魔法帝国は最強で最恐であり、復活すればこの世界でも抵抗できず、支配されるだろう…

ムーラは、自分たちが戦っている相手は、もしかしたら、古の魔法帝国の末裔なのではないかと思ひ始めていた。

2万もの強軍の全滅、誘導魔法がかかった導力火炎弾、どれも常軌を逸している。更に敵の鉄龍だ。

あれはムーラ大国で見るとような飛行機械とは全く異なる形状であり、性能も桁違いだ。

ヒューーン………ドーン……ドンドンドーン

鈍い音が響く。

前方に、火山が噴火したかのような猛烈な火炎が上がる。

「ま……まさか……あの位置は！」

嫌な予感、彼は本隊へ急ぐ。

彼が本隊上空へ達した時、その予感は的中している事を知る。

そこには黒く焦げた人間だったものが散乱していた。

本隊が居た場所は人間の骨すら残さないほどの火災が発生しており、まさしく地獄絵

図が広がって居た

「ど、どういふことだ？本隊が……ぜ、全滅したのか？」

い、つたい……

と彼が燃え盛る光景を見ながら降り立ち、呆然としているところに背後から何かが接

近するものがあつた

それは鉄龍と似た金属の鉄像が迫ってきており、彼は驚愕した

「!? な、なんだ、あの鉄像は!？」

鉄像は複数いるのか、何両も移動し、彼の前に停車すると鉄像から何人もの兵士が降

りてきた。

降りてきた兵士達はどこか熟練とした動きで何か変な杖をこちらへ向けた

(あ、あれは…)

相棒も怯えているのか、震えている。

「こちらはアメリカ海兵隊だ！降伏しろ、貴様はすでに包囲されている。」

彼はゆつくりと両手を上げた

もう勝つことができないう抵抗に死が早くなるか、処刑されるか、のどちらかである。

ロウリア軍は数々の虐殺をしてきた

彼自身、あまりその手に加わっていないとはいえ、そんなことは関係ない。

目の前のアメリカ軍がどんな軍隊か、全く知らない。

だが、この様子だとすぐに処刑されるわけではないだろう。

せめて、処刑されるなら、家族に一目でも会いたいものだ…

アメリカ軍兵士が銃を向けたまま、近づくと

「貴方を捕虜とします。抵抗しなければ保護しますので、抵抗しないようお願いします。」

保護？捕虜に保護なんてあるのか？

俺たちの戦争では敵兵士は捕虜とする場合、外交上有利となる貴族や将校なら捕虜となるが、一般兵は通常処刑されるか、奴隷のどちらかである。

すぐに処刑せず、捕虜を保護してくれるとはアメリカ軍とやらはどんな軍隊なんだ？

ムーラはアメリカ軍に対し興味を抱き、後に彼はアメリカカルチャーに驚愕することになった。

14 異世界王国の陥落

中央暦1639年9月2日

ロウリア派遣軍を壊滅させたアメリカ・カナダ軍はクワトイネ公国領内に残存しているロウリア軍をクワトイネ軍に任せ、本格的にロウリア王国へ侵攻を開始。

これに対しロウリア王国は全面的な防衛体制を整えるが、アメリカ・カナダ軍のロウリア王国の予測を遥かに上回る進軍速度に全く防御できず、アメリカ軍の空爆と兵器群を前に惨敗する。

アメリカ軍は海兵隊で侵攻開始後、ロウリア王国首都ジン・ハークを目指し、的確な航空地上支援と空爆によってロウリア軍の主要基地はほとんど壊滅状態に陥った。

まさにロウリア軍は首都以外の軍組織としての機能を損失したと言っても過言ではなかった。

圧倒的な火力、初めてみる戦車・装甲車・戦闘機・ヘリコプター、アメリカ海兵隊やカナダ陸軍を見た住民は恐怖と怯えの目線で進軍する様子を眺めた。

アメリカ・カナダ軍側も中世ヨーロッパの国家との戦闘を想定したため、大量の物資

が用意され、戦後処理に向けて復興活動を開始する。

アメリカ合衆国が用意する物資は日用品・衣料品・医療品・食料・簡易仮設住宅・飲料水など。

更に占領下では奴隷となつている人々を解放したことにより元奴隷や貧困層からの圧倒的支持を得ることとなり、一部の情報機関はアメリカを奴隷解放軍と評した。

首都周辺地域、バイリア領

ここでもアメリカ軍による空爆によつて主要な基地は破壊された。

バイリア方面は首都へ続く重要な戦略地点であつた。

もし、バイリア方面を突破されれば直接敵部隊は首都へ侵攻することが可能になり、何としても防衛させなければならぬ。

しかし、バイリア方面軍は数日前からアメリカ軍の空爆により主要な基地はもちろん、隠蔽した補給基地すら空爆され、もう何も物資も残つておらず、兵士の士気も下がる一方であつた。

バイリア方面第4歩兵団 司令部

「・・・各方面の戦線を聞かせてくれ」

「はい、アメリカ軍はクワトイネ側よりまっすぐ我が国の首都ジン・ハークに向け驚異的

な進軍速度で侵攻しており、このままでは明日には首都へ到着してしまいます。

現在バイリア南部にて、第7歩兵師団と第9騎兵師団、第6重装歩兵師団、第10弓兵団、第2魔導兵団が戦線にて交戦中ではありますが、なにぶん物資の不足と士気の低下、アメリカ軍の鉄龍による空からの攻撃によって各方面では敗戦とのことです…」

「なぜだ…我が国は圧倒的に軍事力の差がついているのではないのか!? アメリカとやらに介入されてから派遣軍と海軍は全滅し、すでにノイ領、ウォルニア領、ホーニア領は陥落! 主要の基地は壊滅! もはやこれまでなのか…」

「司令官…」

司令部内で沈黙が続く

ロウリア王国はロデニウス大陸の中でも軍事大国であった。

クワトイネやクイラの二カ国を同時に相手取ったとしても圧倒的勝利が可能な国力と軍事力

それが開戦当初まで信じられ、勝利を確信した矢先に突如参戦した国
アメリカ合衆国とカナダ連邦

参戦直前ロウリア王国側は東方の諸島の小国かと思われ、全く問題視していなかった。
た。

その考えはバイリア卿もバイリア領兵士たちも国民も同じだった。

「・・・司令官としては失格なのかもしれない。だが、私は君たち若い兵士を無駄死にさせたくはない・・・」

しばらく沈黙した後

「降伏しよう。」

!!!???

司令部内の兵士たちは息を飲む

降伏、それは相手に自身の生命を委ねるということだ。

処刑されようが、虐殺されようが、奴隷にされようが相手に委ねる降伏という文字の意味は残酷なものである。

「もちろん、諸君の中には反対する意見もあるだろうが、聞けばアメリカ軍は捕虜に対しては優しいと聞く。なら、このまま全滅必須の無益な戦いを終結させ、降伏する方が一番だと考えている・・・どうか、わかってくれないだろうか？恐らく我々がどんなに奮闘しても数日とは持たない」

兵士たちは頭を垂れる者、静かに涙を流す者、悔しくて拳を握る者

全員も薄々理解していた、自国よりも圧倒的力を持つアメリカに勝てないことは、例えバイリア領だけが勝利しても何も意味を為さないことも

「し、司令官！南部方面の戦線が崩壊したとの先ほど報告がありました!!!」

「!?まずい、各方面に停戦の指示を送るのだ！急げ！なんとしてもこれ以上無駄死にさせるんじゃない!!!」

「わ、わかりました!!!」

と伝令の兵士は急いで各方面に停戦を命令し、バイリア領軍はアメリカ・カナダ軍に降伏した。

アメリカ・カナダ側としても他の領土でもあったことから、降伏はすぐに受け入れ、治療や物資の支援を出した。

バイリア領降伏により首都ジン・ハークへの道を切り開いたアメリカ海兵隊は戦車部隊を率いて進軍したのだった。

翌日

ロウリア王国首都 ジン・ハーク ハーク城

謁見の間でガタガタと震える男性がいた

ロウリア王国を治める王ハーク・ロウリア

かの国王は国を更なる発展させるために第三文明圏を代表するパーパルティア皇国

に属国と言つていいほどの屈辱的な条件を飲み、支援してもらつたことでようやくロデニウス大陸に点在するクワトイネ・クイラの二カ国を同時に相手しても勝利できるほどの軍事力を整えた。

6年ほどの歳月をかけた結果ワイバーン部隊、魔導兵団、魔導砲部隊まで整備した。特にワイバーンに関しては350騎という圧倒的な戦力差をつけた。

これほどの実力ならばロデニウス大陸を統一した後、第三文明圏にも侵攻できる……できるはずだった！

しかし、突如参戦してきたアメリカ合衆国とカナダ連邦という滅茶苦茶な軍事力を持つ国が参戦したことで全てが変わつた。

5月から参戦したアメリカ・カナダ軍は我が国が限界まで国力を投じて、列強の支援を受けて実現した4400隻という大艦隊。

その艦隊が5月中旬にたつたの20隻ほど相手に6割以上の戦力が損失し、軍港には謎の光の矢によって軍港の造船所や海軍施設、倉庫街、ドックなど全てが破壊され尽くした、最終的に海軍は30隻くらいしか満足に動ける船はいない

そして、6月頃に陸戦でも占領下であつた村や町を解放し、先遣隊は全滅。

7月の下旬にアメリカ・カナダ軍はロウリア北東部から侵攻し、信じがたい進軍速度で侵攻した。

これがアメリカとカナダ軍という国の軍事力なのか!?
あれではパールティア皇国以上の軍事力：

下手すれば第2：いや、第1文明圏まで匹敵すると言っても過言ではない。

あの時：この国へ国交を締結しに来たアメリカとカナダの外交団を丁重に扱い、国交を締結すべきだった：

・・・相手のことを知らずに竜の巣に飛び込んでしまったのは我々だったんだな：
たったの20隻の艦隊？ワイバーンがいない国？蛮族の貧弱な軍隊？

違う！たったの20隻でも4400隻以上の艦隊を撃滅するこゝとができる力を持ち、
ワイバーンよりも性能が高い鉄竜を持っている超大国ではないか！！！！

しかも、相手は誰一人死亡していない、一人も：

我々は敵軍の兵士一人すら討てなかったということか：

何とも呆気ないものだった：

こんな戦況、恐らく文明圏と全面戦争になったとしても、たったの3ヶ月ほどではこれほどの戦果はありえない!!!

そう、もつと相手を見定めるべきだった!!!!

これほど後悔しても悔やんでも悔やみきれないという気持ちはまさにこの状態だな

：

ははは、我々はどうすればいいのだろうか…今もこうして王都防衛騎士団が敵に対抗しようとして動いている…

王都防衛騎士団には我が国が五代前の先祖が買ったという「伝説の盾」を装備させている。

だが、アメリカとカナダ軍の前にどれほど耐えられるか…

もはや降伏しか、ないのか…

と彼は頭を抱え込み、体を震わせていた。

いつ来るか、わからない恐怖

確実にアメリカとカナダ軍は一步一步迫っていた。

首都ジン・ハーク ゴルボート住宅街

ジン・ハークはアメリカ海兵隊とカナダ第36カナダ旅団群によって包囲され、増援部隊もヘリコプター輸送による降下作戦も実行した。

これによりアメリカ・カナダ軍は戦車50両、戦闘車両80両、装甲車200両、人員3万という大部隊を投入していた。

空からもA H—1 Z ヴァイパー、M H—60 R シーホーク、ブラックホークがいくつも飛び、敵基地ワイバーンを完全無力化した。

戦車部隊を先頭に城門を破壊した海兵隊は城下町で必死の抵抗を続けるロウリア軍

をなぎ倒しながら進軍していた。

「よし！敵兵を無力化！前進するぞ！」

「了解！」

アメリカ海兵隊のエイブラムスM1A3型はガスタービン独特のジェットエンジンのような空気を吸い込むような音を鳴らしながら進める。

「こちら海兵隊フォックス3、ラミネス、第一住宅街を制圧した。これより首都商業地区を制圧する。」

『HQよりフォックス3了解。敵伏兵に注意しながら制圧せよ』

「了解。通信アウト……よし、これよりフォックス3部隊は首都商売地区を制圧する。ここには第4歩兵大隊とC中隊が合同で制圧に取り掛かる。敵からの激しい抵抗があるとは思いますが、油断せずに気を引き締めよ」

「了解！」

「！前方貴族の家、広場にて敵影を確認！」

「よし、俺とフランク、ラモスは回り込み、残りは奴らに銃弾の雨を降らせる。戦車12中隊も敵影を確認次第、攻撃せよ」

『了解、一つ聞きたいのですが、奴らはこちらの降伏のやり方を既に知っていると見ていいのでしょうか？』

「それは間違いない、国務省がしっかりと仕事をしていることを祈ろう。」

各隊員はそれぞれの配置につき、敵兵士に照準を合わせる。

『こちら正面、配置に着きました、いつでも攻撃可能』

ロウリア軍の精鋭部隊と会敵した。

「いたぞ！アメリカ軍だ！」

「王宮には近づけさせるな!!」

「攻撃用意!!!」

「M153で攻撃しろ！」

*M153CROWS II

「イエッサー!!!」

ロウリア精鋭部隊、王都防衛騎士団と呼ばれるこの軍は絶対王政の支配力を高めるため、と王や親族を護衛するロウリア屈指の部隊だ。

数こそ陸海軍より少ないが、高い練度とトップクラスの剣術や陸海軍からエリートと呼ばれる人材で編成された最強部隊だ。

アルファ3を襲ったのは第2重装歩兵大隊だ。

「アメリカ軍へ目に物を食らわせてやる！盾部隊前へ！」

と盾を持つ兵士が前へ陣形を組みながら構える。

重装歩兵大隊の隊長スワウロは緊張していた。

彼の部隊はロウリア防衛騎士団の中でも最強クラスの部隊であったが、破竹のように進むアメリカとカナダ軍はまさしく異質であった。

一言で言えば蛮国の軍隊ではなく、列強以上の軍事力を持つとまで噂された。

その噂はロウリア海軍の壊滅、侵攻部隊の壊滅、ロウリアへ進撃する報告などが届くたびに信憑性が増し、ハーク王は虎の子であった伝説の盾を保有する全てを支給した。

伝説の盾は王家が代々伝わる最強の盾であり、盾は伝説によれば魔法帝国が作り出したものとされ、ロウリア王家はこれを家宝としていた。

これを支給することはどんな鈍感な兵士でも国内が逼迫し、ロウリアに危機が迫っているということがわかった、わかってしまった。

だが、騎士団やワイバーン部隊、歩兵隊などの意見は変わらず王都を守り、敵に徹底抗戦を！と信念を抱く。

ロウリア王国はアメリカ軍によって大敗北していることを一部の人間にしか知らされず、兵士たちはアメリカ軍が不意をつき、攻め込んできたと信じていた。

だが、隊長クラスや上層部の人間には既に知っており、むしろどうにもならないことを認識していたが、せめてアメリカへ一封報いるため、一撃を入れてから講和する予定であった。

今日の前の巨大な鉄像が現れる

それは非常に大きい大砲に全身鉄で覆われ鉄像が走る後には地面がめり込んだ跡が残る。

そしてそれが火を吹くと仲間が複数一気に倒され、建物は粉々に、ワイバーンは木っ端微塵となった。

この盾でどれほど耐えられるのか：

不安な気持ちは多くあるが、ロウリア騎士として逃げるといふ道はなく、どんな敵が現れても偉大なロウリア王国のために礎となるう。

「全軍！ 亀甲陣形を維持し続け、前進せよ！ 我らは誇り高き騎士団！ 勝利おおおお！！！！」
『うおおおおおお！！！！』

彼の言葉に兵士たちは声を上げる。

鉄像の上についている細長い棒がこちらへ向けられる。

そこから火が次々と放たれる。

光の雨は騎士団を襲う

「グフツ！」

「ウギヤ！」

「ガアアアアア!!」

くそ！ 奴らの光の雨は強烈だ！ 次々と仲間が死んでいく

鉄像の周りにいるアメリカ兵からも銃が放たれ、火力はさらに濃厚となる。

「く！くうううっ!!」

スワウロに何度も命中するが、スワウロは何とか耐えている。

さすが伝説の盾と言える。

だが、このままではジリ貧であることも同時にわかっている。

耐えてもどんな精鋭でも体力は無尽蔵にあるわけではない。

どうするか、と思索していると鉄像の大砲がこちらへ向けられる。

！まずい！ と思い、退避指示を出そうとするが、時既に遅く鉄像の大砲が火を吹き、陣

形を保っていた騎士団が爆発により完全に崩れ、そこに光の雨が襲った。

「くそ、ここに死んでたまるか！」

と彼は強靱な肉体によって爆発範囲から離れているとはいえ、耐え、最後の一兵になるまで耐える。

彼は既に満身創痍でただ、耐えるだけで騎士団は全滅した。

意識が朦朧した中、視界が歪み、倒れた。

く、ここまでか…結局アメリカに一撃も入れることができなかった…

盾もあつちこつちに銃痕を残し、ひびも入っていた。

そこで彼の意識が消えた。

「なんてやつだ、M2ブローニングやミニガンに耐えるなんて、どんな化け物だ？」

「一番注目するものは連中が持っている盾だな、他の兵士のは鉄板か鑄造した盾だったが、こいつは違うかもな」

と騎士団が持っていた盾の中で状態が良いものを回収した。

印象としては黒い四角い盾である、盾の中央には何かの紋章が刻み込まれ、盾の中には戦車砲によって破壊されたものがある。

「何だ？普通の盾にしては軽いな、それに金属を何層にも重ねている。」

ラミネスは盾を観察しながら、そんな印象を抱いた。

異世界は中世のように鉄鉱石や銅鉱石を溶かし、鑄造することが一般的であるが、あの騎士団は重機関銃やミニガンの弾幕にも耐えた。

さすがに戦車砲には耐えられなかったようだが、あれを報告した方がいいだろう。

「よし、騎士団からは生き残りがいたか？」

「はい、一人だけ奇跡的に致命的ダメージがない兵士がいました。」

「ほう、そいつは運がいいな、そいつはそのまま後方へ送れ」

「了解です！」

「よし、城はすぐそこだ！前進するぞ！」

ハーク城内

ハーク・ロウリアは辛抱な気持ちで玉座に座り、どんどん追い詰められていくことを実感していた。

先ほど王都防衛騎士団が全滅したらしい。

伝説の盾を装備した最強の部隊でも敵わないなら何もできないことがない。

既に脱出路もアメリカ軍の鉄竜の攻撃で崩壊した。

タタタタ！タタン！

連続した聞きなれない音が王城の中で聞こえる。

近衛兵の悲鳴が聞こえる。

来たか…

ガシャン!!!

ドアが無理あり開けられ灰色の斑模様 of 兵士たちが入って来た。

あちらは完全にこちらへ銃を向けており、いつでも攻撃できる状態だ。

後ろのメイドたちは完全に怯えた様子で震えていた。

真ん中の兵士が一步前へ出た。

「我々はアメリカ海兵隊、第12部隊のアルファ率いるラミネスです。ハーク・ロウリア、あなたの身柄はこれよりアメリカ軍が確保する。

抵抗しなければ危害は加えない。」

「そ、そなた達は魔帝軍の末裔なのか?」

アメリカ兵士たちは全員剣を持っていない。

手には、不思議な形の銃を持っている。

剣は帯剣していない。どうやら全員銃兵ではなく魔術師のようだ。

王の脳裏に、古の魔法帝国軍、魔帝軍のおとぎ話が浮かぶ。

「いえ、違います。我々は合衆国軍であり、魔帝軍?ではありません。」

「合衆国軍…もつと、もつと知っていればこんなことにはならなかったのかもしれないな…。」

「一言言っておこう、ロウリア王国が人種差別し、民族浄化するような悲劇を繰り返す限

りアメリカとカナダはそれを決して許さない。いずれ貴国とは戦うことになったでしよう。」

「定められた運命というものか……」

「これより合衆国へ連行します。よろしいでしょうか？」

ハーク・ロウリアはゆっくりと頷き、連行されていくのだった。

このロウリアとクワトイネ、アメリカとの戦争は3ヶ月ほどで終結し、後にロウリア王国は解体されることが決定となり、アメリカの指導の共、民主主義へ移行するのであった。

貴族や王族、戦争犯罪を犯した者はもちろん、重罪の人々は処刑されていくのだった。

ロデニウス大陸戦争

勢力国家 『クワトイネ公国』 『アメリカ合衆国』 『カナダ連邦』 VS 『ロウリア王国』
指導者

クワトイネ公国首相カナタ / アメリカ合衆国大統領ハリー・ウインストン /
カナダ連邦首相ウィリアム・ハーブ / ロウリア王国王ハーク・ロウリア34世

ロウリア軍

戦死者27万人

負傷者11万人

行方不明者5万人

艦艇4300隻以上轟沈・損失

ワイバーン部隊全滅

海軍及び陸軍施設8割損失

民間人

3000人（民兵及び志願兵）

アメリカ軍

負傷者93名

車両12両損失

カナダ軍

負傷者2名

クワトイネ軍

戦死者2万人

負傷者3万人

行方不明者3400人

ワイバーン部隊50騎損失

艦艇30隻損失

陸軍施設5ヶ所被害甚大

民間人

死傷者20万以上

行方不明者5万人

15 課報員

私は偉大なるグラ・バルカス帝国情報局所属の課報員だ。

名前は言えないがコードネーム「ジェイ」

ここロウリア王国首都ジン・ハーク

王国はクワトイネ公国とクイラ王国へ攻め込み、2カ国とも併合する予定だ。

2カ国が減ぼされればロデニウス大陸はロウリア王国のものとなり、のちに我が国が植民地とする。

情報ではロウリア王国は第3文明圏列強国パーパルディア皇国から軍事的支援を受けて、長年かけて戦力を揃えたと聞く

我々から見れば産業革命すら起こしていない野蛮な国にいくら帆船や前装式の大砲など揃えても無意味であるが、この世界では違う。

私は今日も情報收拾を行う、噂程度であるが、何やらクワトイネ公国とクイラ王国は海からの大陸国家と国交を締結させ、著しい成長をしているらしい。

本当かどうかかわからんが、商人経由なのだから本当だろう。

だが、なぜ、お世辞でも文明国とは言えない2カ国と国交だけではなくその国を成長させるのか

通常、技術というものは格差があることで外交・戦略上有利な立ち位置となり、輸出するとしても中心的技術ではなく、消費物資を少しずつ輸出する。

もし、本当に2カ国の国力を上げているとするなら代理戦争でロウリア王国を占領下に置き、割譲するのが狙いなのか

今日も俺は執事の格好で王家に仕える。

情報を集めるのなら一番手っ取り早い方法はその国のリーダーとなる組織の近くにいることだ。

王族や貴族の集まる場所で働く自然と情報が集まる。

この国の防諜活動はお世辞にもうまく機能しているとは言えない。

諜報活動しやすい環境であるから、我が国から諜報員はあまり派遣されていない。

さて…今日は貴族の相手か…疲れるものだ

「あらく執事さん、私に紅茶のおかわりをもらえるかしら？早くしないと首を切るわよ」

こう言って本当に斬首されたメイドや執事がいるというのだから怖いものだ。

「かしこまりました。少々お待ちを…」

と紅茶のポットを持ち、紅茶のお代わりを注ぐ。

「ねえ……聞いたかしら？あの農業国がどうやらアメリカやカナダという国と国交を締結したらしいわよ」

「まあ……あんな野蛮な国と繋がりを持つなんて……なんて恥知らずの国ですこと」

「ええ、実は我が国も国交開設に訪問したらしいけど、王様は怒って追い出したわ」

「当たり前ね、亜人と共存する国家とつながりを持つ時点で身の程知らずね……おまけに歴史もたった300年ほどの国らしいわよ」

「まあ……さ、300年？それはとんでもない新興国家ですこと……」

「ええ、当然貴族や王族すらない国で国民がリーダーを決めるのですって、なんて愚かな行為をしているのでしょうか」

「低能である考えね、民衆に国家の王を決めさせるなんて、無知な民衆が自国のリーダーを決める仕組みは愚かな指導者を作る原因にもなっているだろうに、それを自覚しているのかしらね？」

「さあ、農業国と連携する時点で、彼らには正確な判断能力がないに等しくて？」

「貴族や王族が存在しない国なんて盗賊が集まった国なのかしら？」

と貴婦人方が話している間で、ジエイは考えていた

新興国家のアメリカ？カナダ？そんな国は聞いたことがない。

そんな国がクワトイネと繋がるとは運がない国だな：

この亜人を徹底的に迫害している国を敵に回すとはな

まあ、俺たちにとってどうでもいいことだが、できることなら近いうちに情報を仕入れておきたいところだ。

情報は最も戦略上重要だ。

情報一つで戦場や国家戦略に左右され、今の所ムー大国以外機械式飛行機は見られず、我々にとって最も警戒すべき国はムーと中央世界の国家だ。

中央世界なんて大層な名前だが、所詮は未開の国家。

魔法という力も1発の弾丸を防ぐ強力な魔法使いは少なく、大半が銃弾を防げない。

その上実用性のない能力で最初こそ警戒していたが、もう警戒していない。

ワイバーンという航空兵力もたった250から350Kmしか出ない低速な射程の短い火炎弾を打つだけの的に何もできない。

今のうちにもっと探りを入れてみるか…と思索していた

すると廊下側が騒がしい

ジエイはそつとドアの側まで寄ると兵士が話していた。

「おい、あの話は本当なのか!？」

「あ、ああ…本当だ…クワトイネに派遣していた派遣軍が全滅しました…」

「まさか…ワイバーン部隊もか!？」

「は、はい…敵航空戦力の攻撃によって全て全滅したとのことです。」

ワイバーンが全滅? 列強国でも介入したのか?

「ま、まさか列強国が介入しているのか!どこだ…!パーパルディア…なのか?」

「い、いえ、パーパルディアではなく見たことない鉄のワイバーンに何か、音がするとそのまま人体が木つ端微塵になつたとか、森が一瞬にして地獄の炎で焼き尽くされたとか断片的な情報ばかりで、まだ断定はできませんが、非常にまずいことになっています…敵部隊は既に我が国へ侵攻している噂もあります…」

「そ、そのことを知っている者はお前だけか?」

「い、いえ、すでに將軍と王には報告しています。」

「そうか…くれぐれも内密で頼むぞ…こんなこと民衆にもバレて見ろ…ロウリアは大パニックだ」

「し、しかし、大パニックになるのも時間の問題では?」

「馬鹿野郎!お前の脳は飾りか!?!こんなことが民衆なぞに漏れてみる、王族だけではなく俺たち兵士にも責任追求はくるかもしれない、とにかく今は誰にも言うな、いいな!」

「は、はい!」

と兵士達は動き始めそのまま奥へ入っていった

「あらま…なんて騒がしいのかしら？少し兵士の質が下がったのではなくて？」

「仕方がなくて？ここ最近では軍事力をつけるために民衆から無理やり徴兵したらしいから兵士の質が下がるでしょう。所詮烏合の衆でしかないですし」

「あらま、品のない民衆から集めた兵士なんて下品なだけですわね…そのままワイバーンの餌になればいいわ」

「あらあら、それじゃあワイバーンが可愛いそうよ」

「ほほほほ」

と会話しているが、ジョイは考えていた

は、派遣した部隊が全滅!?ワイバーンすら全滅するとは一体どうなっている？

あれだけの戦力では圧倒的勝利に間違いないはずだ！

おかしい…何かがおかしい…

やはり第三勢力の介入が正しいだろう

そうでなければこの状況を説明できない

とにかく今の仕事が終われば探りを入れてみよう…

ジョイは執事としての仕事が終わるとすぐに行動した。

士官の部屋へ侵入するとそこから書類を探り、現在の戦局について探した。

書類はすぐに見つかった

これは…通信内容記録？

通信記録2

『こちら3号！東南方面を現在調査中、未だ敵影は見られず、この………うん？なんだ、あれは？…!?な、なんだこいつ』

『本部！何者かわからない鉄龍から誘導火炎弾が追ってきてます！助けてくれ！助けてくれええええええ!!』

『な、なんだ!?回避急げ！早く右へ旋回するんだ』

.....

は？なんだ、この状況は…

一体どうなつていふと言うのだ？おかしい、ほとんど悲鳴ばかりしかないじゃないか
他の書類は…あ、あつた

と書類を熟読すると内容は簡潔にまとめると派遣された部隊はアテム副将以下全員

全滅、クワトイネ側に支援しているアメリカ合衆国、カナダ連邦の介入が原因と思われる、また、アメリカとカナダ軍の扱う鉄竜や鉄像が現れ、それらはあらゆる攻撃が通じず、一方的に攻撃された、と言うことだ。

鉄竜？鉄像??? 一体なんのことだ。

だが、ロウリア側が海軍力だけで4400隻、ワイバーン部隊が350騎とこの世界の文明圏外では強力な軍勢力と言える。

相手はクワトイネ公国やクイラ王国の持つ軍勢力なんてロウリアと比較すれば天地の差がある。

「これほどの戦力を全滅させるとは両国ができるとは思えない。両国に支援していると思われるアメリカとカナダの仕業か？」

気になることは多くあるが、見つけた書類を記録せねば…とジョイは記録したのちに寝室に入り、隠し部屋に設置されていた無線機に本国へ情報を送った後に寝静まった。

次の日では猛烈な音と振動で叩き起こされた。

「な、なんだ!?!」

ドアの外では慌てている様子で騒動が起きていた。

「敵が来襲したぞ! 外壁に兵士を回せ!」

「敵の鉄竜が現れた! 対空準備しろ!!!」

「うわああく!!! 城門が破壊された! バリケードを立てろ!」

ま、まさか敵が来襲したのか! と外を見ると何かババババババと強烈な音を鳴らしながら何かを通った。

アメリカ軍のAH—1Z ヴァイパー、MH—60R シーホークが飛んでいた。

あ、あれは…我が国で開発中のオートジャイロ!?

なぜ、あれが…

もう相手は実用化させていると言うのか!?

相手は蛮国ではないのか!?

あんなもの、この世界には存在しないはず!

なぜ、こんなものが…

と彼の脳の裏に先日 の出来事が思い出され、一カ国の国名が思い浮かぶ。

!?

あ、アメリカ…あれらはアメリカ軍なのか!?

ロウリア上空にはA H—1 Zヴァイパー、M H—60 Rシーホーク、ブラックホークは何十機も首都の周りを飛行していた。

外には何かが囲んでいた

うん？あれは…と持ち前の双眼鏡で見る

だんだんと手が震えていた

ま、ま、まさか…この世界には戦車があると言うのか!!!???

おかしい、産業革命すら起こしている機械文明はムー大陸のムー帝国にしかないはずだ！

ムー大陸でも戦車は確認されていない。

巨大な主砲、重厚な斜めの装甲…

あんなもの我が軍の戦車よりも巨大な戦車だ…

しかも2種類の戦車があるな…もう一つはさっきの戦車のような傾斜した装甲ではなく垂直だ…

これも超重量に見えるのに関わらず50 kmを超える速度で快速に走っていた。

あれほどの巨大な主砲…70 mm? いや、100 mmある…

駆逐艦の主砲を戦車に載せているのか!?

あれほどの戦車を開発する能力を持っているアメリカとカナダは一体どんな国なん

だ：

それにここからではよく見えないが銃声の連続音が聞こえるということは侵攻軍には独自の連射式銃を持っている可能性がある。

まさか、ロウリア王国で知ることができるとは：

詳細をもっと知れば良かったが、周囲はあまりにも大混乱となっており、よくは調べられなかった。

これはまずいかもしれない：ほかの工作人員の話では海上では1万トンクラスの巡洋艦や空母を発見した話もあった

それも信じがたい情報ではあったが、これほどの兵器が登場すれば嫌でも現実とわかる。

ジョイが見た戦車はアメリカ陸軍が運用するエイブラムス戦車M1A3型最新鋭主力戦車とカナダ陸軍が運用するレオパルド2A10型主力戦車であった。

一体あれほどの軍勢をどこから、と上空を見ると何か飛んでいた

エンジンが二基主翼の両端に搭載し、エンジンは今まで聞いたことのないエンジン音筒状のエンジンから高音が響き、航空機は何かを吊るしていた

それは何か巨大なものだった

あれは…… 戦車!?

こいつら、まさか飛行機に戦車を運ばせていたのか!

そして、航空機から空中の状態で戦車が投下され、落下傘と思われるパラシュートが開き、ゆつくりと地面に着地する

な、なぜ、我が国ではまだ、研究段階の落下傘がある?

アメリカとカナダという国はもしかすれば我が国を凌駕する技術と軍事力を持っているのかもしれない。

飛行機から物資や兵員を降下させ、その地域の迅速な制圧構想は我が国にでも研究されてきたが、まさか実戦で見られるとは……

急いでこの事を本国に報告せねば……!

すぐに彼は情報をまとめて城を走った。

丁度城の出口に差し掛かるところで彼の足に突如痛みを感じさせた。

「うがつ!」

と前へ倒れるように倒れたジョイは足を押さえたまま撃った本人を見ると驚愕していた。

そこには旅人の格好の男性が数人

手には拳銃が握られており、顔には泥を被ったかのような汚らしい格好していた。

* 一般的にはそれを迷彩と呼ぶ

「な、なんだお前は!? 私はこの城の執事だけだ! 私を捕まえても何も得られないぞ!」

拳銃だど!? こいつらまさか、アメリカかカナダのスパイか!? 早すぎる…まさか、私の正体を知ったのか!?

「少し黙ってもらおうか、お前さんがどこかのスパイだったと言うことは既に知っている、何やら珍しいものを持っているらしいじゃないか?」

「し、知らん! 私は執事だ! 人違いだ!」

「ほう、往生際が悪いようだな、お前さんの持っているカバンを調べたら面白いものが出るじゃないか?」

!!?

「くっ!」

「大丈夫だ。眠ってもらおうぞ」

「クソ! こんな場所で捕まっていたまるか! さてはお前はアメリカ合衆国かカナダ連邦の課報員だな? なら、話は早い。私もお前たちのことは興味を持っている。我が国まで来てもらう」

とジョイは懐から拳銃を取り出す。

それは旧日本軍が使用した九四式拳銃に非常に酷似していた。

男性はやれやれとCQCの構えを取る

胸のソーバックからナイフを取り出し、手に持っている拳銃オペレーターと一緒に構える。

「?なんだその構えは?ナイフと一緒に構えるとは、お前も知っているだろうが、ナイフより拳銃の方が有利なんだけ?」

男性はニヤリと笑う

「!何がおかしい!」

とジョイは拳銃を撃つが、男性は体を捻り、素早く避けると一気にジョイに接近する!

「!拳銃相手に接近するとは、貴様は馬鹿のようだな!こいつは連射できるぞ!」

と拳銃を男性に向けるが、男性は近くにあった木箱や柱の物陰に隠れながら接近してくる

「クソ!死ね!」

と拳銃を男性に照準すると引き金を引くが、弾丸は出なかった

「!?」

銃声がなかったことを確認した男性は一気にジョイに近づく!

「馬鹿め!拳銃は一つとは限らないぞ!」

と新たに拳銃を出す、その前に接近され、そのままジョイの首元にナイフが突かれる。

「!?」

「拳銃に頼るのは結構だが、近接戦闘では拳銃よりナイフの方が機動力に優れる。」

ジョイはナイフに突かれたまま動けず、拳銃を手放す。

「7発」

「？」

「そいつの装弾数は7発、残弾数をしっかりと身体で覚えることだな」

「!?拳銃の性能まで知っているとはな…負けたよ」

「悪いが、暫く眠っててもらおうぞ」

「好きにしてくれ」

とジョイ言うと男は別の拳銃へ持ち変えると首元へ撃ち込む。

男性はドサリと倒れた後、そのまま寝てしまったようだった。

「こちらSEALs a群、ネズミを捕まえた、回収班を頼む」

『こちらシーウルフ、了解した、すぐに向かわせる。』

「苦労だったな、どうだ?一足先に敵地へ侵入した感想は?」

「やめてくれ、普通に宿屋や屋台で売られている食事は軍の物資徴収でロクな味付けされていなかっただ。」

「ジャングルの方がまだ、美味しい食事にありつける」

『そうか、詳しい報告は本国で行ってくれ、回収班は1時間後に来る予定だ。アウト』
と男性たちは通信を切り、タバコを口に咥えるとそのまま倒れた男性を抱えて奥へ入って言ったのだった。

数十分後、ジョイ以外でも多数の諜報員が行方不明になる出来事が起きて、ある国が情報収集に苦勞することとなったことは今後の未来に影響するのであった。

SEALsの目的は偶然偵察機や早期警戒機が受信した未確認電波が原因だった。

電波を一切発信しない封止状態のアメリカ側は偶然受信したことに疑問を抱き、受信された電波は全く知らない暗号ではあったものの、解析した結果第二次世界大戦ごろに使われた通信機器とわかった。

ペンタゴンやCIAはもしかすると電波を出す機械を既に開発し、実用段階の国家が存在するのでは？と疑問から確信に変わり、ちょうど発見された場所がロウリア王国であったため、対ロウリア戦に向けて作戦も準備段階、そこでCIAとペンタゴンは海兵隊のSEALsを出動することで電波の発信源を特定し、他国のスパイを捕獲すること

に成功した。

この結果にCIAやペンタゴンは歓喜し、貴重な情報源を確保できたことで、より詳しい情報が得られるのであった。

16 ロウリア国復興

アメリカ・カナダ・クワトイネ連合とロウリア王国との戦争はロウリア王国の降伏により、完全終結となった。

ロウリア王国はアメリカ合衆国、カナダ連邦とクワトイネ公国の主導の下、解体され、共和制を導入したロウリア共和国となった。

領土としてもクワトイネ側が北東部のおよそ韓国本土に相当する面積の領土、アメリカとカナダ側が西部の日本本土ほどの面積を割譲した。

ロウリア共和国は実に領土の半分を失い、保有する戦力に大きな制限をかけられた状態で国民や政府の間で不安視する声も上がったが、アメリカによる技術支援と戦後の警備を担当していることで話は何も問題はなく進んだ。

また、ロウリア王国が保有する魔術や魔法技術に関する全ての譲歩も条件に譲歩された。

旧ロウリア王国ハーク・ロウリア34世は大量虐殺の首謀者としてそのほかの側近と軍関係者など戦争犯罪者共にクワトイネ公国・クイラ王国の刑罰によって罰せられるこ

ととなった。

それまで捕虜とされたロウリア軍はアメリカ及びクワトイネからロウリア側へ返還となった。

しかし、少数ではあるが、アメリカやカナダへ残留したいというロウリア兵士がいた。両国の政府はこれを条件付きで、許可することに決定。

残留した兵士の中には魔導士も含まれ、魔導士は捕虜の中でも重要な人材であった。捕虜の待遇を通常より良くしていた。

そのことが功を成したのか、何名かのロウリア捕虜から魔導士がアメリカ側へ所属し、また、戦争犯罪者である魔導士関係者もアメリカ政府は魔法研究機関に送った。

戦争犯罪者となった彼らがどうなるのか、誰も知る由もない。

この知らせを聞いた研究員や軍関係者は歓喜するのだった。

アメリカ・カナダ軍内部でも魔法の存在は現在のところ危険性の高い魔法は発見できていないが、これから現代兵器が全く効かず人間のみ、特定人物を攻撃できる魔法や諜報関係、特に古代歴史書に存在する転移魔法を研究所では注目され、かつて古の魔法帝国が大陸ごと転移した伝説やムー大陸の伝説など魔法対策及び研究へ予算が投じられた。

(それでもアメリカ軍の軍予算は例年よりも20兆円ほど予算がアップした上、陸軍で新たに特殊攻撃対策本部を設置することも検討している。)

アメリカ政府がなぜ、魔法へ注目する背景に科学の法則を超越した理不尽な力が脅威となり、いくら前世界で世界のトップクラスの軍事力と言われたアメリカでも、神や悪魔のような神話に出てくるデタラメな攻撃手段の可能性が高いことがあるとCIAや魔法分析調査部から出たからだ。

当然、カナダもアメリカ同様の魔法対策へアメリカと共同研究していた。

アメリカのあらゆる面で何とか対応しつつ、ある意味中国や中東問題よりも国家危機にあると考えていたアメリカ上層部や大統領にとってロウリア戦争は、この世界の實力を知るのにちょうどよかったと言えた。

政府内でそんなあらゆる対策が立てられる中、戦後処理で別の問題も浮上した。

それは奴隷であった。

アメリカでは奴隷禁止なことはもちろん、奴隷は150年ほど前まで存在していたことからシヨックが大きかったと言えた。

ロウリア王国では奴隷の定義として人族以外の獣人・翼人族などの亜人族や犯罪者などが中心であるが、一部では志願制により奴隷兵、奴隷となる人々もいた。

一般的に奴隷は人権など保障されず、道具同然に使われ、例えば主人が奴隷を何人殺害

しよが罪に問われず、逆に奴隷が何かしらの貴族や一般人へ暴行・殺害・暴言・性犯罪など行なった場合即男性は処刑、女性性は性奴隷となる。

これはロウリア王国で膨大な人口を抱え、それらの国民を養うための必要な労働力として確保していた面が強く、

奴隷の半数は鉱山・農業・下級産業・奴隷兵などに従事し、残りは貴族や裕福層が飼っていた。

ロウリア王国の奴隷産業は他国から奴隷となる人々を狩るだけではなく、内陸部に奴隷工場と呼ばれる奴隷となる人々を生み出すだけの工場が存在し、生み出される奴隷は国内だけではなく列強国などに輸出される。

これらはアメリカ軍が奴隷商売業を営むムルタン・カフトロ卿やヒュールラ商会など徹底的に摘発した。

この現状に連合側は直ちに現政府に奴隷制度廃止を徹底させ、人種だけではなく種族に対する人権保証する法律を整備する。

これが功を成したのか、現地民からはとても歓迎された。

ここ数年、ロウリア政府は軍備増強のため重税を重ね、国民は不満が溜まっていた。

奴隷からはロウリア王国解体によって主人を殺害、逃亡する出来事が多発し、特に獣人族や翼人族などがアメリカ領土となるロウリア北部へ逃げ込む事が多くなった。

この事態にアメリカとカナダ側は異世界人を国内へ積極的に入国させることは民族間の争いの種や法律が整備されていない状態で未知の病原菌・生物を国内へ上陸することを懸念していた。

クワトイネやクイラとの貿易面でも厳しい検査によつて今の所問題は起きていないが、十分に安全な状態とは言えない。

彼らは既に身内や友人、故郷そのものが破壊されている者、行き先がなく奴隷解放軍であるアメリカやカナダに興味を持った者、単なる興味本位の者など

その数、何と数万人にも登り、これにアメリカ・カナダ政府は頭を抱えたが、妥協案を提示する。

それは新しい領土の市民として受け入れてはどうか？というものだ。

もともと移民大国であったアメリカは移民を受け入れることにそれほど問題はない。

新しい領土を開発するには労働力の問題があった。

それはアメリカやクワトイネがロウリアから割譲した領土に住んでいた住民は特にアメリカに未知の兵器の登場によつて恐怖していた。

現代ではまずあり得ないことであるが、中世では新しく入手した領土内の住民は奴隷か、税を搾り取られる存在となるので、ロウリア国民は避難した。

一部は残っている者もいるが、それでも劇的に数が少なくなつた今ではアメリカとカ

ナダも開発に数年以上はかかるだろうと予想していた。

それを解決するために労働力を確保することで開発期間が短くできる。

アメリカやカナダ側としても元極東に点在していたグアム島や日本が消失したことにより貿易や戦略上確保しておきたかったという面もあった。

それは今後予想されるフィリアデス大陸や第一・第二文明圏との貿易を円滑に行うために大陸に近い領土だ。

それを領有化する事ができたため、できるだけ早めに開発し、貿易港として機能を果たす。

残った住民はアメリカ軍がロウリア王国を滅ぼしたため、あつけからんとしていたが、しかし、終戦後アメリカ指導の元で復興していく様子や食料配給、医療支援など中世の世界では考えられない扱い方をしてくれた。

結果的に貧困層や元奴隷だった人々は親米となった。

ロウリア王国の各地はアメリカ軍による攻撃によって損害を受けた住宅、工場、軍事施設、公共施設などはあるものの、そちらは最小限に留めて軍事施設を徹底した攻撃を行ったため、国民側へは被害は少ない。

そんな中、今日も復興のために一人のアメリカ軍中尉が仲間と共にロウリア共和国、首都ジン・ハークの見回りをしていた。

「ふう……えらく暑い……下手すればベガスよりも暑いですね……」

「なあに言っているんだ、こんなのネバタよりは涼しい方だぜ？スコット」

「そうですが、早く任務を終えて家族に会いたいものです……マイク中尉もそう思いませんか？」

「ああ……まあな、異世界の国家は酷いものだな……見てみるよ……」

少し小道を見ればそこにはゴミや残飯、浮浪者と思われる遺体、排泄物が落ちていて、せいで強烈な匂いを発していた。

中世ヨーロッパの歴史でも下水はローマ時代以降あまり復旧しなかったため、排泄物や汚物などは全て川へ捨てるか、道路へ捨てるのが一般的であった。

路地を歩いていると上から汚物が落ちてくることもあった。

有名な話では16世紀頃のフランス貴族が傘を常に外へ歩き携帯する背景に汚物が上から落ちてくるのを防ぐためとも言われている。

また、ドレスが異常に膨らんでいるのもスカートに汚物がつかないようにするためのデザインという話もある。

パレードや記念式典になれば国が掃除するのだが、そんなものは滅多に行われず、階

級の高いものは香水などをつけて匂いをごまかしていた。

しかし、アメリカ・カナダ政府は異世界のあまりの不衛生さに渡航する人々に注意と制限をかけていた。

「たく…あと少しでここらでも企業がここら辺に下水管を引くらしいから少しはマシになるだろうが、いつ見ても耐えられないものだ」

「中尉もこの光景をどこかで見たことが？」

「…ああ…アフリカでな…そこではこつちよりはマシだったが、2019年に起きたチュニジア共和国チュニスの爆弾テロ事件覚えているか？」

「はい、チュニジア共和国の大統領や側近が殺害された事件ですよね？」

「ああ、あの時俺はエジプト陸軍の指導に任務として行っていたが、その時にあんな事件が起きて、主犯たるテロリストどもはアフリカ北部を支配しようと計画するイスラム過激派によって引き起こされたものだ。」

当然、イスラム過激派と敵対関係にあったアメリカは派兵を行い、俺も戦場へ出向いたが、そこで何と戦ったと思う？」

「…何を見たのですか」

「クソツタレどもものせいで薬物中毒になった少年兵だ！それも少女達だった…」

俺も兵士として敵対するなら戦うことしかなかったから、戦ったが、その少年兵たちの遺体たちはどれも若く、俺の娘くらいの歳だったんだ。

あんなにも無残に捨てられている様子を見るとそれを思い出して嫌になるものだ……」

頭の裏で映ったのはアフリカの草原でアメリカ軍の歩兵隊と反政府組織の戦闘だった。

チュニジア共和国首都チュニスで大統領式典の中、テロリストが爆弾テロを行い、爆発に巻き込まれた大統領以下政府関係者4名が死亡するというチュニジアの歴史上最悪とも言われた事件だった。

テロリストを指揮したのは反政府組織が手を組んだイスラム過激派だった。

チュニジア政府は反政府軍を抑えられなくなり、国連へ助力を求め、これを受けたのは中東へ部隊を展開させていたアメリカ軍であった。

アメリカ軍は現地へ介入すると首都の復興や支援、戦闘介入を行った。

戦闘は精密爆撃により反政府軍は組織的行動力を失い、あつという間に空中分解した。

しかし、結局首謀者も逃げてしまい、アメリカ軍は面目が潰れてしまう結果となった。

さらに現地政府はもはや政府としての機能がいくつも停止し、国が崩壊するのも時間

の問題であった。

結局、アメリカ軍は反政府組織の壊滅を受け、国連の主導の元、復興が行われるだけで国全体として回復するのはかなり時間がかかった。

「中尉…」

「…少し長話をしたようだ、しばらく続けるぞ」

「はい」

とそこへ獣人族のケモミミを生やした少女が突っ込んだ。

「！おい大丈夫か」

途中でマイクは言葉を失った、そこには鋼鉄製の手錠に最低限布の面積しかないボロボロの服、白い髪は手入れされていないのか、ボサボサ

何より何かに怯え震えていた。

耳は犬なのか、シエパードのような耳をしており、可愛い女の子であった。

「こんにちは…お嬢ちゃん、何かあったのかい？」

と優しく中尉は腰を下ろし、少女と同じ目線に合わせる。

と少女は怯えながらこちらを見る

少女は白い髪に陶磁器のような白い肌、シェパードの耳と尻尾は白く、瞳は青であった。

「心配ない、俺たちはアメリカ軍だ、俺はマイク中尉、何か追われているなら助ける」
「あ……めり……かぐん？……」

と首を傾げるが、少し考えたあと保護してもらうことにした。

「……中尉、これは……」

と目線で中尉へ目配せをすると

「ああ……報告でもあった人攫いの仕業だろう、大方亜人だから攫われたということだろうな、おそらく放置したらまた、捕まる。」

「……では、保護を？」

「ああ……ちよつと待て……確か右ポケットに……」

マイクは姿勢を維持したまま、何か内ポケットを探ると銀色に包まれた四角いものを取り出す。

「あつたあつた、お嬢ちゃん、チョコレートを食べるかい？」

「ちよこれーと……？」

「そう、こいつだ」

少女はジッとチョコレートを見るが、食べようとはしなかった

マイクは少し考えて、ハツと何かに気づき、チョコの一部を食べた

「美味しいぞ、大丈夫だから」

マイクが食べたことで少女はチョコをあらゆる角度から見たあと、パクリと食べた

その光景は白い髪に犬と思われる耳が強く反応した

(か、可愛い……………)

すると本当に美味しかったのか、リスがどんぐりを齧るように食べた少女は少し元気を出した。

「お嬢ちゃんの名前を聞いてもいいかな？」

「うん…イルミ……………っていうの……………」

「そうか、イルミちゃんだね、君を本部へ連れて行くが大丈夫かい？そこなら君を安全な場所へ連れていけるが…」

と優しく微笑むとイルミは少し微笑み、頷く

「わかった。じゃあ、おじさんから離れないように、ね」

イルミはマイクの上着を掴みながら頷く

そこへ扉をなぎ倒すかのような音が響き、男性が複数現れた

イルミは何かを感じ取ったのか、すぐに中尉の上着を握ったまま震えた。

(イルミが…)まで怯えているということは…いつらか…)

「あの小娘どこにいやがる！」

「うん？頭！あそこです！」

男の中でも大柄の男が気づいて、こちらへ駆け寄った。

「おや、これはこれはアメリカカ兵士様でございますか、その少女を捕まえてくれてありがとうございます。」

「君たちは？」

「あつし達はこの辺に住んでいる商売人でして、その娘を探していたんですよ……」

「……少女との関係はなんだ？」

「は、はい、その少女はあつしの娘でして、急に家を飛び出したから、慌てて追いかけていたんです。」

「ほう……娘に鋼鉄製の手錠をかけることが普通なのか？」

「あ、いや、それは……あつしの家で悪い子にはつける文化みたいなものですよ」

(清々しいほど嘘を吐くな………)

「そうか、お前らとこの子の服装はだいぶ違うようだが、なぜだ？」

「あ……いや……」

「それにかなり怯えているようだが、それもなぜだ？」

「……くそ！アメリカカ兵士だろうが相手は2人だ！やっちゃまえ!!!」

と路地から男の部下たちが出てくる

「へ：：へへへ：：アメリカ軍人に手出しすることは避けたかったが、この際仕方があるー」

「お前らやつちまえ!!!」

「「「おう!」」」

と柄の悪い男たちは三人を囲むように移動し、手には剣やナイフ、斧、木の棒が握られていた。

「・・・いいだろう、お前ら全員フルボッコにしてやる、かかってこい!」

と言うと男たちは一斉に襲いかかってきた

「よし、スコット!今だやれ!」

「あいよ!イルミ!しっかり耳と目を塞げ!」

とイルミはマイクに守られながら耳と目を塞ぐ

男たちの目の前に落ちた閃光手榴弾が一気に爆発し、男たちは強烈な光と音によって耳を潰された者、目をやられた者が続出した

「ぐああああああああ!!!」

「目が：：：目がああああ!!!」

「うおお：：!!!」

すぐさまマイク中尉は怯んでいる男たちを制圧に取り掛かり、呆気なく終わった。

「よし、うまくいったな。」

「はい、まさかここでこいつを使うとは思いませんでしたよ」

「ああ、こういう使い方も悪くねえだろ、おい連絡を入れろ」

「あ、はい！」

中尉はそのまま頭の男性に近づき、胸ポケットから書類を取った。

内容にはロウリア王国壊滅によって奴隷を別の場所へ移すというもので、こいつらだけじゃなくてほかもいるってことか……

さらにイルミ以外にも被害となっている奴隷は亜人を中心に多くのリストがあった。

これは使えるな……

「中尉！HQと連絡が取れました！直ちにこちらへ車を回してくれるようですよ！」

「そうか……よかつたな、イルミちゃん、これでもう君を追うものはいなくなつたんだ」

「ほん……と……？」

「うん」

するとイルミは涙を溜め、中尉の腕の中で泣くのだった。

中尉は子供をあやすかのように背中をほんぽんと優しく叩いてやり、大丈夫……大丈夫

夫……と言葉をかけた。

イルミが泣き止むのに数分くらいかかった後で、中尉は質問した。

「イルミちゃん、お前さんはもう自由の身だ、両親はどこにいる？」

「……………」

イルミは下を向いたまま、沈黙する

それに二人は最悪の状態を予測し、まさか…と思いつながら聞く

「おとうさんも… おかあさんも… ともだちもみんなしんじやったんだ… わたしのむらはじゅうじんぞく… ぼつかりのむらで… ろうりあのへいたいにみんなつれてこられたあと… ころされちゃった…」

わたしはろうりあぐんがこんらんするとき… にげられたけど… とちゅうでそのおとこたちにつれてこられたんだ…

みんな… あいたいよ… おかあさん… おとうさん… う……………」

とそこまでイルミが言うとマイクが抱きしめた

「ふえ…？」

「え？中尉!？」

「怖かっただろ？ずっと一人で、よく頑張った……………」

とイルミが再び涙を溜める

「大丈夫だ：お前を苦しめる奴らはみんな俺たちがぶっ潰してやるからな：」

イルミは今まで溜めていたのか、というほど涙を流し、中尉の上着を掴んだまま大泣きする。

イルミが嗚咽する中、マイクはイルミを抱き締めながら静かに怒りを燃やしていた。異世界とはいえ、こんな世界はあんまりではないか

地球でもロクなことは無かったが、こっちはもつと酷い

こんな少女少年が多くいると想像すると地球以上の理不尽さとこの構造を作り出す異世界に怒りが湧いていた。

「イルミ：俺と一緒に暮らさないか？家はアメリカにあるだが、家族に妻と娘2人がいるんだ。

きつとお前も娘たちと仲良くできると思うんだ

どうだろうか：」と頭を掻き、照れ臭そうに言った。

「・・・うん！」

イルミは笑顔になった。

「ははは：マジですか：……」

「ああ、本気だ。なあにいまの俺の収入なら家族が一人二人増えてもどうてっことないさー！」

「ははは！そうかもしれないですね！けど今はまだ異世界人の入国審査が……」

と二人の兵士と一人の獣人少女は後に中尉の元へ少女は引き取られ、妻と娘は驚愕する話はまた、後日起きるのであった……

二人が入手した書類をもとにロウリア国内の人攫いや人身売買組織は撲滅され、ロウリア共和国から多数の亜人がクワトイネ、クイラ、アメリカ領土へ引越すのだった。しかし、奴隷の身から助けてくれたアメリカ軍へ恩恵を感じ、アメリカ軍へ志願する亜人も現れたことは別の話であった。

この出来事は多くの亜人から好印象を抱かれ、アメリカやカナダを目的にアメリカ領土へ移住するものが多く増えた。

「中尉、ある友人が教えてくれた言葉で中尉に送りたい言葉があるのですが」

「うん？なんだ？」

「中尉って、ロリコンじゃないですよね？」

「ロリコン？なんだそれは」

「日本人が言っていた言葉なんですけどロリータコンプレックスです！幼女や少女を愛

17 異界の漂流国家

北米大陸から遙か西方、大海腹の中、大陸と呼ぶには小さく、島にしては大きな陸地があつた。

その陸地には近代的建造物が並び、煙突から黒煙を吐く港には金属の大型船が点在し、その国は

グラ・バルカス帝国だつた。

グラ・バルカス帝国（通称第8帝国）情報局

並べられた電気式受信機に、電子音が連続して鳴り響く。現代の者がそれを聞いたのであれば、信号形式は違えど、モールス信号と間違ふ事だろう。

電気式受信機に張り付いている局員が何かを受信した内容をメモし、局長へ近づく。

「閣下、ロデニウス大陸の情報について、現地から報告が届きました」

きらびやかではあるが、スッキリとした黒い制服の男が報告を始める。

「概要は？」

「はっ！ロウリア王国のクワトイネ公国並びにクイラ王国への侵攻は、アメリカ合衆国とカナダ連邦の介入により、失敗に終わり、王家は失脚し、民主主義国家に移行したことです！」

「!?ロウリア王国が敗北？何かの間違いではないのか!？」

「いえ、混乱の末情報をもとめるのにかなり時間がかかりましたが、間違いないです。しかし、アメリカ軍による素早い侵攻によつてロウリア王国に派遣していた諜報員に何人もの行方不明者が出てしまいました。」

いつもは概要を聞くだけで納得し、仕事は部下に任せ、責任は自分がとる閣下と呼ばれた男の片眉が上がる。

おかしい……確かロデニウス大陸はロウリアが最も軍事力を持つ国のはず……

第三勢力の工作？それにしてもロウリア側には別の国が支援していると聞いているが、クワトイネとクイラにはどの国も支援してなかった

それに諜報員が行方不明だと？不自然だな……

「我々の分析では、ロウリア王国の圧勝となり、ロデニウス全域が、ロウリアになるはずとデータでは出ていたはず……。アメリカやカナダという国は聞いたことが無いが……詳細は？」

「はい、アメリカとカナダが参戦したことにより、戦局は一変しました。ロウリア王国の

4400隻の大艦隊は、アメリカの艦隊に一方的に撃破されました。地上でも、ロウリア兵はアメリカとカナダ軍に戦死者を負わせる事無く敗れています」

報告は続く

「なお、アメリカ軍は驚異的な侵攻速度で次々とロウリア軍を撃破し、首都では大混乱となりました。目撃情報では1万トンクラスの重巡洋艦級、5000トンクラスの軽巡洋艦級、大型空母の目撃情報があり、巡洋艦の武装は100ミリから130ミリ程度の主砲と、多銃身の対空砲と思われる兵装が2つしか搭載しておらず、空母の艦載機は混乱の末、確定ではありませんが、ほとんど回転翼機しか見られなかったとのことで、カストロードエンジンらしきプロペラを2〜4発搭載している大型航空機の目撃情報もあります。」

！
何だ?!?おかしな機械式兵器を使う国家はこの世界はムー帝国くらいじゃないのか

まさか、我々同様転移国家なのか?

「何?巡洋艦に空母?大型航空機だど?

何かの誤報ではないのか?機械式航空機や戦闘艦を運用する国はムー帝国くらいで、他国は魔法か、魔導兵器くらいのはずだ。

戦闘機はいたのか?」

「戦闘機などの目撃情報はありません。

巡洋艦や空母などの目撃情報は多数寄せられているため、誤報はあり得ません。

巡洋艦や空母の形態も多少違いはありますが、我々が運用するものと似ているのとこのことです。」

巡洋艦や空母を保有する謎の東方の国家

恐らくここまでの情報だけでは転移国家と断定するのは早いかもしれないが、転移国家で間違い無いだらう。

事実、我々もムー帝国も転移国家なのだから。

転移した国家は共通しているのはどこの国も機械文明だというだ。

「・・・豆鉄砲が1門と多銃身の対空砲か、随分と歪つな旧式の兵器を使うのだな、対空砲に多銃身は弾幕を張るぶんには丁度いいかもしれないが、命中性能が極端に悪い。

そんな兵器を運用しているということは今までの敵は、これで十分だったのだろう。

回転翼機も海軍が開発していたな：大型航空機も4発ということも、もし本当なら部分的には帝国の技術を超えているのかもしれないな。

だが、報告書ではレーダーなどの電子装備がなく、部分的に魔法を使用している可能性もある、か：主砲が1門だけとは随分と平和な世界から来た転移国家だな」

話が続く

「技術がこの世界の国から比べると、隔絶しているな。この国も、我が国のように転移国家だろうが……。砲が1門、旧式の兵装を対空砲に使用している上、レーダーもない、しかも120ミリと豆鉄砲の艦を作るようでは、アメリカとカナダは恐れるに足りんな。多少の被害が出るかもしれないが、大局に影響は無いだらう」

もつと細かい情報はないのか？」

「いえ……なにぶん諜報員の約7割以上がロウリア王国ジン・ハークで消息が途絶えておりなかなか情報が集まりません……」

「7割!? どういうことだ? なぜ、それほど行方不明者が出た?」

「は、はい……恐らくロウリア軍とアメリカ軍の戦いに巻き込まれてしまったのでは? というのが、今の所の見解です。」

「そうか……よし、新たに諜報員を現地に派遣するのだ。」

「了解しました。」

男はその話題に興味を無くす。

「そういえば、レイフォル国艦隊とは、どうなっている」

「国家監査軍が、すでにレイフォル艦隊を補足しています。間もなく戦闘に入る予定ですが、提督は遊び心が過ぎるようで、蛮族に空母はまだ使わず、戦艦1隻のみを差し向

けるそうです」

「1隻だけか……航空戦力がワイバーンや帆船しか持っていない国家には大丈夫だな……ふふふ、1隻が伝説を作るなんて相手は思いもしないだろうな」

ムー大陸西方海上

第2文明圏列強国レイフォル

レイフォル艦隊43隻

艦隊は西へ進んでいた。

突如として現れた第8帝国と名乗る新興国家、周辺の蛮国を統合、制圧し、あろうことか第2文明圏全ての国に宣戦布告してきた野蛮な国、蛮族と放っておいたが、突如レイフォルの西側にある小さな島国、レイフォルの保護国、パガンダ王国を強襲制圧したため、レイフォル皇帝の逆鱗に触れた。

パカンダ王国は圧倒的な戦力で占拠された。

これに皇帝は怒り狂い竜母や100門級戦列艦を含む主力艦隊を差し向け、パガンダ王国沖合いに展開する敵艦隊の殲滅後、パカンダに展開する蛮族を撃滅することを指令された。

艦隊にはレイフォル側にとって最新鋭とも言える艦艇を揃っており、最新型の前装式

大砲を載せた100門級戦列艦、航空戦力を海上で展開することが可能な竜を運用する母艦などを含めた精鋭の艦隊は帆をいっぱい張り、風神の涙と呼ばれる風を起こす魔法具を使用し、速力12ノットの高速（この世界にしては）で、南に向かっていた。

「将軍！偵察中の竜騎士から敵艦発見の報告が来ました！」

偵察中の、竜母から飛び立ったワイバーンロードから魔信を通じて報告があがる。

「敵は1隻のみですが……全長が260mを超え、信じられない大きさの大砲を搭載しているとの事です!!」

将軍バルの眉間にシワがよる。

260? そんな巨大船が一体どうやって浮くのだ? だが、敵艦がどんな敵であろうとも我がレイフォル艦隊に敗北はない!

たった1隻など数の暴力を前に無意味だ!

「艦隊上空に展開する護衛の3騎を残し、残りの竜騎士を敵艦攻撃に向かわせろ! 艦隊進路も敵艦にとれ!」

「はっ!」

波をかき分け、艦隊は進路を敵へ向ける。艦隊の乱れない動き、錬度の高さは第二文明圏の国家として当然であった。

ワイバーンロードも竜母と呼ばれる母船から青空へ向かい、発艦していく。編隊を綺

麗に組み、竜騎士たちは西へ向かった。

グラ・バルカス帝国国家監査軍所属の超弩級戦艦グレードアトラスターは単艦で東に向かっていた。

海上を鋼鉄の要塞が海をかき分け、進む姿はあらゆる人間を圧巻させるほどの雄姿であつた。

船体の甲板には金属製の重厚な46cm砲3連装が3箇所設置され、計9門の主砲は誇らしげに水平線を向く。

重厚な46cm砲の他に小さい砲身を上空へ向け、測定器、見張り番など中央部に沿つて山のような形状をした艦橋。

空へと向けられた3連装高角砲は、ハリネズミのように設置され、高角砲の弾は、グラ・バルカス帝国で最近開発された、近接信管が使用されている。

この近接信管の開発により、砲弾が直撃しなくても、飛行物体が近くに来るだけで砲弾自身の出すレーダー波の反射により、砲弾が破裂し、その破片で飛行物体を撃墜する。数年前までは、帝国でも時限式信管が使用されていたが、この近接信管の導入により、レーダーとの連携によって砲弾の命中率は20倍と、飛躍的に向上した。

主砲の46cm砲はレーダー照準射撃を導入しており、命中精度も向上、威力もこの世界のどの大砲よりも大きい。

主砲の最大飛距離は、40kmも飛翔し、前世界においても、この世界においても、最大最強の戦艦に違いない。

重要区画の装甲は、46cm砲の直撃にも耐えうる装甲となっており、不沈戦艦との異名もある。

グラ・バルカス帝国国家監査軍所属の戦艦、グレードアトラスター艦長、ラクスタルは、前方に広がる海を眺めていた。

「対空レーダーに反応、艦長、レイフォル艦隊から多数の飛行物体がこちらへ向かって来ております」

通信士から報告が入った。

この世界の航空戦力、ワイバーンという竜だ。

先の戦場でパカンダ王国から飛び立ったワイバーン部隊と我が帝国の戦闘機部隊が始めて空戦を行なった結果、一方的な戦いとなり、竜は全滅、こちらには損害なし。

我が国の最新型の艦上戦闘機『アンタレス』に、手も足も出なかつた戦いとなった。

アンタレス型艦上戦闘機は以前の主力機と比べて主翼を複葉から、低翼の一枚が採用され、エンジンも信頼性の高い1000馬力級を誇るものだ。

さらに洗練された機体と、ネジ一本までネジの軽量化を克服した結果、時速550kmという高性能と世界一（前世界基準）の旋回能力を得た。

攻撃性能も20mm機銃と、長年使用された信頼性の高い7.7mm機銃を二門ずつ搭載しており、20mmの弾数が少ないが、申し分ない能力だ。

対してパカンダ王国から飛び立ったワイバーンという竜は、時速230km前後しか出ておらず、勝負にならなかった。

竜の武装と思われる攻撃方法は口から火の弾を出すのと、乗り手が弓矢を放つくらいだ。

いずれも単発であり、弾速が遅く、射程距離も短かった。

あれほどの性能しか出せない航空戦力を運用する国家が中心ならば負けることはないだろう。

近々開発中のロケット兵器も有効に使用することも可能だろう。

「敵機の時速は時速350kmです」

ほう、パカンダ王国のワイバーンよりも100kmほど早いとはな、腐つても列強というわけだな。

まあ、外交官を殺害するような野蛮な世界とはいえ、品種改良くらいは行っているだろう。

だが、それでもこちらの勝利には変わりはない。

「350kmか、少し早いな、これならうちの航空部隊も退屈はしないじゃないか？ はは

はー！」

と笑い、ニヤリと口を歪ませ、通信士へ問いた。

「航空部隊には念のため待機させますか？」

「いや、必要ない……たかだか100km程度しか早くなつた敵に怯えなくてはならない？ 敵は竜だ。あとどれくらいだ？」

「あと8分で、目視圏内に入ります」

よし

敵に、艦攻や、艦爆はいない。しかし、こちらも上空支援は一切無い。

多数の高射砲や、近接信管を装備しているとはいえ、不安はある。

「間もなく見えます」

東の空に、けし粒のように黒い点が見え始める。

速度が遅いため、なかなか大きくなるらない。

ようやく来たか……やはり動きはかなり鈍重なようだ。

「対空戦闘用意！ 各員位置に付け！」

「対空戦闘用意！！！」

戦艦が、本格的な戦闘配備に移行する。

各員が対空銃座、高角砲へ位置につく。

「艦長、まずは対空主砲弾を試してみてはいかがでしょう？」

対空主砲弾は、今まで時限式信管を用いた46cm砲の射撃であったが、現在は新型の近接信管が開発されたことで、優先的に最新型であるこの戦艦へ搭載されている。

近距離戦闘では当然、使用することはできないので、使用するときはある程度距離が必要であった。

あまりにも距離が近いと自分も爆発影響範囲に巻き込まれるからだ。

敵機との距離は、およそ30kmか、相対速度を考慮すれば、そろそろだな……

「よし、第一、第二主砲砲塔へ主砲弾、対空弾装填、発射用意！一斉射撃を行う。砲術士！前方目標群へ照準！」

甲板に出ている乗員は直ちに艦内に避難せよ。」

「了解！」

外部の者が避難し、主砲が動き始める。

前部の2基の主砲（全6門）が、ゆっくりと空を向く。重厚感あふれる動き……。

敵との相対距離を概算で計算し、レーダー照準で、主砲が空を向く

ついに照準が完了し、今かといまかと待っていた。

「発射準備完了しました。」

「よし……第一陣、主砲撃てえええええ……」

6門の砲が一斉に射撃する。

ドドド……

轟音——

!!!!!!!

空気が震える

主砲から発射された爆煙が一瞬景色を赤く染めた。

レイフォル軍竜母機動部隊 攻撃隊 40騎

彼らは敵の巨大艦に攻撃を加えるべく、飛行していた。

強襲に備えるべく、死角を無くす密集体系……20騎が飛行し、その後方上空をさらに20騎が飛行する。

「……………!?!」

誰かが異変に気付く。

空に黒い点が多数見える。

(何だ? あれは)

爆発、轟音……

一瞬のうちに、密集して飛行していた40騎中20騎は、46cm近接信管弾6発の

直撃を受ける。

空に信じられないほど大きな火炎で出来た花が咲く。

突然、前方低空を飛んでいた20騎が消滅する。

混乱……。

!?バカな……一瞬にして20騎が全滅だと!?

「散開しろおおおおお」

これほど大きな爆裂魔法を使用する相手に、密集は危険と判断する。

前方に、巨大な艦が目視範囲に入る。

デカイ！帆が無い！

なんだ、あの巨大な大砲は！

まるで鋼鉄製の要塞のようだ…

「突撃いいいいいいいいいい!!!」

恐怖を振り払い、栄えある列強レイフォル軍の精鋭、ワイバーンロードの部隊は、グラ・バルカス帝国 国家監査軍所属 戦艦グレードアトラスターに向かっていた。

すると目の前の巨大な艦から多数の煙が出ると光弾が見えた。その数は圧倒的な弾幕であった。

「量が……。多すぎる!!!!!!」

!!!!!!

わあ！

蛮族どもが：いったいどんな不意打ちで攻撃したというのだ？大量の爆裂魔法を空中で爆発させた？だが、この借りは大きいぞ：

「敵艦隊間も無く、射程圏内に入ります。」

敵航空戦力を全滅させたのち敵艦隊との会敵を待っていると通信士から連絡が入った。

「よし、射程距離ではあるが、まだ有効射程範囲ではないな？なら命中率は悪いはずだ。そうだな：通信士、敵の大砲は2kmほどしか射程範囲はないんだな？」

「はい、間違いありません。ただ、列強を名乗るだけあって、砲弾はきちんと炸裂します。球形砲弾ではありません。ただ、火薬と違う原理で炸裂するらしいのですが、詳細は良く解っていません。威力は、黒色火薬レベルの爆発です」

「・・・我々よりも、100年以上文明が遅れているな……。我々を蛮族と思って見下しているようだが：。敵の指揮官が哀れだよ。」

「ほぼ命中距離の、5kmまで近づいてから横を向け、全砲門にて敵を討つ。指揮所は射撃管制を行い、的が重複しないようきちんと振り分ける。」

各主砲、副砲で、レーダー照準射撃を実施せよ」
命令は下された。

將軍バル配下のレイフォル艦隊43隻は、風神の涙を使用し、帆をいっぱい張り、最高速度でグラ・バルカス帝国の戦艦、グレードアトラスターに向かつていった。

ワイバーンロードからの位置情報から敵艦の現在地を割り出し、進む。

「間もなく敵艦が見えてきます」

バルは目を見開き、水平線を睨む。

おのれ・・・レイフォルのワイバーン部隊を全滅させるとはいつたいどんな卑劣な手法で葬ったというのだ・・・

だが、そんなことはいいい、いかなる敵艦であろうと撃滅には変わりはない！

「見えたっ！」

!!!報告よりも、ずいぶんと位置情報として見るに、近くに見える。

遠近感が狂うほど敵艦は大きい。

しかし、300年無敗を誇ったレイフォル艦隊、100門級戦列艦を含む43隻にかかれば、いかに大きかろうと、1隻ではどうにもならない。

艦隊は、砲艦を全面的に押し出し、横1列に並んで進む。

おそらく敵艦は我々を甘く見ているためにたった1隻しか来なかったようだが、そんなことを無駄であると思ひ知らせてやろう…

「我が国の精鋭兵が扱う、炸裂式魔法が付与された大砲の弾の味をしつかりと味わってもらおう」

艦隊は、帆いっぱい風を受け、海を割って突き進む。

敵巨大艦までの距離、あと6 km

敵艦が旋廻し、横を向き、こちらに腹を見せる。

艦に3箇所付いている巨大な砲塔、そして艦尾に1箇所、艦橋横に1箇所付いている2番目に大きな砲塔が旋廻し、砲がこちらを向く。

大きい…！巨大な大砲だ…なぜこちらを…！！？

「ま…まさか、この距離で届くというのか？」

敵艦が煙に包まれる。

「敵艦発砲!!」

「まだ届かんよ、子供だましだ!」

レイフォル艦5隻の前後に水柱が上がる。うち3隻の付近に上がった水柱は、とてつもない高さに達する。

「な……なんという威力!」

冷汗

「もうこんなに近くまで砲撃が補正されているというのかあっ！」

敵の副砲が再度噴煙をあげる。

装填が早い!!!

さらに、2隻の戦列艦の横に水柱が上がる。

「!!戦列艦ガオフォースに被弾!!!」

80門級戦列艦ガオフォーに放たれた3発の副砲のうち、1発が被弾する。

「か……………」

戦列艦に着弾した15cmの副砲の弾は、戦列艦ガオフォースの対魔弾鉄鋼式装甲を易々と突き破り、運の悪い事に、弾薬室で爆発した。

ドーーーーーン

黒煙が上がる

「戦列艦ガオフォース轟沈!!!」

「なに!!!…………おのれえ!!艦隊は全速で前進せよ!」

再び敵の主砲が放たれる。

今度は3隻が狙われたようだ。水柱が上がり、内2隻は煙が混じっていた。

大きな水が引いた後、煙が混じった2隻の姿は海上にはなかった。

ていた。

自分以外の全ての艦は撃沈された。

敵艦は、現在自分の艦の周囲を旋廻しつつ、全砲門をこちらに向けている。

「……降参の旗をあげよ」

命令が下る

戦列艦ホーリーのマストに、この世界で降伏を宣言するための、降伏旗が掲げられる。

「敵艦、近づきます」

巨大戦艦が近づいてきた。

「おのれえ。おのれえ。蛮族どもが近づいてきたら、全砲門をもって、敵巨大戦艦を撃沈

せよ!!」

「えい!!：しかし、降伏後に攻撃など……。栄えあるレイフォルの名を汚します!」

参謀が反対する。

パーリン……ドサツ……

「たつた今敵艦からの発砲により、参謀は戦死した……。解つたな」

將軍バルは、参謀を射殺し、撃つた銃を捨てると艦長に迫る。

「なーに、心配するな。我が方の炸裂主砲を、至近距離で食らえば、浮かんでいられる船など、この世にはない……。どうせ敵は一隻しかない。誰もしゃべらなければ、こ

煙が晴れる。

敵の…旋回砲塔が……ゆっくりと……こちらに向かって……回転し始める……。

「敵艦健在!!!」

通信士の悲鳴のような声があがる。

「ま……全く効いていないのか？………ば、化け物めえええええええ」

戦艦グレードアトラスターの46cm砲9門の至近距離からの一斉射により、レイフォル艦隊最後の戦列艦ホーリーは、この世から消滅した。

「……降参の後に砲撃とは……。列強といっても、この程度か……ちよつとお仕置きが必要なようだな……。残弾は？」

「各砲門70発程度です」

「そうか……。敵の首都は、海に面していたな？」

「はい、ここから東へ350kmほど先ですが……。」

「砲撃でお仕置きだ」

「了解」

翌日、レイフォル国の首都 レイフォリアは、僅か数時間という時間の間で戦艦グ

レードアトラスターの全弾射撃によって、灰燼に帰した。

皇帝は死亡し、軍は降伏、グラ・バルカス帝国は、レイフォルを自国領に編入、入植が始まることとなった。

戦艦グレードアトラスターは、たった1艦でレイフォル艦隊を撃滅し、その足で、レイフォル首都 レイフォリアを焼き尽くし、降伏に追い込んだ世界最大最強の船として、恐れられる事となり、伝説となる。

この世界の歴史にとって、それは激震となった。

18皇族が住まう国家

海を進む輪形陣の艦隊陣形で進む艦隊があつた

中央には大型客船が2隻、その周りにはアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦4隻、ビアトリクス級駆逐艦4隻と合計10隻の編成で航行していた。

この艦隊は第三文明圏の2カ国と国交を締結させるための外交団を乗せた遠征艦隊であつた。

本来であれば、護衛のみであれば沿岸警備隊か、2隻ほどの駆逐艦で十分ではあるが、異世界の事情から万一を考慮し、アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦と最新鋭のビアトリクス級駆逐艦8隻も同行していた。

ビアトリクス級駆逐艦は2027年度以降に就役した新型ミサイル駆逐艦、本級はズムウォルト級駆逐艦が実質的に失敗作であること認識していたアメリカ海軍や政府は拡張方針である対中戦に備え、設計から更に発展させた結果ビアトリクス級はデザインこそ似ているが、中身が全く異なるミサイル駆逐艦となつた。

ズムウォルトは本来の求めた性能は自分に迫るあらゆる攻撃目標をデータリンクと圧倒的ミサイルで防衛し、主砲と対地ミサイルによる地上支援、攻撃を行うことこそが

コンセプトであった

しかし、改装されたコンセプトは対地攻撃を主眼とし、あらゆる物量攻撃に対し適切な対処をするために艦隊防空、対潜、対艦攻撃を可能とするミサイルを搭載、ステルス性を活かした先制攻撃を目的とした。

そのため、最も問題であったTSCEI (Total Ship Computing Environment Infrastructure) 次世代アメリカ海軍戦艦の標準型戦闘システムの技術的問題は2026年、AI技術向上や画期的戦術システムの開発によってコストが従来よりも下がったことで実現できたというのも実現可能となったポイントと言える。

他にノースロップ・グラマン社が開発していたMFEW (Multi Function Electronic Warfare) システムも搭載された。

搭載する兵装も

AGS 155mm砲2基、LaWS2基、Mk. 57 VLS、スタンダードSM-2、ミサイル防衛用のスタンダードSM-3、対地攻撃用トマホーク、対潜戦用の垂直発射式アスロック (VLA)、20mm機関砲2基、無人機電子妨害用ミサイルECMなどアーレイ・バーク級駆逐艦とは全く異なった駆逐艦となった。

一言で言えばアーレイ・バーク級駆逐艦は艦隊防空を主任務とする場合、ピアトリク

ス級駆逐艦は1隻で物量攻撃や対地・対艦攻撃を主任務とする艦艇と言えた。

さらに次々と登場する新型無人機に対し、自由電子レーザー兵器も搭載している。

そんな最新鋭艦隊でまとめられた理由には、外交においてロウリアのように舐められないようにわざと最新鋭艦を多く配置した

新世界では魔法やドラゴン、海獣なども存在する中ではあらゆる不測の事態に対処できるように過剰なまでに配置したとも背景にある。

客船の中ではそれぞれ担当する外交官たちや政府関係者が乗船しており、それぞれで話していた。

「まったくわざわざ外交を結ぶだけで我が軍の最新鋭艦を引つ張り出すとはな……」

「そうですね？ 私は我が国の最高のボディガードがいて満足しているがね……それにビアトリクス級は確かに最新鋭ではあるが、我が軍にはもつと新型艦があるはずだが？ 何でしたかな、クリミ……なんとかと言う戦闘艦だったな？」

「ヘンリー外交官、あの戦闘艦のことは機密ですよ

確かにこの世界でどんな事態が起きるのか、予測不能ですが、相手は中世の国家ですぞ？ 過剰と思いますがな」

「おやおや、君がそんなことを言うとはね、だが、今回の相手は文明圏の中でも列強国というらしいじゃないか

それなら我が国を舐められないようにしっかりと国交を安全に締結させるためには必要なことです。

この世界の列強も科学技術は進歩しているようですが、我が国から見ればまだまだです。

同時にこの世界は野蛮な国が多すぎる。

それなら相手と友好的に掴めるか、わからない状態で何も準備をしていないで進めるのは危険だろ？」

政府関係者はそのことを聞くと沈黙していたが、それでも少し不満があった。

相手と国交を結ぶのに砲艦外交マネなんてせずとも：

なんだか、歴史が150年前に戻ったようだ

しかし、この方針が後に間違っていないことが後に証明されるのであった。

当初、砲艦外交に議会は反対する声も上がっていたが、ロウリアの事例もしかり外交官の安全、あらゆる事態に対応するために必要性が高まったため議決された

現在、第3文明圏の中でも列強国であるパーパルディア皇国とそこから東側約210 kmの位置に、縦150 km、厚さ60 kmの、まが玉を逆にしたような形の島国、フェン王国だ。

アメリカ合衆国から8900Km位置する国家

アメリカも列強国との繋がりを求めるためにパーパルディア皇国へ外交団を派遣した。

しかし、彼らの努力がある出来事で全て水の泡となるのはフェン王国にフェン王国外交団が着いてしばらくしてからだ。

パーパルディア外交団が目的地で到着するとそのままパーパルディア皇国の外務局へ馬車で向かった。

外交団たちは初めて乗る馬車にお尻を痛めながら到着するとそこにはイタリアのローマにあるような豪華な建造物が並んでいた。

パーパルディア皇国の外務局は3つの種類に分かれ具体的には

第1外務局は、皇宮の内部に位置し、第3文明圏の5大列強国のみを相手として外交を行う。

対外関係に細心の注意が必要であり、高度な政治判断が求められ、勤務員はエリート中のエリートである。

第2外務局は、皇宮の外側に位置し、列強国以外の文明圏に属する国家を相手にする。国力を後ろ盾にし、無理な要求を押しつつ、国益をいかに引き出すかが求められる。

列強保護国もいるため、一方的に高圧的になるわけにもいかず、高度な判断が求められる。

エリートが属する。

第3外務局は文明圏以外の国、いわゆる蛮国相手の仕事である。

いかに高圧的に出て、相手から絞りとれるかが試される。

蛮国は量が多いため、外務局人員の6割がここに属する。

独自の皇国監査軍と呼ばれる軍に命じ、懲罰行動を行わせる権限を有する。

外務局というものは大きな権限が与えられた部署でもあった。

ある一室ではある男が怒鳴り散らしていた。

「皇国監査軍東洋艦隊はどうなっている!!!出港したのだろうな!」

「は、はい…只今出港したと連絡が…」

「よし、フェン王国に目にも物を見せてやるのだ、あの国は我が国の『慈悲』とも言える租借案を蹴り、このパールディアの顔へ泥を塗ったのだ、絶対に成功させろ、いいな?」

「は、はい!!!」

外交団も到着すると第3外務局へ誘導され、内容を伝えると受付担当官が出てきて、外交官と話し合いをしていた。

「無理ですね、局長様は只今別件で忙しいですので、手続きが済むまでお待ちください。それにあなたの方の要求内容を拝見しましたが、あまりにも高度と言いますか、ハードルの高い内容が記載されておりますので」

「どういうことですか?」

「例えばあなたは……対等的通商条約や法外法権を認めないというのは難しいものですから」

「それがなぜ、難しいのですか? 国と国の間では通常のことでは?」

「……我が国は列強国ですよ? それを……存知で言っておられるのですか?」

受付担当官はため息を吐き、態度を強めた

「いいですか、今、世界において、治外法権を認めないことを我々が了承している国は、4カ国のみです。つまり、列強国のみなのです」

話は続く

「列強国でない、まして文明圏にも属していない、国際常識すら理解していないあなた方の国が、治外法権を認めない、対等の国として扱えとか、列強国のごとき要求をしてい

る。∴課長はあと2週間くらい後には空きますので、あと2週間待つて下さい。ただ、私としては、これはかなりハードルが高いと言わざるを得ませんので考え直すことをお勧めしますよ」

これにアメリカ側は表情には出さないが、内心怒っているものもいた

「そうですね、では我々はまた、2週間後ほどそちらへ出向きます。」

と言うと外交団たちは客船へ帰っていったのだ。

「・・・なんですかね、あの態度は」

「分かっている、だが、これでも中世のヨーロッパと変わらない世界では仕方のないことだ。耐えろ……」

場所は変わって、フェン王国外交団ではフェン王国、首都アモノキに到着した町の風景や天守閣を備える城に懐かしさを覚えていた。

「オーマイガ……まさかジャパンと同じ文化を持つ国家と出会えるとは」

「oh……タイムスリップしたみたいだ」

「こいつはジャパニーズのEHIMEじゃないか！」

外交官たちが日本の江戸時代のような風景に魅了されているのと同時にフェン王国

でも話題となっていた

フエン王国外交団を護衛するのはアーレイ・バーク級駆逐艦2隻とビアトリクス級駆逐艦3隻だからだ。

上空にはドラゴンも飛んでいて、見たことのない巨大な船に興奮している者もいた。外交官たちはそのまま小型ボートで港まで行き、城まで向かった。

今日ではフエン王国が5年に1回開催する「軍祭」が行われるため、その親善として、3騎の竜が上空を飛ぶ。

軍祭は、文明圏外の各国の武官も多数参加し、武技を競い、自慢の装備を見せる。各国の、軍事力の高さを見せる事により、他国をけん制する意味合いもある。

文明圏の国も呼びたいが、「蛮国の祭りには興味が無い」のが本音らしく、「力の差を見せ付けるまでもない」といった考えもある。

上空を飛んでいた風竜に乗る兵士は眼下に見える巨大な灰色の船5隻と、巨大な黒と白の船が見える。

この艦隊はどうやら東の国、アメリカとかと言う名前の新興国家らしい。周辺の他国もその巨大な船に圧巻された。

「おぼろしくな…」

相棒の風竜が話しかけてくる。

風竜は知能が高い。

「確かに、今日は快晴だ」

太陽がまぶしく、雲の少ない日だった。

「いや、違う。太陽ではない。あの下の灰色の船から、放射線状の光が様々な方向に高速で照射されているのだ」

「船から光？何も見えないが」

「フツ……人間には見えまい。我々が遠くの同胞と会話をする際に使用する光、人間にとっては、不可視の光だ。何かが飛んでいるか、確認も出来る。その光に似ている」

「飛行竜が判るのか？どのくらい遠くまで？」

「個体差がある。ワシは120kmくらい先まで判る。あの船の出している光は、ワシのそれより遥かに強く、そして光が収束している」

まさか……。

「まさか、あの船は、遠くの船と魔通信以外の方法で通信したり、見えない場所を飛んでいる竜を見ることが出来るのか？」

「あそこにいる6隻すべてがそのようだな……それにどうやらあのヘンテコな形をした船はワシが出す光を吸収しているようだ、あの艦隊は魔法ではなく何か別のもので動いているようだ。」

「す、すごいことだね……」

「ああ……とんでもない国なのかもな」

「アメリカか……すごい国だ」

上空では、このような会話が行われていた。

アメリカ海軍ビアトリクス級駆逐艦マイケル・モンソーア

「おいまじかよ……あのドラゴンで間違いないのか？」

「はい、間違いありません……生物からレーダー波に似た電波を発信させることなんてあり得ませんが、あのドラゴンから来ている電波は航空機の電子機器にも通用します。」

「信じられんな……」

「これは帰ったら報告しなければならぬことが増えましたね」

異世界で人工的ではなく、生物から電波を発信させるレーダー機能を備えていることで、アメリカ軍上層部はレーダー機能を備えたドラゴンを大陸国や文明圏列強などが大量に配備している可能性があるとして、魔法戦術を考慮した対異世界戦術を強化させるのと同時にステルスミサイルや対魔術戦闘兵器開発が進められるのだった。

一方フェン王城

「劍王、アメリカという国が国交を開くために交渉したいと参っております件はいかがいたしましょうか？」

通常の執務中、王の側近である劍豪モトムが話しかける。

「アメリカ？ああ、クワトイネ公国の大使から情報のあつた、ロデニウス大陸の東方にある新興国家か。あの辺は、小さな群島で、海流も乱れていた…。」

各島の集落が集まって国でも作ったのか？」

劍王は、小さな国をイメージしていた。

「いえ…それが…。アメリカが言うには、アメリカだけで人口3億8千万人いるそうです…。」

「は？…今何と言った…。」

「あ、アメリカの外交官からの情報ではアメリカ合衆国の人口3億8千万人はいるとのことです…。」

「3億?!?3億8万人?!?そんなバカなことがあるか!!!」

もし、それが本当なら世界の半分以上の人口が存在していることになるぞ!!!」

劍王は全く信じていない。

「それが……クワトイネ公国経由の情報でも、同様の情報があります。両国とも、すでに国交を結んでおり、すでにそこにあるのは群島ではなく、一つの巨大な大陸から、列強をも超える超文明を実現していると……。」

「……列強を超えるのは、言い過ぎとしても、クワトイネ公国がそこまで褒めるのであれば、それなりの国家なのだろうかもな

剣王と他の側近はアメリカの外交官と会うことにした。

「これはかつての日本の数百年前のような光景だな……」

「セオドア外交官、これは身を生き締めないといけませんな……」

「ああ、精神意識も日本人と同じと言うのなら付き合いやすい、そうであることを祈るか……」

今では同盟国日本も一緒に転移しなかったが、セオドア個人としては日本も一緒に転移して欲しかったと思っていた。

日本はアメリカに依存していた分、アメリカも日本に依存していた。

例えば日本製の精密機械は一部にも米国の生産される電子部品に使用されている。

アメリカ人にも日本文化（主にアニメ・漫画・ゲームなど）を積極的に取り入れる現代のジャポニズムも2023年から大流行した、一部の国民は日本も一緒に転移しな

かったことに絶望したのもいる。

当然、転移した外国人の中にも日本人も絶望した人も多くいた。

この国にはそんな日本に存在する文化と非常に酷似しており、全体の文明力は低い。だが、国民の精神レベルは高く、街中でも例え貧しくても、挨拶するほど礼儀が正しい。

そんな国民性を見て、外交団は日本のような印象を抱いていた。

「剣王が入られます」

声があがる。外交官は立ち上がって礼をする。

「そなた達が、アメリカ合衆国の使者か」

剣王は浴衣のようなデザインの服装と身体がピタリと揺れてない様子

(あの王…重心が全く乱れていない上、常に精神を尖らせている…かなりできるな…)

とボディーガードとして付いていた海兵隊アレン上等兵は思った。

「はい…貴国と国交を開設したく思い、参りました。ご挨拶として、我が国の送り品をご覧下さい」

剣王の前に並べられたアメリカの陶磁器や高級服、超高級品の指輪・ネックレス、ワ

イン

劍王は今まで見たことのない正確に作られた陶磁器や高級貴金属などに興味を示し、ヨーロッパの有名なマイセン陶磁器にも劣らない品質を持つティーカップや皿を見ると魅了された。

ティーカップや皿、ガラス製品には動植物や建造物の絵が描かれ、陶土の色や釉薬は非常に綺麗な白色、青磁などが含まれていた。

余談だが、アメリカにはヨーロッパから入った文化の中で陶芸はアメリカで採掘される土などを使用した独自のアメリカの陶磁器も存在する。

「これは美しい……」

事前に聞いた、アメリカからの提示条件と、アメリカからの書類に間違い無いか確認する。

「失礼ながら、私はあなた方の国、アメリカを良く知らない」

話が続く

「アメリカからの提案、これはあなた方の言う事が本当ならば、すさまじい国力を持つ国と対等な関係が築けるし、夢としか思えない技術も手に入る。我が国としては、申し分ない」

「それでは……」

外交官の顔が明るくなる。

これで国交が無事締結される可能性が高いからだ。
それを遮って剣王は話す。

「しかし、貴国が国ごと転移する話や巨大な建造物どれも信じがたいものばかりだ。」

「…それは、我が国に使者を派遣していただければ」

「いや、我が目で見て確かめたい」

「え?…と、言っていますと?」

「貴国の实力を見て見たい」

!!!???

「ちようど確か港に水軍の船があつたな?今年我が国の水軍から廃船が4隻ほど出る。
その4隻を標的艦として攻撃して見て欲しいのだ。」

剣王は暗に实力を見せろと言ってきた。

これにアメリカ側はまさか相手から「实力を見せろ」と言われるとは思っておらず、外交としてはどうだろうか?と思っていたが、護衛として連れてきたアーレイ・バーク級やビアトリクス級を見せるのに手っ取り早いと手段と考慮し、承諾されたのだった。

19 迫る悪意

フエン王国首都アマノキ沖

そこにはアメリカのフエン王国外交団を護衛する5隻の駆逐艦が浮かんでいた。

「あれがアメリカの水軍か…マストも大砲も見えない船もあるがあれで戦えるのか？」

剣王シハンは直角的なデザインを持つビアトリクス級に対し、巨大な四角い形状に興味を抱いていたが戦闘能力があるとは思えなかった。

剣王だけではなく側近や軍事関係者も同じ印象を抱いており、むしろアーレイバーク級駆逐艦の方が城のように見え、強く見えた

本当はビアトリクス級の方が戦闘能力は上だが、現代兵器というものを知らないフエン王国側は何も口が出なかった。

「いやはや、クワトイネ公国から事前情報として聞いてはいましたが、これほどの大きさの金属で出来た船が海に浮かんでいるとは…。」

騎士長マグレブが同意する。

「私も数回、パールディア皇国に行った事がありますが、これほどの大きさの船は見た事がありません。」

「剣王、そろそろ我が国の廃船に対するアメリカの艦からの攻撃が始まります。」

剣王シハン直々に、アメリカの外交団に頼んだ

「是非ともアメリカ軍の力を見せてほしい」

その回答が今出る。

駆逐艦のうち四角いデザインを持つ船の艦首に付いている四角い箱が動く

「なんだ？あの箱は……？」

と、思つて片方だけの望遠鏡で観察する

アメリカの船から煙が吹き出る、僅かな時間の後、音が聞こえる。

ダン……ダン……ダン……ダン……

4回

直後、標的船は猛烈な爆発を起こし、水飛沫をあげ、船の残骸が空を舞う。

標的船4隻は、爆散、轟沈した。

「な!? どうやって攻撃したというのだ!? ……大砲らしきものは見えなかったぞ……」

「わ、私もです……」

剣王シハン以下フェン王国の中枢は、自分たちの攻撃概念とかけ離れた威力を目の当

たりにし、唾然としていた。

1隻からの攻撃で、4隻をあつさり沈める。しかも、とてつもない速さの連続攻撃で沈めた。列強。パールディア皇国でも、そんな芸当は出来ない事をここにいる誰もが理解している。

「ふふふ……すぐにでも、アメリカと国交を開設する準備に採りかかろう。不可侵条約はもちろん、出来れば安全保障条約も取り付けたいな……。」

剣王は満面の笑みで宣言した。

剣王たちと外交団で準備を進めている間、イージス艦ジョージ・ロブソンのモニターを見ている乗員が西から近づく飛行物体の接近に気づいた。

飛行物体は350kmほどで、20機接近してきた。

「これは……CICから艦橋へ対空レーダー探知、西方から接近してくる飛行目標を探知。時速350K m、20機ほどです。」

「西は確かパールディア皇国という国があったな」

「はい」

「フェン王国の軍祭に招かれているのか？」

「わかりません、確認を取ります。」

その飛行物体はフェン王国首都アマノキ上空に至ったが、王国からの返答は無かつ

た。

パーパルディア王国 皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード部隊20騎は、フェン王国に懲罰的攻撃を加えるために、首都アマノキ上空に来ていた。

軍祭には文明圏外の各国武官がいる。その目前で、皇国に逆らった愚か者の国の末路はどうなるか知らしめるため、あえてこの祭りに合わせて攻撃の日が決定されていた。

これで、各国は皇国の力と恐ろしさを再認識することだろう。そして逆らう者の末路、逆らった国に関わっただけでも被害が出ることを知らしめる。

ガハラ神国の風竜3騎も首都上空を飛行している。

風竜が皇国のワイバーンロードを見ると、ワイバーンロードは、不良に睨まれた気の弱い男のように、風竜から目を逸らす。

「ガハラの民には、構うな。フェン王城と、そうだな…あの四角い船に攻撃を加えろ!!」ワイバーンロードは上空で散開した。

複数のワイバーンロードはアメリカ海軍のビートルクス級に向けて急降下を開始する。

西側から飛行してきた、ワイバーンと呼ばれていた竜は、隊を2つに分けフェン王国王城に向け、急降下を始めた。

「おいおい……何のデモンストレーションだ?」

「誰もが疑問に思った時、急降下していた竜が口を開け、口内に火球が形成され始める。」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
次の瞬間、10騎のワイバーンロードから放たれた火球は、王城の最上階に着弾し、木製の

王城は炎上を始める。

「1・ジョージ・ロブソンへ謎の飛行物体が王城へ突如攻撃を加えた!他国か武装勢力と
思われる!厳戒態勢!」

「了解!機関始動!戦闘システムを攻撃モードへ」

『イエッサー!』

「!!!本艦にワイバーン10騎が急降下中!!!」

「イービス艦ジョージ・ロブソンの艦橋で悲鳴に似た報告があがる。

「いかんつ!迎撃用意!!!」

「了解!対空戦闘用意!」

次の瞬間、パーパルディア皇国の皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード10騎

は、直下約500m付近にイージス艦ジョージ・ロブソンに向かい、導力火炎弾を放出した。

「迎撃するぞ！目標群β！LaWS起動！」

「了解！LaWS迎撃開始！」

ジョージ・ロブソンの後部に搭載しているLaWSが装甲板から顔を出し、頭上から降り注ぐ火炎弾へ照準する

次々と降り注ぐ火炎弾から直撃コースの目標をTSCEIが瞬時に選別し、レーザーを照射した。

レーザーは現代のような目に見えない光線ではなく、船から一瞬光の光線が放出された。

放出されたレーザーは火炎弾に見事に命中し、全てをあっという間に迎撃した。

レーザーエネルギーと火炎弾が持つエネルギーが衝突したため赤い色の光となって消える。

「全ての火炎弾、迎撃成功しました！」

「よし、頭上で飛ぶじゃじゃ馬どもをミンチにしてやるぞ！奴らに海軍式の礼を見せてやろうじゃないか！」

「イエッサー!!!」

すると攻撃目標は瞬時に他の艦にもデータリンクとして情報が伝わり、それぞれが攻撃目標を選択する。

「何!!迎撃したと!!?」

急降下から、水平飛行に移行したワイバーンロード10騎は、必中タイミングで撃つたにもかかわらず、そのほとんどを謎の光線が出たと思ったら、迎撃した。

「も、もう一度だ!大砲もマストも付いていない凶体がデカイ層船を沈めるぞ!全騎突撃!」

ともう一度攻撃するためにワイバーンロードは再び上空から急降下した。

各駆逐艦は、護衛艦隊へ攻撃された時点で、「敵」として認識し、攻撃へ移る。

イージス艦の主砲が上空に展開する「敵」へ向く。

ビートルクス級駆逐艦からも155mm主砲もステルスモードから解除し、それぞれに照準される。

各駆逐艦的が重ならないように、振り分けられる。

FCS射撃管制システムにより、敵との相対速度が計算され、飛行する敵の未来位置

で迎撃できるよう、寸分違わず、主砲の砲身が上空を向く。

次の瞬間、各駆逐艦の主砲が炸裂し、上空にいたワイバーンロードはすべて消滅した。その間僅か5秒足らずでほぼ神業のように20騎のワイバーンロードは竜騎士ごと爆発した。

空に20個の黒い花が咲く

「……………」

剣王シハン及びその側近たちは、開いた口が塞がらなかつた。

ワイバーンロードは、間違いなくパーパルディア皇国のものだろう。

我が国が、ワイバーンロードを追い払おうと思つたら、至難の技だ。

1騎に対して一個武士団でも不足している。そもそも、奴らは鱗が硬く、弓を通さない。

バリスタを不意打ちで直撃させるか、我が国に伝わる伝説の剛弓、「ベルセルクアロー」を使うしか無いが、ベルセルクアローは弓本体が硬すぎて、国に3名ほどしか使える者はいない。

戦闘態勢にあるワイバーンロードを仕留めるのは、事実上不可能に近い。

文明圏外の国で、1騎でもワイバーンロードを落とすことが出来れば、国として世界に誇れる。

我が国は、ワイバーンロードを叩き落すことが出来るほど精強であると…。

それを、アメリカは、いともあっさり、怪我をして動けなくなつたハエを踏み潰すかのように、自分は怪我を負わず、列強の精鋭、ワイバーンロード竜騎士隊を20騎も叩き落してしまった。

アメリカは文明圏外の武官が集まっている軍祭で、各国武官の目の前で、各国が恐れる、列強パーパルディア皇国の精鋭ワイバーンロード部隊を赤子の手をひねるように、叩き落とした。

歴史が動く、世界が変わる予感がする。

ワイバーンロードは、おそらく自分たち、フェン王国への懲罰的攻撃に来ていたのだろう。

アメリカをこの紛争に巻き込めたのは、天運ではなからうか…。

「は、はは、ははは…」

剣王シハンは、笑いながら燃え盛る自分の城を眺めていた。

神は私たちを見捨ててなかつた…これなら勝てる…！

『すごいものだな…あの船は…』

風竜は感嘆の声をあげる。

『あの船から、トカゲどもに、人間にとっては不可視の光を浴びせ、船の砲はそこから反射する光の方向を向き、トカゲどもの飛行する未来位置に向かって撃っている…あの光線も我らが出す火炎弾よりも高温で早い…あの船は、見た目以上の技術の塊だな』

「そ…そうなのか？ そんなにすごいのか!？」

『古の魔法帝国の伝承にある、対空魔船があるが、あの船はそれ以上なのかもしれないな』

「え？ そんなにすごいのか…。帰ったら報告書が大変だな」

『特にあの四角い船からは不可視の光はあの2隻の城のような船よりも強く、正確だ…あんなことは我らでもとても不可能だ』

「風竜でも不可能なことを人間が!？」

『どうやら、想像を絶する船を作り出したようだ…あのアメリカとやらは…しかもあの艦隊からは魔力が一切感じられなかった』

「!？」

スサノウは絶句する

魔法を一切使わないで正確に対空目標を撃墜することなんて神でもない限り無理だ

!

一体何者だ、あのアメリカという国は…

『魔力を一切使わず、技術のみで不可視の光を当てるとはあの国に興味が湧くな…』
上空では、ガハラ神国の風竜騎士団長スサノウと風竜の間で、そんな会話が行われていた。

パーパルディア皇国のワイバーンロード部隊をあつさりと片付けたアメリカ海軍の活躍を見て、文明圏に属さず、軍祭に参加した各国武官は放心状態となっていた。

「な…なんだ!!!あの凄まじい魔導船は!!!」

「なんとという恐ろしい力だ!!常軌を逸しているぞ!!」

「あの列強ワイバーンロードをあつさりと叩き落とした!!いったい…何なのだ!あの船たちは!!」

「アメリカという新興国家らしいぞ」

「まさか…古の魔帝の流れを汲む者たちでは?」

海岸から海を眺めていた文明圏外の国々の武官たちは、自分たちの常識とかけ離れた力を持つ灰色の巨大船に恐怖を覚えると共に、味方に引き入れる事は出来ないかを考え始めていた。

パーパルディア皇国を遥かに超える力を…もしかしたら、あの船の国は持っているのかもしれない。

フエン王国の軍際に来たのであれば、フエンとは友好関係にあるという事だ。

フエン王国と良好な関係を築き、あの船の国と仲良くなれば、もしかしたらパーパルディア皇国の属国化を防げるかもしれない。

奴隸としての国民の差出や、領土の献上等、もしかしたら…。

フエン王国がパーパルディアの領土租借案を蹴った時は、フエンが焼き尽くされるのではないかとも思ったが、あの船の国と友好関係にあるのであれば、フエンが強気になるのも理解できる。

後にフエン沖海戦と言われた海戦後、文明圏外の国を中心に、アメリカへ、旧ロウリア領バートニア州へ多数訪れることになった。

パーパルディア皇国、皇国監査軍東洋艦隊竜騎士レクマイア

フエン王国懲罰の命令は、簡単な仕事だと思っていた。

栄えある列強パーパルディア皇国のワイバーンロード部隊にかかれば、フエンのような蛮族の国など、自分一騎で一騎士団を相手にしてもおつりが来る。

軍祭などという、各国武官や船まで招いての祭りが行われているのであれば、蛮族どもにパーパルディアの力を再認識させる機会にもなる。

フエン国という蛮国に、パーパルディアに反目する国の祭りに参加していると、痛い目を見るということを解らせるために、目立つ四角い船を狙った。

しかし、その船は必中距離で放った導力火炎弾のほとんども、見たことがない光線で迎撃してきた…

その光は弓をも跳ね返すワイバーンロードの硬い鱗を引き裂き、相棒に大きな傷を負わせた。

自分は海へ落下し、海上から上空を見上げたところ、仲間たちはさらなる悲劇にみまわれていた。

仲間たちは、他の超巨大船から放たれた大砲によって、木っ端微塵に吹き飛ばされていた。

大砲が空を飛ぶ物に当たるということも、理解しがたい現実であるし、この世で自分たちの敵となりうる存在は、列強しか無いと思っていたが、自分たちがなすすべもなく破れた相手に興味も持った。

海に浮いていると巨大な船から黒いボートが出てきて、それがものすごい速度で自分に近づいた後、自分は降伏し、何かを投げてください、そのまま救助された。

「竜騎士隊との通信が途絶しました」

艦隊に衝撃が走る。

「いったい何があつた……。」

提督ポクトアールは嘆きたくなつた。いやな予感がする……。しかし、これは第3外務局長カイオスの命令である。

国家の威信をかけた命令である。

実行しない訳にはいかなかつた。

皇国監査軍東洋艦隊22隻は、フエン王国へ懲罰を加え、今回ワイバーンロードを倒した皇国にたてつく者に対し、各国武官の前で滅するため、風神の涙を使用し、帆をいっばいに張り、東へ向かつた。

アメリカへ襲いかかる戦火は広がろうとしていた。

そんなことも知らずパーパルディア皇国へ外交団護衛艦として回されていた艦隊は駆逐艦ばかりであつたが、水上艦だけではない。

皇国監査軍東洋艦隊の後を追う海底に潜む巨大な鉄の塊

それは鋼鉄製の一つのスクリュウで進む、海中に潜める機械の怪物が迫るのであつた。

20 フェン軍 VS パーパルディア軍

フェン王国首都アモノキ 待機室

「なんたることだ……」

外交団のセオドアは、突如現れた正体不明の敵勢力に頭を抱えていた。

フェン王国首都アモノキ上空に現れた正体不明の部隊が首都アモノキと護衛艦隊に攻撃を実行、護衛艦隊が殲滅した。

殲滅したことは別に何も問題ではないが、フェン王国のゴタゴタに巻き込まれてしまうことを危惧していた。

突如現れた正体不明の部隊はワイバーンに乗っており、ワイバーンは山賊やそこらの組織が運用できるものではないというのは既に情報として上がってきているからどこかの他国と考えるのが妥当だろう。

アメリカ側として国同士の戦争に巻き込まれ、全力で戦えるほどまだ回復していない上、議会が何というのか、分かったものではない。

下手すれば大統領の政権に響くことになる。

だが、今回起きた出来事は予測できるものではなく、ワイバーンはどうやらワイバーンロードと呼ばれる列強にしか持つていない竜らしい。

つまりワイバーンの方向は西から接近してきたという情報は駆逐艦からでも確認されているところから見て、相手は間違いなくパーパルディア皇国だろう。

パーパルディアは第3文明圏の中で代表される列強国であり、そんな国との交渉が滞っている中でこんな出来事が起きては全てが水の泡となる。

胃が………また、胃腸薬を飲まないと…

こうなれば事態が悪化する前になんとかする必要がある。

しかし事態はかなり悪いものになっており、駆逐艦からの情報ではフェン王国に接近する艦隊を発見したとのこと。

現在、パーパルディア外交団へ回された潜水艦が追跡してくれているらしい。

潜水艦も派遣されているとは驚いたが、この際そんなことはどうでもいい。

事態は切迫していた。

本日の夕方、フェン王国側との会議が予定されていたが、外交団は急遽フェン王国外交部署に連絡を求めた。

フェン王国側は、即時会談に応じた。

来賓室で待つアメリカ外交団、フエン王国は貧しい国ではあるが、外交のための来賓室は、豪華さは無いが、おくゆかしき、趣のある部屋であり、非常に質が高い。

一時して、フエン王国騎士長マグレブが現れた。

「アメリカのみなさま、今回フエン王国を不意打ちしてきた者たちを、真に見事な武技で退治していただいたことに、まずは謝意を申し上げます」

騎士長は深々と頭を下げる。

「いえいえ、我らは攻撃してきた武装勢力を追い払ったわけで、貴国への攻撃を追い払ったではありません。」

セオドアは牽制する。

「ではさつそく、国交開設の事前協議として実務者協議の準備をしたいのですが……。」

フエン王国は、もうアメリカを味方に引き入れたくて、たまらないようだ。

「失礼ですが、貴国は既に戦争状態なのではないのですか？ 状況が変わりましたので、我々の権限だけでは戦争状態にある貴国と、現時点で国交開設の交渉が出来ません。この件はまた本土の方で検討した後に進めましょう。」

「解りました。良い返事を期待しています。ただ一つ、これだけは、心に留めおいて下さい。

あなた方があっさりとは片付けた部隊は、第3文明圏の国、しかも列強パーパルディア皇国です。

我が国は、パーパルディアから土地の献上という一方的な要求をされ、それを拒否しました。それだけで襲つて来たような国です。

過去に、我々のようにパーパルディアに懲罰的攻撃を加えられた国がありました。その国は、敵のワイバーンロードに対し、不意打ちで竜騎士を狙い、殺しました。

かの国は、パーパルディア皇国に攻め滅ぼされ、国民は、反抗的な者はすべて処刑し、その他の全ての国民は奴隷として、各国に売られていきました。王族は、親戚縁者すべて皆殺しとなり、王城前に串刺しでさらされました。

パーパルディア皇国、列強というのは、強いプライドを持った国というのを、お忘れなさらぬようお願いいたします。」

ぞつとするような話を聞いた後、外交団は、王城から港に向かった。

フェン王国の首都、アマノキの港は、文明圏外の各国の戦船が整然と停泊しており、壮観な風景であつた。

しかし、その場に駆逐艦の姿は無い。

文明圏外の首都の港とはいえ、駆逐艦を停泊させるほどの水深は確保出来ないため、外交団の送迎は、駆逐艦のボートで行う。

ヘリを使用すれば移動は早いが、首都上空の飛行許可はもらっていないのと上空に飛んでいる竜が邪魔で飛行できなかった。

ボートはアマノキの港に停泊し、エンジンを切り外交団が来るのを待っていた。港では、人々が目を輝かせ、こちらに手を振っている。

「とーちゃん、あの人たちがさっきの悪い奴らをやっつけたんだよね」

「そうさ！あの光弾の嵐、すごかっただろう!!」

「うん！すごかった！」

「おーい!!」

「ありがとうね〜！」

満面の笑みでこちらに手をふるフェン王国の人々、それに笑顔で手を振る外交団や海兵隊。

「人気者ですね、俺たち」

「この国にとって俺たちはヒーローだからな、仕方ないさ…だが、悪くもないな」

「うん？外交団が来たな」

外交団は握手や感謝を言われながらボートに乗船し、そのまま客船へ戻っていくのだった。

この出来事はすぐにホワイトハウスにも伝えられ、ハリー大統領は頭を抱えた。

これが全盛期のアメリカであれば、問題はない。

しかし、転移騒動からまだ1年も経っていない上、まだまだ国内国外問題が山積み……いつ民衆の我慢が爆発するか、わからない状態で？

……

余程の理由がないと無理だ……

とにかく、外交団を避難させないと……

と指示を出すのが、フェン王国から外交団を乗せた艦隊は既にフェン王国へ向かってくるパーパルディア皇国所属の艦隊が接近しており、当初護衛艦隊はこれを探知していたが、軍祭に参加する艦隊だと思い、見逃していたのが仇となった。

全速力で逃げれば逃走は可能だが、パーパルディアは列強国であり、報告であったレーダーや通信機能を備えたワイバーンを保有している可能性が高い。

例え逃げきれてもフェン王国は無事では済まない。

フェン王国を守るわけではないが、パーパルディア外交団からの報告でも進行は思わしくなく、むしろバカにされている始末

これはアメリカ合衆国としてもこれから国交締結する国が危機に落ちた時に逃走したとなれば現在国交締結している国やこれから訪問する国への悪評となる可能性も捨てきれない。

ハリーは外交団を守るのとフェン王国へ外交として守ることで親米派となり、今後の外交工作が非常に進みやすくなると考え、

最近の報告ではクワトイネやクイラ、他国との国交を締結し、採掘された鉱石から未知の鉱石、魔法技術的にも研究が進んでいる。

復興も他国との貿易間の黒字や外国人問題の沈静化

そのおかげで私自身のキャリアにも未曾有の転移騒動から復興させた政治家になりつつある…

彼の頭の中であらゆる可能性を考え、米海軍本部へ繋がった。

「私だ、サミュエル大将、確かパーパルディア外交団の護衛からフェン王国へ向かう艦隊を追跡する潜水艦がいたな？」

『はい、現在フェン王国まで100km地点まで接近しておりますが…途中で戦闘があったもののまっすぐ進行しているようです。』

「ほう…」

『戦闘はどうやらフェン王国所属と思われる海軍が数隻ほどパーパルディア艦隊と衝突後、フェン王国側を一方的に攻撃した後殲滅しました。』

そうか…既にフェン王国海軍が迎撃に出ていたのならやりやすい…

パーパルディアも帆船の戦闘艦を保有するだけで空軍からの衛星情報では蒸気機関を搭載した船や工場があるとあった。

産業革命を起こしてもまだ、初期段階でもフェン王国では到底敵わないだろう。

これは運が良い

フェン王国側はまだ本隊を出撃させていないなら、彼らが戦った後で我々が撃滅すれば好印象だろう

フェン王国はあくまで他国であり、まだ国交も結んでいない

アメリカ側からすれば国内問題を抱えたまま他国の揉め事に首を突っ込むほど余裕はない。

だが、今回の出来事は避けられない事態であった。

ならば、最大限にこちらへ有効活用しよう。

まだ、パーパルティア皇国との国交開設ができる状況の今は潜水艦が一番最も隠密に敵部隊へバレずに攻撃できる。

この世界には今の所潜水艦の存在は発見されていないのなら、うまく隠せるだろう。

「そうか、サミュエル大將外交団の安全を確保するためにパーパルティア艦隊を退却させることは可能か？」

『はい、可能です。』

「ああ、その艦には……………」

大統領はしばらく大將と話した後受話器を置くため息を吐きながら椅子に座った。

大統領報告数時間前

フェン王国より100km地点海上

フェン王国、王宮直轄水軍13隻はパーパルティア皇国との戦争が首都の襲撃によって濃厚となったため出撃したのだ。

警戒にあたる水軍は、フェン王国の中では精鋭をそろえており、全てはパーパルディアに対抗するため

水軍は木製の船に、効率の悪そうな帆を張り、進む。

機動戦闘が必要な場合は、船から突き出たオールを全力で漕ぐ。

船には、火矢を防ぐための木製盾が等間隔に整然と置かれ、敵船体を傷つけるための

バリスタが横方向へ向かい、3機つつ設置されていた。

火矢を放つための油の壺も、船上に配置されている。

13隻の水軍を束ねる旗艦は、他の船に比べひとまわり大きく、船首には1門だけ大砲が設置されている。

水軍長 クシラ は西方向の水平線を睨んでいた。

「軍長、パーパルディア皇国は来ますかね…。」

「先ほどワイバーンロードが我が国に向かい飛んでいった…必ず来る！」

「…勝てますか？」

「ふ…列強国相手とはいえ、タダではやられんよ。うちはかなりの精鋭揃いだからな。

それに…。」

軍長は艦首にある大砲を見る。

「あれを見よ！文明圏でのみ使用されていると言われる魔道兵器だ！球形の鉄の弾を1

km近くも飛ばして、船にぶつけ、その運動エネルギーをもって破壊する。これほどの兵器を船に積んだんだ！」

軍長は艦長に話す。

部下の前で不安は口に出さない。しかし、軍長は知っていた。列強には、砲艦と呼ばれる船ごと破壊出来る超兵器が存在する上、我が国のムラサメ衆から超大型戦列艦建造にも乗り出していると：

フエン王国のトップシュークレットだった。

おそらく砲艦は、このフエン王国最強の船、旗艦剣神のように、文明圏に存在する大砲と呼ばれる魔道兵器を船に積んだものだろう。

しかも、その最強クラスの船が、列強では普通に存在するのだろうか。

水軍長クシラの頭の中は、来るべき列強パーパルディア皇国との戦闘に備え、フル回転を始める。

(どうすれば…勝てる)

「艦影確認!!!艦数22!!!」

マストの上で見張りをしていた見張り員が大声で報告する。

ついに、来たか!

水平線に艦影が見える。

望遠鏡と通して見えるその艦は、フェン王国王宮直轄水軍の船に比べ、遙かに大きく、先進的である。

デザインと機能性を兼ね備えたマストに風の魔法で吹き付けられる風を受け、フェン王国式船より速い速度で船は進む。

水平線から徐々に大きくなっていく敵艦隊は、フェン王国水軍長クシラの目を持ってしても優雅であり、美しく、力強い。

各艦の乱れない動きから、錬度の高さが伺える。

「総員、戦闘配備!!!」

船員が慌しく動きまわる。

「・・・思ったより接近が早いな・・・。」

彼の想定する船速よりも速く艦隊は近づいてくる。

「くつつつ…初弾だ！最初に一番威力のある攻撃を行ない、その後魔導砲を放ちながら最大船速で敵に突っ込むぞ!!!」

「各自、戦の準備を!!!旗艦剣神を最前列とし、縦1列で敵に突っ込むぞ!!!」

・・・たのむぞ…。

水軍長クシラは旗艦剣神の船首に1門だけ設置された魔導砲に願いを込めた。

「艦影確認、あの旗は…フェン王国水軍です」

パーパルディアア皇国 皇国監査軍東洋艦隊の提督、ポクトアールは報告を受ける。

「フェン王国か…。ワイバーンロード部隊の通信が途絶している。新兵器を持っているのかもしれないな…。」

ポクトアールは声を張り上げる。

「相手を蛮族と侮ってはいかん！列強艦隊を相手にする意気込みで、全力で叩き潰すぞ！！」

艦隊は速力を上げ、フェン王国水軍へ向かって行った。

フェン王国水軍

「間もなく敵との距離が2kmに接近します」

報告が上がる。

「あと1kmで敵の砲艦の射程に入るか…。」

水軍長クシラの額に汗が滲む。

「最大船速！！オールを漕げ！！」

各船からオールが突き出る。

太鼓のリズムに合わせ、一定のリズムでオールが漕がれ始める。

「フェン王国水軍13隻は、速度を上げ、進む。」

「!!!!!!」
「敵船、回頭しました!」

敵の艦隊が一斉に横を向く。

「何をすする気だ!?!」

水軍長クシラは、敵船の動きの理解に苦しむ。

「パパパパパパツ……敵船が多数の煙に包まれる。」

「ドドドドドドーン……少し遅れて炸裂音が海上に鳴り響く。」

「ま……まさか!!!ま……魔導砲!?!」

「ば、馬鹿な!?!文明圏で採用されている魔導砲の射程距離は1kmのはず!」

「敵船との距離は2km……2倍の距離があるはず……」

「これが列強国か!!!」

「敵船はこちらの1門のみしか装備しない魔導砲に対し、数え切れないほど搭載した戦列艦が多数回頭していた。」

「シュボン!!!シュボンシュボンシュボン……」

「砲撃の落ちた場所に水柱があがり始める。」

く…当たるなよ!!

水軍長クシラは神に祈る。

ドーン…シュバー…ドーン!!!!

旗艦剣神の後方を航行していた船に、敵の魔導砲が着弾する。

砲弾は炸裂し、船上に設置してある火矢を放つための油壺をなぎ倒し、撒き散らされた油に引火、船は爆発炎上を初める。

フェン王国の精鋭部隊が…鍛え抜かれた肉体、練習に練習を重ね、地獄のような訓練の後に得られた剣術が発揮される事無く船上で焼かれ、転げまわる船員

「く……なんとということだ!!!」

次々と砲はフェン王国水軍に着弾し始める。

多数の船は炎上してゆく。

「少しでもけん制しなければ!!魔導砲放てー…っ!!!」

旗艦剣神の船首に1門設置されている砲が、轟音と共に、球形砲弾を放つ。

次の瞬間、敵砲が旗艦剣神に着弾し、爆発!船上に大穴が開く。

「これが…列強かあっ!!!」

砲艦の数、1艦あたりの砲数の差、砲の射程距離及び威力、そして艦の船速、どれもが桁違いであり、水軍長クシラは、力の差を思い知る。

これほどの差とは思わなかった。列強とは、文明圏内での規模のみの差で、「列強」と名乗っていると思っていた。

しかし、現実は違った。「質」、「技術」においても列強は文明圏を遥かに凌駕していた。これでは、敵が1艦だったとしても勝てない。

水軍長クシラの意識は、燃え盛る旗艦剣神の弾薬室への引火と共に、永遠に失われた。

「フェン王国水軍の艦は13隻すべて撃沈しました。我が方の損失ゼロ、人員装備異常なし」

.....

「.....考えすぎだったか...」

「敵はやはり蛮族でしたね、大砲を1発だけ撃つてきましたが、文明圏通常国の使用している、我が国からしたら、旧式の砲でした。艦隊の遥か手前に着弾しています」

「そうだな...進路をフェン王国首都、アマノキへとれ!!」

艦隊は1隻の損失も、僅かな被害も出す事無く、さらなる敵を求めて東へ向かった。

21 海の狩人

フエン王国沖合 約80km地点

穏やかな海の中に潜む何かがあった。

それはピコーンと音を発信させながら、進み

全身金属でできた黒色の鯨のような船体

船尾にはX型の舵と船体から突き出ている突起物

この世界には存在しない兵器

アメリカ海軍第5艦隊所属 攻撃型原子力潜水艦ロサンゼルス級ハンプトン

カルフォニア州サンディエゴ海軍基地から出航したこの潜水艦はパーパルディア皇
国とフエン王国へ向かうアメリカ・カナダ外交団の護衛任務を担っていた所に一つの通
信が入った。

あつちこつちに計器類、最新鋭のディスプレイが並ぶ空間で乗員は暇を持て余してい
た。

「暇ですわね……」

「そうだな……護衛任務だから仕方ないさ」

「護衛といつても相手は蒸気機関を搭載すらしていない帆船を主力の海軍しか持たない国家にわざわざ潜水艦も動員するとはね」

「それほど上はピリピリとなつていゝんだ、彼女ももう少し任務を全うすることになるだろうしな」

「思えば、こいつも30年以上は経つもんですね」

「ああ、長いものだ。」

「艦長、ホワイトハウスより通信が入りました。」

「ほう、何と言つていゝ？」

「はい、パールディア皇国から出航した皇国監査軍東洋艦隊はフェン王国に派遣した外交団とフェン王国へ甚大な被害をもたらす可能性が高いと分析した結果、現時点から皇国監査軍東洋艦隊は敵部隊と認識。ハンプトンはこれを撃退せよ」

なお、本作戦は敵部隊に悟られないために魚雷のみで攻撃すること。」

「パールディア皇国か…確かあの国にも外交団は派遣されているが、合衆国は敵として認識したのか？」

「かもしれないですね、パールティアを潜在的敵対国家として認知したのかもしれないせん。」

「そうか…敵船の数は？」

「22隻です。」

「よし、命令は出たな、これよりパールディア皇国の皇国監査軍東洋艦隊を撃破する。撃破ということは殲滅する必要はないのだな?」

「ホワイトハウスからは皇国監査軍東洋艦隊を本国に引き返すことができれば手段は問わないとのことですよ。」

「聞いたな? ソナーに映っているな?」

「はい、現在皇国監査軍東洋艦隊は本艦から東南へ約10km地点にあります。本艦との接触はこのまま航行すればあと20分で着きます。」

「遅い、先ほどフェン王国海軍との戦闘があったのなら、迅速に行動する必要がある。」

「イエッサー!!!」

「奴らに海軍魂を見せてやるぞ! 今までの訓練の成果を見せてやれ!」

「Hoo—yah!!!」

「原子炉・推進系統に問題なし」

「魚雷装填完了!」

「ソナー問題なし!」

「戦闘システムオールグリーン!」

「合衆国海軍の力を奴らに見せてやるぞ!!」

と原子力潜水艦ハンプトンは30ノットへ速度を上げ水中を進むのであった。アメリカ軍が建造した攻撃型原子力潜水艦が監査軍東洋艦隊へ接近するのであった。船内には魚雷が今かと、攻撃の時を待っていた。

監査軍東洋艦隊 ポクトアール提督

「フェン王国首都アマノキまであとどのくらいだ？」

「はい、後20分ほどで首都アマノキへ着きます。」

「よし、順調だな……ここまでフェン王国の海軍は恐るに足らないな……」

ポクトアール提督は紅茶を飲みながら海上を見つめる

「首都アマノキでも数時間はかからないうちに壊滅させることは可能だろう。ワイバーンロード部隊が通信途絶した理由が気になるところだな……」

「恐らく魔信問題かと思われます。貧弱な軍隊しか持たないフェン王国がワイバーンロード部隊を壊滅させることは不可能です。」

「それは私もそう思う。陸戦隊は準備を完了させているな？」

「はい、装備も万全で大砲の準備も弾と火薬もまだまだあります！」

「そうか……なら、大丈夫だな、艦隊行動には十分注意しつつ警戒を厳重にせよ」

「了解です！」

ワイバーンロード部隊が通信途絶したことがどうしても気になる…ワイバーンロード部隊は列強の中でも上位に値する航空戦力だ。

それが負けるなんて考えられない。

だとすれば先ほどの兵士が言ったように魔信問題？全てが？

それも考えにくい…

提督の不安は思わぬところでの的中することとなった。

背後からこの世界には決して存在しない無機物の物体が接近していることも気がつかずに…

皇国監査軍東洋艦隊から3 km地点海中

「艦長、敵艦隊との距離3 km地点まで接近しました。そろそろ攻撃を始めますか？」

「そうだな、浮上開始！魚雷発射深度まで浮上するぞ！」

「了解、浮上を開始します。」

艦はゆっくりと船体を浮上させ、だんだん海上から降り注ぐ太陽光が船体を照らしていった。

「今から攻撃目標にされる艦隊が可哀想になってきますね…この世界では決して存在しない兵器からの攻撃をこれから受けるのですから」

「……ああ、艦隊にいる乗員はどこから攻撃されたことさえわからないだろう。それどころか、水中から攻撃する概念すらないのだから無理もない。」

アメリカ海軍が建造した攻撃型原子力潜水艦ロサンゼルス級

ソ連海軍の新型の原子力潜水艦建造に対し、対抗して建造された世界でも優秀な原子力潜水艦となった。

ロサンゼルス級は建造されてから50年以上も経ち、2030年となればバージニア級が量産され、ロサンゼルス級は優秀な性能と量産性の二つの要素を持つて生まれた潜水艦であるが、中国海軍が次々と建造する潜水艦はロサンゼルス級を超える性能でなくとも、無人潜水艇など無人兵器が多数配備されると潜水艦の戦術的優位性に大きな波紋を産んだ。

ロサンゼルス級も当然廃船するか、検討されたが、ある出来事がきっかけで中止された。

それは中国戦争である。

無人潜水艇に対し幾つもの対策が生み出されたことによりロサンゼルス級潜水艦も十分通用することが認識されると初期からシーウルフ級よりさらに発展させた攻撃型原子力潜水艦と入れ替わるように配備することが決定。

対中戦争終結後、ロサンゼルス級は初期からおおよそ30隻ほどが廃艦となること

決定されたが、ここでも思わぬ出来事がロサンゼルス級へ舞い込んだ。転移騒動だ。

転移騒動にとってアメリカ海軍の保有する最新鋭潜水艦や現役潜水艦が20隻以上消失した。

流石に海軍上層部は焦った結果、廃艦予定であった攻撃型原子力潜水艦ロサンゼルス級は急遽復帰され、10隻が現役となった。

ロサンゼルス級は米国の攻撃型原子力潜水艦として異世界の海を航海した。

流石に艦齢がすでに長い間経っているため、ロサンゼルス級は戦闘システムや原子炉、攻撃火器は最新鋭のものが搭載され、今までのデータと変わっている。

攻撃型原子力潜水艦ロサンゼルス級

全長120・45 m

全幅10・9 m

原子力ギアード・タービン推進(60000shp)

最大速力水上水中 33ノット/35ノット

潜航深度 560 m

兵装

・700mmエア・タービン駆動水圧式Mk-90魚雷発射管 8基

・ ハープーン U S M

・ トマホーク S L C M

・ 各種機雷

・ 音響魚雷

・ E C M M

・ トマホーク S L C M用 V L S (フライト I I / I I I) 1 2 基

弾薬庫容量 3 3 基

乗員 1 0 2 — 1 1 5 名

などミサイル容量を増やす、戦闘システムを最新型にする、船体などのあらゆる面で改良が加えられた。

今日も彼女は老兵になりながらも任務を遂行する。

「艦長、魚雷攻撃可能深水まで浮上が完了しました。」

「よし、最初の目標は前方の戦列艦 4 隻だ、5 分おきに攻撃する。」

「もし、艦隊が引き返さなかったら…」

「その時には悪いが全滅してもらおうほかないだろう、できれば海に漂着した乗員も引き

「わかりません！いきなり目の前の戦列艦に巨大な水柱が発生したと同時に戦列艦パオス轟沈しました——————!!!」

そして

ズドドドーン!!!!

「!!せ、戦列艦ガリアス、マミズ、クマシロしよ、消滅!!!」

「ば、バカナ…一体どこから…」

「て、提督…」

「て、敵艦の姿は見えないのか!? 上空は!？」

「水上・上空共に敵影が見られません!」

「どういうことだ! もっとよく見ろ!」

「て、提督! ここは一時退避しましょう!」

「馬鹿者! 敵が現れてもいないのに逃げれるか!!!!」

「し、しかし、このままでは未知の攻撃に晒される可能性があります!!!」

「ま、まさか海の魔物が住んでいるじゃ…」

「そんなバカなことがあってたまるか! 早く原因を究明するんだ!!!」

「敵艦隊動きはありません。」

「…よし、続いて5番く8番ファイヤー！」

「ファイヤー！」

また、潜水艦から魚雷が発射される。

魚雷はソナーを頼りに戦列艦の上で響く音源へ近づく

そして、また戦列艦が消滅する

「戦列艦ガラト、マニア、ガリウド、サラトが消滅!!!」

しかし、周りには誰にもいない

兵士たちの不安はますます不安を煽っていた。

「て、提督…」

すでに22隻いた監査軍東洋艦隊は14隻となっていた。

沈没した戦列艦のわずかな生き残りが海面に漂っている。

救助船と警戒船で分かれていたが、それでもわからない。

「て、撤収だ…撤収せよ!!!」

い、一体この状況はなんだ？何もできず、ただ突如として戦列艦が轟沈していく

フェン王国は魔物でも味方に付けたのか!!!

こんなこと報告しても一喝されて終わるだろうな…

こんな状況を理解する人間なんて一人もいないだろう……
神よ……もしいるのならこの恐怖の正体は一体何か教えてくれ……
!!!!

と、監査軍東洋艦隊は突如8隻もの艦艇が轟沈したことでこれ以上侵攻すれば更なる被害を被る可能性があつたため、撤退することになった。

アメリカ合衆国とパールディアア皇国……超大国と列強国との戦闘はここで初となるが、それを誰も知る由もなく、そのまま歴史の隅へ葬られることとなる。

ハンプトンは任務が完了したのを確認したのちにそのまま撤退した。

パールディアア皇国 第3外務局

局長カイオスは、その報告を聞き、脳の血管が切れるのではないかと思われるほど激怒していた。

事の始まりは、フェン王国が皇国の領土献上案を拒否した事からはじまる。

498年間の租借案という「慈悲」も、双方に利があるにも関わらず、拒否される。

「フエン王国は、皇国をなめている」

このような意見が第3外務局内で主流になった。

数多の国々が存在するこの世界において、文明圏5カ国、文明圏外67カ国、国の大小はあるが、計72カ国もの属国を持つ列強パーパルディア皇国にとつて、文明圏外の蛮国からなめられた態度をとられる事は、とても許容出来るものではない。

他の国々の恐怖の楔が外れては困る。

このような事情もあつて、パーパルディア皇国第3外務局所属の皇国監査軍東洋艦隊22隻と、2個ワイバーンロード部隊が派遣されたのであつた。

ワイバーンロード部隊により、フエン王国首都アモノキに攻撃を行い、フエン人に恐怖を植え付けることにより軍祭に参加している文明圏外の蛮国武官に力を見せつける。

そして、艦隊による無慈悲な攻撃により、フエン王国首都アモノキを焼き払うことで、パーパルディア皇国に逆らつたらどうなるのかを他国に見せつける：計画だつた。

しかし、結果は惨憺たるものだつた。

空襲に向かつたワイバーンロード部隊は魔信を入れる間も無く、消息を絶つた。

どうやったのかは不明だが、おそらく全滅したものと思われる。

これについては、当初ガハラ神国の風竜騎士団が参戦したのではないかと疑われた。しかし、風竜は確かに強いが数が少なく、通信する間も無く全滅するのは考えにくい。

その後に入ってきた情報、

フエン王国水軍と、東洋艦隊が会敵し、敵水軍を一方的に撃破！我が方に損傷なし。これは良い。蛮族相手なら当然の結果だ。

ここまでなら普通だ。フエン王国が列強に敵うなどあり得ないからだ。しかし、そこからだ。

「皇国監査軍東洋艦隊 撤退」

第3外務局に激震が走った。

皇国監査軍東洋艦隊は8隻の艦艇がいなくなっているがそれでもまだ、14隻は居た。

これだけでも十分フエン王国を焼き払うことは可能な戦力だった。

にも関わらず、提督は精神的に病んでしまったのか、海の魔物に襲われた、戦列艦が一瞬にして轟沈したという頭のおかしい報告を行ってきた。

しかし、ワイバーンロード部隊の報告もおかしな点が多い。

魔信によれば首都に停泊していた鋼鉄製の巨大な船に攻撃を仕掛けたところ、船からの攻撃によって全滅したことだ。

鋼鉄製の巨大な船なんてムー帝国ならともかく蛮国が建造できるわけがない。

ワイバーンロードに連絡をさせず撃墜させるには全ての対空目標へ正確に空を埋め尽くすほどの弾幕を張る必要がある。

さらに飛んでいる目標を安定した陸上ではなく、波による揺れがある船の上で対空戦闘するというのだ。

信じがたい情報ばかりでこいつは俺をからかっているのか？と言いたい。

古の魔法帝国の対空魔船であればあるのかもしれない。

そもそも、砲弾は文明圏の列強でさえ、現在は2 km 飛翔する砲弾しか造れない。それを遥かに超える射程距離など、しかも文明圏外で、ありえるはずが無い。

・・・よくもこんなふざけた報告書を出せたものだ。

魔導砲の弾は、角度が1度でもずれたら着弾地点が大きくずれる。対空目標を正確に迎撃できるの砲など、古の魔帝でも無理だ。

しかも：いや、もうやめよう。これらの報告、狂った提督の言い訳なぞ聞いたところで意味はない。

文明圏外の蛮国がそんな超高度な兵器を持っている訳が無い。

提督以下の兵士たちは、口を噤んでいるという。提督に脅されているのかもしれない、今後どんな敵で何隻いたのか、詳細な調査が待たれるところである。

皇国に泥を塗った敵がいるのは事実であり、ふざけた敵を殲滅する必要がある。

しかし、敵が誰か知らなければ、攻めようが無い。

今回はワイバーンロードや戦列艦を何が襲ったのかは知らないが、本国はもう一度送ることになるだろう。

考えたくはないが、どこかの列強国がバックについているのかもしれない。

それならワイバーンロードが撃滅した理由がつく

第3外務局は「敵」を知るため、情報収集を開始した。

パーパルディア皇国第3外務局 窓口

「もうしわけありませんが、今日課長は会う事が出来ません。」

アメリカとカナダ外交団は、約束したパーパルディア皇国外務局の課長と会議のためやってきたが、窓口で再度足止めをくらう。

「・・・それはなぜですか？お約束は今日のはずですが？」

「ちよつと込み入った事情が発生いたしました。申し訳ありませんが、文明圏外の新興国と会議をしている状況ではないのです。予定は未定ですので、また1ヶ月以上後に連絡を下さい」

アメリカが原因で第3外務局は忙しくなっていたため、この日も重要人物とは面会で

きず、アメリカやカナダの外交団は、この日もトボトボ帰っていった。

パーパルディア皇国第3外務局

「何だ?!?今年は奴隷の差出が出来ないだ?!?」

外務局職員が、トーパ王国（文明圏外）大使に怒鳴りつける。

「我が国の民を、奴隷として貴国に差し出すのはもうやめとうございます。」

大使が冷汗をかきながら答える。

「ふんーでは、各種技術供与の提供を、貴国だけ停止させるぞ!!」

皇国は、超旧式技術の供与を文明圏外の国々に少しずつ行っていた。少しずつ国力が増す…が、周辺国家も少しずつ国力が増すため、パワーバランスは変わらない。

一国だけ供与が停止されると、他国との発展速度に差が出るため、他国に先を越され、国力は衰退する。

皇国は、各種技術供与も外交手段の一つとして利用していた。

言うことを聞かなければ、工具や、釘などの部品の輸出の停止まで視野に入れていた。

これで完全に国が立ち行かなくなる…はず。

トーパ王国の大使はいやらしい薄ら笑いを浮かべる。

「技術ですか…。ならば、我々は奴隷を差し出さない。皇国は我が国への各種技術供与

を停止する。これでいかがですか？」

今までのトーパ王国からは考えられない強気な態度だ。

大使は話を続ける。

「我々は…あのアメリカとカナダとの国交を結んでいるのですよ」

フツと笑い、大使は締めくくった。

外務局 食堂

現在は休憩中であり、職員は食事をしながら雑談していた。

「最近蛮国が、やけに反抗的と思わぬか？」

「確かに、ここ一ヶ月くらいは顕著にそれを感じる」

「ああ、前なら怖がつて、全ての要件をのんでいたのに、昨日は「我々は、あのアメリカ

合衆国やカナダ連邦と国交を結んでいる！」と、強気に言われたぞ。たかがシオス王国

ごときだ」

「!!俺もトーパ王国大使から、似たような事を言われた。トーパなんて、技術がいらな

いと言っていた。理由が今話に出ていた「アメリカ」「カナダ」と国交があるからと。

アメリカつて知っているか？」

「知らん」

「俺も」

「私も知らない」

「まったくこうも反抗的だとやりにくい早いところフェン王国にも裁きを下して欲しいものだ。」

偶然にも両国を知っている局員は居たが、前日の盗賊により死亡し、両国を知る者はほんの一握り程度しかいなかった

第3外務局内で蛮国の強気な対応で険悪な空間を作り出し、その光景を外から見ている視線にも気づかず、通常営業を続けた。

パーパルディア皇国は皇国監査軍東洋艦隊の出来事はただの提督の狂気ではないとし、もう一度派遣することが決定された。

しかし、第一陣皇国監査軍東洋艦隊の兵士たちは怯え、フェン王国へ行くことを拒否した。

なので、外務局は再び45隻の皇国監査軍東洋艦隊を編成し、さらに1隻竜母艦を派遣することで合計20騎ほどのワイバーンロードが派遣されることが決定された。

なお、これに元皇国監査軍東洋艦隊の兵士たちは断固として反対し、無駄死になると伝えた。

そんな彼らの心配など無視し、第二次皇国監査軍東洋艦隊は出撃した。

2.2 獣人国家

アメリカ合衆国とフィルアデス大陸との間にある島国

グラミラート王国

第3文明圏に属する小国ではあるが、人間種以外の種族の中でも獣人の割合が非常に多く、獣人の国と呼ばれている。

アメリカから4500km地点、日本列島ほどの大きさの島国で、他国との繋がりはあまり持とうとしない

グラミラート王国は建国1000年ほどしか経っておらず、建国以前はフィルアデス大陸で亜人を迫害する過激的宗教が流行り、多くの亜人は迫害を受けた。

その中でも獣人族やエルフ、ドワーフなどは農奴、炭鉱夫、剣闘士奴隷、性奴隷などに大変人気もあったため、積極的に誘拐、捕獲、奴隷生産などが行われた。

獣人族やエルフ、ドワーフなどの亜人族は迫害から逃れるためロデニウス大陸やウエレス島(グラミラート王国)、ルクセイト島(アルタラス王国)へ逃げ、その中でも獣人

族は高い身体能力があったため、ウエレス島へ逃れ、建国した歴史を持つ。

獣人国家グラミラート王国首都ハーボン・ロット市へ向け、アメリカ外交団は3隻のアーレイバーク級駆逐艦を引き連れて、訪れた。

一方グラミラート王国は大混乱となっていた。

今まで王国へ来るものはほとんどおらず、近年ではようやく獣人族や他の種族に対しても差別がなくなってきたことで商船が寄港するようになったが、巨大な鋼鉄製の船が複数も現れたことに驚愕していた。

「これはまた幻想的だな…城と樹木が一体化しているよ…」

「Wow…こりゃあ、ハリウツドの連中も喜ぶだろうな！ア○ターに出て来る巨大な大木があるぞ！」

「まさに異世界か…」

とそんな艦隊へグラミラート海軍の戦列艦が臨検を行っている頃、王宮では騒然となっていた。

突如現れた灰色の巨大な鋼鉄製の船が3隻、白と黒のラインが特徴の巨大な船が1隻彼らが何者なのか、文明圏の大国か？

列強国がついに攻め込んできたのか？など不安が抱えていた。

グラミラート王国 第6代目女王 メルシエイ

青い髪色に陶磁器のような白い肌、白を基調としたヨーロッパのドレス衣装に見に包み、尻尾はいくつもの狐のような尻尾が伸び、頭にも耳がついていた

周りに犬耳や猫耳、鳥のような翼を生やす者もいた。

「將軍、状況を説明しなさい」

將軍は狸耳を生やした少しぽっちゃり体型の中年男性だ

「は、はい、港に現れた巨大な鋼鉄製の船は4隻であり、そのうち3隻が戦闘艦かと思われま。艦隊の掲げる国家はこの国にも該当しない国旗でした！」

「どこにも該当しない？どんな模様かしら？」

「赤と白のラインがいくつもの線が横に並んでおり、左上に四角い青の中に白の星がいくつも載っています。」

「そんな模様は見たことがないわね…彼らは何と？」

「はい、只今海軍が臨検を行っておりますので、間も無く結果が着く頃かと思われま。そこに執務室へ兵士が書類を抱えてやって来る

「メルシエイ様！」

「来たわね…臨検の結果ね？そのままでもいいので報告してください。」

港灣へやって来た巨大な船の艦隊は海軍が臨検を行ったところアメリカ合衆国・カナダ連邦という国々の特使が代表して、敵対する意思はない趣旨を伝え、詳しい話を聞く

と彼らは以下の内容を伝えて来た。

・アメリカ・カナダという国は、突如としてこの世界に転移してきた。

・ロデニウス大陸のロウリア王国との戦争後、貴国に所属する獣人族を保護したので、その身柄を引き渡したい。

・両国はグラミラート王国と正式な会談を行いたい。

国ごと転移した話など執務室にいる誰もが、信じがたい表情をしていた。

しかし、アメリカやカナダという国自体は外部からの情報により知ってはいた。

まさかロウリア王国と戦争したなんて誰も知る由もなかったが

そもそも2000mの艦隊でこんな小国に来るなんて砲艦外交以外何者でもない。

本当に大丈夫だろうか？

兵士によれば捕らえられていた獣人族は2000名ほどで非常に健康状態が良く保護されていること。

「アメリカやカナダ…噂では聞いておりましたが本当に実在していたとは…それにロウリア王国とも戦争したとは…あの忌まわしい王国がなくなることは喜ばしいことであるが、両国の特使が言っていることは本当であるか？」

「はい、引き連れた戦闘艦も護衛艦隊と言っておりました。」

「なるほど…おそらく海賊や人攫いの組織による奪還を警戒してくれていた可能性もあるわね…わかりました、会いましょう」

「！メルシェイ様!？」

「危険です!」

「何を言っておられるのですか？彼らは我らの同胞を救ってくださったのよ？今まで我が国を差別してきた国家と違い、同胞をここまで丁重に扱ってくれた国は悪い国ではないでしょう。」

兵士達や政務官達は指示通り、両国を王宮アーバストへ案内し、会議室へ待機させた。両国の外交官は今まで見たことのない自然と人工物が調和している建造物に魅了されていた。

王宮には巨大な水晶石やクリスタルがふんだんに使われている。

もともとグラミラート王国のウエレス島は水晶やクリスタルが多く含む鉱脈を持ち、さらに魔水晶石と呼ばれる魔石とは異なる鉱石を採掘することが可能だ。

魔石はこの世界に存在する魔の力が鉱石に集積することで鉱脈として誕生する。

魔水晶石は鉱石に長い年月をかけて断層の圧縮と熱によって魔の力と磁力を生み出す効果があつた。

閑話休題

案内された外交団の代表はこれまたセオドアであった。

「そろそろ休みが欲しいと思っていたが、こんな幻想的な美しい世界を見られるものなら悪くないものだ。」

「それは我が国にとつても大変光栄なことでございます。」

と別の方向から声がし、そちらへ顔を向けると狐の尻尾と耳を生やした美しい女性がいた。

後ろには政務官と思われる他の獣人族もいる

「私としてもこの光景は是非とも本国でお伝えしたいものです。あなた様がこの国の女王陛下でよろしいですか？」

「はい、私はグラミラート王国第6代目女王　メルシエイ・ラ・ミラドルと申します。我が国へようこそおいで下さいました。歓迎いたします。こちらは……」

と將軍や外務局長など紹介して行き、まずはお互い社交辞令から入る。

「ご丁寧なご挨拶嬉しい限りでございます。私はアメリカ合衆国外交官のセオドア・アーノルドと申します。」

「カナダ連邦外交官、ヴェロニカ・ジヨセフと申します。」
とこちらも返す。

「まずは同胞を助けて頂き感謝の言葉を言わせて頂きます。誠にありがとうございます。ごさいます。ごさいます。」

「いえいえ、陛下自らその言葉を頂けるとは我が国にとつても喜ばしいことです。

我らは同盟国へ宣戦布告した敵国を殲滅したにすぎません。

その中では獣人族の皆様や他の種族の奴隷が多くおりました。

我らとしても大変許しがたいことであり、その中でお助けしたにすぎません。」

外交官らは相手が陛下ということで言葉を選びながら発していた。

「そうですか……貴国の殲滅したロウリア王国は我が国にとつては忌まわしい国家でもありました。」

この度の来られた目的の中に我が国との国交も視野に入れているとお話を伺いましたが、詳しくお聞きしましょう。」

アメリカはクワトイネ公国やクイラ王国の時に活躍したプロジェクトなどで丁寧に説明し、国の紹介、文化、軍事力などを解説した。

彼らが紹介する内容は驚愕でしかなかった。

どんな国かと思えば、巨大な大陸に超科学文明国家

港湾に現れた巨大な船以上の大きさを持つ海軍力

繋ぎ目のない道路、圧倒的高さを誇るビル街、魔法なしでも巨大な鉄の塊を飛ばすこ

とが可能な飛行機

大量消費社会を支える生産システム

どれもこれもが圧倒的であり、グラミラート王国側は啞然とした表情で見っていた。

これはおそらく本当であろう、港湾に現れた艦艇、見たことのない機械で綺麗な絵を動かす技術

一体どれほどの国力を持っているのか、想像を絶するものだった。

グラミラート王国にとって到底持ち合わせていないものばかりであった。

両国の要求は王国側で輸出物資、建材のクリスタルや魔水晶石、魚介類の輸出であった。

対して両国は科学やインフラ、基礎工作機械、留学の限定的な受け入れなどを輸出するとのこと。

あれほどの技術を輸出してくれるなんて、列強国ではあり得ないものであった。

これは関係者内部で詳しく話された。

実は獣人族は人よりもそれぞれの動物性に合わせて身体能力を有しており、中には飛行することも可能だ。

しかし、身体能力が高いのだが、魔法を一切扱うことができなかつた。

なので、王国にとって魔水晶石は宝の持ち腐れであり、これを輸出するだけで圧倒的

技術力や科学が入手できるならグラミラート王国側にとって大きなメリットであった。

アメリカ側にとつても王国との交流はアメリカから4500km離れている地点であり、民間船が補給できる場所が欲しいのと魔石はアメリカにとつても現在のところまで魔導師は生まれていないが、魔法を解析するにあたって重要な素材であり、他国からも魔水晶石は魔石の上位鉱石であり、遥かに稀少価値が高いとのこと。

他国はあまり王国に魔水晶石の鉱脈があるのを知らないが、アメリカは衛星解析により地中に埋蔵されているのを把握していた。

さらに亜人との交流はこれからの亜人国家との外交が柔軟に進ませるための一貫であった。

「こちらが詳しい国交内容でございます。」

と書類を政務官が受け取り、少しチェックしたのちにメルシエイへ手渡される。メルシエイは内容に驚愕した。

話を聞くと確かにこちらに有利な好条件が多く含まれていたが、何かしらの条件はあるのだろうと思い、内容を読んだ

どの内容も平等な条約ばかりでこれだけの高い文明力を持つ国家なら、もう少し不平等な内容を仕掛けても問題ないのに：

(なるほど…両国は我が国と平和的永久のお付き合いを望んでいるのね?)

と生きて200年ほどの知恵で考えた。

(この二カ国なら長く付き合うことが可能なのかもしれないわね、内容は全く問題ないわね)

とグラミラート王国側も快諾し、アメリカ・カナダとグラミラート王国は国交を締結した。

そこへヘジョセフがとある質問をした

「この度国交を締結して頂きありがとうございます。ありがとうございました。」

陛下は実に美しい女性でありますね、よければ年齢をお聞きしてもよろしいでしょうか?」

(!?おいばかやめろ!お前は陛下に何を聞いている!?)

とセオドアはやりわりと注意しようとすると

「はい、今年で201歳になりますよ」

「に:~:200?」

「.....」

外交官らは絶句した。

まさか目の前にいる20代の女性が200歳なのだから、人は見かけによらないと思わず実感した。

「200歳とは長きに渡って長生きされているんですね…」

「はい。我が王家では代々妖狐族ですので寿命が長いのです、200歳であれば人族の30歳に該当しますわね」

「そ、そ、それにしてもお美しいですな」

「はい、ありがとうございます、良ければこの後我が国で歓迎の宴をさせてもらいたいのですが、いかがでしょうか？」

「はい、是非ともご参加させて頂きます。」

ということとでグラミラート王国の宮殿の舞踏会で宴となった。

「これは肉料理か？これは結構イケる…これも美味しいな…」(俺の日本人の友人もここへ連れてくると発狂するだろうな…日本のアニメ文化でケモミミ…だったか？ケモミミキヤラクターは人気だからな…)

いやむしろ犯罪を起こさないか、心配だな…)

「こんばんは、あなたがアメリカ合衆国の特使のセオドアでしょうか？今宵のパティーは楽しんでおられますか？」

「うん？ええ、楽しませていただいておりますよ」

と貴族の若い獣人族の娘に声をかけられ、振り向く

そこには白髪の犬耳、白い尻尾、陶磁器のような白さとブルーアイ、豪華な民族衣装

を身に纏った少女がいた

「それはよかったです。今宵は我が国の伝統的マルラマ料理や高級魚も使われておりますゆえ、セオドア氏のお口にあつてよかったです。」

「ええ、貴国の料理は大変美味なるもので、美味しく頂いております、お嬢様の名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「はい、私はエルモン家次女のマミュと申します。」

(・・・ああ、出たな、この手の宴はこの世界では貴族として繋がりを持つために近づく者が…:ジョセフ殿は大丈夫だといいが…)

とジョセフを見るとすつかり犬耳や猫耳の女性を話してデレデレである。

(…:外交官だよな? 情報を漏らさないか、心配だ…)

少し頭を抱える

異世界各国はどうやら西洋の中世が中心に多くの文化がフランス・イギリス・ドイツ・イタリア風と多くあつた。

貴族間との付き合いでも異世界に転移してから外交官たちはできる限り貴族のご機嫌をとり、穏便に婚姻話を避ける対話力も求められるようになった。

中世近世では貴族や王族が行うパーティーは情報交換の場だったり、秘密裏に何か約束事・互いの腹の探り合いも裏では目的だったりする。

このような場でアメリカやカナダは当然注目の的となるため、貴族から若い娘を紹介、外交官や護衛の若い女性が貴族男性にナンパされることもしばしばある。

「これはお若い、この国は本当に獣人族の方が多いのですな」

「はい、我が国は8割以上が獣人族で占められておりますので、色んな種族が居られますよ？」

「ほう、例えばどんな種族がおられるのですか？」

「ふふふ、アメリカやカナダの特使の方は本当に獣人族のことをご存じないのですね：私たち犬耳を生やしている種族は犬耳族、ほかにも猫耳族、狸人族、翼人族、狼人族、妖狐族、リス族、熊人族など多くの種族がおられます」

（つまり動物の種類ごとにいるというわけか、是非とも彼らの遺伝子を見てみたいものだ、しかも呼び名が地球の動物と一緒にとはこの世界は本当に不思議なものばかりだ。）

「なるほど、多くの種族がおられますのですね」

「はい、貴国が助けて頂いた獣人族も多くの妖狐族や翼人族、狼人族などでした。」

「そうですか：彼らが助かってよかったものです。」

「はい……………」

マミュが下へうつむいた後体が震え出した

「ど、どうしたのかね？ 具合でも…」

と言葉を続けることができなかった、なぜならマミュがそのままセオドアに抱きついたので。

「!?マミュお嬢様!？」

「・・・ありがとうございませう…本当に…貴国が助けて頂いた獣人族の中には私の妹もいました…」

と落ち着く

「本当に…ありがとうございませう…本当に…妹は五体満足で元気に戻るまで私は心配で堪らなかつたのです…」

「……………」

！たとえば記録の内容ではエルモン・リリシアという貴族女性もいた

エルモンと同じ特徴があるということは彼女で間違い無いだろう。

「それが元気な妹の姿を見て、私たちをちゃんと見てくれる人族がいるんだって……実感しました…」

「……………」

「失礼なことはわかっていきます、ですが、どうしてもお礼が言いたくて…」

と涙を流しながら抱きついた

セオドアは無言で娘をあやす父親のように背中を優しく叩く。

「そうですか…マミュお嬢様のご家族がご無事でよかったです…」
しばらくそうしていたが、セオドアはあることに気づく、考えてみればここは舞踏会
の真ん中だ。

色んな貴族や王族、外交官もいる。

つまり、視線を集めるのにそう時間がかからなかった。

端の方では微笑ましそうにメルシエイや政務官、兵士が見ていた。

端の方ではジョセフも羨ましそうに見ていた。

!?

流石に外交官の道を歩いて10年、実年齢30代であったセオドアは急激に恥ずかしくなつた。

しかし、急に離すこともできず、いくつもの拍手が上がつた。

獣人族は種族ごとに多くいるが、グラミラート王国は非常に結束力が高く、それ故仲間を助けたアメリカやカナダに好印象であつた。

その後、アメリカとカナダの外交官や兵士はグラミラートからこれでもか、というほど熱い感謝を受け、アメリカ・カナダとグラミラートとの繋がりが誕生した瞬間であつた。

余談であるが、セオドアはマミュウから猛烈な熱愛を受けることになり、ジョセフから血涙で見られることになった。

兵士たちからは羨ましいような視線を帰国の旅路への間味会うことになった。

グラミラート王国からの鉱石でもアメリカ軍を仰天させる鉱物が発見されることになったのはのちの話になる。

(ふふふ、第一印象はこれで良いかしら？ 超大国アメリカ、カナダ何としても繋がりを作らないとね♪…全ては王国のために…)

23 フェン沖海戦前編

パーパルディア王国 皇都エストシラント南方の海軍基地

パーパルディア海軍艦艇が多数停泊する中、出撃する45隻の艦隊があった。

その艦隊は第二次皇国監査軍東洋艦隊だ。

第一次皇国監査軍東洋艦隊が提督の精神的問題によって任務を達成できなかったため、第3外務局は第一次皇国監査軍東洋艦隊の14隻から更に31隻増強し、竜母艦1隻を加えた艦隊だ。

フェン王国へ送る戦力としては過剰な戦力であり、明らかなオーバーキルだ。

しかし、第3外務局としても失敗した汚名を返上すべく、圧倒的な戦力で蹂躪するために強力な艦隊を編成した。

この艦隊はフェン王国首都アマノキ殲滅が主目標であるが、もう一つの任務もあった。それはワイバーンロード部隊を殲滅したと思われる巨大船への攻撃だった。

列強国として他国に、それも小国如きに舐められては列強として名前が泣く

第3外務局は軍務へ無理を言つて竜母艦を1隻編成へ組み込むことができた。

竜母には20騎のワイバーンロードが搭載され、強力な艦隊となった。

第3外務局 局長カイオス

「…これでフェン王国を今度こそ殲滅できるだろう」

「おやおや…カイオス局長、何やら第3外務局とやらは蛮族相手に随分と失態を犯しているらしいじゃないか？」

第2外務局の職員が嫌味を言いに来た

「…皇国監査軍東洋艦隊は提督の精神的問題によるミスだ、第3外務局とは関係はない。これで今度こそ任務を達成してくれるだろう」

「そうだといいたがな？ 君達第3外務局のせいで私たち第2、第1も他国から大笑い食らっているんだ。今度こそ成功させてくれよ？」

「ああ、分かっている。提督も我が国で優秀な人物を抜擢した。」

「それに聞いているぜ？ 蛮国が生意気な態度で反抗的なんだってな？ 失敗は許されな
ぜ」

「…それについても現在調査中ではあるが、共通しているのは「アメリカ」「カナダ」という国の名前が必ずと言っていいほど出る。そっちにも心当たりはないのか？」

「全くないな、聞いた話によると東方の果てにある国だろ？あそこは海ばかりで小島程度がいくつかあっただけだ。そんな所に国なんてあるわけないだろ？」

「・・・そうだな」

「とにかく失敗はしないでくれよ？今回の件で皇帝もかなり敏感になっているからな」

「ああ」

（く…これもみんな皇国監査軍東洋艦隊が失敗したせいだ!!!今度こそ成功を納めるだろう。）

今回の一件では滅多に見ない皇帝陛下も注目しており、第3外務局はいつも以上に緊張し、ストレスとなった。

そのせいで、第3外務局員は他国に対し辺り散らしていたという。

第二次皇国監査軍東洋艦隊は皇都エストシラント南方の海軍基地から出撃したのだった。

アメリカ合衆国はフェン王国との国交締結に議会の方で賛否両論となったが、結果として国交することになった。

潜在的敵国家であるパーパルティア皇国との対立は避けられないのと既に多くの場面でパーパルティア皇国との紛争に巻き込まれているという点が大きかったところだ

ろう。

政府は対パ政策としてロデニウス大陸と北米大陸の交易に妨害が入らぬようフェン王国と条件付きで国交締結することに決定した。

フェン王国には産業はなく、資源も乏しいが良質なウラン鉱石が採掘することができるといふことでアメリカの採掘関係や原子力関係の企業がこぞって進出した。

フェン王国はアメリカやカナダに対して好意的であり、フェン王国側としては金銀銅鉄以外の鉱石は屑扱いである。それをアメリカやカナダが買い取っていた。

調査の結果現代のアメリカが消費するウランの120年分の埋蔵量があることが判明した。

さらにフェン王国は失われた東洋文化を強く感じさせ、米加の国民感情は悪くないため観光業も視野に入れていた。

フェン王国首都アマノキから出航したウランを運ぶ輸送船は護衛として沿岸警備隊からハミルトン級カッター（カッターとは哨戒艦または巡視船とも言う、本作では以降巡視船と表記します。）マンローが一緒に出航していた。

ハミルトン級巡視船マンロー

「おーい、ケン！今日の夜にはポストンへ着く予定なんだよな！貨物は44822で

合っているよな？」

「ああ、ウズキ鉱山から採掘されたウラン鉱石だな、そうだ。」

順調に行けば9時にはボストンへ着くだろうよ」

「そりゃあいい、今日ジェニファアの誕生日だから、日付的には帰れそうでもかった」

「おお、それはおめでとう！娘さんは何歳になったんだい？」

「今年で5歳だ！もうすぐ学校に通うことになるから、待ち遠しいぜ〜！」

「ははは、それは羨ましいな。俺も早く結婚したいものだよ」

「お、それなら港に居たフェン人はどうだ？東洋系でみんな可愛いかったぞ〜！」

「お前…：妻子がいる身でそんなこと言うなよ…！」

「ははは〜それでどうなんだい？」

と肘でグイグイ押し来てる

「そうだな…：港で飲んだ居酒屋で看板娘が居たんだが、そいつのことがちよつとな…」

「お！美人なのか？」

「だから、お前は妻子がいるだろ！ああ、またフェン王国に来たら話してみようと思つて

いる。」

「がははははは！それなら俺の直伝でナンパ術を教えてやるよ！」

「あく機会があればな」

と沿岸警備員たちの会話は出航するまで続く。

そして、朝、鉦石運搬船ノース号と巡視船マンローが2隻出港した。

フェン王国から沖合140km地点、第二次皇国監査軍東洋艦隊 提督ヴァルロア
ト

「全く無能な奴め、偉大な我が国に泥を塗りやがって…」

「提督、フェン王国まで残り140km地点となりましたが、ワイバーンロードは出撃させますか？」

「いや、フェン王国には航空戦力は展開していないと情報がある、ならば50km地点で出撃させ、ワイバーンロードがなるべく上空で戦闘できるように近づく。」

「当たり前であるが、ワイバーンロードはあくまで生物である以上確実な有効行動距離というものはない。」

「ならば、近場まで近づいて出撃させたほうが上空で戦闘できる作戦行動能力は上がり、戦術的幅が広がる。」

「わかりました。」

「作戦行動範囲までもう少しだ。フェン王国の海軍らしき船もあったが、そんなものは屑ゴミでしかない、早いところ作戦を終わらせるぞ」

艦隊は確実にフェン王国首都アマノキヘ道中のフェン王国海軍の艦艇を蹴散らしながら進撃していた。

その進路上を鉾石運搬船ノース号と巡視船マンローも通る予定であった。

一方フェン王国では王宮では大騒ぎであった。

再びパーパルディア王国が45隻の艦隊となつて攻め込んで来たからだ。

剣王シハンや騎士長マグレブなど政務官や軍務が集まつていた

きつかけは今朝の警戒任務に出港していた警備隊が攻撃を受け、攻撃を仕掛けて来たのはパーパルディア王国の国旗を掲げる艦隊であったからだ

これに剣王や軍関係者は悲痛の声で悲鳴をあげていた

「やはり再び攻め込んで来たか…なぜ、1回目の艦隊が撤退したのか、不明だったが2回目がかこんなにも早いとは…」

彼らはアメリカ軍の潜水艦が撃退した事実を知らず、何故パーパルディア王国の艦隊が撤退したのか、大きな疑問であった。

アメリカ軍がパーパルディア王国のワイバーンロードを撃墜したことで撤退したのでは？と最終的にまとまったが、パーパルディア王国が再び攻め込んで来るのを見越し

て水軍を強化する動きも遅かった。

軍船は再び建造するのに時間がかかる。

艦艇は一朝一夕でできるものではなく、長い間時間がかかってしまうので、フェン王国はアメリカ合衆国とカナダ連邦へ援助を求めた。

アメリカ側は再びパーパルディア皇国の妨害がフェン王国へ来る可能性を懸念していたので、沿岸警備隊などを派遣していたが、艦隊となれば太刀打ちできないので、フェン王国へ向かわせていたフェン王国派遣艦隊を急遽向かわせることに決定した。

*なお、ここで補足して言えばカナダ海軍はフリゲート艦ハリファックス級12隻とヴァイオラ級2隻、通常型潜水艦ヴィクトリア級4隻ほどの戦闘艦しかない。

現在5隻の計画、5隻の新造艦を建造中であるが、全く数は足りていない状況だ。

カナダの領海はとてつもなく広い

これをすべてのカナダ海軍力だけでカバーすることはほぼ不可能の話であって、自国の領海を守るのに一杯。そんな状況の中派遣できるほどの海軍力を持っていない事情がある。

そもそも人口4000万人ほどで強大な海軍力を持つのも人的資源から考慮し、厳しいものだった…

フエン王国派遣艦隊は

旗艦強襲揚陸艦アメリカ級ブーゲンビル

アーレイバーク級駆逐艦

・マステイン

・チャファイ

・マンセン

沿海域戦闘艦インディペンデンス級

・ジャクソン

・モントゴメリー

合計6隻

派遣艦隊が急行中、鉱石運搬船ノース号とハミルトン級巡視船マンロー2隻はそんな戦闘状態を知らず航海していた

「う〜ん…」

「どうしたケン？」

「うん？ああ、通信状態があまり良くないんだよ。本部との連絡が取れなくてな…」

「ああ、仕方ないだろ、通信衛星もこの前稼働したばかりなんだし、不具合なんて異世

界では日常茶飯事さ」

「そうだが…もう少し通信機を見てみるよ」

「あいよー」

と艦橋へ登るとレーダーを見ている乗員から艦長へ声がかかった

「艦長、前方20km先に45隻の艦隊が真つ直ぐフェン王国へ向け航海しています。」

「何？今日の航海航路にはそんなものはなかったぞ？」

「また、どこかの船団じゃないですかね、この前の軍祭で各国が活発に出入りしているらしいですし」

「…そうか、わかった、進路はこのまま、艦隊が見えたら、その艦隊から逸れて後悔するぞ」

「了解です。」

「…45隻の艦隊？随分と多いな…輸送船団だといいたがな…だけど、この胸騒ぎはなんだろう…」

レーダーに映る45隻の艦隊は帆船にしては14ノットと速度が異常だ。

通常帆船は追い風などを受ける事で推進力を得るが、相手の方向先だと相手の艦隊は向かい風を受けることになる。

これも魔法の一種なのか？

危険が迫っている事を知らず、危機が一刻と近づいていた。接触まで残り20分が過ぎた：

第二次皇国監査軍東洋艦隊 提督ヴァルロアート

「提督、フェン王国まで残り60kmとなりました。」

「よし、あと10km地点まで航海したら竜母からワイバーンロード部隊を出撃させろ、準備に抜かりはないな？」

「はい、ワイバーン部隊は準備完了しています。いつでも出撃可能です。」

「ふふふ、そうか、だが、奴らはダメだな：すっかり怯えておる」

提督ヴァルロアートの視線先には海をずっと見ながらビクビクしている第一次艦隊の乗員がいる。

全員100km地点になると怯えが酷くなり、そのまま脱走兵まで現れたので、見せしめに処刑したらすっかりおとなしくなった。

しかし、邪魔だから後方に護衛を組み、前進していた。

あの怯えは異常だ：一体何が彼らを襲ったというのだ？ 損失した5隻は結局原因がわからなかったし、何も現れない。

やはりあいつの妄想でしかないか…

と考えていると遠くから船が見えた、2隻

「艦影と思われるもの発見！こちらに接近してきます」

「!? 大きいな…フェン王国のものとは思えない…。」

小山ほどの物体が海上を動いている。船？と思われるが、常識から考えると規格外の大きさだ。

「提督、前方から2隻の船を発見しました。如何でしょうか？」

「ふむ、もしかすると列強の船籍なのかもしれない。国旗がわかるまで何もするな」

「了解しました。」

艦隊はさらに双方との距離が縮まり、距離10km地点まで接近した。

提督は驚いていた。目の前の船は姿が明らかになるにつれ、巨大な船であった。

帆はなく、白い赤のラインが目立つ船体に見たことのないマスト、そして船首には巨大砲を備えていた。

後方の船も地味な色で四角い建造物が立っているだけであった。

国旗も見たことのないものであり、ヴァルロアートは列強の国でないことを確認し、ニヤリと微笑む。

「巨大な船だな…あれほどの船を建造するだけの技術を蛮国が持っているとは…」

と興味本位で見て、命令を出す

「艦長、攻撃命令を」

「はっ、2隻ともですか？」

「ああ、まずはあの目立つ白い船からだ。あれを沈めろ」

「了解しました。全艦戦闘準備せよ！手旗信号を送れ！」

と戦闘準備を着々と進め、艦隊はさらに2隻へ食らいつくように接近した。

「ヴァルロアート提督、戦闘準備が完了しました」

「よし、一気に近づいてやつへ大砲をぶちかましてやれー！！！！」

「おおおおおー！！！！」

と艦隊は風神の涙と風系魔法を使い、さらに速度を上げた

それに気がついた巡視船マンローは後方にノース号を避難させ、そのまま護衛するよ
うに航行し、艦隊とは逸れる形で進路を取った。

すると艦隊はまるで自分たちに食らいつくように接近しており、信号を送った。

「艦長！艦隊の前衛がこちらへ接近するかのようには猛スピードで接近しております！退

避しましょう！」

「いや、もしかすると何か信号を送ろうと接近しているのではないのか？見たところど
こかの国の旗が上がっているようだし、あれは海賊ではない。」

「し、しかし…」

「この異世界では相手は通信機器を持っていない、ならばこちらの世界に合わせないと
思わぬトラブルを招くことになるのかもしれない。」

「わかりました。」

「それとあの国旗はどこ国だ?」

「は、はい、もうすぐ乗員が知らせてくれるので、判明するかと…」

艦橋でそんなやりとりがされる中、ケンは通信機器と睨めっこしていた。

「くそ…何で通信ができないんだ? 動け! 動けよ! このポンコツが!」

と叩くと通信状態が戻り、正常となった。

「…よし、やっとか…これで安心して本部と連絡が取れる…うん? 本部から通信? 何だ
?」

通信機器が正常に作動した途端、通信が入ってきた。信号は沿岸警備隊本部からで
あった。

「こちらアメリカ沿岸警備隊所属ハミルトン級巡視船マンロー、暫く通信機器の機械的
トラブルにより通信ができなかった、本部どうぞ」

『それぞれろじやない! 巡視船マンローとノース号とともに当海域を退避せよ!!!』

「ど、どういうことだ? 何があった?」

『その海域はフエン王国へ強襲する敵勢力の艦隊の進路上となっている!!!直ちにマンローとノース号とともに当海域を避難せよ!!!数はおおよそ45隻と報告では上がっている!レーダー上で見つけた場合、その艦隊を避けて航海するんだ!』

「な、何だつて!?!」

と同時に船体に揺れが生じる

そこから爆発音が響き、ケンは最悪の予感が頭を感じた。

目の前の艦隊はいきなり発砲した

接近し、甲板に帆船を見学しようとする乗員が見ていると相手はいきなり、横腹を見せたとおもうと大砲をこちらへ向けていた。

それに気づいた時にはすでに遅く1000mへ入った時に8隻が砲撃していた。

飛んできた砲弾はマンローにいくつも直撃し、球体の砲弾は薄い装甲しか持たない巡視船でもいくつかわ耐えられても、その中に炸薬が入っているせいか、運悪く船尾にめり込んだ後、爆発した。

マストにも命中し、マンローはボロボロの状態であった。

艦橋にも命中し、窓ガラスの割れた破片が床に飛び散っている中、指示を出す。

「ゲホッ!ゲホッ!ひ、被害報告!」

「機関室被弾！およびマストやヘリポート、甲板にも被害が出ており、甚大な被害が出ています！負傷者多数!!」

と頭から血を流したまま乗員が叫ぶ

「システムは…戦闘システムはどうだ！」

ハミルトン級カッターはアメリカ沿岸警備隊が保有する長期間航海する事を想定され、建造した巡視船だ。

本級は対中に向け海域警備強化の一環として2022年から沿岸警備隊強化計画により強化されている。

(Wikipediaのデータを参考にしていますが、多少改良されています。)

船種 WHEC： 長距離用カッター

(High Endurance cutter)

就役期間 1967年 — 現在

性能諸元

排水量 基準3,100トン / 満載3,600トン

全長 130.37 m

全幅 13.06 m

吃水 4.27 m

機関 CODOG方式

航続距離 デイゼル推進時：15, 500海里（20ノット巡航時）

ガスタービン推進時：9, 600海里（25ノット巡航時）

速度 最大30ノット

電力 計 2,500kW

乗員 150名

兵装 62口径76mm単装速射砲×1基、Mk. 38 25mm単装機銃×2基、

Mk. 15 20mmCIWS×1基、ハープーンSSM 4連装発射筒×2基、RI

M-116 RAM-5×1基、M2 12.7mm単装機銃×4基

レーダー AN/SPS-40C 対空搜索用、AN/SPS-73 対水上搜索用

GFC Mk. 92 mod. 5型

などRIM-116 RAM-5、ハープーンなど搭載された重装備となっている。

「は、はい！AN/SPS-40C、AN/SPS-73はともに正常！武器システムもいくつかの25mm単装機銃が現在破損しており、ヘリ格納庫は砲弾により破損！通信機器もアンテナをやられたせいで破損……!?ガスタービンエンジンや推進軸にも砲弾

が爆発した影響で破損しています！」

「何!?!今はどのくらい出せる!?!」

「だいたい15ノット程度であれば可能です。通信関係は完全にダメです…」

ドオオオオオ

「ヘリ格納庫で爆発有り!ヘリが燃料に引火し爆発したようです!」

そこへ駆け込むかのように艦橋へケンが入る

「か、艦長!!あの国旗はパーパルティア皇国です!」

「何!?!」

艦長はすぐに負傷者を救護し、火災鎮火の指示を出すと確認するように乗員へ言う。

「くっ!進路を退避行動へ!全速力で包囲網から抜け出すぞ!」

「了解!」

「よし、システムは生きているな?」

「はい、何とかいつでも攻撃可能です!」

「よし、砲撃してきた艦隊を敵艦隊1と判断し、攻撃するぞ!76mm単装速射砲とCIWS!!攻撃開始せよ!ハーブーンも奴らにやられた分しつかり返せ!アメリカ沿岸警備隊を舐めるな!と奴らに伝える!できるだけノース号が十分安全な海域まで避難す

るまでこいつらを止めるぞ…」

「し、しかし、速力15ノット程度では追いつかれる可能性が…」

「どのみち15ノット程度ではこの艦隊に追いつかれる可能性が高い。レーダーから見
て奴らは14ノットほど出ていた。」

その速度だとノース号が追いつかれることはないと思うが、竜が出てこられると話
は別だ！

あの艦隊にもし、1機でも航空戦力が搭載されていたら、あつという間に追いついて
しまう！

さつき、ケンから通信を傍受したようだが、海軍の艦艇がこっちへ向かっているとの
ことだ、ならばここで踏ん張れば、助けがくる！それまでは何とか退避しつつ奴らと交
戦するしか道はない！

「りよ、了解！76mm単装速射砲とCIWS！Fire！！」

とボロボロの白い船が意地と言わんばかりに異世界軍へ砲撃する!!!

これが超大国と異世界の列強国との最初の水上戦となった歴史的瞬間でもある。

24 フェン沖海戦後編

フェン王国派遣艦隊

旗艦強襲揚陸艦アメリカ級ブーゲンビル

艦長フランクリン

「艦長、フェン王国沖合まであと10分です。」

「うむ、わかった。」

米国が主体となり、新しく発足させた北米大陸条約機構（North American continent treaty organization）NATOは、北大西洋条約機構とは全く違う新しい機構として発足した。

かつての国連はもはや機能しなくなり、旧国際連合本部を中心とし、国連の機能をそのまま移植したアメリカ合衆国とカナダを中心とする北米大陸条約機構の本部として使われた。

この条約機構はアメリカやカナダを中心とする北米大陸国家と軍事同盟、安全保障条約を締結する国家などが加盟する。

基本的に異世界の国家が持つ軍事力ではアメリカ軍との連携はかなり厳しく、アメリカ軍が主体となって敵国家と連合となり、敵国家と戦争する。

これはアメリカ合衆国との重要な貿易関係を持つ国家を保護することで權益を守ることが、最も重要な事項であった。

これが現代の地球であれば必要ないのだが、戦争が日常茶飯事の世界で安全に貿易国との交易ができるはずがない。

そのためにクワトイネ公国、クイラ王国、グラミラート王国など軍事同盟を締結。

まだ、新しく発足したばかりで加盟国は4カ国と少ないが、これはアメリカ政府とカナダ政府が事前に制限をかけているからだ。

無闇に北米大陸条約機構へ加盟してもらおうと北米大陸国家側にとって利益を出さない国家まで守る義務が発生するからだ。

なので、加盟には厳しい審査があり、この条約を知る他国ではこれに加盟しようと外交上で躍起になっていた。

はじめに言えば、アメリカやカナダはあくまでも北米大陸条約機構へ加盟することには制限をかけているが、国交を締結しないとまでは言っていない。

だが、文明圏外の国家はアメリカやカナダと国交を締結することでアメリカ軍の軍事力を背景に外交に利用しようとする動きもあった。

閑話休題

フェン王国派遣艦隊は、フェン王国もアメリカ側にとって良好なウラン鉱石などが採掘できるため、パーパルディア皇国との戦争状態であったフェン王国を守るために派遣された艦隊だ。

フェン王国派遣艦隊はパーパルディア皇国との戦争状態が終結するまで駐屯することになり、現在パーパルディア皇国の艦隊が進撃している情報を受けて、急行していた。

フェン王国派遣艦隊

旗艦強襲揚陸艦アメリカ級ブーゲンビル

アーレイバーク級駆逐艦

・マステイン

・チャファイ

・マンセン

沿海域戦闘艦インディペンデンス級

・ジャクソン

・モントゴメリー

強襲揚陸艦には陸上戦力や航空戦力艦上戦闘機F-35B型、輸送機MV-22D型、CH-53E/K、汎用ヘリコプターUH-1Y、MH-60S、戦闘ヘリコプターAH-1W

など計35機の航空戦力

それに加えて後期型のアーレイバーク級駆逐艦や沿海域戦闘艦インディペンデンス級など異世界の国家に対し十分すぎるほどの戦力を派遣した。

彼らに新たな下された任務が、第二次皇国監査軍東洋艦隊を撃滅するため現場へ急行し、今回は殲滅せず、できる限り戦死者を出さず退却させる、と言うもの。

この艦隊の司令官はエイドリアン准将

エイドリアンは先のロウリア王国との戦争を考えていた。

特に4400隻VS20隻との戦闘はアメリカ軍の圧勝となった。

戦列艦とイージス艦、性能の差という話の次元ではない、もはや一方的なジェノサイドだった。

ロウリア王国のギム虐殺が大々的に報道されたことで国民は報復色が強くなったため、追求はされなかったが、今回は完全なる防衛戦となる。

帆船はマストがなければ行動能力を失ったも同然である。

ならば、最初の戦列艦はあえてマストを狙い、相手が退却できるようにする必要がある。

パーパルディアア皇国と合衆国は戦争状態とはなっていないが、CIAやペンタゴンは戦争になるのも時間の問題と考えている。

あの国は列強国である上、我が国とカナダとの国交がある国へ侵攻する可能性が非常に高く、未だパーパルディアア皇国外交団は良い返事をもらっていない。

だが、今のアメリカにとって大規模な戦争ができるほどの余力はあまり残っておらず、できれば避けたい。

少なくとも1年は待つて欲しいところでもあった。

と考えたエイドリアンは戦闘準備に取り掛かるが、そんな彼に一本の通信が入った。

それはウラン鉱石を運搬するノース号からの救援だ。

内容は謎の45隻の艦隊から襲撃を受けたこと、ノース号を護衛していた巡視船マンローが敵艦隊との交戦に入ったことで、エイドリアンは直ちにF-35D攻撃隊を発艦させ、向かわせるのであった。

巡視船マンローの状態は非常に最悪な状態となっていた。

第二次皇国監査軍東洋艦隊から距離1000mで砲撃されたマンローはヘリ格納庫、機関室、通信アンテナ、艦橋などへ命中し、ヘリ格納庫で火災が発生。その数秒後に通信アンテナが残留した砲弾の爆発により損傷、さらに機関室でも運悪く砲弾が爆発した影響によりガスタービンとディーゼルエンジン2基と推進軸が損傷したことで15ノット程度しか速力が出せなくなった。

さらにハーブーンSSM 4連装発射筒も1基が支える支柱に砲弾が命中し、倒れてしまった。

マンローはすでに半包围されており、後続がマンローの退路を塞ぐように回り込む。完全なる包围状態となったマンローは満身創痍ながらも幸いだったことは武器系統にハーブーンSSM 4連装発射筒1基以外あまり問題はなく、戦闘可能であったこと。

アメリカ沿岸警備隊と第二次皇国監査軍東洋艦隊との戦闘が幕を上げた。

目の前の白い船は後部から爆発したと思えば炎上し、船体には複数の弾痕があった。

あれだけ砲撃して轟沈しないとは驚いた：

蛮族が作る船はあつという間に沈むものだどヴァルロアトは思っていたが、どうや

ら考えが甘かったらしい。

だが、関係ない。砲弾は装填が完了するのに数分はかかるが、あの船は反撃のそぶりを見せない。

もう一撃与えれば撃沈するだろう。

ここまで巨大船だと竜母からワイバーンロードを出撃すべきか迷ったが、使うまでもない。

とタカを括っていると巨大な船は聞いたことのない唸る音がしたと思えば急加速した。

な!?なんだ、あの加速力は!?一体どんな魔法を使っている!

白い船は砲撃を回避するために回避行動し、船首の巨大な砲台が動いた。

「あれは砲台か、蛮族があればほどの大砲を作る技術があるとはな……」

と関心を抱くと突如砲台からダンと轟音をあげると近くにいた戦列艦が爆発する

「な、なんだ!?!」

と考える余地もなく、砲台からはダン、ダン、ダン、ダン、ダンと連続的に音が響き、次々と戦列艦が被弾していく!

被弾した戦列艦は1発では沈まなかったが、すでに大破寸前まで追い込まれていた。

マストは倒れ、船首はすでに木っ端微塵となり、船倉に積まれていた爆発物が爆発す

る！

「く、なめやがって、あの船を撃沈しろ！放てええええー！！竜母からもワイバーンロードを発艦させろ!!!」

第二次皇国監査軍東洋艦隊はドドドーンと次々に砲撃するが、急発進急加速を繰り返す白い船になかなか当たらない。

そして、甲板についていた棒状の何かに人が取り付くとそこからダダダダダダダダと連続音が響き、戦列艦がボロボロになっていった。

「Fire! Fire!! Fire!!! 全ての弾薬を使い果たす勢いでアタックしろー!!!」

とマンローに搭載されている62口径76mm単装速射砲×1基、Mk. 38 25mm単装機銃×2基、Mk. 15 20mmCIWS×1基が砲火を吐き、白い船は次々発砲する硝煙で漂っていた。

「か、艦長！ハーブーン準備完了しました！」

「よし、左舷に展開している艦隊に攻撃しろ！そこから空いた穴から包囲網を抜け出す！」

「了解！目標B群、23番から27番目標！攻撃開始！ハーブーンFire！」

とハーブーンSSM 4連装発射筒からハーブーンが連続的に発射する。発射されたハーブーンはあまりにも距離が近いため、一旦艦隊上空を通り過ぎた後、外部から再び目標へ攻撃するようプログラムされていた。

甲板でも戦闘要員がMk. 38 25mm単装機銃やM2 12.7mm単装機銃を使って、戦列艦に攻撃していた。

距離1000mであれば十分射程圏内であつたため、銃座には機銃手、弾薬運搬、それ以外はM4カービンを使って攻撃する

「くそ！ 奴ら撃つても撃つても次々と現れやがる！ ケン！ そっちはどうだ！ ジョージ！」

「ああ、なんとか突破口を開きたいとこだが、さつきのハーブーンが開いてくれることを祈っているよ……」

「だあくファック！ それまではこの状態ということかよ！」

「!? 伏せろ！」

とそこへ空からいきなり、火炎弾が甲板へ降り注ぎ、乗員を火だるまにする

「うわあああああゝゝゝゝ!!!」

「助けてくれー！」

そこには火だるまになった者、火炎弾によって身体の一部が欠損した者、頭を抱えて

伏せている者

まさしく戦争だ。

空にいつの間にか、飛んでいる竜から放たれる人間も炭に変えるかのような高温の火炎弾。

空の葉莖が甲板に転がる

繰り返し砲撃される火炎弾によって船体へ着弾音が響きわたる。

俺たちが一体何をした？ 訳も分からないのにいきなり転移して、ただ仲間作りしているだけなのにこんなことって…理不尽だ…

ちくしょう…娘に会いたい…

提督ヴァルロアート

マンローは持っている限りの装備をフル活用し、第二次皇国監査軍東洋艦隊は思わぬ苦戦を強いられていた。

たった1隻、1隻に第二次皇国監査軍東洋艦隊は既に4隻の戦列艦が撃沈され、6隻が無視できない損傷が出ていた

先ほど、打ち出した光の矢はなんだったのか、さっぱりわからなかったが、我が外務局所属皇国監査軍東洋艦隊がなんてざま…！

だが、奴もワイバーンロードが加わったことでいくつか被弾したのか、火災を起こしている。

あれならもうすぐ撃沈可能だろう。

まさか、あれほどの戦闘能力を蛮族が持っているとは考えにくい、やはり列強国か？
だがどこだ？あの白い船は魔導師からの情報では全く魔力の反応がない、とのことだ。

魔力を一切使わず、これほどの光の弾幕を張る？

あり得ない、できればあの船を拿捕したかったが、ここまで抵抗されては仕方ない。
せめて、あの乗員を捕虜にすれば何かしらの情報は得られるだろう

上空にはようやくワイバーンロード部隊が展開できた。

これで終わる。これで…と

「ち、思ったよりも頑丈だな…一体どこの列強国が建造した船なんだ？」

すると背後からヒュー…と風を切るような音がだんだん大きくなってきた。

人生で聞きなれない音にヴァルロアートは後ろへ振り向く

するとそこには白い矢が天空へ向かって飛翔していた！

「な、なんだ、あの矢は!？」

白い矢は天空へ上昇したか、と思うとまるで誘導されるかのように下へ急接近した。

「!まずい、あの矢を迎撃しろ!!」

とヴァルロアートが命令を出す、水兵がそれを認識する前に白い矢は4つの戦列艦へ連続的に命中した。

命中した戦列艦は巨大な火柱を立てると船体が黒煙で見えなくなった。

爆発の衝撃?波は隣にいる戦列艦へも影響し、マストが折れ曲がっていた。

「……!!!戦列艦クロード!マミュニア!ダート!アルロート!しよ、消滅!消滅しました!!!」

「ば、バカな一体何が…先ほどの攻撃はどこから来たというのだ…!!!??ま、まさか…」

先ほどの巨大な白い船から謎の光の矢!!!

あの時か!?だが、一体どうやって戻ってきたというのだ!?奴はまるで自分で意思を持つかのように正確に攻撃した!

しかもそれが寸分の違いもなく正確に4隻ともに命中したというのか!?

ヴァルロアートの中であの船は危険であると信号が鳴っていた。こいつの情報を知りながらも祖国へ届けないと…我が祖国の命運に関わることになる…!

最初はただの巨大なだけの蛮族の船だと思っていた。

それが蓋を開けてみればどうだ?

戦闘開始から5分ほどであの船はダンダンダンダンと連続の轟音が響くと次々と戦列艦が被弾し、連続音になると蜂の巣にされた戦列艦も出た。

彼らは既にこちらの攻撃がいくつも命中しているだろうが、火災となり、艦が傾いていた。

たった1隻に第二次皇国監査軍東洋艦隊45隻のうち半数が中破損傷し、10隻が撃沈された。

こいつを何としても沈めなければ…

ヴァルロアートは白い船は既に満身創痍であることがわかっていた。

連続音も光の弾幕もだんだんとなくなってきた。

沈めるなら、今だ！と強く決心した提督は息を吸い、命令を出す

「砲撃しろ!!! 奴はもう虫の息だ!あと少しで奴を沈めることができる!全艦突撃しろ!!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』

と艦隊はマンローを追撃する。

巡視船マンロー艦橋

「艦長!!!ハーブーン命中!突破口が開きました!!!」

「よし、そこへ舵を取れ！機関最大船速!!!」
艦はガスタービンが唸りを上げる。

キュウウー—————
!!!!!!

船体は急加速と急停止を繰り返し、既に機関室では残った機関を動かそうと乗員が走り回っていた。

武装も62口径76mm単装速射砲×1基、Mk. 38 25mm単装機銃×1基などがなんとか射撃しているが、それ以外の装備が上空からの攻撃により既に使えない状態であった。

唯一頼みであるRAMも対空レーダーが損傷したことで攻撃することができなくなった。

しかし、できる限り主砲や機銃は弾薬が許す限り打ち続けた。艦橋内は悲鳴と損害報告や弾薬切れなどの報告が飛び交った。

元々海賊などの武装勢力を撃退することが前提の巡視船にこれだけの艦隊と近場でやり合うような艦ではない。

ハーブーンも撃ち尽くし、対空システムも被弾してダメになった。

船体はなんとか包囲網から脱出するも戦列艦に搭載された3連式カノン砲が船首からこちらを狙っており、距離は一向に伸びない。

全速力でも15ノットしか出せない状態で、ただひたすら助けを待った。

船首が艦隊とは反対方向を向いているため、艦隊へ砲撃はできない、できることは上空を飛翔している竜を追い払うために弾幕を張ることくらいだ。

だが、残弾も残り2割を切ったとき、艦長以下乗員たちは覚悟した。

「くそ…万事休す…か」

と聞いたことのある音が前方の方角から聞こえてきた。

それは何かを噴射する音であった。

この音は…

ケンも甲板の上でMk. 38 25mm単装機銃を上空にぶちかましていた、上空に弾幕を張る中、最悪の通知音が響く

ドドドドドドドド…ピーピーピー!

残弾が切れた音だ。

く! 残弾なしか…マズイ…うん? この音は…これは…

マンローからの攻撃が止んだことを好機と見て上空に飛翔しているワイバーンロー

ドが襲いかかろうと降下しようとしたときワイバーンロードは爆発した！

突如爆発したワイバーンロードは竜と竜騎士がバラバラとなり、そのまま海へ落ちる。

それを見たケンは歓喜した

「やつと来やがったか…おせーぞ！海軍!!!」

と上空にF-35Bが6機上空に現れた。

これに乗員たちは歓喜した！

やつと…やつと…救援が来たからだ。

その後、衝撃と共にケンは意識を失った。

それと反対に第二次皇国監査軍東洋艦隊の水兵や将校たちは驚愕した表情で顔色が真っ青になった。

自分たちはたった1隻の強敵に遭遇し、あと少しで撃沈できるところで頼りの上空へ展開していたワイバーンロードが突如見たことのない光の矢によって全て撃墜された。

光の矢は正確にワイバーンロードを狙っており、回避しようとしたワイバーンロードにまるでそこを通ることを予測しているような軌道であった。

状況が非常にまづいことになったことを察知した、将校をはじめとする水兵たちは恐

既にヴァルロアートは頭が真っ白になっており、第二次皇国監査軍東洋艦隊も合計20隻の艦隊を撃沈、5隻は逃走した。

残り竜母を含む20隻の艦隊のうち17隻が先ほどの白い船との戦闘で損傷していた。

一斉射撃した灰色の艦隊は2発目が放たれ、また、3隻が撃沈される。

3発目は3隻のマストに命中したのか一気にマストが他のマストを巻き込みながら倒壊したり、横転するものが出る。

信じがたい連射能力と命中精度：

通常大砲は有効射程2kmであるが、さらに命中弾を得るには弾幕を張るために大砲を多く搭載した100門級、150門級と大砲を多く搭載する。

波が存在する船の上で海の日標へ当てるのは至難の技だ。

多くの大砲を搭載しても距離2kmの100門命中するのは1割未満、1kmであれば3割と命中精度はやつと上がる。

そして、さらにバラバラバラと何やら空気を叩くような音がすると思えば今度は鉄の虫が現れた！

「!?くそくそ!!!撃ち返せ!あのハエどもをたたきおとせ!!!」

もはや命令は叫び声となり、兵士たちも恐怖の顔で撃ち落そうと大砲の広角を上げて

上空へ打ち上げる。

第二次皇国監査軍東洋艦隊へ止めを刺しに来たのはアメリカ海軍のフェン王国派遣艦隊、旗艦強襲揚陸艦アメリカ級ブーゲンビルから飛び立った汎用ヘリコプターUHIY、MH-60S、戦闘ヘリコプターAH-1Wだ。

計12機の航空隊が空から第二次皇国監査軍東洋艦隊へ襲いかかる。

空に待機しているF-35Bも攻撃に加わり、わずか数分で第二次皇国監査軍東洋艦隊は4隻だけとなった。

竜母も戦闘ヘリコプターAH-1Wのロケット弾攻撃によって爆沈した。

4隻となり、攻撃が止む。

「ば、バカな……一体何を間違えたというのだ？」

「て、提督!!! た、直ちに撤退しましょう!!!」

「て、撤退だ……と……!」

「今や第二次皇国監査軍東洋艦隊は旗艦を含めたった4隻だけになりました! 攻撃が止んでいる今がチャンスです!!!」

「く……う……て、撤退……する……」

ヴァルロアートは目の前の灰色の巨大艦を目線で殺す勢いで睨みつけたあと、撤退し

た。

艦隊が次々と撤退する様子にアメリカ軍は不気味にも一切何もせず、ヴァルロアート提督以下第二次皇国監査軍東洋艦隊は満身創痍になりながら撤退した。

旗艦強襲揚陸艦アメリカ級ブーゲンビル

エイドリアン准将

「司令官本当によろしかつたのですか？彼らは軍組織に属しているとはいえ、民間船に手を出そうとしたテロリストどもですよ」

「・・・例え行動がテロリスト同様でも彼らは軍人であり、人間なのだ。既に決まっていることをわざわざ手を下す必要はない。できれば彼らには海面に漂う乗員の救助を行って欲しかったが、彼らを救助せよ」

「アイアイサーー！」

これで我々アメリカの力はパーパルデア皇国に伝わり、戦争しようとする意思はなくなるはず…

できれば決まっている戦いにおいて無駄死にする兵士は少なくなかったが、彼らは巡視船マンローに攻撃した。

それは即ちアメリカへの攻撃意思とも取れ、今のアメリカに大規模派兵はできなくはないが、そこまで余力はない。

戦争を行うことになれば何より民衆が許さず、例え結果が予想されていたことでもそれを認識することができなければ行動に移せず、アメリカ国民は戦争に消極的だ。

巡視船マンローも集中攻撃によりボロボロとなっており、現在本艦で負傷者を治療中だ。

これ以上戦火が広がらないことを祈りながら、任務をこなすのであった。

ブーゲンビル艦内

「う、うう……」

「！ケン！目覚めたか！」

「あ、ああ……ここはどこだ……」

「ははは、ここはアメリカ海軍の強襲揚陸艦の中だ。お前は甲板で敵機の攻撃を受けて、気絶していたのさ」

「そうか、もう戦争は終わったのか……」

「ああ、海軍さんが奴らを蹴散らしてくれた、ケンにも見せてやりたかったぜ」

「よせ、もう俺はコリゴリだ」

その後、巡視船の行動はアメリカ政府や国民から評価され、乗員全てに勲章を贈与さ

れることになるのだった。

ケンも後日、無事帰国して娘と泣きながら会っていたという……

25 噂

神聖ミリシアル帝国

港町 カルトアルパス とある酒場

中央世界にある誰もが認める世界最強の国、神聖ミリシアル帝国。

その交易の流通拠点となっている町、港町カルトアルパス。ここは、各国の商人たちが集う町であり、商人たちの生の声は、各国の事情を現す生の声として、情報源としても、非常に価値があるため、商人の姿に紛れ、各国のスパイたちの集まる町でもある。

神聖ミリシアル帝国は世界トップの魔法文明先進国であり、街並みには高度な魔導技術を使用した夜間に街を照らす空中に浮かぶ街灯、木製と金属の船が上空を飛び交い、数十mほどの高層建造物など高度魔法文明としての光景が見受けられる。

とある酒場では、酔っ払った商人たちが、自分たちの情報を交換していた。樽のような体をして白い髭を生やした男が豪快に話し始める。

「おい聞いたか？第2文明圏の列強レイフォルが、新興国家に敗れたらしい」

「ああ、確か第八帝国だったよな？おい、誰か第八帝国について知っているやついないか？」

ローブをかぶった顔の青白い男が話し始める。

「ああ、知っている。」

第八帝国は通称らしいぜ、本当の国名はグラ・バルカス帝国という国らしいな。

俺は、レイフォルの首都レイフォリアで香辛料の商売をしていたが、あの恐ろしい日は今でも忘れない。

ある日、突然首都近辺の警備が厳しくなって、いつもはちよつとしか配置されていない首都防衛用の魔導砲が設置された台場に、大量の人員と、予備の魔導砲までたったの数時間で設置された。

さらに、首都近辺にある竜騎士の基地に大量のワイバーンロードが全国から飛来してきた。

いったい何が起こるのかと、商人たちでも噂になったよ。

兵隊に聞いても、「今は話せない」の一転張り、第八帝国が攻めてくるのでは？といった声もあったが、皆列強であるレイフォルの勝利は疑っていなかったし、不安になる者もいなかった。

そして、それは変化のあった翌日の夕方やってきた。

昼頃から、ワイバーンロードが何度も編隊を組んで海の方へ飛び立っていったが……
帰っては来なかった。今思えばこの時点でおかしいと気がつくべきだった。

港に戦艦が現れたんだ！とてつもないデカイ戦艦だったよ。山のような戦艦、そして
陸地からでもはつきりと見えるほどの、とてつもなくデカイ砲を積んでいた。

俺は、あんなデカイ船は、生まれて初めて見たよ。

戦艦は、レイフォリアの沖合6kmくらいに停船した。台場の魔導砲の完全な射程圏
外だった。

そして、それは砲撃を放った。

一隻の砲撃など、たかが知れていると思ったが、その威力は炎龍でも作り出せないの
では無いかと思うほどの威力があった。

台場の魔導砲は一発で消滅したよ、

レイフォリアに対する無差別砲撃は怖かった…。

とにかく逃げて逃げて逃げたよ。やつらは、とてつもなく強い。たった一隻で、列強
の首都を消滅させたのだ!! 列強ムーもあれには負けるぞ。世界はグラ・バルカス帝国に
支配されると思う…」

「おい待て、レイフォールに勝つとは確かに強いが、世界最大の魔法文明を持つ神聖ミリシ
アル帝国に勝てる訳が無いだろう。格が違いすぎる。」

「機械文明のムーも、ミリシアル帝国に順ずる強さがあるからなあ。ムーにも勝てないだろう。なんだかんだ言つても、文明圏外の蛮国にムーは負けんよ」

「その蛮国にレイフォルは負けたんだよ」

「レイフォルなんて、列強といつても……言つちや悪いが、最弱の列強だろう？」

一般国に比べれば遥かに強いが、他の列強にくらべると、実力は遥かに弱い……」

「お前らはグラ・バルカス帝国の恐ろしさを知らないから、そんなことが言える」

酔っ払いどもの話は続く。

「そういえば、ロデニウス大陸でも戦争が起きたな」

「ああ、確かロウリア王国だろ？あの国は人口だけは列強以上にいるな」

「ああ、そこへこの前交易に行つたが、隣国のクワトイネ公国に宣戦布告して、亜人の殲滅を目標としていたな……」

「亜人の殲滅？無理に決まっているだろう。さすが蛮族の国！」

「だが、途中でアメリカとカナダっていう国が参戦してな、あつという間に敗北したよ。脅威の侵攻速度で攻め込んできたらしい、聞いたところによると見たことのない鉄竜や鉄像が現れたと思えばあつという間に首都を占拠しやがった。

ロウリア海軍の4400隻の大艦隊もアメリカ海軍に太刀打ちすらできなかつたらしい。

しかも4400隻がたったの20隻の艦艇に大損害を受けたと聞いている。

クワトイネ公国やクイラ王国もその国と国交を締結したらしいが、その二カ国は凄まじい速度で発展しているらしい。

アメリカとカナダは今後も、世界に名を轟かせる国になるかもしれない！」

「はあ？戦争で一人も戦死者が出ない、たったの20隻に4400隻が撃退された？お前、正気か？」

それはどう考えても情報操作された情報だ。あり得ない。」

「しかもロウリア王国が敗北した？どこかの列強国がアメリカとカナダに味方したとしか考えられないな」

「一度も名前を聞いたことのない国が勝利することなんてあり得ない。お前もう少しまともな情報を拾ってくるんだな」

「し、しかし、見たことのない鉄竜や鉄像が現れた情報もあるぞ！」

それにこの情報はロウリア王国裏情報だから間違いない！」

「お前考えても見ろよ、鉄でできた飛行機を作るだけの技術を蛮族が持つわけないだろ、神聖ミリシアル帝国やムーならともかく」

「よくある戦場伝説つてやつさ」

「まあ、グラ・バルカス帝国やアメリカ、カナダがいくら強かろうと、神聖ミリシアル帝

国とは、格が違うさ。絶対に勝てないよ。結局、中央世界はいつまでたつても安泰さ！古の魔帝が復活でもしない限りな」

「そうだな、がははははははは！」

（くつ、信じられないのも無理はない、俺も信じられないさ！今も頭に焼き付いた轟音とともに通つたあの鉄竜：あれは神聖ミリシアル帝国やムーなんてものじゃない：もつと速かつた：それにあれほどの化け物を作るなんてとてもミリシアル帝国でも無理じゃないか？）

「でも聞いたか？パーパルディア皇国から出撃した艦隊が文明圏外の国へ戦争しに言つたらしいだがよ」

「ああ、第3文明圏の列強国だろ？それがどうした？いつもの通り一つの国を壊滅させて、属国を増やしたか？」

「いや、それがよ、俺もパーパルディア皇国エストシラントで繊維関係の商売をしていたが、戻ってきた艦隊がたつたの4隻だけだった。

しかも竜母艦も撃沈されたらしい。」

「何？竜母艦も？一体どんな国と戦争した？ムーにでも喧嘩を売ったのか？」

「どうやらフェン王国っていう国らしいだが、その港の発展具合がどうも変だ、第3国

による関与の可能性が高いらしいぜ」

「ほう、フェン王国はワイバーンすら持つていない剣術の国だろ？そんな国に手を貸す列強国か文明圏の国家などいるのか？」

「恐らくないだろうが、どうも最近の東方の各国の技術の進歩が異常だ…。」

「異常？」

「ああ、ロデニウス大陸クワトイネ公国との香辛料取引もしているが、つい半年以上前まで小規模だった港湾が灰色の石で加工された巨大建造物が建った大規模な港湾設備に変わっている。」

「巨大建造物？」

「そこにはつなぎ目のない黒い道、正確な四角い形の建造物、金属でできた建物もあった。」

それに港には大型船も停泊していて、その大型船は全長200mを超えていた。

それも複数あったな…

内部の方でも半年前までなかったレールの上に金属の魔導車が走り回っていたんだ。

それだけじゃない、道には我が国のような魔導車複数走り回っていて、半年間で一体何があつたと思つた。

それがクワトイネだけじゃない。クイラ王国も同様だった。

その開発に必ずと言っていいほど名前が出るのは「アメリカ」「カナダ」だ。

正直に言えば……この街光景とそれほど差がなくなってきた。」

「おいおいおい、冗談はよしてくれよ、第一半年で港湾施設を建設することは不可能だし、200mの大型船？お前夢でも見ていないか？

第二に魔導車は我が国かムー帝国のような一部の列強国しか持っていない。

魔導車一台購入するのに高級なのにそれが複数も？

明らかに現実離れしすぎているぞ？

それにその話が本当ならアメリカやカナダは中央世界に迫る技術を持っていることになるぞ？

あり得ないな」

と鼻で笑う

「いや、だが、確かにこの目で見たんだ。

その時に新しくできたカーマートというお店で買ったんだが、この繊維をしてみると男性は高品質の紙袋から黒いダウンジャケットを取り出す

「これは……随分品質の高い繊維だな……全部均等に正確に縫い合わせてある……」

「ああ、……までの品質を作る職人は今まで見たことがない」

「……だが、結局は服だろ？その程度なら神聖ミリシアル帝国だってあるさ！そのアメ

リカやカナダという国は恐らく列強国が支援している可能性が高いだろう。そうでなければ蛮国がそんな技術を持つことはできない。

どの国が支援しているか、知らねえが一応警戒はしたほうがいいかもな、ここまでの品質なら十分神聖ミリシアル帝国の繊維と対抗できるしな」

「いくら民芸品の品質が高かろうと武器もまともに作れないような国家に神聖ミリシアル帝国やムー帝国が劣るわけがないだろ」

「がはははは!!」

酔っ払いどもの楽しい夜は更けてった。

クワトイネやクイラで見た商人の話はアメリカエネルギー企業などが工場、巨大な港湾施設、交通網を建設したからだ。

何もない状態から半年でクワトイネ公国やクイラ王国は電気・水道・ガスが通るようになった。

国内全体で凄まじい勢いでアメリカ・カナダ企業による開発が行われてきた。

企業による両国を中心とする国々は雇用、生産、消費、需要、供給を全て生み出し、結果アメリカやカナダにとっても、各国にとってもお互い非常に良好な関係となっていた。

アメリカやカナダに関わつた国はまさしく産業革命状態であり、それによつて職人や商人ギルドによる運動も社会現象の一つとなつた。

そのおかげでアメリカやカナダを歓迎する声の日々に上がつて行き、同時にアメリカやカナダの技術・科学を盗み出そうと諜報合戦が水面下で行われるようになり、アメリカの国防総省やCIA、NSA、連邦捜査局などが国内、国外を問わず奮戦することになった。

アメリカとカナダによる東方の各国は国力を増強させ、列強国に迫るまで技術促進が行われている。

このまま成長すれば5年ほどで列強国を超える技術力にもなり得るだろう。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント第3外務局

第3外務局長カイオスは焦つていた。

フェン王国へ制裁を加えるために二度目に送り出した艦隊がボロボロの状態となつて姿を表したからだ。

最初は5隻、その後4隻と合計9隻ほどしか帰つてこなかつた。

それが意味することは失敗。

しかも竜母艦も撃沈されたということ。

これを最初聞いた時、夢か、と思った。悪い悪夢だと。

現実へ引き戻されるかのように次々と来る第二次皇国監査軍東洋艦隊の損害報告と水兵、ヴァルロアート提督を含む負傷者の報告：

もう、頭が真っ白になった。

い、一体どこの国と戦争した？

間違えて列強国の艦隊と鉢合わせてしまったのか？

巨大海獣でも現れて艦隊を襲ったのか？

いや、むしろそっちの方がまだ、現実的だし、海獣に襲われた方がまだ、名目上救いがあつた

頼むから、そっちであつてくれと希望的観測を抱いていたが、無慈悲にも彼の元へ報告書が届く。

第二次皇国監査軍東洋艦隊 戦闘記録

艦隊は皇都エストシラント港湾から出撃し、数日ほどでフェン沖へ到着。

ヴァルロアート提督はワイバーンロードの戦闘継続能力を考慮し、フェン王国首都から10km地点で展開する予定であつた。

道中で遭遇したフェン王国海軍は少数ながら撃滅し、順調に進撃。

フエン王国首都まで少しのところまで巨大船2隻と遭遇。

1隻は白い目立つ船であり、後方にいたもう1隻は白と黒のラインが入った巨大船。艦隊は白い船と戦闘を開始した。

ここまで記録は正確に取れていたし、順調だった。何も問題ない。だが、そこから異常であった。

45隻対1隻なんて子供でもわかるような結果を大きく覆し、白い船は船首に取り付けられた大砲によつて数分で4隻が轟沈。

その後、ヴァルロアート提督は竜母からワイバーンロードを出撃させ、白い船を撃沈しようとする戦となった。

しかし、白い船はダンダンと音になるたびに戦列艦に着弾していき、1発も外さず、全ての砲弾を命中させた。

さらにダダダダと連続音が鳴ると戦列艦や甲板に出ていた兵士が蜂の巣となり、ワイバーンロードも光の弾幕により4騎ほどが撃墜。

白い船は光の槍を放つとそれはまるで自分の意思を持っているかのように正確に戦列艦へ全て命中し、被弾した戦列艦は消滅した。

白い船はその後火災を発生させながらも信じられない急加速と急発進する能力を持つていた。

あと少しのところまで上空に展開していたワイバーンロードは全て鉄竜によって撃墜、その後新たに灰色の巨大船5隻が介入したことにより艦隊は正確な百発百中の驚異の命中性能と威力、さらには射程5000などの射程距離を持った砲撃によりヴァルロアート提督は負傷、第二次皇国監査軍東洋艦隊は壊滅した。とあった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ、これは……

船は水上で移動するため、当然波の影響で揺れるし、砲弾を相手の艦艇へ命中させるには数で撃つしか方法はない。

そのために戦列艦には1000門級や1500門級などが存在する。

さらに射程は列強国でも2000なのに、それが5000？

そして、信じがたいほどの加速能力、魔法は一切関知されず、全てのムー帝国のような機械式だと？

もし、この報告が本当であれば第二次皇国監査軍東洋艦隊は超機械文明国家へ喧嘩を売ることになる。

だが、そんな現実離れをした報告に外務局の局員や政務官も誰も信じられなかった。一体全体どうやってこんな支離滅裂な報告が出来上がるのだから……

くそ、この提督も病んでいるのか!?

あり得ない。1度は海の生物、2度目は謎の勢力により介入。

念のためにフェン王国との繋がりを持つ国から調べる方が早いだろう。

もしかするとフェン王国ヘムーが支援しているのかもしれない。

ああ…皇帝陛下になんと報告したら良いのか…

と胃痛を抑えるように腹に手を置き、考え込むカイオスであった。

この出来事は第3外務局のみならずパーパルディア軍全体でも衝撃的ニュースであった。

特に竜母艦が轟沈したことは多くのパーパルディア軍の航空兵士に衝撃を与えた。

当たり前であるが竜母艦はワイバーンロードを20騎以上搭載することが可能な洋上での航空戦力を運用することを想定された戦闘艦である。

それ故、竜母艦はワイバーンロードの運用を主眼として置いているため、基本的に後方から攻撃する。

となれば生き残る可能性が非常に高いはずなのに、敵船は護衛艦隊を蹴散らして竜母艦を攻撃したというのか

しかも、ワイバーンロードは1騎も帰還しなかったとのこと。

一体敵は何なのか

これに大きな反響を及んだ。

第二次皇国監査軍東洋艦隊を壊滅させた要因である謎の勢力について第3外務局は本格的に調査へ乗り出すのであつた。

このままでは列強国として他国に舐められるなど不満やストレス、怒りは先に逃亡した5隻の乗員に向けられ、この日から乗員や提督は冷淡な扱いを受けることになる。

第2文明圏最強の国 列強国 ムー 統括軍所属 情報通信部 情報分析課

ここは、国の諜報機関であり、情報を分析する部署である。

様々な国の情報が集まり、分析する。

情報とは重要であるが、この国の人々は情報をあまり重要視しないため

軍人や民間からは

・何をやっているのか解らない部署

・無意味な事をしている部署

・ココソコソといつも何かやっている

など決して良い感情を持っておらず、忌み嫌われている。

情報分析官であり、技術士官のマイラスはレイフォリア襲撃の際に魔写された、グラ・バルカス帝国の超弩級戦艦グレードアトラスターの写真を分析して、冷や汗をかいていた。

「……何ということだ……」

ムー帝国は世界で魔導文明が主流の中、科学文明に有用性を見出し、機械や科学の発展に常に力を入れていた。

神聖ミリシアル帝国のような魔導文明は一切持つておらず、世界で唯一産業革命を起している国家だ。

軍関係者や政府は最も先進国であるムーより進んだ技術を持つている超弩級戦艦グレードアトラスターのことは絶対信じない…

これほどの戦艦を建造するグラ・バルカス帝国はムーよりも進んだ科学文明なのかもしれない。

それは超弩級戦艦グレードアトラスターは

全長260を超え、明らかな30cmを超える主砲を3門3基搭載することは到底不

可能だ。

しかし、それを上の人間が認めることはない、むしろ臆病風に吹かれたと罵倒される未来しか見えない。

はあ……分析も報告も胃が痛いものばかりだ。

我が国の最新鋭戦艦は『ラ・カサミ級』

ラ・カサミ級戦艦の最大の特徴は世界で使用されている大砲をより大きく搭載口径を大きくするために船体の中央に回転式砲塔を持つことで30・5cmという超巨大砲も搭載できる画期的な機構を備えている。

さらに30・5cmとなれば砲弾や装薬は自然と大きくなり、これを後装式だけで装填するのはほぼ不可能だ。

そこで半自動装填システムを実現することで、弾薬庫から砲塔へ弾薬を昇降機で運ぶことで巨大な砲弾でも装填を可能となった。

これらによってこれまでの戦列艦の常識を超えた戦闘艦となった。

列強国で使用される風神の涙による高速を得る推進方法から、蒸気タービンを活用した蒸気推進式に変更した。

蒸気機関をここまで発展させたのはムーだけだ。

性能面としては…

- ・排水量15140トン
- ・全長131.7m
- ・全幅23.2m
- ・機関15000馬力
- ・最大速度18ノット
- ・兵装 主砲30・5センチ連装砲2基4門
副砲15・2センチ単装砲14門 他

このスペックは、中央世界の神聖ミリシアル帝国の魔道機関を搭載する戦艦とも十分渡り合える性能を持っている。

列強国のレイフォルやパーパルディア皇国の帆船に圧勝するものは言うまでもない。機械文明を最先端進んでいる先進国ムー帝国は自国のみしか発達させていない科学技術を一切他国には輸出しなかった。

これはムー帝国の他国に対するアドバンテージとなるからで、他国は大多数の国家は科学に対する認識は魔術と比べても関心が薄かった。

このスペックは、中央世界の神聖ミリシアル帝国の魔導船とも渡り合える可能性を秘めている装備である。

レイフォルや、パーパルディア皇国の帆船に圧勝するのは言うまでもない。機械文明

最先進国ムーは、彼らの国とは別格であり、神聖ミリシアル帝国に迫る可能性を持った国である。

しかし…。

マイラスは頭を掻き耷る。

グラ・バルカス帝国の超弩級戦艦グレードアトラスターは、情報によれば、30ノットくらい速度が出ていたらしい。

あの大きさだと、おそらく排水量は7万トンくらいあり、砲も38センチか、もしかしたら40センチくらいあるのではなからうか？

そんなデカイ船を、30ノットもの高速で移動させるなど、いったいどれほどの出力が必要になるのか…。概算で、7万馬力くらい必要なのではないか？

しかも砲数も格段に多い。

砲撃の威力は、口径の3乗に比例する。

つまり、この戦艦と、ムーの最新鋭戦艦ラ・カサミが打ち合えば、ほぼ確実に負ける。奇跡でも起きない限り、叩き潰される。

このような、高度な艦は、もしかしたら、砲撃精度も我が方よりも上の可能性がある。「写真を見ただけで負ける事が解るとは…。これは…技術レベルが50年くらい開いていないか!？」

技術士官マイラスは、ムーの行く末を案じていた。
もう一つの資料を見た。

はるか東方の国家間の戦争記録と新興国家の軍事資料であった。

東方はムー帝国とはかなり距離があるため、影響は少ないだろうと判断されていた。

東の文明圏外国家ロウリア王国とクワ・トイネ公国との戦争が勃発、初めは誰もがロウリア王国の圧勝と分析していたが、それを覆した国の船らしい。

その国はアメリカ合衆国、カナダ連邦

諜報員によればアメリカに関することはなぜか、わからないが、クワトイネ公国とロウリア王国を中心に多数が行方不明となったが、魔写した者の情報によればアメリカ海軍の軍艦　チャファイという名前の艦艇らしい。

全長150を超え、灰色の船体に1門の主砲。

そして、2基の対空用と思われるガトリングが搭載されていた。
「うーん……全く解らん」

まず船体は大きいのに、砲をたったの1門しか搭載していない。

よほど連射がきくのか、もしくは砲撃精度に自信があるのか……。連射するにせよ、1門よりも2門付けたほうが、威力は高いし、当たりやすくなる。

設計思想が全く理解できない。

砲が高価すぎて、1門しか設置できないのだろうか？

理解できない装備が所々見受けられる。

それになぜ、旧式のガトリングを使う？

ガトリング自体ムー帝国にも存在しており、それは手回しガトリングガンのことだ。

この艦に関しては、用途が全くもって理解できない。

「訳の解らない国が、突然出てきたな……。」

そして、もう一つの写真を見る。

その写真は軍艦ではあるらしいのだが、全く理解できない。

「この船は軍艦なのか？」

それはアメリカ軍のビアトリクス級駆逐艦であった。

ビアトリクスは高いステルス性能を保つために主砲や光学兵器は船内へ収納されて

おり、初めて見る人間は全く意味を理解するのが難しい船

マイルスから見れば四角い直角的な船だと思った。

しかし、全長に関してはさっきの船よりも大きいらしく、これが一番の謎であった。

本当に軍艦なのか？いや、何のために作られたのか、全くコンセプトがわからない。

似たようなものなら神聖ミリシアル帝国の魔導戦艦だろう。

ということではアメリカやカナダは神聖ミリシアル帝国からの支援を受けているのか

?

いや、それにしてもこんなデザインの船にはならないはずだ：

だが、もう一つ気になる情報もあった。

それはクワトイネ公国やクイラ王国、グラミアム王国などで見られるようになった鉄竜だ。

魔写は撮ることは叶わなかったが情報によればワイバーンよりも早く、轟音を鳴らす飛行物体らしく、もしかすると彼らは魔導機関ではなくレシプロエンジンを…？

いや…ムー以外で蒸気機関や外圧式機関（スターリングエンジン）はなかったはず…
一体？

それに先ほど挙げた国この半年の間での発展具合が異常な速度で進んでいるという。ムー帝国から商人が交易のために東方の国へ入国した。

そこには半年以上前は大型の帆船すら建造できないほどの港湾設備やドック施設だったものが、今では超大型船が出入りし、工場がいつの間にか、立ち並んでおり、立派な製鉄所や原油採掘施設？（又の名を石油コンビナートと言う。）などがクワ・トイネ公国・クイラ王国・グラミラート王国を中心に見られるようになった。

まだ、建設中の建物も多く見られ、巨大な超重機も多くあった。

内陸部でも我が国で実用化している蒸気機関車より早く煙を一切出さない鉄道を敷いており、つなぎ目の無い道路

「やはりおかしいな……東方の各国は第3列強国。パーパルディア皇国から技術支援を受けているとは聞いているが、パーパルディア皇国にも蒸気機関は確かにあるが、あれは従来の原理とは異なる方式だ……これもアメリカやカナダが関わったせいなのか？」

先進国は発展途上国へ無償で技術支援を行うことは一切なく、必ず何かしらの代償を払ってようやく支援してもらえぬ。

だが、支援される技術はその先進国が力をつけさせないためにわざと技術は低い設定で支援される。

それでは発展途上国はいつまで経っても技術や文明力が上がっても先進国には追いつけない世界構造となっている。

その観点から見ればアメリカやカナダという国は訳がわからない。

これほどの技術を提供しては、将来的に敵対国となった場合、自国に被害を被ることになるからだ。

グラ・バルカス帝国とはいいい、アメリカ、カナダ？という国とも、聞いたことのない国家が突如現れたことによりムーも調査に乗り出していた。

神聖ミリシアル帝国やムー帝国だけではなく、中央政府や東方各国はアメリカ・カナ

ダのロウリア戦争、フェン王国での出来事を中心に徐々に広まり、その噂は新聞にも取り上げられ、『極東に現れた新たな新興国家!?ロウリア王国に圧倒的勝利!』という見出しで世界中の国民はアメリカ・カナダの名前の知名度が上がるのであった。

フェン王国ではフェン王国沖でパーパルディア皇国の第二次皇国監査軍東洋艦隊をアメリカ艦隊が壊滅させた情報は大々的に発表され、その情報はパーパルディア皇国にも届くのもそう時間がかからなかった。

技術士官マイラスの苦悩は続く。

マイラスや商人などが見た建築物はアメリカやカナダの企業が積極的に進出し、建設した工業地帯だ。

まだ、完成ではないが、その建設速度は『この世界』から見て異常であった。

アメリカ・カナダ側は労働力の確保が異世界人によって確保ができているのと政府が積極的に支援しているため、通常では考えられない速度で突貫工事していた。

アメリカ合衆国ホワイトハウス大統領執務室

「へ、へ、ヘックション!!!」

「大統領！大丈夫ですか？」

「うん？ああ、どうやら最近の異世界へ転移してから気候や温度変化に身体が対応してなくてな、そろそろ休みたいものだ。」

「そうですか、大統領まだお仕事のお時間は残っておりますので、この書類もお願いします！」

と秘書官はニツコリと笑顔で分厚い書類を机に乗せた。

「ストップストップ、こ、これは明日分では無いのかね？」

「いえいえ、本日の書類の分です。」

「と、とほほほ…早く仕事を終わらせてエルフと食事にも行きたいものだ…」

「あら？そんなにお気に召したのですか？」

「そりゃあ、彼らは基本的に美形が多いからね、我々より年上であつて、あの美形は正直に言えば反則だと思つるのは私の気のせいだろうか？」

「気のせいではありませんか？では、大統領、こちらの書類の仕事を再開しましょうか」

「み、ミス・ポット、少しはきゅ」

「ダメです！お願いますね！」

「Oh…」

世界中の各国で自国の噂が流れている間でもホワイトハウスは今日も平穏な時間が

流れていった。

26 侵略

アメリカから遠く離れた地、恵まれた広大な自然を持つ国

アルタラス王国 王都ル・ブリアス

アルタラス王国はフェルアデス大陸の西側に位置する山脈や平野のバランスが取れた国土を持ち、文明圏から離れているが、文明圏外の国家として随一の国力と人口、軍事力、産業を持つ大国であった。

気候は非常に温暖な気候であり、アルタラス王国の建造物は基本的に丸みを帯びており、王城や民家も全て屋根が丸かった。

この国には世界有数の埋蔵量を誇る魔石鉱山が存在し、そこから良質な魔石を産出し、輸出することで莫大な外貨を稼ぐ、資源輸出国であった。

莫大な外貨を稼ぐことにより国は富み、人口50万人を抱える王都ル・ブリアスは人々の活気にあふれている。

他国との交易も非常に活発的であり、経済はここ数十年間好景気に沸いていた。

そんな大國の國王ターラー4世は苦渋に満ちた表情をしていた。

「これは…正気か？」

手元に通す外交文章には、とても外交とは思えない威圧的な文章で書かれた内容があった。

相手はパーパルディア皇國、アルタラス王國はパーパルディア皇國とも交易を結んでおり、アルタラス側は良質な魔石、パーパルディア皇國側は技術提供などの関係で今まではやって行けた。

しかし、目の前にある書類は全てをぶち壊す内容。

パーパルディア皇國からの要請文、毎年皇國から送られてくる要請文であるが、「要請」とは名ばかりであり、事實は命令書である。

何度も目を通す。

そこにはパーパルディア皇國からアルタラス王國への『要求』が書かれていた。「これほどのひどい内容は今まで見たことがない…。」

パーパルディア皇國は前皇帝が崩御した後、現皇帝ルディアスが即位した。

皇帝ルディアスは国土の拡大、国力増強を掲げ、各國に領土の献上を迫っていると聞く。しかし、そこは無難な場所だったり、双方に利がある場合が多い。

今まで屈辱とも言える内容でもこちらに利があったため我慢できた。

しかし、今回はどうだ!!我が国に全く利が無いではないか。

- ・アルタラス王国は魔石鉱山シルウトラスをパーパルデイア皇国に献上すること。
- ・アルタラス王国王女ルミエスを奴隷としてパーパルデイア皇国へ差し出すこと。
- ・アルタラス王国はシベラルト地方をパーパルデイア皇国へ割譲すること。

以上3点を2週間以内に実行することを要請する。

そして、最後に記載された一文

「出来れば武力を使用したくないものだ」

魔石鉱山シルウトラスはアルタラス王国最大の魔石鉱山であり、国の経済を支える中核であり、世界でも5本の指に入るほどの大鉱山である。

魔石鉱山産業によって良質な魔石で他国へ輸出することにより外貨を得ることができた。

収入源である魔石鉱山シルウトラスを差し出す。

これを失うと、アルタラス王国の国力は大きく落ちる。

さらに、王女の奴隷化。これはパーパルデイア皇国に全く利の無いものであり、明らかにアルタラス王国を怒らせるためだけにある。

初めから戦争に持ち込もうとしているようにしか見えない。

そして、シベラルト地方はアルタラス王国の最大交易港を有する地方であり、ここも

失えばアルタラス王国は他に他国との貿易するための港湾設備はほとんどなく、あつても小規模な港しかない、つまり外貨の収入を大きく失つてしまう。

何故だ!!今まで屈辱的とも言えるパーパルディア皇国からの要請を飲んでいたので、いきなり手の平をかえしてきたかのようなこの要求。全く持つて不明である。

：パーパルディア皇国め、一体どういふつもりだ!?

国王は王都ル・ブリアスにあるパーパルディア皇国第3外務局アルタラス出張所に出向き、事の真相を確かめる事とした。

パーパルディア皇国第3外務局アルタラス出張所

応接室

「待つていたぞ、アルタラス国王!」

パーパルディア皇国第3外務局アルタラス担当大使ブリガスは椅子に座り、足を組んだまま1国の王を呼びつける。

王は立つたままであり、大使の他に椅子は無い。

そこに来客者への配慮は一切なかった。

(なんと無礼な…。)

国王ターラー14世は話を始める。

「あの文章の真意を伺いに参りました」

「その内容のとおりだが？問題でもあるのか？」

「魔石鉾山シルウトラスは我が国最大の鉾山です」

「それが何か？他に鉾山はあるだろう。それとも何か？え？皇帝ルディアス様の意思に逆らうというのか？蛮族風情が我が国へ喧嘩を売るとはいい度胸だな」

「とんでもございません。逆らうなど…。しかし、これは何とかありませんか？」

「ならん!!!」

「シベラルト地方も我が国の最大の貿易港であります。何故、ここを欲する？」

「そんなものルディアス様が望まれたからに決まっているだろ」

「すでにこの時点でターラは怒り心頭であったが、なんとか表情に出ないように冷たい視線で質問を続ける。

「・・・我が娘、王女の事ですが、何故このような事を？」

「ああ、あれか？王女ルミアスとやはなかなかの上玉だから、俺が味見をするためだ」
「は？」

ターラの頭は真っ白になる。

「俺が味を見てやろうというのだ。まあ飽きたら、淫所に売り払うがな」

「・・・それも、ルディアス様の御意思なのですか？」

「ああ!!!なんだ!!!その反抗的な態度は！皇国の大使である俺の意思は即ちルディアス様

の御意思だろう!! 蛮族風情が! 誰に向かって話をしていると思っただい!

ターラー14世は何か切れる音が頭の中で響く、これほどの怒りは人生で初めてのこととで、無言で部屋を出ようとするとブリガスが罵倒する。

「おい! 話は終わってないぞ!!」

無視して立ち去る。

「俺様を無視するとは後で後悔しても遅いからな? 蛮国風情が」

国王は立ち去った。

王城——

「あの馬鹿国の馬鹿大使をパーパルディア皇国へ送り返せ!! 要請文も断る、国交を断ずるとはつきり書くと共に、パーパルディア皇国の我が国での資産を凍結しろ!」

国王は吼える。

「軍を召集し、王都の守りを固めろ! 予備役も全員召集だ!! 監査軍が来るぞ!! パーパルディア皇国に我が国の誇りを見せ付けてやれ!!」

今までパーパルディア皇国からの要求は屈辱とも言える内容でも飲んできたが、あれほどこちらを属国にする勢いの条件を飲んでいては、もはや国家の主権は存在しない。

パーパルディア皇国の監査軍に出血ダメージを負わせ、早期講和へ持ち込むしかアル

タラス王国には生き残るすべは無い。

我が国には、豊富な富があったため、軍事力は文明圏外の中でもトップクラス、文明圏とも肩を並べるほどの軍事力を保有していた。

監査軍はパーパルディア皇国内でも、旧式兵器を運用する監査軍程度であれば十分対抗は可能のはず：

せめて、娘を逃す時間くらいを稼げねば：

国王は夕焼けへ視線を向けながら、決意した目で来るべき戦いに執念を燃やしていた。

アルタラス王国はその頃から国家総力戦の準備が始まり、軍備強化、常時軍の集結など軍事的行動を起こした。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

第3文明圏において、唯一の列強国であるパーパルディア皇国、皇帝ルディアスの住まう皇宮は、その威を示すため、柱の1本1本まで繊細な彫刻で作られており、見る者を圧倒する。

彫刻はルネサンス期に作られた圧倒的肉体美を追求した彫刻は超絶技術を象徴するような印象だった。

この世の天国を思わせる鮮やかであるが、繊細に整備された庭。宮殿の内装は、豪華絢爛であり、この世の富を集めたかのようだ。

その光景はフランスのヴェルサイユ宮殿のようだ。

この皇宮を訪れた各国の大使や国王は思うだろう。

柱一本一本職人による高度な彫刻技術や石造技術力を持つ圧倒的人材資源。

天国と思わせるほどの美を追求した巨大な庭、建造物・庭など全てを維持する資金力
この世の富を集めたかのような宮殿の内装、そしてその規模。なんと凄まじい国力だろうか、と来客者は思うだろう。

皇都エストシラントは間違いなく東の文明圏、第3文明圏で最も繁栄した都市だろう。

訪れた商人や民たちは思うだろう。

何と凄まじい規模の都市かと。何と国民が豊かなのだろうか。何と美しい町なのだろうか。

都市部の商売地区でも建造物は3階、4階などは当たり前で高層建造物が立ち並んでいた。

全体の町風景だけでも非常に裕福で発展した都市と文明圏外の各国は称する。

そんな優雅で裕福な首都の皇宮で多くの政務関係者や軍事関係者が集まっていた。

とても派手な貴金属に色鮮やかな服装の姿の男が1名

「おもてをあげよ」

第3外務局長カイオスは、冷汗をかきながら顔をあげる。

その先には27歳といった若さからは想像も出来ないほどの威厳を保つ若き皇帝ルディアスの姿があつた。

非常にまずい状況であつた。それはフエン王国だ。

フエン王国の第一次、第二次監査軍の派遣は事実上の大失敗により、第3外務局は完全に面目丸潰れであつた。

今日まで第二次のみならず、第一次も原因追求に当たっているが、正確な情報がまだ集まっていない。

確証は取れていないが、フエン王国からの諜報員からの情報では我が国の監査軍を圧倒的な勝利によってアメリカ艦隊が撃滅したという未確認情報も入っていた。

アメリカそしてカナダ、第3外務局においてその名前は禁断の名前となっている。

各国との外交において特に東方の国は最近生意気な態度を取るようになった。

その時必ず出るのは「我が国はあのアメリカやカナダと国交を取っておりますから」だ。

そのおかげでアメリカ・カナダという名前を第3外務局員が聞くとイライラし、險悪感となった表情で睨みつけるため

アメリカ・カナダについては現在情報収集集中である。

*フェン王国沖海戦からすでに時間が経っているが、情報が行き届かないのはアメリカのCIAがパーパルディア皇国に対して情報妨害しているからだ。

アメリカ側としてはパーパルティア皇国との国交は絶望的であると分析したが、パーパルティア皇国は第3文明圏の中でもトップクラスの国力と軍事力を持つ列強国である。

世界的にも世界5位以内に入るほどの文明力を持つパーパルティア皇国は周辺国家の小規模な紛争を起こさせないなど統治している背景がある以上パーパルティア皇国を滅ぼすことはアメリカとカナダ側にとってデメリットでしかないため、できれば、大規模な戦争はしたくは無いが、潜在的敵対国家となっているパーパルディアには徹底的な妨害工作を開始した。

これによつて第3外務局はなかなか情報が集まらず、苦戦していた。

そして、今日だ。

皇帝ルディアスはカイオスに威圧するような目で見つめながら問いかける。

「カイオス、フェン王国への懲罰の監査軍の派遣、予への報告はどうした？まさか忘れは

とは言わないだろうか？聞くとこゝろ2回も送ったそうじゃないか」

「ははっ!! 監査軍派遣の報告を行わず、真に申し訳ございま…」

「この…たわけが!!!」

皇帝は怒りの表情で怒鳴りつける。

「つつつ…!!!」

!!

「貴様が予への監査軍の報告を行わなかったことはどうでも良い。それは予が第3外務局に与えた権限なのだからな。」

一々蛮国への決まった侵攻報告など聞いていると朝から晩までかかるのだからな…」
皇帝は淡々と述べた後、怒りの籠る声を上げながら言う。

「だが、一番の問題は監査軍が2度も送ったのに関わらず失敗したことだ…」

カイオスの顔から滝のように汗が吹き出る。

や、やはり、漏れていたか…

「何処にやられた？まさかフェン王国か？2度も送っておきながら迎撃するなど、列強国の可能性が高いだろ？」

「ははっ!! 目下全力で対象国の割り出しを行っておりますが、現在までの調査結果では、文明圏外の国と思われませんが結果がはつきりしないため、まだご報告する段階にありません」

「何?…まだ解らぬというのか?。」

皇帝の顔が怒に満ちる。

「旧式兵器を運用する軍隊とはいえ、我が国に泥をつける蛮国がいるとはな…カイオスよ、詳しく現時点でわかっていること申してみよ

もし、その報告に偽りがあれば貴様の首と一族全て処刑となる。」

「は、ははっ!!!」

カイオスは現時点で分かっている範囲内で可能な限り伝えた。

聞いている間皇帝は静かに目を閉じたまま聞いた。

アメリカ・カナダについては本当に情報があまりにも情報が不足していたため、今回は報告していなかった。

この時、カイオスを含めて第3外務局はフェン沖海戦やアルタラス王国での対応でキャパシティーをオーバーしてしまい、実はアメリカやカナダから国交締結のために外交団が来ていることを完全に見落とすという普通ではあり得ないミスを犯していることを知る由もなかった。

対応した外交官も受付のみで内情をよく分かっていた

そのせいで第3外務局は身近に情報があるのに関わらず杜撰な組織体制によって気がついていなかった。

「二度目が提督の精神病により失敗。二度目は謎の勢力によって壊滅した、か

お主、予をバカにしておるのか？我が国にそんな無能な提督はいないはずだが、どうやら海軍は随分生温い教育をしているようだな？」

高級な服装に派手な勲章をつけた小太りのおじさんが頭を何度も下げながら弁解する。

「も、申し訳ございません!!!」

「たわけが……まあ良い、海軍は我が国にとって重要な組織だからな、今後はより一層訓練を厳しくするように」

「は、ははっ!!!」

「カイオスよ」

「ははっ!!!」

「各国は、皇国がフェン王国ごときに敗れたと見るだろう。我が国に逆らった国が判明したならば、本国艦隊がフェン王国もろとも叩き潰す。解ったな。」

「ははっ!!!」

カイオスはおそるおそる話始める。

「皇帝陛下、もう一つ報告したいことがございます」

「何だ!!!」

皇帝はただでさえイライラした表情で怒鳴る。

「アルタラス王国の件ですが、予定どおり、魔石鉱山シルウトラスとシベラルト地方の献上を断つてきました」

「ほう…」

皇帝ルディアスの顔に先ほどこいらいらした表情からニヤリと口を笑わせる

「さらに、アルタラス王国は、国内での皇国の資産凍結と、国交断絶を伝えてきました」
「ふふふ…」ここまであからさまに反逆を開始するとはな。予定どおりではあるが、蛮族風情に舐められたものだ。」

話は続く。

「アルタラス王国にはどうやら躰が必要だな…監査軍ではなく本国の軍で叩き潰せ。皇軍の準備は既にできているな？」

「皇帝の命があれば、いつでも出撃できる準備は整っております。陛下の御言葉一つで、すぐにでも出陣し、アルタラス王国を滅し、すべての魔石鉱山、領土を皇帝陛下に献上いたします。」

「そうか…では任せた。アルタラス王国の統治に関しては全て任せる。」

「は、ははっ!!!」

植民地とした領土の全てを軍部に委ねるということはアルタラス王国民、資源、領土など全てを軍部が好きに使って良いということ。

その意味を正確に知った軍部代表は感謝の念を込めるように頭を深く下げた。この日、列強。パールディア皇国はアルタラス王国に対し、宣戦布告した。

アルタラス王国 王都 ル・ブリアス 王城

王国内では戦争準備状態となっており、王国民も軍部に協力し、バリケードや備品製造などへ尽力していた。

既にパールディア皇国は総動員状態となっており、侵攻するのは監査軍ではなく本軍だ。

本軍が来るとなればこの戦争も根本的な戦略が変わり、できるだけ皇軍を出血させることで、講和へ持ち込むことが目標となった。

そんな戦争状態となった王都のル・ブリアス 王城の一角で年寄りが娘に語りかけるように二人で話していた。

国王ターラー4世は自分の娘である王女ルミエスに語りかけていた。

「ルミエス、今すぐにこの国から脱出するのだ。既に脱出の手筈は整っている。できるだけ遠くへ逃げるのだ。」

王の顔には焦りが見える。

「な、何故ですか？」

ルミエスは不安な表情へ父親に問う

「パーパルディア皇国が我が国に宣戦布告してきた…。この意味が解るな？来るのは監査軍ではなく、本国の皇軍が来るだろう。」

皇軍が来るとなれば我が国に勝ち目はほぼないだろう。

皇軍がここへ侵攻するのもそう時間がかからないはずだ、その前に早く脱出するのだ
…」

「民を見捨て、王女のみ逃げるなど…。王女として国民へ合わせる顔がありません！」
「頼むから聞いてくれ…」

国力差を考えれば、長期的短期的に見てもおそらく我が国は負けるだろう。王族は皆処刑される。ルミエスよ。おぬしの行く末は、さらに酷いものとなる。頼むから、逃げるのだ」

「しかし…」

ルミエスは父親に言われるまで最後まで徹底抗戦するつもりでいた。

愛する国家を守るのは王族としての務めでもあり、国民が立ち上がるときに逃げるなど恥知らずにもほぼがある。

しかし、ターラは娘に言い聞かせるように優しく言う。

「私は国王としては最低であろう。自分の親族だけ逃がして助からせようなど…。だ

が、一人の父親として、ルミエス、娘には助かつてほしいのだよ。お父さんの言うことを聞きなさい。これは国王としての命令でもある。」

「わ・解りました……。」

ルミエスは目に涙を溜め、悔しそうな表情で拳を作り、震えながら答える。

「港湾の倉庫街に偽装商船を手配している。その乗員は我が国の兵士だ。

商船を装って、この国にパールディア皇国が来る前に脱出するのだ。

人員や必要なものは大丈夫だ。この国を出た後東方へ行くのだ。

東方にはロデニウス大陸へ向かい、アメリカ合衆国やカナダ連邦に保護してもらうのだ。

その両国はクワトイネ公国やクイラ王国をロウリア王国から守り、ロウリア王国に勝利した。

フエン王国沖海戦でもアメリカ海軍はパールディア皇国の艦隊を撃破したらしい。

ロデニウス大陸の北西部にバートニア州というアメリカ領土がある、そこへ行くのだ。

パールディア皇国と敵対しているのであれば保護してもらえないはず。

アメリカ人やカナダ人は非常に優しい民族だ。

そして、ここへは戻るな、戻ればルミエス、お前は奴らに捕まり死より恐ろしい運命

となる。」

「…わ、解りましたわ。お父様」

ルミエスは涙を落しながら、ターラに抱きつき、そのまま別れた。

その後、国王の命令のもと、アルタラス王国 王都から脱出し、その後、王女の姿を見たものはいなかった。

それから数日後、アルタラス王国へ接近する大規模艦隊を感知したのであった。

アルタラス王国北東方向約130km沖合い 洋上

パーパルディア皇国 皇軍

100門級戦列艦を含む砲艦211隻、竜母12隻、地竜、馬、陸軍を運ぶ揚陸艦101隻。合計324隻の大規模艦隊であった。

その戦力は中央世界と比較すれば貧弱な戦力であるが、第3文明圏の中でも圧倒的な戦力を保有している。

皇軍はアルタラス王国を滅するため、南西方向へ向かっていた。

将軍シウスは海を眺めていた。

非常に戦略に優れた戦略家であるシウスは数々の戦記を残す冷血な無慈悲の将軍が

彼の評価だ。

「將軍、間もなくアルタラス王国軍のワイバーンの飛行圏内に入ります」
報告があがる。

「まだ来ぬか……。対空魔振感知器に反応が出たら、竜母から100騎程艦隊上空で警戒させよ。細かい運用面は任せる」

「了解しました」

と水兵はすぐに下がる。

先ほどの兵士が言っていた対空魔振感知器とは魔素を利用して飛行するワイバーンを視覚外で発見するために開発された対空レーダーに感があれば、ワイバーンロードを艦隊上空で警戒任務にあたるよう支持する。

（構造とすれば電波の代わりに魔素が魔法陣から発信することによりあらゆる方向へ飛ばすことで対空目標を感知することを可能とする魔導機械の一種だ。）

ワイバーンロードは、各竜母に20騎ずつ配備されている。

アルタラス王国海軍は、すでに皇軍から50km先の水平線に目視できる距離まで迫っているだろうが、アルタラスのワイバーン部隊が来るのはまだ先であろう。

*（この惑星は地球より大きいため、水平線は19kmではなく、より遠くまで目視

できる。）

敵に竜母は無く、本国から洋上にワイバーンを飛ばしてくることとなるだろう。

効率よく合理的に最大にして効果を発揮させるために彼は来るべき戦闘に見据えていた。

アルタラス王国 王国海軍

「我が国を乗っ取るとはイナゴどもめ!!!」

怒気をもって、海軍長ボルドは吼える。

遠くにはパーパルディア皇国軍の艦隊が見えた。

その数は非常に多く、どれもが最新鋭艦だ。この時点で通常の国は降伏するのだが、我が国は違う。

魔石鉱山によって潤沢に富を築けたおかげで軍備強化を進めることができた結果、文明圏外の中でもトップクラスの規模と優秀な性能を持つ兵器を保有した。

文明圏の国は自国に武器兵器開発能力がなければ、高値で売られてしまうが、文明圏の国には武器輸出国は多く存在する。

我が国には魔石鉱山によって良質な魔石を輸出し、それを文明圏の国が購入、加工される。

入手した資金で最新お風神の涙を帆船に使用することにより列強並みの加速性能を手に入れることができた。

相手はパーパルディア皇国軍であるが、少しでも対抗することが可能であろう。

そろそろワイバーンの戦闘行動範囲にもあつたはず。

「よし、本国からのワイバーンの戦闘行動半径の中に敵船団が入つたな…。よし、空軍基地にワイバーンを一気に送り、敵船団に攻撃を加えろ!!!」

ボルドは魔通信用器具を手にとり、艦隊に指示を出す。

「間もなく我が艦隊も戦闘に入る!!総員第一種戦闘配備!!!いいか!!!肝に命じろ!!!王国の興廃この一戦にあり!各自奮闘努力せよ!」

命は下された。

アルタラス王国上空高度100000m

雲一つない青空に黒い飛行物体が飛んでいた。

その飛行物体は後退翼を備え、黒い機体、そして生物とは思えない生氣を感じられない無機質

アメリカ軍が飛ばした無人ステルス偵察機RQ-8

RQ-45ブラックバードはRQ-4グローバルホークの発展型の無人偵察機。

敵地上空へ強行偵察任務を行い、レーダーに探知されずに特殊部隊の地上支援攻撃、偵察支援、情報収拾などに使用される。

対中戦争に備えてアメリカ空軍が先進国の持つ優秀なレーダーやミサイルを回避するステルス偵察機に着手し、完成したのが垂直尾翼を持たないB2爆撃機のようなデザインとなった偵察機。

武装として対空ミサイル6基を武装するなど防衛能力を備えている。

アメリカは異世界の詳細なデータを観測するため秘密時に軍事衛星と航空機、潜水艦を使って、各国の国土・発展具合・規模・環境などを調査する。

それを受け持っているのはCIAだ。

CIAは特殊部隊から無人機などを保有するアメリカ合衆国の諜報機関でもある。

異世界の各国に対空レーダー、ソナーなどを持っていれば領空・領海侵犯したことがすぐにわかるが、この世界ではそんなものは持っている国の方が少ない。

例え持っていないでも探知することはほぼないだろう。

そもそも、現在の情報では中央世界にも潜水艦や音速を超える航空機情報はないからだ。

なぜ、アメリカCIA所属の無人機がアルタラス上空を飛行しているのか、というと、

潜在的敵国。パーパルディア皇国の軍事力や戦術、戦力を詳しく知るため。

ルミスエス女王は偽装商船に乗って、バートニア沖で沿岸警備隊により保護され、アメリカ合衆国の証人保護プログラムで現在CIAが保護している。

ルミスエスによれば王国はパーパルディア皇国からの要求を拒否し、パーパルディア皇国が宣戦布告したため、戦争状態となったということ。

未だアメリカやカナダとパーパルディア皇国は外交上敵対国家となっていないため表立った軍事的行動や外交は展開できない。

そもそもパーパルディア皇国の外交団によればパーパルディア皇国からの返答は良くないらしく、待機状態が続いている。

これではアメリカやカナダ側としても何もできないことである。

なので、パーパルディア皇国の軍事力と戦術、戦力など実力を把握するために偵察機を飛ばした。

それをモニター室で複数のオペレーターと司令官が暗い部屋の中、表示されるモニターを見ながら指示を出す。

「ホーク1目標上空へ到達しました。現在アルタラス王国沖にパーパルディア皇国の艦隊と思われる大規模艦隊がまっすぐ王国へ向け、進撃中。」

王国海軍も複数の艦隊が見られます。あと30分で接触します。」

「わかった。ホーク1はそのまま上空にて待機、ホーク2は首都 ル・ブリアスへ飛行中
せよ」

「了解しました。」

他国との戦争を見るのはこれで何度目になるか：我々は存在上幾多と合衆国の権益と国民を守るために日々情報収集を行う。

あくまでも我々の任務は情報収集や破壊工作、要人確保などだ。

例え目の前で救える生命があつたとしても優先順位を変えてはいけない。

これは諜報組織としては当然のことだ。

正直、あまり気持ちが良い仕事ではないのかもしれない。

だが、情報は戦略や方針を左右する重要な要素だ。

こうして偵察しているが、見方によつてはアルタラス王国を踏み台に相手の情報を得る。

まるで、かつて第二次世界大戦でイギリス軍が実行したドイツ軍の情報をあぶり出すために街一つ生贄に実行した作戦の関係者と似た感覚になるな：

と頭の隅で思い出すか、のように画面を見つめたまま流れて行く情報を見る。

戦闘が始まったようだ。

アルタラス王国海上 竜騎士団 騎士長 ザラム

竜騎士団120騎は、アルタラス王国空軍基地から北東方向に展開するパールディア皇国 皇軍 に一撃を加えるため、編隊を組んで飛行していた。

敵は王国に幾多と屈辱的な要求をしてきており、今まで幾度となく飲んできたが、今回は魔石鉱山シルウトラス、シベラルト地方の献上と王女の奴隷化を申し出てきたらしい。

王女は性格も良く、美人で品性があるため、国民からの人気も高い。

魔石鉱山シルウトラスやシベラルト地方を王国が失うと、国が立ち行かなくなるのも、誰もが理解している。

一般公開されたパールディア皇国からの要請文を読んだ国民は激怒した。

「たとえ国滅ぶ事となっても、横暴な列強に一撃を!!」

と彼らの心は一つとなり、例え祖国が滅ぶことがわかっているも国家として戦争することを決意したのだ。

国民だけではなく、軍部も同様で、パールディア皇国にはせめて出血ダメージを負わせ、何とか講和へ持ち込むことが最優先だった。

ザラムは魔通信に向かって指示を出し続ける。

やがて…。

「見えた!!!」

パー・パルディア皇国の艦隊が目に入る。

見たことのない大艦隊だ。

「指示どおり、散開!!後は12士長の支持に従え!!」

「アルタラス王国竜騎士団は散開して、パー・パルディア皇国軍へ向かっていく。」

「!!!」

「ザラムは気がつく。」

「斜め上空後方!太陽を背に敵が突っ込んでくるぞ!!注意セヨ!!」

敵のワイバーン部隊が急降下し、太陽の背にして突っ込んでくるため魔通信を傍受するまで気づかず、そんな獲物へ食らいつくようにパー・パルディア皇国のワイバーンロード部隊は導力火炎弾を放ち、アルタラス王国竜騎士団120騎のうち、60騎以上が命中し、落ちてゆく。

「畜生!!」

アルタラス王国の竜騎士団も、敵ワイバーンロードに食いつこうとするが、速度差で直ぐに避けられる。

導力火炎弾の射程圏外に逃れた敵は、再度上昇し、有利な上空から再度導力火炎弾を放ち、一方的な戦いで全滅した。

「く、速い！もう全滅してしまうとは……さすが列強国ということか……」

部下に不安な顔は見せない海軍長ボルドであったが、内心は不安に満ち溢れていた。

「敵艦隊との距離あと2km」

部下からの報告が入る。

「敵艦隊転進！」

敵艦隊が我が軍に対し、横腹の砲門が全て解放された状態でこちらへ向けていた。

!?

「まさか……魔導砲がもう届くのか!？」

パパパパパパパッ!!!……敵艦の一部が煙に包まれる。

ドドドドドドーン……少し遅れて発砲音。

「まずい!!」

敵艦隊は次々とこちらへ砲撃し、こちらはまだ射程圏外であった。

（く……魔導砲の性能が……ここまでであるとは……このままでは全滅してしまう！何とか敵艦

に攻撃せねば…)

「面舵いっぱい!!敵から45度の角度を取り、接近しつつ攻撃に最適角度を維持せよ!敵の魔導砲が来るぞ!!!風神の弓を使用する!!!」

艦隊がゆつくりと曲がる。敵の魔導砲が飛んできている事を思うともどかしいほどの遅さである。

シユパンシユパンシユパンシユパン……

水柱があがる。

敵の攻撃の第1波の到達である。

……ドーン

「戦列艦シデイ被弾!!!」

戦列艦シデイに敵砲弾が被弾し、猛烈な爆発を起こす。これが噂に聞いている炸裂砲弾か…。

我が砲の砲弾よりも、射程距離も威力も数も上のようだ。

今回の第1波攻撃は、ほとんど洋上に着弾する。

今後、砲撃数も命中数も増えていくことだろう。

「風神の弓発射準備完了!!!」

「風神の弓、発射!!!」

風神の弓とは列強国の風神の涙がもたらす風を矢の推進力に使用することで重たい矢でも射程を伸ばした状態で攻撃することを可能とする対艦攻撃平気だ。

一つ一つに純度の高い魔石を使用することで爆裂魔法を生み出し、着弾した場所を爆発させる。

しかし、一つ一つのコストが非常に高く、まさに決戦兵器でもあった。

通常の文明圏艦隊を相手にした場合、敵の射程距離の倍以上先からアウトレンジで攻撃可能なアルタラス王国の切り札。魔石鉱山の盛んな富める国ならではの兵器である。

ヒユイイイイン……

船上に風が吹き荒れる。

シユンシユンシユンシユン

風神の弓は、侵略者に対して連続で発射された。

パーパルディア皇国 皇軍

艦隊は次々とアルタラス王国海軍へ砲撃を開始しているが、思ったよりも命中精度が低い。

既に砲撃を開始してから5分以上は経っているが、一向に命中しない。

そして、ようやく砲弾が命中したのか、敵艦の前方に居た戦列艦が爆発する。

「敵艦1隻に魔導砲命中、火災発生!!!」

「命中率が悪いな…。まあ、初弾だとこんなものか。」

艦隊の数は多く、風神の涙や魔導砲を満足に開発できないような国にこちらの船を超えることはなく、この海戦は一方的な戦闘となり、終結すると楽観的な意見が上層部や幹部の多くが考えて居た。

「敵船、角度を変えて侵攻」

「何をするつもりかな？」

「!! 敵船団、横を向けた艦から順次バリスタを発射しています!!!」

「バリスタ!? あんなに射程距離の短いものを、ここで発射してどうする!?!」

幹部連中が困惑する。

「!! 矢が…飛んできます!!」

「なにい!!!」

100門級戦列艦旗艦シラントを矢は飛び越え、約50m離れた海上に矢は落下する。

矢の前部に設置された、爆裂魔法が起動し、爆発、水柱が上がる。

「魔力探知、おそらく、風神の涙と爆裂魔法が付与された矢と思われます」

報告があがる。

「なんと……富が裕福に存在するアルタラス王国ならではの戦術だが、もつたない兵器の使い方だな」

矢は次々と飛んでくる。旗艦に狙いをつけたかのように、周囲に水柱があがる。

ドーンドドドドドーン

旗艦シラントに、連続して10本の風神の弓が命中した。

アルタラス王国海軍

「100本準備していた風神の弓は、すべて撃ちつくしました」

「よし、それでは、敵艦隊に進路を向けよ!!! 一気に魔導砲の射程圏内に距離をつめるぞ!!!

……しかし……敵旗艦に10発も命中させるとは、王国軍の錬度は衰えていないな……」

敵旗艦に集中させて攻撃、撃沈し、指揮系統が破壊され、敵が混乱している間に距離を詰めていつきに叩く……つもりだった。

敵の旗艦周辺に蔓延していた煙が晴れる。

!!!」

!!! 衝撃が、海軍長ボルドを駆け抜ける。

!!! 敵艦健在!!! あっ……敵艦隊発砲!!!」

通信士の悲鳴のような声があがる。

爆裂魔法の付与されたバリスタは、我が国の艦が食らえばダメージはタダではすまない。10発も着弾すれば、船の大半は破壊されるだろう。

しかし…。敵の旗艦は上部構造物の一部は破壊されていたが、内部は全くの無事らしく、何事も無かったかのように、航行し、我が方に攻撃を開始している。

風神の弓は、パーバルディア皇国の誇る旗艦シラントの対魔弾鉄鋼式装甲により、いともあっさりとは跳ね返され、致命傷を負わずには至っていないかった。

皇国の砲弾は、第1波に比べ、圧倒的に数が多い。

「戦列艦ベシアル被弾、轟沈!! 戦列艦ブーデツヒ被弾、轟沈、戦列艦パケラ被弾、轟沈!!」
「戦列艦オシア、ワイバーンロードの火炎弾により被弾、火災発生!!」

悲劇的な報告が続く。

「ち…畜生!! 畜生!!」

海軍長ボルドは燃え盛るアルタラス王国軍の主力海軍を見ながら、ワナワナと震える。握り締めた拳からは、血がしたたる。

敵艦隊の攻撃可能艦の数は増え続け、砲弾数の着弾も徐々に増え、猛烈な数となり、戦場は凄惨を極める。

「あっ!!!」

ドーン

海軍長ボルドの意識は、飛んできた砲弾により、強制的に終了した。

「敵、艦隊全滅しました」

「我が方の損害は？」

「旗艦シラントに10発ほど、敵の爆裂魔法の付与された矢が着弾しましたが、対魔弾鉄鋼式装甲により、ほとんど跳ね返したため、シラントは小破です。人的被害としては、シラントに乗船していた従軍記者が、着弾に驚いて足を捻って捻挫しています。それ以外は人員装備異常なし」

「竜騎士隊の被害は？」

「被害なし」

第3文明圏最強の国、列強パールディア皇国軍は、アルタラス王国海軍を撃破し、アルタラス王国 首都ル・ブリアスを落とすため、揚陸地点のあるル・ブリアス北側約40km地点へ向かった。

アルタラス王国首都 ル・ブリアス 北側約40km地点

海岸と荒野が広がるこの場所は、人が隠れる場所は何処にもなく、水も出ず、魔石鉱山も無いため、人々に放棄された土地である。

しかし、海岸線は広く、揚陸するには適していた。

パーパルディア王国軍は、入念なワイバーンロードの上空偵察の後、さしたる苦労も無く、同場所に橋頭堡を確保、野営陣地を構築した。

アルタラス王国 王都

王ターラ14世は、出陣の準備をしていた。

アルタラス王国海軍はすでに無く、上陸を許してしまった。魔通信が途切れるまでの内容を精査した結果、さしたる損害も与えられずに全滅してしまったようだ。

王国のために殉職してしまった兵たちのために祈りをささげる。

家族もいただろう。親の介護を抱えた者もいただろう。婚約者がいた者もいただろう。

しかし、王国のために殉じた。

王は思う。

今回の敵を退けた暁には、殉じた兵たちの家族のために何かしてやらなければ…。

しかし、強大な敵はほぼ無傷で王都の北側に迫っている。

列強が敵に回っているため、味方してくる国はいない。

王は、必勝の決意を固めるのであった。

アルタラス王国軍その数約2万

王軍は、王都ル・ブリアスの北方約10km地点に展開していた。

軍事目標は、王都北方約40km地点に橋頭堡を確保しているパーパルディア皇国軍陸戦部隊約3千を滅する事にある。

陸戦隊約3千に対し、2万もの超大軍を準備する。

通常であれば、オーバーキルである。圧倒的な戦力差の前では、少々の戦略の差など大局に影響は無い。しかも、遮蔽物の少ない荒野に敵は布陣している。

相手が通常国であれば、勝ったも同然である。

しかし、相手はこの世界に5カ国しかいない列強である。

「今回は勝つだろうが、油断は出来ないな……。」

アルタラス王国、国王ターラー14世は決意を固めるのだった。

パーパルディア皇国軍 陸戦隊

皇軍は海岸線沿いを南に侵攻していた。

3000名もの精鋭部隊、前方に地竜と呼ばれる像の2倍近くの大きさの竜が32

頭、パーパルディア皇国にしか住まないとされる竜である。

昔、皇国の拡大期、この地竜を操ることによって戦略的な運用が出来るようになった。矢はもちろん、バリストアさえも通さない硬い鱗を持つ地竜の登場により、皇国の陸軍は他国を圧倒し始める。

皇国が圧倒的国力を持ち、文明3大流のうち、ハイエルフを祖とする第3文明圏の頂点に登り、列強と呼ばれるようになったのはこの地竜の運用があつてこそだ。

ワイバーンほどの機動力は無いが、それを上回るほどの硬い鱗を持ち、射程距離は短い、拡散し、効果範囲の導力火炎放射を行い、何よりも地上のその場所に長い間居座る事ができる。

ワイバーンでは、そこに居座る事ができないため、いわゆる制地権を確保するには地竜をおいて他にない。

地竜は像の2倍程度の大きさの体を持ち、全体的に丸く、亀のように三角の頭が出ている。

又、パーパルディア皇国は人間で運べる程度の大きさの炸裂式砲弾の入った大砲を配備している。

馬に引かせるタイプの大砲も配備している。

歩兵にはフリントロック式のマスケット銃が支給され、球形の弾を放つ。

味方の陣で爆発が起こる。

「なっ!!何だ!!!」

「まさか、魔導砲か!!!固定砲や船のみではなく、人が運べるまでに軽量小型化したというのか!!?」

爆発のあつた近くの兵は10人単位でなぎ倒される。

しかし、爆発の間を縫うようにアルタラス王国兵は皇軍に向かって進む。

人海戦術!!!

皇軍との距離をつめる。

しかし、それを阻むように、ワイバーンロードによる上空からの導力火炎弾の嵐が吹き荒れる。

度重なる爆発も、アルタラス王国軍の圧倒的な人海戦術に対し、焼け石に水だった。

導力火炎弾によって、焼かれる兵、しかし面制圧は出来ないため、弾の当たった箇所の兵が倒れるのみである。

ウオオオオオオオオオオ!!!

凄まじい土煙をあげ!!!アルタラス王国軍はパーパルディア皇国軍に迫る

アルタラス王国軍の前方には、横一列にならんだ地竜の姿が見える。

大きい…。

しかし、あるのはたったの32頭、竜と竜の間隔も50m近くあり、大きい。間を抜ければ問題なさそうだ。

「数で圧倒している!!踏みつぶせ!!!」

騎兵は弓を持ち、地竜にねらいをつける。

「大きいのだな…。くらえええええ!!!」

パシユパシユパシユ!!!

風を切り、弓は地竜に向かい飛んでいく。

カキン!!カキン!!!カキン!!!

当たった弓のすべては、地竜の硬い鱗に跳ね返される。

「ちっ!!!では、地竜の間を抜け、後方の敵に突っ込むぞ!!いけえええええ!!!」

地竜と地竜の間は50m近く離れている。密度は無いに等しい。

間を抜ければ、約300m後方に敵の部隊がいる。無意味な見掛け倒しの地竜は無視し、敵を倒す!!

軍は地竜に向かって突撃する。

ウオオオオオオオオ!!!

その時だった

横1列にならんだ地竜の口内が光始める。

「まさかっ!!!!導力火炎弾か!!!!」

横1列に等間隔に並んだ地竜、射程距離は短いが面制圧が可能な導力火炎放射を発射した。

火炎は口から拡散し、広範囲に地面と敵を焼く。

地竜は首を振りながら、攻撃範囲をさらに広げる。

アルタラス王国軍は地竜の火炎放射の中に突っ込む形となった。

グアアアアアアア

火だるまとなって!!!! 転げまわる兵と馬、火炎の制圧範囲が広すぎるため、アルタラス

王国軍は一時進軍を停止する。

地竜は少しづつ進みながら、火炎をばら撒き続ける。

後方の軍によりすぐには下がれない前方の軍は、どんどん焼かれていく。

しかし、火炎放射前に竜を抜けた騎兵が300ほどいた。

騎兵はパールディア皇国軍に迫る。

パパパパパパパーン

敵の歩兵たちの陣から、白い煙が上がる。

騎兵たちがバタバタ倒れる。

「な…何が起った!!!!」

パ。パ。パ。パ。パーン

さらなる攻撃、攻撃は続き、地竜の間を抜けた騎兵たちは、歩兵のマスケット銃の一斉射撃により、全滅した。

アルタラス王国軍の進軍は完全に停止する。

そこにさらなる悲劇が起こる。

王国軍陣地の中で、猛烈な爆発が連続して起こる。

「まさか!!!」

王は海の方角を見る。

パーパルディア皇国の砲艦約100隻が陸地に向け、陸戦隊の支援のため、アルタラス王国軍に艦砲射撃を開始する。

100門級戦列艦を含む砲艦100隻による艦砲射撃は、アルタラス王国軍の展開する陣地に砲弾の雨を降らせる。

同攻撃は面制圧射撃となり、アルタラス王国軍は総崩れとなった。

この攻撃によりアルタラス王国軍は事実上壊滅状態となった。艦隊は陣地が跡形も無いほど砲撃し、全軍を指揮していたターラー14世はこの世を去った。

その後、パーパルディア皇国はアルタラス王国を占領、完全なる属国となった。

占領後、アルタラス王国で女性はパーパルディア軍による強姦、輪姦、誘拐の対象となり、男性は兵士たちの娯楽として暴行、リンチ、銃殺するなどの光景が頻繁に起こった。

国民の大半は奴隷か労働力として生き残ることができたが、アルタラス王国国民にとって長い地獄が始まることとなった。

アルタラス王国の王族や一族、親戚縁者全員が例外なく串刺しとなった。処刑する妊婦も胎児を腹から引き摺り出し、処刑するなどの徹底的な処刑が行われた後、王城前の広場に見世物にされた。

CIAはアルタラス王国で起きた出来事や戦闘記録を全てホワイトハウスやペンタゴンへ送った。

また、アルタラス戦争で使用された地竜やマスケット銃などは脅威度として低いが、海戦で使用された魔法による攻撃方法は今後のパーパルディア皇国との戦闘において脅威となる可能性が高いと見ていた。

また、一連の流れを全て見ていたCIA関係者の中にはあまりの残虐に気絶した者も出たほど、現代人には恐ろしいものであっただろう。

こうした処刑は現代こそ先進国の中では表に出てこなくなつたが、数百年前は当たり前のように行われていた光景であった。

列強国すら、残虐と思える光景でも日常的に行われていることから、アメリカ政府関係者は自国の常識や倫理が全く通用しないことを改めて知る。

27 方針

第2文明圏 列強国 ムー帝国

ムー帝国は第2文明圏を代表する列強国。

この世界で唯一魔法に頼らない産業革命を成功させた機械文明国家。

ムーは神聖ミリシアル帝国に続く世界第2位というポジションを獲得した。

魔法に依存せず、科学のみで発展させた結果、魔法文明国家神聖ミリシアル帝国の次に続く国力、軍事力、技術力を持った。

その技術によって神聖ミリシアル帝国以外であれば圧倒的優位性を持っているムーは列強国の中でも強国であった。

そのムーに国交を開設したい、技術提供を申しこむ国が後を絶たず、ムーは外交で有利に事を進めていた。

しかし、ある日ムーの元へ国交締結のため入国した二カ国の外交官を乗せた艦隊が歴史上仰天する出来事となろうとはムーの誰も予想も付かなかった。

数週間前

アメリカ合衆国 ワシントンDC ホワイトハウス

会議室

「では、機械文明国家ムー帝国について会議を始めよう。まずは国防総省から報告を聞くとしようか。」

「はい、この世界は魔法文明国家が中心に構成されているということはご存知だと思いますが、中央世界より西へ進んだ大陸に機械文明が存在することが衛星により明らかになりました。こちらの衛星写真をご覧ください。」

カリートはスクリーンを操作し、写真へ切り替えるとそこには120年前以上に存在していた旧式戦艦が写っていた。

「こ、これは……」

「そうです、画像から照合した結果、旧大日本帝国海軍所属戦艦三笠クラスに非常に酷似しており、重工業地帯や航空機、車なども確認しました。」

画像からも分かる通り、彼の国は蒸気機関を運用していることから産業革命以降のイギリス程度の技術力と国力を持っていると思われる。

ムーについても調査した結果、魔法文明国家の中で唯一の機械文明国家であり、第2

文明圏を代表する列強国と報告結果が出ました。」

「なるほど、魔法が主流としてこの世界で唯一機械文明国家ということが気になるが、それほどの技術があるのならば我が国の商品もいくつか売ることができらるだろう。ぜひとも国交を締結したいものだ。」

「同じ科学文明国家としてはヨーロッパのような位置付けもいいかもしれんな」

「しかし、この中世の世界でこれほどの技術差があるのも少々不自然ですね…かの国は機械文明を持つというならば我が国としては警戒すべき国ではないでしょうか？これほどの文明力であれば数十年で『原子爆弾』も実現する可能性もある。」

!!!!

現在、合衆国のみ持っている戦略兵器、『核兵器』。

実は原子力爆弾は原子力エネルギーを研究する論文や実験自体1940年代以前から行われており、ムー帝国が1910年代の文明を持つということなら数十年で実現する可能性もあるのだ。

核兵器を他国が保有したことでロシア、北朝鮮、中国での核兵器問題で結局有効な解決策がなかった。

さらにこの世界では唯一核兵器を持っているアメリカは異世界国家へ大きなアドバンテージとなる。

現在核兵器に変わるクリーンな戦略兵器開発も再開しているが、配備にまだ時間がかかる。

「だが、かの国はまだ産業革命を実現したばかりの国家だ。長期的に見て侮れない国家であるが、現状で過度な警戒もすべきではない。

それに我が国にとって最も国交を締結し、通商も結びたいところだ。」

「はい、ムー帝国には衛星画像から見る通り重化学工業や石油コンビナートなどはあまり規模が大きくなり、大量生産システムも黎明期かと思われます。これに我が国の企業が開発に乗り出せば将来的に莫大な貿易額になると予想されます。」

「うむ…将来的にも我が国のライバルとなる可能性も高いのだな、是非ともNATOにも加盟して欲しいものだ。」

転移からすでに1年以上は経っており、クワトイネ公国・クイラ王国・グラミラート王国、フェン王国、トールパ王国など諸外国との交流は順調であり、貿易も黒字となっている。

だが、かつて地球に居たほど黒字にはなっておらず、成長を回復させるにはもっと大量消費社会を形成させなければ到底市場として規模が小さすぎる。

しかし、どの国も中世近世レベルの文明しか存在せず、インフラ関係や日用品、書物、船舶関係、重工業系、農業生産、軍事産業などは潤いを見せてきた。

特に軍事産業は転移によって失った戦力を回復させるために例年よりも20兆円以上予算を増額し、戦闘機・艦艇・戦車・装備など新規開発を見せて居た。

転移直後、軍事産業は一時停止の事態にも追い込まれたが、皮肉なことにロウリア王国戦をきっかけにフェン王国沖海戦など、北米大陸周辺地域は地球よりも脅威が多く存在し、議会や民衆に認知されたことで予算が増額された。

さらにギムでの虐殺が特に大々的に報道されたことで国民を中心に強い危機感を抱かせた。

地球に居た頃では周囲に敵国は海を隔てた先のずっと遠い場所であった。

しかし、転移したことで貨物船や客船などが海賊、他国の武装勢力、竜による旧太平洋を中心とする北東部で襲撃に合うようになった。

これによってアメリカ・カナダは損失した戦力の補充と軍拡に向かっていた。

これは潤沢な軍事予算、豊富な資源、国力を持つ超大国アメリカだからできることで、日本やヨーロッパなどとても大陸国でない国家は厳しい。

だが、問題もある。当然IT企業や工業系の企業は不況であった。

確かに国内や一部地域では電子機器を中心とする現代品は売れるようになったが、他国には売れない。

また、技術流出防止のために売ることができないという点が正しい。

当たり前であるが、現代に作られている自動車・船舶・電車・飛行機・電化製品・携帯などにはコンピュータ技術など高度な技術が使われている。

それらを大量輸出することで、結果的に外国への技術促進に繋がり、中国のような非常に不安定な技術成長をさせることとなる。

もちろん、全く販売しないことはアメリカやカナダの経済を活性化させるために不可能であった。

さらに電気・ガス・水道すら通っていない地域、国家に電子機器を売ったとしても宝の持ち腐れであり、発電所・電波塔・修理専門店・その国の教育レベルの低さ、そもそも産業革命すら起こしていないのだから当たり前だ。

銃器産業でもメンテナンスが非常に簡単な壊れにくい銃を販売することしかできないくらいだ。

そこで産業革命を起こし、それなりに発展している国ならば話は別だ。

だから、アメリカやカナダ政府は資本家たちから経済活性化のために輸出制限を下げて欲しいと言う。

最も難関な点としては現代の私たちが使用しているコンピュータや携帯電話、インターネットは全て軍事技術から流用された技術だ。

つまり安易に電子機器やコンピュータ関係のシステムを他国に売ることは技術流

出となり、将来軍事技術に転用されるだろう。

今の所アメリカ・カナダが主導となつて行つていゝインフラ関係や工場は両国が徹底的に管理しているため大した技術流出には繋がつていない。

兵器開発の歴史においても民間技術から軍事技術へ、軍事技術から民間技術へ転用されることは意外とよくある話だ。

例えばノーベル博士が作り出したダイナマイトはもともと鉱山開発のために作られたはずが、軍事へと転用したことが有名だ。

もちろん、技術は過剰に制限を掛けたところで流出を完全に防ぐことは人の交流・物流がある限り不可能である。

完全に制限するとなると鎖国し、入国する者を徹底排除すればできるのかもしれない。

だが、それは極端なやり方で実行すればアメリカやカナダに異世界で数十年後、異世界国家が連合となつて北米大陸へ攻め込むかもしれない。

ならばこちらから友好的に接することが平和への解決だろうということで、過剰なまでに徹底した技術流出防止策はしていない。

国交締結した各国には代価を貰いながら、基礎工作機械や研修制の受け入れ、インフラの整備など手広くやっている。

「列強国とはコンタクトを早くとっておきたかったが、ヘンリー外交官からの様子はどうだ？」

「依然、パーパルティアからの返答は思わしくないようです。」

「そうか…あの国と国交は無理か…」

「…大統領、それは不可能かと、あの国は我が国籍の船舶や同盟国フェン王国にも宣戦布告もなしに何度も攻めてきています。」

「いずれ白黒はつきりとなければなりません。」

「そうかもしれないな…だが、すぐというのは困るぞ？我が軍はあいにく再建で忙しいのだ。ロウリア王国でも少ない戦力で戦えたが、パーパルティア皇国を滅ぼせば周辺地域の影響が計り知れない。」

一応第3文明圏の中でもトップクラスの国力と軍事力を保有するが、そんなことはアメリカ側からすれば早い話「で？だからなんだ？」という話である。

しかし、軍需産業は実戦データを欲しがっていた。

転移したことで確かにアメリカ軍は3割ほどの戦力を失ったが、海兵隊・海軍・空軍・陸軍・特殊部隊には精鋭部隊が残っている。

精鋭部隊が残っていれば人員を育成するのも苦労はしない。

しかし、実戦はどうしても竜や中世の兵士では相手にならないため、できるだけ大國で長期的に戦える國家が望ましいだろう。

「はあ……パーパルティア皇國についてはいずれ白黒はつきりさせなければならぬことは分かる。

だが、当面合衆國は再建のために時間を必要とするためできるだけ引き延ばす方針だ。」

この方針に若干不満を持つ者もいるが、話は進む

「ムーへ送る外交官も決まっているな？」

「はい、今回はフェン王国でも安定し始めたので、グラミラート王国・フェン王国でも外交を成功させたセオドア外交官に行かせようか、と」

「うむ、彼は確かに優秀だし、問題ないだろう……そういえば彼はグラミラート王国で貴族娘に好意を持たれているらしいじゃないか？」

大統領が微笑しながら言うのと他の関係者も苦笑気味になる。

「はい、現在では文通を続けており、内容も熱烈なメッセージだったとCIAやDIYから報告が上がっています。」

なお、これはプライバシー侵害であるが、外交官と他國の貴族の文通や電話でも国内

の機密関係の情報を話す可能性があるため秘密裏にCIAやDIYが監視していた。

「いずれセオドア外交官が口説かれるかもな」

「これは猛烈なアタックされるのも時間の問題なのかもしれません」

「セオドア外交官も優秀だからこそ立場をわかっているとは思いますが、貴族や王族の婚姻話には気をつけなければならない。」

セオドア外交官にアタックしている貴族娘は分からぬが、異世界人と我々も向き合えないといけない。

我々はこの世界で生きていくのだからな」

「そうですが、まだ異世界人に関する法律も整備が不完全なため、入国は難しいですが」
「それは仕方がない。なんせ黒人・白人・黄色人種以外にも人間種以外の種族が現れたからな。種族の把握すらできていない状況で法律を整備するなんてほぼ不可能な話だからな」

「はい」

「相手は機械文明国家だ。くれぐれも粗相の無いように気をつけるのだぞ」

「お任せください、国務省がしっかりと国交を締結します。」

「うむ、それと編成する艦隊だが、我が国の最新鋭空母を旗艦としよう」

「！ミルドレッド・バスカムですか！」

ミルドレット・バスカムとはアメリカ軍ジェラルド・R・フォード級5番艦で、転移した直後まで完成間近だったのだ。

それが慣熟訓練も含めてつい最近ようやく就役した実質的にこの世界での最新鋭空母であった。

4番艦までジェラルド・R・フォード級1番艦は設計図通りであったが、対中戦争により改良が加えられた結果

5番艦のミルドレット・バスカムは別名ミルドレット・バスカム級原子力空母という名前もある。

ちなみにミルドレット・バスカムは2028年に当選した大統領の名前で対中戦争に大きな貢献をしたと言われている。

「ムー帝国は我が国の軍事同盟となるかもしれない。ならば我が国の力を見せておけば、我がアメリカ合衆国の力という物を理解してもらえらるだろう。」

「わかりました、では護衛艦として第二艦隊からビアトリクス級駆逐艦をいくつか編成の中へ入れておきます。」

「うむ、頼むぞ？ムー帝国はこの世界で第2位の技術力と国力、軍事力を持つ国だからな。」

「はい、神聖ミリスアル帝国に関しても魔法文明国家であります、ムー以上の技術力を

持っていることは確実です。ムーとは違い、機械文明国家ではありませんが、今後を考慮すると国交を締結すべきと思われまます。」

「それは分かっている。魔法文明だけで一切科学を頼らず文明を発展させたことは驚いたが、世界1位ならば北米大陸条約機構の影響力を高めるために是非とも近づきたいものだ。」

「わかりました、CIAやDIYにはさらに二カ国について調査するようお伝えしてきます。」

それを聞いた大統領は、満足そうにコーヒーを飲むと、そばに居たCAI長官が更に近付く。

「大統領、それとお耳に入れておきたいことなのですが」

「どうした？他にも何か分かったのか？」

「西方より新しく入った情報であります、グラミラート王国やトーパー王国からの情報で、第8帝国と名乗る国が第2文明圏で列強国レイフォルへ侵攻し、滅ぼしたということとです。現在でも第2文明圏内で暴れているということとです。」

「第8帝国？他国へ無差別に侵攻しているというのか、まるで第3帝国ドイツみたいな国家だな」

「今後でも調査は続いておりますが、何分にも北米大陸から遠い地域ですのでなかなか

調査員もそこまで手が行き届いていない状況でして…

さらなる調査のために第4軍事衛星と第9偵察衛星の優先使用权をこちらへ融通してもらえないでしょうか？」

現在、アメリカ合衆国は合計20基ほど打ち上げられ、7割が軍事衛星、3割は民間企業の衛星となっている。

しかし、まだまだ衛星自体は星が大きいため数が足りず、今後も打ち上げを予定している。

なので、衛星の優先権が各組織で争うように使っているのが現状である。

「分かった、第8帝国については調査せよ」

「はー！」

会議はこれで終わったが、政府関係者は部屋を出るよう到大統領へ促されたため、退出した。が、軍事関係者と空軍大將が残っていた。

「さて、そちらの『例の大陸調査』はどうなっているかね？」

「はい、現在でも衛星や偵察機、潜水艦による調査を続けておりますが、一つ気になる情報があります。」

「ほう、それは何かね？」

「はい、大陸の魔獣についてです。」

「何か分かったかね？あそこには魔獣と呼ばれるモンスターのせいでも人が住めない大陸となっているそうじゃないか」

「はい、偵察機や衛星による調査の結果、魔獣の姿はあまり見られませんでしたでしたが、熱源探知による反応では多数の魔獣を確認しました。

魔獣は大陸の南部、トーパ王国国境付近に活発的な動きが見られましたが、現在まで変わった動きはありませんでした。

未だ一部では常に雲が掛かっている場所もあるため、調査中です。」

「そうか、「グラメウス」大陸はどの国にも所属しない大陸らしいが、あそこの魔獣を殲滅し、領有化することは可能か？」

軍事関係者や大將は額に垂れる汗をハンカチで拭きながら、あまり乗り気じゃない表情で言う。

「できる、できないで言えば可能ではありますが、かなりの戦力が必要となります。ICBMやSLBMを使用すれば殲滅は可能ではあります。ですが、これでは放射能や放射線により永遠に住めない大陸へと変貌いたしますので、現在の開発中の兵器を使っても殲滅は厳しいかと……」

「そうか、まだ、我がアメリカ合衆国はかつての地球に居た頃よりも弱まっている。これをまず回復させてから殲滅に乗り出すのが、賢明か」

「恐れながらグラメウス大陸には魔獣の他にも危険生物が多く存在し、隔離する方が妥当ではないか、と思われれます。」

「なるほど、確かに唯一繋がっているのがトーパー王国だけとは言え、炎龍や神龍も生息するなら、アメリカ軍でも只では済まないかもしれないな」

「はい…」

「分かった。グラメウス大陸については今後も調査を頼むぞ、必要な人員や機材や全て手配しよう。」

なるべく情報を集めてくれ」

「は、はい、大統領。」

アメリカ合衆国は偶然にも偵察衛星がグラメウス大陸を数ヶ月ほどの前から捉えた時から他国に潜入させている諜報員にグラメウス大陸について調査するよう指令を出していた。

大陸には多くの魔獣やドラゴン、他の危険種族も生息している情報は助かった。

もし、後1ヶ月でも遅れたらアメリカは『どの国も領有していない大陸』を得るために調査隊を送る予定だった。

これが分かったアメリカは人員を送るのをやめ、衛星や航空機による観測に切り替えた。

グラメウス大陸にはステルス偵察機RQ―45ブラックバードやF―22F型、F―35C、E―7、などを積極的に使った。

これによって大陸の詳細なデータが揃いつつある。

魔獣やドラゴンは非常に厄介な生物でワイバーンやワイバーンロードなど赤ちゃんに思えるほどの能力差だ。

まずドラゴンに関しては複数の古龍や炎龍が生息しているらしく、1度RQ―45が撃墜されたことがあった。

それ以降撃墜されることはなかったが、状況的にRQ―45はマツハ2ほどの速度で15000ほどの高度で飛行していたのに関わらず、レーダーに反応し、回避しようと思えばその物体はマツハ2以上の速度で飛行していた。

明らかにおかしい数値で飛ぶ飛行物体に無人機から撃墜直前に撮影した画像で炎龍が確認された。

つまり、炎龍の能力は

- ・ 高度15000でも飛行可能。
- ・ マツハ2程度の速度を持つ。
- ・ 生物にして恐ろしいほどの加速度がある。

つまり炎龍は今まで他の大陸には確認されなかったが、グラメウス大陸には生息して

いると言うことだ。

これが現在アメリカ異世界調査部隊を悩ましているものの一つだ。

もちろん、撃墜自体は可能であるが、これだけの能力を持つ生物が存在することなど、とても信じがたいものであった。

大陸のまだ4割程度は濃い雲が掛かっかけていて、衛星ではもちろん、航空機も寄せ付けないほどの嵐が常に発生している地域も存在し、調査が思うように進まなかった。

アメリカ異世界調査部隊の調査は今後も続く。

グラメウス大陸南部上空

F-35Cが調査のために飛行していた。

現在のところでは地表に反応がないため、低空飛行で調査していた。

通常低空飛行は危険な行為だが、F-35Cには自衛用として対空ミサイル6基搭載、バルカン砲もある。

これだけの装備であれば自衛用としては十分である。

「こちらラーモット2番機、グラメウス大陸南部の森林地帯を現在飛行中、魔獣反応はなし。」

『こちらHQ、了解。そのまま調査を続行せよ』

「こちらラーモット2番機了解…ふう、不気味なくらい生氣を感じない森だな」

パイロットは眼下に見える真つ赤に染まった森を見て吹く

「さあて、早いとこ終わらせて行きますか…ん？」

少し欠伸をしながら何気ない山を見ていると何か光ったような気がしたのだ。

「光った？何かいるのか？」

とF-35Cは近くまで飛行するが、何も反応はない

「うん？何かいたような気がするが、まあいいか」

と機体はそのまま山から遠ざかるのであった。

その山の麓から人型の生物が複数出てきた

「行ったか」

「はい、星の戦士の神の船は去りました。」

「おのれ…人間どもめ、ここまで私の邪魔をするとは…おかげで魔帝様の汎用2足歩行型陸戦兵器エンシエントカイザーゴーレム作成に成功し、トーパ王国から攻め滅ぼしてやる計画が白紙になった。」

「星の戦士がまさか、再び召喚されているとは思いませんでした。」

「うむ、あの忌まわしい人間どもを滅ぼす前に星の戦士を真っ先に滅ぼしてから支配してやる……」

「はい、例の兵器についても順調にできております」

「そうか……あれらが完成すれば星の戦士とはいえ、神の船や鉄像が出たとしても蹴散らせる。あいつらは？」

「まだ、捕獲に成功しておりませんが、もう少しで捕獲が可能です。グラメウス大陸で最強種のアレらが従属させれば無敵でございます。」

「星の戦士については何か情報は出たか？」

「はい、旅人やワイバーンの兵士などを捕まえては尋問しておりますが、どうやら最近アメリカ合衆国やカナダ連邦という国が新興国家として登場したらしいのですが」

「アメリカ？聞いたこともないな、そいつらが星の戦士か？」

「可能性としては大きいかと思われます。今後としては彼らを真っ先に攻め立てるのがいいかと」

「そうだな……引き続き、情報を頼むぞ、我はこれから少し出かけてくる」

「それは、『ヴァンピーア』でございますか？」

「そうだ、あの層どもにもそろそろ役に立つてもらわなければならぬからな」

「ふふふ…全ては魔帝様のために…」

二人はニヤリと不気味な微笑みを浮かべながらF-35Cが去った後の上空を見るのだった。

28 機械文明国家

中央歴1639年12月3日

第2文明圏 列強国ムー帝国ブータン港

ブータン港は、ムー帝国屈指の貿易港であり、様々な船舶が出入りする。

ブータン港湾にはムー帝国の企業所属の蒸気機関を搭載した輸送船や客船、貨物船などが停泊し、列強国からの帆船も停泊している。

そんな港湾である出来事が注目の的となっていた。

それは超大型船の出現だ。

ブータン港湾沖に現れた艦隊は計9隻

大体が200mほどであるが、2隻が異常に大きく1隻は平たい甲板を持つ軍艦、もう1隻はビルのような建造物が建っている船、この2隻の全長300mは余裕で超えており、ムー海軍は直ちに攻撃準備に取り掛かった。

目の前に現れた9隻の軍艦と客船

見方を変えれば一つの海戦が可能な戦力でムーへ侵攻してきたとも見える。

ブータン市に住むムー住民はあまりの巨大船に驚愕しながらも港に集まっていた。

ムー海軍の駆逐艦が艦隊へ近づくと、駆逐艦の乗員は圧倒的大きさに開いた口が閉じなかった。

「な、なんだ、この巨大な空母は……これほどの空母なんて今まで見たことがない！この艦隊はこの所属だ？」

と艦長はそんな言葉をもらすが、ムーの駆逐艦が艦隊へ近づいても、護衛艦と思われる軍艦は何も対応はせず、ジツと静かだ。

すると大型船から小型艇が出てきたと思うと信じられないほどの速度でこちらへ近づいてきた。

駆逐艦の乗員も警戒はしつつ小型艇の乗員を駆逐艦へ乗船させる。

乗船してきた人々は青い斑模様の服装が二人、黒いスーツを身に纏った人物が二人「初めまして、私はムー海軍所属のヒューラ駆逐艦艦長のマイセルである。貴殿が航行している海域はムー帝国の領海である。貴国の所属と要件をお聞きしたい。」

「はい、私はアメリカ合衆国、国務省から来ましたセオドア外交官と申します。」

「カナダ連邦、ヴェロニカ・ジョセフ外交官と申します。」

「我々はムーより第3文明圏フィルアデス大陸のさらに東方から来ました。今回の訪問はムー帝国と国交開設したいと思っております。」

「ほう、国交開設ということですか……わかりました。上の人間には私から伝えましょう、その間ブータン外務省へご案内いたします。」

「ありがとうございます。ぜひよろしくお願いいたします。」

艦長は政府へアメリカ・カナダのことを伝えると順調に進んだ。

ムー政府はアメリカの艦隊の報告に驚愕し、政府・軍関係者に大きな衝撃を与えた。

艦隊に戦艦はいないが、3000m以上の超大型航空母艦などムーにはない、せいぜい1800mほどの空母が配備されているくらいだ。

しかも護衛艦と思われる戦闘艦の大きさは1500m、2000mを超えている艦艇ばかりだ。

ただ空母以外の艦艇で船体が大きい割に主砲が1門と2門程度しか付いていない貧相なデザインに疑問を抱くが、神聖ミリシアル帝国の魔導戦艦のようなデザインだが、武装が何も見当たらないまさに箱を並べたようなフォルムに大きな疑問を抱くのに十分だった。

3000mクラスの船舶など現在のムーの造船技術では不可能だ。

ムーはもともと戦闘艦で主力とされるのは戦艦であり、空母はあくまでも補助艦に過ぎない。

現在ムー帝国が建造した最大級の船舶は230m級の客船であり、それは4つの煙突に世界の中でも最大級の豪華客船だ。

外交自体もムー帝国側が国交を快諾し、無事アメリカ合衆国とカナダ連邦はムー帝国と国交締結した。

ムー帝国側にとって贈り物で喜ばれたのはセオドア外交官らが用意した旧式ではあるもののテレビ、アメリカ産のコーヒー、タバコ、陶芸品、貴金属品などだ。

そして、ムー帝国側からは非首都オタハイトへアメリカ・カナダ外交官たちを招待したいということで、これを承諾し、首都へは自分たちへ向かうことになった。

本来であれば汽車で向かうのだが、ムー帝国側にとっても更なる技術調査のために空軍のアイナック空港の使用許可を出し、アメリカの航空機の派遣を要請することになった。

案内役となったのはムー帝国の戦闘機マリンであった。

アメリカ・カナダの外交官は配備され始めた新型MV-22D型とF-35D合計3機で向かった。

*MV-22D型はMV-22Bの発展型として開発されたジェットエンジンを搭載したオスプレイ。

F-35D型 F-35系列の中で最新鋭機体。対無人機対策としてECM-34-Tを搭載し、無人機に対し強力な電子妨害と電磁波を発生させる電子妨害無効化システムを搭載した発展したのがF-35D型。

現在でもF/A-18E/FやF-35C型は現役であるが、徐々に新造艦にはF-35D型に変わりつつあった。

F-35D型はC型と比べ、若干大型化してしまっただが、それでも無人兵器に対抗できるだけの妨害装置やミサイルポッドと呼ばれる

一度に6発の対空ミサイルを搭載できる格納型ミサイルポッドを2基外付け式で翼へ搭載可能だ。

さらにステルス性をできる限り落とさないためにミサイルポッドの形状もステルスを意識され、ミサイルポッドの登場によって戦闘機ミサイル搭載量が飛躍的に上がる結果となった。

ただし、F-35C型ではエンジンの出力問題があるため搭載すれば性能低下は免れない。

編隊はアイナク空港へ飛び立った数十分くらいで到着するが、案内していたマリンがまさかの追い抜かされるという事態になったため、編隊はそのまま上空で待機したのちに空港へ全て垂直降下した後着陸した。

その光景に空港職員や軍関係者は呆然とした表情で見ていた。

その中である技術者も呆然とした表情で見ていた。

外交官らはムーの外交官たちについて行つたが技術者はフラつきながらもMV—2 2D型へ近く。

彼は冷や汗をかきまくっていた。

目の前の機体はプロペラがない。

主翼に搭載している筒状がエンジンと思われるが、内部には羽がビッシリ敷き詰められており、見たことのない飛行機であった。

それがどれほど大変で技術を必要とするのか、技術者としてわかっていた。

彼はマイラス技術士官であり、この若さにして第1種総合技将の資格を持つエリートであった。

彼はアメリカ・カナダ外交団が来る前に外交官から彼らの技術力を調査して欲しいと

いう依頼を受け、彼らの到着を見たが、驚愕することばかりであった。

最新鋭戦闘機マリンが追い抜かれ、彼らは圧倒的な速度で飛行していた。

耳には聞き慣れないエンジン音が響き、まるで神聖ミリシアル帝国の戦闘機のような音だった。

しかし、聞こえる音はキューンという一定感覚で安定した音が聞こえていた。

プロペラを採用していない彼らは独自のエンジンを作ることができるということ。

さらにこれだけ重たい機体をあれだけの機動力と垂直降下させるための出力は膨大であり、とても我が国では再現が不可能だ。

高出力の小型エンジン、確か我が国の航空分野においてプロペラ以外でのロケット推進式飛行機の論文を見たことはあるが、目の前のエンジンは明らかにロケットエンジンではない。

論文によればロケット推進は燃料を燃焼させて推進力を得るため、噴射口だけあれば良い。

だが、目の前のエンジンにはちゃんと空気取り入れ口が付いている。

ということは神聖ミリシアル帝国の魔光呪発式空気圧縮放射エンジンと同等ものである可能性が高い。

「な、なんという技術力!!!」

1機の機体は筒状のエンジンを2基主翼の両端についており、プロペラが一切ない。しかも我が国の長距離輸送機ラ・カオスほどの大きさで700Km/hは余裕で出ていた。

ラ・カオスは巡航速度280km/hほどしかなく、目の前の機体と比較されれば一目瞭然だ…

主翼の両端にエンジンをつけるということはそれだけエンジンの推進力と空気力学において十分耐えられる機体構造を持っていることになる。

700km/h以上という速度で垂直降下するためにエンジンの向きを変える。

言葉では簡単に聞こえても実際は高度な技術がなければ不可能だ。

さらに700km/h以上ということは神聖ミリシアル帝国が持つ最新鋭天の浮舟で500km/hほどしかない。

つまり、航空分野はどの国よりも先を進んでいることになる。

そして、護衛してきた戦闘機…

何と言葉を漏らせば良いか、わからない。

マリンのような主翼や尾翼、コックピットの位置などがまるで異なった形態、機尾には二つの噴射口、コックピット付近の空気取り入れ口

滑らかなライン、洗練された無駄のないデザイン

こ、これが戦闘機というのか：

全くどうやってこれほどのすべてのパーツが金属で作られた単葉機を作り出すことが出来ると言うのだろうか。

情報ではこいつは機体の上面の一部の扉が解放されたと思えば、筒状の何かが下へ向き、ゆっくりと着陸したという。

しかも安定していたとのこと。

筒状の何かとは恐らくエンジンだろう、つまり噴射口を下へ向けることができるという事か!?

アメリカという国は恐らく神聖ミリシアル帝国以上の超文明国家なのかもしれない。

300m以上の大型艦なんて見たことがない上、神聖ミリシアル帝国でも存在しない。

マイラスが技術者として理解できるうちにアメリカやカナダがいかに超大国なのか、無意識に認識し、自分たちの常識がアメリカの航空機によって崩れ去るような音がした。

応接室へ向かうマイラスの足取りは重い。

向かう先はアメリカ合衆国やカナダ連邦の外交官がいる応接室だ。

彼らが持っている艦艇や飛行機械は、我が国で開発することは現段階では不可能だ。あれほどの高性能を出そうと思うなら、生み出すのに数十年、実用化にさらに数年以上かかるだろう。

それだけ超越した超技術の塊：

航空機分野だけでも我が国は圧倒的不利である。

だが、彼らの艦隊には超大型空母が居ても、戦艦の情報はなかった。

我が国には高さ100メートルクラスの超高層ビルや、練度の高い優秀なエースパイロット。そして最新鋭戦艦ラ・カサミがある。

まだ、完全に不利なわけではないはずだ。

「どうなる事やら……。」

マイラスはアメリカ・カナダ外交官が滞在する部屋の扉をノックした。

コンコン

「どうやら」

扉をゆつくりと開ける。

中には、黒を基調とする清潔感溢れる男性2名がソファに座っていた。

「こんにちは、今回ムーの事をご紹介させていただき、技術者マイラスと申します。お二

人にお会いすることができ、大変嬉しく思います。」

アメリカ・カナダ外交官は立ち上がり、挨拶をする

「こちらこそ、このような機械文明国家、ムー帝国のことについてご紹介をして頂けるとは感謝します。アメリカ合衆国国務省から来ました外交官のセオドア・アーノルドと申します。」

「カナダ連邦外交官、ヴェロニカ・ジョセフと申します。お会いすることができて、大変嬉しい限りです。」

丁寧な言葉遣いだ、大概では文明圏外の国と相手する場合、高圧的な態度、言葉遣いが荒いことが多い。

「丁寧な挨拶ありがとうございます、具体的にご案内するのは、明日からとします。長旅でお疲れでしょうから、今日はこの空港のご案内の後に、都内のホテルにお連れします」

マイラスは、空港出口へ行く前に、空港格納庫内に外交官団を連れて行く。

格納庫に入ると、白く塗られた機体に青のストライプが入り、前部にプロペラが付き、その横に機銃が2機配置され、車輪は固定式であるが、空気抵抗を減らすためにカバーが付いている複葉機が1機、駐機してあった。

それは第一次世界大戦の戦闘機を連想させるデザインだった。

ピカピカに磨かれており、整備が行き届いた機体だと推測される。

マイラスは説明を始めた。

「この鉄龍は、我が国では航空機と呼んでいる飛行機械です。

これは我が国最新鋭戦闘機「マリン」です。最大速度は、ワイバーンロードよりも速い380km/h、前部に機銃・・ええと、火薬の爆発力で金属を飛ばす武器ですね。を、付け1人で操縦出来ます。メリットとしては、ワイバーンロードみたいに、ストレスで飛べなくなる事も無く、大量の糞の処理や未稼働時に食料をとらせ続ける必要もありません。空戦能力もワイバーンロードよりも上です。」

と説明する。

アメリカ人やカナダ人は目を輝かせて見ていた。

「これは…懐かしきレトロなレシプロ機だな」

「複葉機は男のロマンを感じますなくこれに美女と一緒に乗って空を飛びたい」

「…よし、君は少し黙っておこうか」

セオドアというアメリカ外交官がまるで懐かしそうに見ているのに対し、ヴェロニカというカナダ外交官は美女と飛ぶ光景を想像しながら顔がにやけていた

「レトロ」？それに懐かしいということはレシプロエンジンは既にあるのか？

少し探りを入れてみようか

「我が戦闘機に関心を持つて頂き嬉しい限りです。」

マリンには最新型のレシプロエンジンを搭載しておりますが、アメリカやカナダには内燃式レシプロエンジン以外にどういった選択肢がありますか？蒸気機関もレシプロといえますよね？まあ、蒸気機関は重くて出力が弱く飛行には適さないのですが」

マイラスの問いに、セオドアが答えた。

「そうですね…アメリカやカナダには、ジェットエンジンと呼ばれる航空機に適した小型高出力エンジンがありますので…。もちろん、レシプロエンジンもありますよ」

ジェットエンジン…先ほどの筒状のエンジンがそれなのだろう。聞いたことがないエンジンだ…やはりこの両国は凄まじい技術力を保有している。

「ほう…アメリカやカナダにも航空機に適したエンジンがあるのですね。是非構造を教えてくださいたいものです」

「構造自体を教えることは可能ですが、我が国やカナダでは新世界技術流出防止法が出来ましたので、限定的になります。」

小型高出力化や、エンジンの燃焼温度に耐え得る材料の素材や製造方法については公開することはできませんので、それでいいのであれば大丈夫です。」

「なるほど…設計図などは見ることは可能なのでしょうか？」

「簡単な設計図であれば見る事ができますよ、実は我が国から貴国へ贈り物がありま

すので、後で見えていただければ貴方も喜ぶでしょう。」

「簡単な設計図が見ることはできるのですね、贈り物とは興味深い…。個人的には是非アメリカやカナダと国交を結べる事を願いますよ」

情報を探るためにマイラスはさらに探る

「あなた方を護衛してきた戦闘機と思われる航空機はどのくらい速度が出るのですか？」

航空機は速度が重要だ。速度が上がれば、一撃離脱戦法により、速い方が圧倒的に有利である。

セオドアとヴェロニカはお互いにアイコンタクトを取る

「F-35D戦闘機であれば最高速度マッハ2.3ほどです。音速の2倍程度ですかね??他にもマッハ2.5ほどの戦闘機もいます。」

なん!!???!

お、音速を超えるのか!?!どうやって!?!今まで我が国でも音速を超える人工物体は存在しない。実験では将来的にロケット推進技術で音速を超えることは可能ではないか?と言われているが、速度面で圧倒的差がありすぎる。

「ははは…是非見てみたいものです…。では、こちらへ…」

マイラスは、アメリカ・カナダ外交団を、空港外へ案内する。

ムーの誇る自動車に乗せてホテルへ向かおうとしたが、もう嫌な予感しかしない。一体なぜ、これほどの技術を持つ国家が今まで存在しなかったのか：

これほどの技術があるならば正直に言えば中央世界以上の技術があると言わざるおえない。

空港外には、アメリカ・カナダ外交団を乗せる車が待機していた。馬を使わず、油を使用した内燃機関を車に積むまでに小型化した列強ムーの技術の結晶。

そのデザインもイギリスのロールス・ロイス・シルバーゴーストとよく酷似している。アメリカ・カナダ外交団は、驚く事無く、車に乗車する。

車は出発し、動き始める。特に驚いた様子はない。

やはりアメリカやカナダにも車があるのか…？

「どうですか？我が国の内燃機関を極限まで小型化に成功した自慢のパフアリア社製の車ですが」

「とてもレトロな雰囲気を持っていて美しい自動車だと思います。貴国は素晴らしい自動車を作りますな」

「それはありがたいものです。両国にも自動車はあるのですか？」

マイラスは尋ねる。

「はい、乗用車であれば、1年前のデータですが、アメリカだけで約2億9879万台以上が走っています」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

マイラスの目が点とし、間拔けな声を何とか飲み込む

…に、に、2億??????

一体どれだけの人口なんだ!?

ちよつと待て、この世界最大の人口を持っているじゃないか!?

「そ…そんなに走っていると、道が車で一杯になってしまいますね…」

「我が国は、前世界においても、信号システムが世界一進んでいましたので…。国交が樹立出来れば、自動車と共に是非信号システムについても輸出したいものです」

「そ、そ、そ、そうなのですか……ちなみに先ほど2億台以上の車両が走っていると仰いましたが、貴国の人口はどのくらいいるのですか？」

「はい、アメリカ合衆国は3億7250万人の人口ですね」

「カナダ連邦は4564万人ほどです。」

ああ、そうですか…

もう嫌だ、この二人、胃が痛くなってきたよ

カナダだけでも文明国以上の人口じゃないか…

マイラスは精神的に疲れてきた。

整地された道をホテルへ向かう。

やがて、高級ホテルが見えてきた。

車はホテルに横付けされ、皆はホテルへ入る。

「本日はここまでです。また明日、我が国の歴史と海軍についてご説明いたしますので、本日はゆつくりとお休みください。我が国から盛大におもてなしをさせてもらいますので」

「こちらこそありがとうございます。明日もよろしく願います。」

マイラスは、両国の外交団にこう伝え、ホテルを後にした。

もう、今日は早く寝たい、あんな超大国の外交官相手に精神が持たない…

翌日

アメリカ・カナダ外交団は、ムー歴史資料館にいた。簡単にマイラスは説明を始める。「では、我々の歴史について簡単に説明いたします。まず、各国にはなかなか信じてもらえませんが、我々のご先祖様は、この星の住人ではありません」

「!?」

「・・・」

セオドア外交官は驚きのあまりポカーンとした顔をしている。ヴェロニカ外交官は意味深の視線を向ける

マイラスは話を続ける。

「時は1万2千年前、大陸大転移と呼ばれる現象が起きました。これにより、ムー大陸のほとんどはこの世界へ転移してしまいました。これは、当時王政だったムーの正式な記録によつて残されています。」

「これが前世界の惑星になります」

マイラスは、地球儀を取り出す。外交官のセオドアは、見覚えのある地理配置に驚愕する。

「これは……！」

「!!!」

ふふん、アメリカ・カナダめ、前世界が丸い事に驚いているな。

流石にいくら超大国でもこれは知らまい

「前世界は丸かったのです。この世界も、水平線の位置からして前世界の2倍強はありますが、丸いはずですよ」

「地球だ!!!」

「へ?」

「これは…地軸の位置が少し違うのか?しかし、この配置は紛れも無く地球だ。む?南極大陸がこの位置にあるということは、氷に覆われてはいなかったということか…」

「しかし、この大陸はなんですか?これは存在しないはず…」

?何を言っているのか、わからないが説明してやるか…

マイラスは、南極大陸を指示し、説明を始める。

「ちなみに、この大陸はアトランティスといまして、全世界では、ムーと共に、世界を二分するほどの力を持った国家でした。ムーがいなくなつた今、おそらく世界を支配し

ているでしょうね」

「ちなみに…」

と言つて、マイラスはユーラシア大陸の横にある4つの大きな島が集まっている場所と巨大な大陸を指差す

「この国は、ヤムートといつて、我が国の友好国だったそうです。そして、もう一つこの大陸にもアステカ国家も友好国でした。

しかし、転移で引き裂かれたため、おそらく今はアトランティスに飲み込まれているでしょうけど……」

「少しよろしいでしょうか？」

セオドアがマイラスの発言に割つて入る。

「?」

「アメリカとカナダを説明するのに、一番良い方法が出来ました」

「はい?」

「我々も転移国家です。同一次元にあつた星かは不明ですが、おそらくあなた方の昔いた星から転移してきたとおもいます。

あなたが指差したこの大陸が我が国です。そして……」

セオドアはバッグから地図を出す。

「これが現在の北米大陸地図、そしてこれが私たちの過去にいた世界の地図です」

北米大陸地図、そしてメルカトル図法を使用した世界地図がマイラスに見せられる。

その地図には、たしかにムーのいた、ムー大陸の存在しない前世界地図があった。

マイラスの脳裏に衝撃が走る。セオドアが言葉が続ける。

「我々の元いた世界にも、1万2千年前に、突如として海に沈んだ大陸があると、言い伝え程度ですが残っています。」

あなたが今アトランティスと呼んだ大陸は、南極になってしまっているようですね。もしかしたら、地軸がずれたのかな？」

「貴方が言っておられたアステカ文明もありました」

!!!!

「は、ははは……まさかの歴史的発見ですね。あなた方アメリカとカナダとは、個人的には友好国となつてほしいものです。まさか、そんな事が……。」

後で、すぐに上に報告いたします」

せ、正確だ……一体アメリカとカナダはどんな技術を使えばこんな精巧な地図ができるというのだ!?

航空写真でもこれほど精巧な地図作成はできない!

これも報告する必要があるな…

その後、マイラスは簡単に歴史を伝えた。

転移後の混乱、周辺国との軋轢、魔法文明に比べての劣勢、機械文明としての再出発、そして世界第2位の国家へ。

ムーの歴史は、転移してからは苦難の歴史だったようだ。しかし、単一国家独力で車や飛行機を開発しているのは驚きの限りである。

セオドアは個人的にムーを評価していた

転移してから周りが魔法文明の中競争相手もない戦乱の中、科学を発展させて、独自でたった一カ国で蒸気機関を開発し、1900年代ヨーロッパやアメリカ、日本などで苦難な道を辿って発展させたのを一カ国で開発しているなんて、もし、ムーが後数十年すればいずれジェットエンジンや宇宙へ行くことも不可能ではないのかもしれない。

優秀な民族だ。

やはり、ムー帝国は北米大陸条約機構に加盟して欲しいものだ。

もし、ムーが加盟し、西方方面を確保できれば、中央世界に十分に経済的にも戦略的にも対抗できる。

これは報告内容が増えたものだ。

一通り説明が終わり、アメリカ・カナダ外交団を海軍基地へ案内する。

両国に対してムーの…列強で最強かもしれない、2番目の海軍力を誇るムーの姿を見せて付けてやらなければならない。

マイラスは、ロウリア王国で魔写されたアメリカの艦船を思い出す。

全長は我が国の最新式戦艦ラ・カサミよりも長いが、回転砲等の砲が1門しかついていない。しかもおそらくは12か13センチクラスの砲だ。

それに対して戦艦ラ・カサミの主砲は30・5センチメートルの2連装が2基、計4門だ。

砲撃の威力は口径の3乗に比例する。撃ち合えばよほどの事が無い限り勝てるだろう。

いかに超大型空母がいたとしても飛行機で戦艦を撃沈することはできないからだ。

いかに航空母艦が大型だろうが、所詮は洋上に浮かぶ箱舟

戦艦の前にはただの的でしかない

今回は自信满满に案内できそうだ。

港には、ムー国海軍の最新鋭戦艦ラ・カサミが停泊していた。

「!? これは…戦艦」

「やはり戦艦というものはかっこいいものだな……」

セオドアとヴェロニカはそれぞれの感想を述べる。

セオドアは目を見開いていた。

うん？ 戦艦というものはかっこいいもの？ ということは戦艦を保有しているのか？

「こいつは旧大日本帝国海軍の三笠にそっくりだ、アメリカのアイオワ級やサウスダコタ級、アラバマ、テキサスを思い出すものだ……」

「我が国にはハイダしか博物館船はいませんからね……戦艦は羨ましいものですね」

うん？ そっくり？ やはりアメリカには戦艦を保有しているのか？ しかもアイオワ、サ

ウスダコタ、アラバマ、テキサスだけで4隻の名前が出た。

ならば我が国に訪問した艦艇は本気ではないということか？

となればどうして主砲が1門の艦艇を建造する？

情報をもっと欲しい……

「ほう、両国にも戦艦があるのですか？」

「そうですね、我が国には約30年以上前までは、立派な戦艦を保有していました。しかし、時代の流れに伴い戦艦は建造されなくなりましたが」

「我が国には戦艦はないですね」

戦艦を保有していたのに時代の流れに伴い建造されなくなった？ どういうことだ？

どうして、わざわざ主力艦である戦艦を建造しない？ よほど平和な世界になったから必要なくなったからか？

だとしてもたつた1門の主砲で何ができる？

いくら30年とはいえ、アメリカは未だ戦艦を建造能力はあるのか？

あれほどの300mを超える超大型艦を建造できるのなら、我が国の戦艦を建造することは可能はずだ。

アメリカ軍の正規空母は超大型航空母艦だ。

護衛艦は巡洋艦ばかりの艦艇だった。

通常ムー帝国では排水量と特性で判断している。

3000tクラスで駆逐艦、5000tクラスで軽巡洋艦、1万tクラスで重巡洋艦、飛行甲板を有する艦艇は航空母艦

25cm以上の主砲を搭載する艦艇は戦艦とそれぞれで区分けされていた。

アメリカ艦隊は明らかな超大型空母と重巡洋艦ばかりの編成で駆逐艦や軽巡洋艦らしき艦艇はなかったように見える（ムー帝国基準）

恐らくあの空母も6万：7万トンを超えるだろう

「となればアメリカは我が国同様転移した今では配備する予定はあるのですか？」

アメリカのセオドア外交官は少し難しい表情を作る。

「戦艦は我が国でも議論になりましたが、現在のところでは配備予定はありませんね、アイオワ級もサウスダコタ級もとても戦闘には耐えられませんからな、今では記念艦となつていきます。」

「そうなのですか…この世界では弱肉強食なのですが、戦艦を建造する必要はあるのではないのですか？」

「そうですね、我が国としてもコストパフォーマンスを考慮すれば戦艦の必要性が増しています。我が国には戦艦を建造するための技術がすでにロストテクノロジーとなっていますからね。」

なるほど…

「そうですね…ところで、先ほど日本の艦に似ているとおっしゃっていましたが、日本という国は？」

「日本は転移する前の我が国の最大の同盟国でした。今では一緒に転移していませんので、この世界には存在しません。日本では三笠と呼ばれる戦艦がありました。約140年前に日本が大日本帝国と呼ばれていた時代に存在した連合艦隊の旗艦です。この艦があそこに停泊している戦艦にそっくりに見えましたので…。」

日本は先ほど歴史のご説明の中にありましたヤムートという国の末裔となる国で

す。」

「!?な、なるほど…」

大日本帝国海軍

戦艦三笠 1900年に進水し、1903年連合艦隊の旗艦となる。

1904年から日露戦争に加わり、旅順口攻撃や旅順口閉塞作戦に参加、そして黄海海戦にも参加した。

1905年には、有名な日本海海戦で、当時世界最強といわれたロシア海軍のバルチック艦隊と交戦した伝説的な艦であり、現在は記念館として、人々を楽しませている。「なるほど…先ほどアイオワやサウスダコタなどが名前で出ましたが、どんな戦艦ですか?」

「そうですね、この画面を見てもらってもいいでしょうか?これがアイオワ級です」
 地オドア外交官はスマホを操作し、画面を展開すると見せる。

!!!!!!
 な、なんだ、これは…

こんな小さな黒い板に精巧な絵が表示しているだど!?

どんな技術を使っているんだ!!!

それにこの戦艦は…第八帝国の戦艦グレードアトラスターよりスマートだが、巨大だ

…

これが記念艦だとい!

どう見てもラ・カサミ級よりも強力な主砲が三連装…

だが、なんだがすつきりしている…

「今ではすっかり博物館となってますからな」

これほどの技術がありながら建造しないなんて宝の持ち腐れというのはこのことだろう。

それが今ではたったの1門の砲と旧式のガトリングを搭載するようじゃ莫大な維持費がかかる金食い虫の戦艦は必要ない世界だったのかもしれない。

戦闘艦の中でも最も戦闘能力が高い戦艦は高い技術能力を必要とする。

技術は伝承しなければロストテクノロジーとなって消えてしまう。

戦艦が建造されなくなつて90年以上も経過しているなら航空分野では脅威になるが、海上分野ではこちらが勝利するだろう。

だが、良い情報を得た。あれほどの戦艦であればグレードアトラスターに対抗することが可能だろう。

是非とも記念艦となつている戦艦を調査せなば…

ムーの技術士官マイラスの案内が一通り終わり、ムー首脳陣に報告が上がる。

報告内容は上層部や首脳陣にとって頭を悩ませるものであったが、相手が友好的な態度で国交を締結したいということなので、ムー帝国は国交を締結する。

この裏には脅威になりつつあるグラ・パルカス帝国に対抗するためにできるだけ戦力と技術が欲しいムーの思案もある。

戦艦の配備にはアメリカ軍部でも戦列艦やワイバーンに対しミサイルを使用するとは明らかコストパフォーマンスとして費用対効果を考慮すれば全く採算に合わず、むしろオーバーキルで、それなら砲弾でもいいのではないか？と意見が出たが、小口径・中口径しか持たないイージス艦や巡洋艦しか持たないアメリカ海軍は一時期アイオワ級を復活させる話も出たが、アイオワ級は退役してから30年以上は経っており、たとえ配備できたとしても戦闘には耐えられないと判断された。

海軍の中でも戦艦を建造すべき、とパターンソン中将派が推し進めていたが、上層部が現在建造しているピアトリクス級駆逐艦や現用艦で十分事足りると判断され、白紙となった。

一応アメリカにはアイオワ級戦艦、サウスダコタ、テキサス、アラバマなどが記念艦

として現存するが、それはあくまでも記念艦であつて、戦闘に出しても十分な戦闘能力を發揮せずに運用に支障が来たことが予想され。戦艦の配備計画は保留となつていた。

アメリカとカナダはムー帝国へ技術的支援を行う代わりにムーにNATOへ加盟、安価で資源輸出、魔導機械に関する情報・研究などを譲歩することになり、ムー帝国へ基礎工作機械（旋盤、ボール盤、中ぐり盤、フライス盤、歯切り盤、研削盤、プレス機など）の輸出、バートニア州への留学・研修、工業力向上に協力となつた。

また、アメリカから贈り物として送られた物にムー帝国は驚愕し、この贈り物によつて後の戦いに大きく影響することになる。

余談であるが、ムー帝国はアメリカからの輸出として石炭や石油も求め、アメリカやカナダ側は広大な大陸であれば原油や石炭鉱はあるのでは？と首を傾げるが、ムー帝国は産業革命時から多くの石炭を採掘し、原油も算出しているが、これから増える需要に供給側が新規の鉱山開発などに手間取つてしまい、工業化を進めるためにアメリカから輸入することが決定した。

アメリカ側としても原油はともかく石炭は有り余つている状態なので、承認した。

29星の戦士

ロウリア王国戦争終結後、保護したクワ・トイネの住民や伝説から『星の戦士』についてアメリカ軍が保有する兵器や国旗、文化と非常に酷似しているとエルフからの証言でアメリカ政府は異世界解明のために本格的に調査に乗り出した。

場所はロデニウス大陸クワ・トイネ公国北東部エルフの聖地 リーンノウ森林地帯
樹海となっている森は非常に深く、湿度が高い

空から降り注ぐ太陽の光は大木の枝によって遮られ、地上に僅かな木漏れ日が届く程度。

自然の独特の匂いが漂う綺麗な空気が風の流れに乗って、肌には心地良く感じる。

多くの動植物が生命を謳歌する自然溢れるリーンノウの森の入り口付近で、ハイエルフが二人待っていた。

二人の名前はミーナとウォルだ。

このハイエルフたちはやってくる客人を待っていた。

「はあ……聖地に人族を入れるのは嫌だな。」

ウォルがつぶやく。

彼の生きている間に聖地にエルフ以外の種族が入った事はない。

リンノウの森はエルフにとって歴史・宗教的観点から神聖な神森だった。

かつて魔獣を率いる魔王がこの大陸に攻め込んだ時、多種族連合軍が最後の砦として本拠地を構えた最初で最後の施設。

森の中にはかつて多種族連合軍が使用した歴史的建造物やあらゆる種族の命の恩人である『星の戦士』が使った空飛ぶ船や地竜などの遺産がある。

さらに森の北部あたりの沿岸地域には星の戦士のリーダー的存在であった鋼鉄の海獣がある。

もし、エルフ以外の種族が聖地に入ろうとすればエルフ族が全力で追い出す。

それほど恩恵を感じているのだった。

確かにクワ・トイネ公国を救い、多くの種族をロウリアから救った英雄

ロウリアの奴隷たちからは奴隷解放国家

憎きロウリア王国を打ち倒してくれた

だが、いかにそれだけの功績があっても神聖な聖地に入れることなぞ、神聖な聖地が汚れるだけだ。

音のする方向を見る。

リーノンウの森上空

「な……なんだ!!あれは!!!」

ハイエルフであり、樹海とも言えるほどの森に住む2人はロウリア王国との戦争で使ったアメリカ軍の兵器の情報が行き届いていない。

そんな2人の前に現れた全身金属でできた巨大な羽が上へ向いて高速に回しつつ、周辺に風圧を上げるMH-60Rが飛行していた。

それがゆっくりと高度を下げる

「まっ……まさか!!!星の戦士の空飛ぶ船!?!」

伝承にあった『星の戦士』が乗ってきた飛行機に釘付けだった。

MH-60Rはゆっくり広場に着陸するとエンジン音が小さくなり、サイドドアが開き、中から複数の人間が現れた。

(中から人だと?!この空飛ぶ船は一体!)

とウォルは混乱していた。

伝説内容にあったものが目の前にあるからだ。

人族は、白い服を着た人間が3人と焦げ茶色の斑模様を着た者が6人という。

「初めまして、私は考古学者のイラークです。今回聖地をご案内していただけるとの事で、感謝いたします。」

「私は地質学者のウイルソンと申します。今回の協力には感謝をします。」

「私は軍事専門家のサラと言います。よろしくお願いします。」

「は……はい。」

未知との遭遇に会ったかのように石化した2人

これがクワ・トイネ公国をロウリア王国から救った英雄

多民族のような威圧的な表面は見られず、言葉遣いも非常に丁寧だ。

そんな様子に2人は先方側の腰の低さに戸惑う

「わ、わかりました、ではこちらに……少し歩きますよ。」

アメリカ・カナダ調査団は、ハイエルフの2人につづく。

森は非常に深く、一度迷ってしまえば二度と出てこられないような感覚にも襲われた。

歩き続けて約2時間後

移動すること2時間、軍人はともかく博士にはきつい労働であった。

「ハア、ハア、ハア、あ、あとのくらいで着くのですかな？」

「なかなかこの森は体力を使いますな…アフリカ調査よりも体力を使うな…」

「そうですか？このぐらい私は中国戦よりは楽ですけどね」

調査団はヘトヘトになり、ミーナに尋ねる。

「あら？もうバテてしまったのですか？まだまだこの先森ばかりですよ？あのロウリア王国を打倒し、数々の種族を奴隷から解放した解放者と聞いておりましたので、少し意外ですね」

ミーナは笑って答える。

「本当にもう少しで着きますので、頑張ってください。」

「はい、しかしここは凄い所ですね。方位磁石も色々な方向を向くし、案内が無ければ絶対にたどり着く事が出来なさそうです。」

「神話の時代、魔王軍の侵攻に対し、多民族連合軍の最後の砦として使われた場所です。で。」

森の声を聞けないと、迷ってしまいますよ。」

調査団は進む。

道中では戦争で使われたと思われる警戒部隊が使用する施設の廃墟や壊れた石垣など戦いの激しさを物語るものが数多くあった。

そして、深い森を抜けると巨大な崖に古代の遺跡がドーム状の建物が見えた。

建物は壁や柱に植物が絡みついており、かなり朽ち果てていた。

広場まで着いたところでハイエルフのミーナは立ち止まり、調査団の方へ身体を向ける。

「ここから先はエルフ族にとって神聖な場所であり、我らの宝があります。

長らくここへ訪れる者はエルフ族以外にいませんでした：

知つての通り、神話の時代に魔王軍はロデニウス大陸へ侵攻しました。

魔王軍の魔力は非常に強力で、彼らが引き連れていた魔獣も強力でした。

各種族は魔王に対抗するために、多種族連合軍を組織し、最後まで魔王軍に対抗しました。

しかし、圧倒的魔力や数の暴力によって多種族連合軍は多くの犠牲を払いながらも対抗しましたが敗北し、多くの戦友が散っていききました。

そして、多種族連合軍は、最後の砦エルフの聖地である神森まで撤退します。

魔王軍は多種族連合軍を神森ごと焼き払うつもりで次々と森が焼かれました。

このままではエルフ族だけではなく、あらゆる種族が全滅してしまう。

彼らはエルフ族の神、緑の神は全世界を作り出したと言われる創造神へ助けを求めました。

創造神はその願いを聞き届け、この世界に『星の戦士』を降臨させました。

星の戦士は、空を飛ぶ神の船を操り、雷鳴の轟きと共に大地を焼く強大な魔導をもつて、魔王軍を焼き払いました。

彼らは非常に勇敢であり、魔王軍に恐れず殲滅しました。

彼らは創造神の使命を終わると、元の世界へ帰りました。

しかし、魔王軍との戦いで神の船、鋼鉄の地竜、鋼鉄の神船、鋼鉄の海獣など故障・損傷したものが残され、帰って行きました。

エルフ族は現在では失われつつある時空遅延式魔法をそれらに使い、保管しております。

伝承によれば心臓部となる部分が動かなくなったり、魔王軍との戦いで損傷がひどかったものがあります。

星の戦士が使用した神の船、鋼鉄の地竜、鋼鉄の神船、鋼鉄の海獣はこのクワ・トイネ公国のみならずいくつもの戦線を持ち、魔王軍と戦争したと言われています。

膨大な物資などは創造神のご加護の元に支えられ、魔王軍を圧倒しました。

魔王軍との戦争終結と共に先祖たちは星の戦士にお礼しようと持ち得る限りの財産などを献上しようとしましたが、それらを断り、去ったものと言われます。」

と説明が終わる。

考古学のイラクはこの伝承にかなり興味を持っていた。

中世時代に相当するこの世界で創造神や緑の神と言った神が登場し、多神教のエルフ族がもたらす伝承の中に登場する星の戦士

神の船や鋼鉄の地竜、鋼鉄の神船、鋼鉄の海獣

これらは彼らによれば星の戦士が使った兵器だという

イラク自身も多くの発掘調査や古代について研究してきたが、この異世界はまさに考古学分野において非常に興味深い。

異世界に登場する魔王、魔法、人間以外の種族、古の魔法帝国、星の戦士そしてムー帝国の転移

これらを解明することができればアメリカやカナダがなぜ、転移したのか、そして元の世界へ帰る鍵となる可能性が非常に高い。

転移事件、それはアメリカ、カナダに多大な影響を及ぼした謎の現象。

これによつて国内で大混乱が発生し、一部の外国人や海外へ親戚・知人・友人・家族など持っている人々が絶望した。

彼も妻や娘をヨーロッパの方へ旅行に行っていた時に転移事件が起きたため、最初は荒れた

酒に酔いつぶれ、部屋に引きこもっていた。

しかし、この世界で登場する伝説や空想でしか存在しない魔法やエルフ、ドラゴンが存在したという新聞を見て、彼の感情の中に光が見えた。

妻や娘のことを思うと今でも心配である

だが、この転移を解明することで元の地球へ帰れる道があるのなら、彼はいつまでも挑もうと決断している。

「なるほど……星の戦士とは大変興味深いものだ」

「私としては星の戦士が使った兵器や武器に大変興味を持っていますね」

そして、大きな扉の前に着くとミーナは扉に手を当て、何か呪文を唱える。

すると扉の鍵が開く音が響き、重厚な扉がゆつくりと開く

中には光関係の魔法なのか、処所明るい。

そして、奥には何かが鎮座しているものが見えた。

それは近づいていくほど徐々にフォルムがはつきりする。

だが、それはイラークたちの表情を徐々に信じられないものを見るかのような表情になつていく

それは大きな主翼を持ち、主翼が途中で上へ向くように折れ曲がり、青いシルエット彼らが見たものはまさしくアメリカ海軍が使用したことがある機体

それも90年以上前の航空機

アメリカが作り出した艦載機の中でも傑作機とも言われた戦闘機とも言い、攻撃機とも言える機体

アメリカ調査団の前に、エルフの宝と言われた神話の時代に活躍した空を飛ぶ船が現れ、それを注視する。

「ど、どうしてこれがここにある!？」

「いったいどういう事だ!!!これは!」

「この機体は…」

ミーナはアメリカ調査団の狼狽ぶりが不思議に思い、尋ねる。

「どうされました?確かに、これは私たちの宝であり、この世界のものではありませんが、何をそんなに驚いているのですか?」

アメリカ調査団は表情を固まらせながら、震える身体で機体に近づく

「(?!)…」

「(?!)?」

「コルセア!!!」

アメリカ海軍、艦上戦闘機『F4Uコルセア』

第二次世界大戦後期、アメリカ海軍が開発した艦載機、戦闘機とのドックファイトを

可能とし、爆弾を907Kg搭載可能な艦上爆撃機とも言える。

さらに特徴的逆ガル翼のおかげで重い機体も持ち上げる

一時は艦載機の中でもトップクラスの重量を持った戦闘機だった。

「ど、どうしてこれがここに…」

「え？え？え？この神の船を知っているのですか？」

「知っているも何もこの機体は我が国が90年以上前に開発した飛行機だからだよ」

「あり得ない、どうしてこれが…」

「見ろ、エンジン部分に被弾痕があるということは被弾したことによる故障なのか？」

「!?ちよつと待て！開発したというのはどういことだ！貴方達はこれを作った本人と
いうことなのか！」

「実際私たちが作り出したわけではないのですが、コルセアは90年以上前にアメリカ
が大戦中に作り出した戦闘機で、今も現存しています。」

「!!!」

「バイエルフは絶句した。」

本人達の言うことが本当であればアメリカ調査団、いやアメリカやカナダは星の戦士
である可能性が高い。

いや、本人達なのかもしれない。

だが、それを否定しようとして口から出そうになるが、途中で止まる。

否定しようにも実際にこの人たちは神の船に乗ってきたのだからだ。

と言うことは本当なのか？と疑心暗鬼になりながらも他を紹介する。

「えーと、ここにあるのはこれ以外にもあるけど、見てみる？」

「是非！」

「お願いします！」

アメリカ調査団はF4Uコルセアがあることに驚愕しながらも古ぼけた扉を開き、木組みが目立つ空間へ入る。

「ここは星の戦士が実際に使ったと言う鋼鉄の地竜があります。」

「ここ、こいつはM4シャーマンか！こいつがここにあるとは」

「だが、こいつも放置されていたのか、所々錆び付いているし、前面装甲が大破している」

「よほど激しい戦闘があったようだな……」

「シャーマン……その名前がこの地竜の名前なのですか？」

「そうです、こいつは見た所後期型なのですが、シャーマン戦車で間違い無いです。」

と次々ミーナとウォルは案内する

道中で半分ほどであるが大破、中破したもののばかりだが、F4U-A型コルセア、

シャーマン戦車M4A3E8、ジープ、トラック、ハーフトラック、F6F、T95などが綺麗に並べられた状態で置かれていた。

恐らくエルフ達が大事に保管してきてくれたのか、どれもこれもが大破・損傷しているとはいえ、保存状態は非常に良かった。

博物館・マニアなどは狂喜するだろう。

特にT95はアメリカ軍が開発した対独の要塞を突破するために開発された。ここあるのはほとんど損傷が少なく、状態の良い戦車(?)であった

修理すれば十分直せる車両中にはあったから

全部で車両156輛、航空機90機とエルフ達が保管しているだけでこれだけあるとは歴史的発見と言える。

だが、同時にエルフ達と共に戦って散ったのか、十字架が建てられた部屋もあった。

そこには多くの十字架が建てられ、十字架にぶら下がっていたドックタグを見れば全員例外なくアメリカ人名であった。

調査団は十字を切って、黙祷した。

奥へ歩くと建物の最深部と思われる場所へ着いた

「ここからはエルフ族の中でも限られた人物しか入室が許可されていない空間

鋼鉄の海獣が眠る部屋です。

「だが、アイオワと良く似ているぞ！」

「・・・何かわかるかね？」

イラークがサラに尋ねる。

「・・・・・・・・イラーク博士、ウイルソン博士、これはアイオワ級戦艦ではありません。」

「アイオワでは無い？だが、この艦影は他の戦艦ではなかったはずだぞ？」

「これは第二次世界大戦中我がアメリカ海軍が日本海軍の新型戦艦に対抗するために計画された戦艦、主砲50口径16インチ4基12門、280mを超える巨体、針鼠のごとく設置された対空システム、これは・・・」

「モンタナ級戦艦です。」

「も、モンタナ級だと!？」

「す、すまない、私は軍事に関してはあまり詳しく無いのだが、モンタナ級戦艦とは何か

ね?」

「モンタナ級戦艦はアメリカ海軍が計画した戦艦です。」

計画だけで建造はされませんでした。私としては計画でしかなかったモンタナ級が実際に見られる日が来ようとは凄く興奮します!」

「さ、サラさん、妙に目が光っていますね…」

「当然です!モンタナ級は軍事専門家として興味を湧かないわけじゃ無いですか!ああ、美しい!」

「お、おう…」

「え、えつと…この鋼鉄の海獣についても知っているのですね」

ミーナは若干引いた顔で尋ねる

「はい、もちろんです!」

凄くいい笑顔で答えるが、逆にハイエルフたちも含めて他の調査団も引いていた。

若干微妙な空気になったが、その後調査団はモンタナ級戦艦についても調査すると驚きの記録を発見する。

モンタナ級戦艦の艦長室や通信室で当時の記録と思われるファイルや通信内容が書かれた書類が発見された。

モンタナ級戦艦自身も至る所が黒ずんでおり、第3砲塔は完全に前面装甲や上面装甲

が大破し、砲身が折れ曲がっていた。

後部指揮所も何かに削り取られたか、のような爪痕を残し、両用砲はいくつか大破している。

船体自体も力尽きたせいなのか、ほぼ座礁していた。

機関室は完全に浸水し、いくつかのブロックが水で浸水していた。

もはや完全に大破着底しているモンタナ級戦艦

艦名も記録からUSS メイン BB-69とわかった。

つまり、このモンタナ級戦艦は3番艦メインだろう。

他にもアメリカ軍はロデニウス大陸をメインにフェルアデス大陸北部戦線、北海海戦などが行われたということらしく。

記録では

アメリカ異世界派遣軍 損害記録書

アメリカ陸軍第4s****団

陸軍

損失

戦車189輛

戦闘車両218輛

トラック・ジープなど補助車両178輛

人員

戦死者353名

負傷者1554名

アメリカ海軍第3艦隊第23任m*****

海軍

戦艦3隻撃沈・損失

重巡洋艦1隻大破

駆逐艦6隻大破・轟沈

輸送船4隻中破・轟沈

人員

戦死者3792名

負傷者4302名

両軍

航空機

戦闘機・攻撃機

121機・176機損傷・損失

爆撃機

12機損失

多民族連合軍

戦死者9830名

負傷者30492名

民間人

死傷者12950名

なお、戦艦モンタナ、オハイオについて炎龍の襲撃により行方不明中

さらに驚くことに戦艦メインは当初アメリカ海軍が計画したサイズや設計が異なることを発見し、更なる調査が進められる。

これによってアメリカ・カナダ政府は国交締結する国や諜報員から積極的に星の戦士について調べることが決定した。

30 それぞれの思案と事情

アメリカ合衆国航空宇宙局『NASA』

「一体この星はどうなっている!?!物理法則というものがないのか!!!」

一人研究所で叫んでいたのは宇宙科学部門の科学者パールス・ホーキングは机に両手を拳で叩きながら叫ぶ。

アメリカ合衆国は多くの分野で転移騒動から様々な研究機関が頭を悩ませていた。

その中でも既に20基以上の人工衛星を宇宙へ送り、観測は始まっていた。

次々と送られるデータは驚愕の一言でしかない。

この星は地球の2倍ほどの大きさがあるのに関わらず重力加速後は9.8065m/s²、気圧も平均1015hpa、自転の速さが地球のほぼ2倍の速さのせい、24時間という時間の流れもほぼ変わらず、恐らく変わっても1年が365.5日と0.

5日くらいの差で若干地球の公転周期より長い。

しかも観測グループからのデータでは太陽の大きさもほぼ同じだといひ、太陽とこの惑星との距離は地球の時と同じ1・5億kmだ。

どうなっている？地球の2倍ほどであれば質量はもつとあるはずなのに、この星の内
部はスカスカなのか!?

通常地球より2倍サイズの星が2倍で自転するなら何かしらの影響が地上の生命にも出てもおかしくないのにそれが全くない。

さらに現在確認されている大陸で第1、第2、第3文明圏、南洋大陸、グラメウス大陸、その周辺の諸島以外で大陸の存在も確認されている。

アメリカ合衆国から東に1万キロ以上先にも大陸の存在は確認され、衛星からの情報では人工物の存在も発見されている。

本当であれば東海岸からも東へ進出したいところだが、タナトスのせいで全く進出できないうでいた。

この惑星だけでも驚愕の一言でしかないが、その惑星に住む生物たちの多様性や種族についても驚愕でしかない。

例えば獣人族という動物から人間へと進化したと思われる種族のDNAを調査した

ところ何と99%は人間と似た遺伝子構造で、残り1%は動物の遺伝子が存在していることが発見された。

ということは人間の遺伝子に動物の遺伝子も合わさるということなのだろうか？ それぞれの種族によって特性が存在することも重要な課題となっている。

例えばゴブリンと呼ばれる生物は、知能こそ低いが片言ながら会話が可能で、意思疎通も可能だという。

しかし、動物的本能が強いのか、非常に凶暴であり、議会でもかなり扱いが慎重となっている。

既にサンプルとなるゴブリン数体は新しく領土となったバートニア州の研究所に送られている。

研究所もまだ完成していないが、開発が進んでいるバートニア州ならあと数ヶ月もすれば形になるだろう

ゴブリンだけではなくオークも厄介だ。

オークは知能が全くなく、その身体能力は異常に高い。

その力は装甲車を軽く体当たりで吹き飛ばすほどであり、分厚い皮膚のせいで銃弾が貫通しにくく、動物専用の特許ライフルを使用しないと貫通しない。

今までのオークはほとんどオスが多いため、蜂や蟻のような組織的な社会構造でメス

の比率は少ないのでは？と当初仮説が立てられるが、それはすぐに否定された。

それはクワトイネ公国からの情報ではオークの生態系として基本的にメスの絶対数は少なく、多くの場合他の種族の女性を使って繁殖するという。

生まれる子供は種族の遺伝子関係なくオークの子供が生まれるらしく、オークの遺伝子はかなり強力な遺伝子なのかも知れない。

遺伝子というのは常に優性遺伝子が多く受け継がれるが、異世界では種族ごとの遺伝子にあまり遺伝子学は通用しないことが多い。

先週ほどバートニア州に訪れた種族の中でエルフや獣人族も多かったが、ドワーフと呼ばれる種族も興味深い。

身体の構造はほとんど人間と変わらないのに関わらず、身体的能力が高いのに身長が平均120cmと低い。

ドワーフは社会構造の中で建造物や木造製品など製造業を好み、ついこの間もアメリカの建築会社にドワーフの集団が押し寄せたと聞いたことがある。

そして、エルフ。

こちらでも身体の構造は人間と変わらないはずなのに長寿で200歳まで生きるという。

長寿という意味ではグラミラート王国の姫も数百年は生きる妖狐族らしいが彼らの

遺伝子は一体どうなっているというのだ!?

さらに翼人族

こちらも鳥類が人間へと進化した種族らしく、背中に羽が生えているのと種類によって能力が異なるらしい。

アメリカやカナダには来ていないが、他にも種族が多くいるらしく、まさしく異世界だと心の中から思った。

そして、もう一つ驚くべきなことはこれらの種族が例え異なっても人間と結婚し、子供を産むことも可能だという

遺伝子上ほとんど人間と同じであれば可能なのかもしれないが、両親によって生まれる子供も異なるらしい。

妖狐族の女性と人間の男性から子供を産んだ場合、高い確率で獣人族の子供が生まれるらしい。

遺伝子学に言えば獣人族の遺伝性は強いということだ。

両国は人間以外の種族について法的取扱をどうするか、議論している。

人種差別ではないが、人間以外の種族には必ずそれぞれの特性や能力を持つ

司法省でも人間以外の種族を人間と同じく人権を認めているが、細かな法的処置に対してはどうするか、議論になっている。

「どうなっているんだ、ある意味面白い星ではあるが、物理が通用しない世界なんてあるのか！」

とコーヒーを一気飲みする。

そして、パールスはもう一つのデータをパソコンから呼び出す

それは先月から開始されている魔法実験だ。

実験といってもロウリア軍戦争犯罪を犯した魔導師に協力してもらい、魔法を使って、それをあらゆる機器で観測、魔導師の身体を調べるなどしているが全くと言って良いほど結果が出ない。

そもそも魔法とは何か？それは科学で実現・説明・解釈・定義ができないことを示す言葉と言える。

まさしくアメリカやカナダの両国の科学研究機関の前に立つ難関の問題であった。

エルフ族の話によれば魔法とは地表や空気中に存在する魔素と呼ばれるものが魔法の原理らしく、それらを統制しているのが精霊という。

実際、アメリカの研究機関が最新鋭の観測システムで観測しても何もデータが得られない。

仮説として未知の物質が存在し、現代の科学では解明できない何かがあるというものの、近いもので言えば炭素が酸素に反応し発火するような現象なのではないか？と言われている

つまり、空気中にある酸素が魔素だとすれば炭素を生み出すものがこの世界の種族に秘密がある可能性がある。

旧ロウリア王国から徴収した魔法書関係など解析を急がせているが、どうやら魔法は魔術という儀式を行うことで使用することができらしく、以前クワトイネ公国使節団が使用した魔法は水系魔法と治癒魔法というもので、呪文を発することで魔法を扱うことができるらしい。

魔法も誰にでも扱えるというわけではなく、それぞれの素質や能力が差を分けるという。

魔素というのは一種のエネルギーのようなもので、そのエネルギーを蓄積することができる器が魔導師なのだろう。

魔導師は魔素を魔術によって引き出すことで魔法を生み出すことができる。

現在確認されているだけで攻撃系魔法・治癒魔法・防御系魔法・諜報魔法などそれぞ

れの属性ごとの魔法などがあり、この前クワトイネ公国へ送った調査団がクワトイネ公国に星の戦士に関する情報があったらしく、歓喜していたな…

アメリカでは様々な分野が魔法について興味を抱いていた。

例えば

攻撃系魔法は人工的に生み出すことができれば強力な兵器を作ることが可能だろう。

治癒魔法は医療業界が歓喜することになるだろうが、同時に利権問題も存在する。魔法で外傷に薬品を全く使わず、治癒魔法のみで完治可能だとすれば将来、魔法は人類史の中でも最も優れている力が利権問題でかなり揉めるだろう。

防衛系魔法は警察機関や沿岸警備隊を中心に先手を打たれても防ぐことができればこれほど便利なものはないだろう。

そして、諜報魔法

これがC A IやD Y Iで注目されている力

魔法の精度自体は現代科学分野に劣るが、安価で即日行動が可能という点において非常に便利性の高い力であり、機械を使わないとなると道具を持ち込まないため、組織の内部や厳重な施設などに有効だろう。

今の簡単に言ったものでもっと他に有効活用できないか、と研究されている。

現在のところ研究では火属性魔法最大攻撃である『ファイガ』を旧式M I戦車に攻撃

したところ装甲を焦がす程度で装甲車でも同じだった。

普通乗用車や航空機は爆発し、大破した。

基本的に魔法攻撃を迎撃することは出来ず、ほとんどの魔法に物理攻撃が通用しないため、避けるか、攻撃される前に術者を殺害及び無力化することが推奨されている。

そして、文明や技術格差

地球でも歴史の中で登場するシュメール人は当時としては謎に包まれた製鉄や建築技法などどこから生まれたのか、謎に包まれている。

この異世界では中央世界と呼ばれる中心では情報ではアメリカやカナダが持っている艦船と似たような艦艇や飛行機、蒸気機関を発明しているなど文明圏外との差は下手すれば200年以上ほどの差がある。

中央世界ではどれほどの文明が発展しているのか、未だ不明であるが、衛星からの情報では200mを超える艦艇や夜でも明るく照らす電気技術も発達しているのかもしれない。

現時点ではアメリカ合衆国やカナダ連邦を超える文明や科学力を持つ国家は存在しない。

元々転移や魔法、ドラゴン、海獣、多種族という非科学的なものばかりが登場する世界で全てにおいて科学が通用しないのかもしれない。

ある意味それを解明することも科学の発展へ繋がる課題となるだろう。
本当に面白いものだ…この星は…

と彼はコーヒーを飲みつつ外の景色を見るのであった。

ワシントンDC ホワイトハウス

「大統領、これは直ちに規制をかけるべきです。」

ホワイトハウスの会議室にアメリカ国防省と司法省、大統領が集まりアメリカ国内で起きている麻薬組織による抗争にアメリカで初めて異世界生物が兵器として使われたということだ。

北米大陸の周囲に大陸や島はほとんどなく、西方方面にはぼユーラシア大陸と位置する第3文明圏、グラメウス大陸、ハワイ諸島沖南西のグラミラート王国があるくらいだ。

しかし、海洋生物の生態系の変化や飛行生物で初めてアメリカアラスカ州でドラゴンが目撃されるようになった。

ドラゴンはグラメウス大陸から飛来しているものと考えられ、ドラゴンの生態系にも

把握していないことが多い。

ドラゴンの種類も一種類だけではなく何十と今まで確認され、その中でも穏やかで性格が落ち着いている草食系のドラゴンもいれば、ワイバーンのような肉食の凶暴なドラゴンも存在する。

アメリカ合衆国カルフォルニア州で見られた麻薬組織による紛争は小規模であったものの、初めて調教されたドラゴンが武器として使われた。

ドラゴンは小型から大型まで存在し、今回使用されたドラゴンは肉食系であるものの小型で人間でも調教が可能な種らしい。

外来生物に対し厳しい法律の規制が掛かっているアメリカだが、異世界生物に対しては基本的に持ち込みは禁止されているが、『自然で発生する現象』に対して対処が求められていた。

異世界対策の法律は法案が徐々に整備されつつあるが、まだまだ穴が多い。

そして、ロウリア王国戦争で領土となったバートニア州は異世界の領土であるため生態系や地理などの調査

インフラ、都市開発

バートニア州にやってくる異世界人

そこでアメリカ合衆国はバートニア州の法律を異世界に合わせたバートニア州独自

の法律を次々と可決した。

アメリカは州ごとに法律の内容は変わっており、例えばネバダ州では同性愛は法的に認められているが、他の州では認めていなかったりする。

ただし、例え同じアメリカ領土だったとしても異世界の領土から無闇に植物・動物などの持ち込みを厳しく罰していた。

さらに頭を悩ますのは宗教だ。

アメリカはあらゆる人種がいるため多民族国家であるものの、宗教は非常に厄介な問題点と言える。

当然ながら宗教にも過激派も存在し、それらをどうやって対処するか、だ。

ついこの間ではバートニア州を訪れた文明圏から来た宗教関係者が人種以外の種族を差別し、殲滅すると発言しながら魔法攻撃する事件も発生した。

それはすぐに州軍が駆けつけ取り押さえたが、一歩間違えれば大惨事となっていた。今週だけで司法省で10人ほどが過労で倒れた。

「そうだな…議会の方でも回して置こう。麻薬組織についてはどうなっている？」

「はい、連邦捜査局が全力を挙げて捜査していますので、もう少ししたら報告が来ると思います。」

「わかった。できる限り不安の種である麻薬や犯罪組織は撲滅しておきたい。頼むぞ」
「はい、お任せを」

「そうか、バートニア州の法律も次々と可決し、開発も順調だな？」

「はい、港湾施設も徐々にはありますが、開発が進み、これでアメリカと異世界との貿易も円滑に進みます。」

「ああ……多少出費は嵩むが、せめて異世界各国が我が国へ船を派遣できるほどまで技術を挙げてもらわないとな」

北米大陸が転移してから既に1年以上経つがアメリカ本土へ訪れる外国人は非常に少ない。

一年でアメリカ・カナダは第3文明圏を中心に貿易を行っているが、アメリカ・カナダ側の輸出は順調だが、輸入も両国が行なっている状態だ。

本土へ訪れる人も政府が直接船を派遣しなければ渡航すらできないのだ。

理由としては北米大陸の周辺海域は決して安定しているわけではなく東海岸ではタナトスなど筆頭に害獣被害

西海岸は安定しているもののハワイ沖などグラミラート王国へ航海する間の海域は天候が荒れ、アメリカ・カナダの船ならば十分航海できてもガレオン船や戦列艦などでは渡航できるような場所ではない。

異世界側も天候や海域、害獣などに左右されなければ渡航自体は可能だ。

中世、大航海時代のヨーロッパは世界各地広い範囲で植民地を求めてアジア、アフリカ、北アメリカと勢力を伸ばしたが、船の上で生鮮食品を十分に保存する体制がなかったヨーロッパは次々と壊血病へかかり、一時は船乗りがかかる病気だとも言われた。

しかし、異世界は冷蔵庫並みではないが、生鮮食品を保存する方法を魔法によつて確立されているためか、大航海時代よりは壊血病等による死者数は圧倒的に少ない。

異世界の各国は比較的それぞれの大陸ごとの距離が近いせいか、それほど補給物資を積まない。

それは大陸ごとに文明圏の国家が存在し、補給するための港湾が存在するからだ。

だが、北米大陸となれば話は別で例えそれほど広大な海を航海するだけの力を持つている国は中央世界か、第2文明圏くらいだろう。

アメリカ側としても異世界との貿易を円滑に進めるために異世界大陸側に拠点を置けないか、と考えられていた矢先にロウリア王国戦争である。

これに一部の人間は歓喜した。

異世界大陸側に領土を得ることができれば、そこで拠点をすることも可能だからだ。

その戦争で得られたのがバートニア州。

これによってアメリカやカナダはバートニア州を主軸に貿易を進めるのであった。開発は当然時間がかかってしまうが、それ以上に得られる利益が大きい。

バートニア州が位置する場所はロデニウス大陸とフィリアデス大陸との海峡であり、その一帯を抑えることで海運の確保、潜在的敵国家、パーパルティア皇国へ牽制する意味も持つ。

バートニア州には多くの移民が集まり、現在確認されているだけで80万人以上の異世界人が登録されている。

登録の際は厳密な選別によりスパイ対策も徹底されての80万なのだから、この数値がどれほど異常なのか、わかる。

国籍に関しては非常に厳しい審査を通過しなければ獲得できず、道のりも長かった。

「そうか、順調なら問題ない。今後あらゆる移民問題を想定して開発を進めるように頼むぞ」

「わかっております。」

「派遣艦隊に関してはどうか？」

「はい、今年から配備される第5艦隊と第2艦隊から創設した艦隊が駐留する予定です。」

「ふむ……」

と大統領は手元の資料を見ながら唸る

第2艦隊はともかく第5艦隊は新設された新造艦で埋められた艦隊であり、練度も訓練によって徐々に上がっているが、それでも戦闘経験者の数が少ないな…と思いつながらデータを見る。

「グラミラート王国やクワトイネ公国、クイラ王国、ムー帝国などへの輸出はどうだ？」
「はい、商務省国際貿易局からは全体的に黒字であり、特にムー帝国との貿易は今まで輸出できなかった電化製品やIT分野においてブラックボックス化できた製品を大量に輸出することができて、かなり経済的にも回復しているとのことです。」

各国に現在NATO同盟国の工業化では基礎工作機械（旋盤、ボール盤、中ぐり盤、フライス盤、歯切り盤、研削盤、プレス機など）は非常に好評で、工場建設や店舗の進出などかなり広い範囲で進められています。同盟国限定でバートニア州に留学する学生も増加の一方、バートニア州での開発がまだ完全にはできていないので対応できない部分があります。

国内の産業も最新機器を輸出できないので、どうしても成長が緩やかになってしましますが、大量の受注に数年先まで埋まっています。」

「なるほど、各国の工業化も順調であれば、彼らが独り立ちするまでそう時間は掛からな

いだろう。

軌道に乗れば数年で、我が国の商品を売りやすくなるだろう。

我が国も同盟国へ全面的なサポート体制をしっかりと行うように」

「はい、わかりました…それと大統領、もう一つお耳に入りたいことが」

「ほう…なんだね？」

「新型攻撃システムの打ち上げが近々行われることが決定しました。」

「…それは本当かね？」

「はい、まだ試作段階のものが多いものの、既に実戦に耐えられるだけの性能を保持しているとのことですよ。」

「…そうか、わかった。」

と大統領はほくそ笑みながらコーヒーを喉へ通す。

パーパルティア皇国

とある交易商

「おい、聞いたか？ボスタニア商会で文明圏外からの受注が激減して、かなり経営が危ないらしい」

「ああ、あそこは高品質な鉄製品を作っていたんだがな……ここ最近交易していた相手から交易の取り消しが相次いでいるらしい」

「それは俺も同じだ。綿花を売ろうとしたら、新しく進出した企業に良い製品が出たらしく、そこへ取引を変えた、クソ！あれでどれだけの損失が出たか……」

第3文明圏で交易する商人たちは基本的に国家によって立場が違う。

列強国の商人は文明圏・文明圏外の国家へ通常の何倍もの価格で販売し、富を吸い上げている。

対して文明圏や文明圏外の国家は列強国よりも技術や国力の差というものが開いているため、自国での産業によって列強国より高品質な商品を作ることが至難の技だった。

列強国の特権を使って交易する商人たちはここ最近での取引先が別の交易相手に変更し、こちらへ見向きもしなくなったということだ。

今まで高品質で大量生産を可能とする列強国でしか商売する相手がいなかった蛮族たちがこちらに対し高圧的態度になってきたというのが印象であった。

既に現時点で大損害を負っている商人もいるほど、この1年で大打撃となっていた。商人たちも新しく交易する相手がアメリカ・カナダということは分かったが、具体的にどういった国なのか、は未知数であった。

当然、自分たちも調査に乗り出し、バートニア州という場所で盛んに貿易が行われていることを知ると、早速部下や諜報員を派遣するが、アメリカやカナダの同盟国及び国交締結した国以外は一切入国することができず、試しに買収しようとしたが、逆にその買収しようとした部下や諜報員が捕まるという事態になった。

焦る商人や軍閥は何とかアメリカやカナダの情報を得ようとするが、なかなか情報を入手できずにいた。

「これもアメリカ合衆国やカナダ連邦とか言う国のせいか…」

他国で購入した製品を調査させたが、高品質だ…

しかもどれもこれもが一流の職人が作り上げたような作りだ…」

「俺も聞いたことがある、製品一つ一つが高品質で文明圏でも複製することがほぼ不可能。

しかも我が国も技術集団へ持っていたところ再現することは不可能と言われた。皇国のお抱え技術集団がダメだと靴を投げたらしいじゃないか」

「ああ…くそ…このままだと今月の交易はどこも赤字になってしまう…」

「皇国との繋がりにアメリカやカナダという国はない、俺たちでも調べる必要があるよ
うだな…」

「…それに最近のクワトイネ公国やクイラ王国、グラミラート王国はおかしい、つなぎ目
のない道路や夜でも明るく照らす灯、第1文明や第2文明圏で見られる列強国の魔導車
が見るようになったし、見たことのない工業施設や建築物もここ1年で爆発的に建設し
ている。」

我が国でも見たこのない超大型船や港湾施設の発展具合も急成長しているらしい
じゃないか」

「ああ、はつきり言ってその3カ国を中心とする発展具合が異常だ。」

もしかすると第1、第2文明圏の商人が第3文明圏に展開したのか？」

「いや、それはない、商人もいなかったからな、逆に見たことのない集団が見られるよう
になった。」

「分かった、俺の方でもっと調査してみよう」

ここ最近での売り上げ減少に危機感を抱いた商人たちが東方の各国へ本格的に調査
することになったが、それはパーパルティア皇国を中心に文明圏の商人も同じだった。

アメリカやカナダによって第3文明圏の経済は変わりつつあった。

今まで文明圏や文明圏外から富を吸い上げていた財閥や商人は間接的にアメリカや

カナダの経済力に押し出されつつあった。

3 1 試作兵器

アメリカ合衆国モンタナ州空軍基地

『発射5秒前、5…4…3…2…1…発射！』

「発射！」

基地でロケットが天へ登ろうと周辺に巨大な煙を発生させる。

ロケットはエンジンに点火すると徐々に自身を空中へ持ち上げる。

地面から離れた後、そのまま推進剤で噴射しながら、重たい機体を上空へ飛ばした。

ロケットは順調に空へ舞い上がり、何も見えなくなった。

ロケット打ち上げに携わるコントロールルームでは歓声が広がっていた。

ようやく新型兵器打ち上げに成功したからだ。

新型兵器は転移前から実用性の高い性能まで満たし、試験的に打ち上げ予定であったが、転移騒動により計画は一時凍結される事態まで悪化した。

近年新型兵器の必要性が高まり、今日打ち上げとなった。

「ジェネレーター号大気圏外へ突入、修正の必要性はなし。順調です。」

「うむ、そうか…」

「このままネバダ州からも打ち上げられた後、宇宙空間で構築されますので、完成が楽しみですね。」

「そうだな、私もこの計画が成功するのを祈っている。ロケットの弾道に問題ないな?」
「はい、こちらの宇宙空間も地球の時と同じ物理法則で本当に良かったと思います。地球より2倍ある惑星が地球の頃と変わらない環境や宇宙で変わらない空間で驚愕しましたが、NASAも太鼓判を押していますので、今後も問題は起きないか、と思います。」
「そうか、オーファン計画もようやく進むことができるのだな。」

この基地で最も権威ある司令官が無表情で返すが、内心では微妙な気持ちもあった。それはオーファン計画だ。現在アメリカ空軍と海軍が進める秘密新型兵器開発プロジェクト。

2018年中国及びロシアが宇宙兵器を極秘に開発していたことがCIAからの情報で判明した結果、アメリカは対抗処置として中露に対抗できる宇宙兵器の配備を進めた。

本来であれば宇宙空間に兵器を配備することは宇宙条約に違反することであるが、約

東事は1人でも守っていなければ無意味だ。

特に国際情勢の世界において大衆に伝えられる情報と事実の情報は異なることが多く存在する。

表面上お互い宇宙空間には兵器を配備しないことに善処しようと言っても、あくまでも国民に向けたプロパガンダであって、外交下では熾烈な諜報戦、貿易戦、サイバー戦と武力による総力戦とは別の手法で戦争は行われている。

アメリカ軍が進める宇宙兵器は重力エネルギーを利用した質量弾による地表への攻撃。

当初では最低でも高層ビルとその周辺地域に甚大な被害を及ぼすほどの威力のある質量弾であったが、計画は難航し、2020年に打ち上げたが、宇宙兵器通称『オーディン』は高温でも十分耐えられるタングステンか劣化ウラン製の質量弾が失敗したのだ。

質量弾自体は内部に取り付けられたロケットブースターによってマツハ15まで加速に成功した。

しかし、大気圏の摩擦熱によって内部のロケットブースターに亀裂や故障が入り、目標地点より逸れた形で着弾するか、途中でブースターが爆発することもしばしばあった。

2029年米中との関係悪化によりアメリカ上層部は中国の宇宙兵器を強く警戒し、

計画の完成を急がれた。

が、オーデインには解決できない問題が一つ発生した。それは現在地球で採掘できる金属物質での超高温にも耐える質量弾作成には難航したことだ。

対中戦争では中国が宇宙兵器を保有していたが使用しなかったのと早期に戦争が終結したことで計画は大きく修正させられた。

脅威となる中国が無力化されたことでアメリカはロシアを強く警戒し、計画であった人工衛星から投射される質量弾による攻撃システムを進めることになった。

計画は何とか進み、転移する直前まで宇宙へロケットを飛ばす予定であったが、これが突如中止する出来事が発生した。

それは転移騒動だ。

転移騒動によって仮想敵国であるロシアはおろか中国すらも事実上消失したことで、計画は中止派と推進派で派閥が別れる。

中止派の根拠は誘導兵器どころか、現代兵器すら持たない国家に通常兵器で十分勝利できるのと、魔法やドラゴン、魔獣、物量攻勢はミサイルや爆撃で十分対応できる。

推進派の根拠は誘導兵器の中でもミサイルをドラゴンや物量攻勢に仕掛けるのは費用対効果が悪く、一度に確実に拠点や制圧面攻撃に特化しているオーデインの方が有効ということと、既に完成間近のオーデイン計画を中止し、破棄するのは今まで投資した

費用が水の泡となることを指摘し、配備を進めるべき。

と対立があった。しかし、転移騒動から半年後、クイラ王国やグラミラー王国との貿易によって得られた新種の鉱物

『オリハルコン』

オリハルコンは山岳地帯の特に火山地帯でしか採掘できない鉱石で魔法剣士が使う魔法剣鍛刀に使用される材料であり、魔道伝達率の向上や魔法をより効率的に魔力を引き出すために使用されるらしいが、研究チームから驚愕する実験結果が出た。

オリハルコンは元々火山地帯でしか採掘できない鉱物の特性なのか、超高温にも耐えられる可能性があるということだ。

研究所は他の異世界から採掘できる資源も調査し、オリハルコンの性質及び他の元素同士を組み合わせる合金開発を行った。

その結果、オリハルコンと相性が良かったタンングステンとの合金金属は双方の特性が合わさったことで非常に優れた耐久性と耐熱性、純粋なタンングステン製よりも合金金属で作る金属が遥かに軽量という結果も出た。

採掘できる量も多くないため大量生産には向かないが、これに目をつけたのはアメリカ海軍と空軍だ。

この特殊金属を政府はトップシークレットとし、少数ながらクイラ王国やグラミラー

ト王国で採掘が開始された。

オリハルコンは耐熱性に優れている特性上溶かす加工は簡単ではないが、タングステンとの組み合わせにより強力な金属となる。

そして、試験的に完成したのは今から1ヶ月前、試験は飛行機から落とすという単純な手法であったが、効果は絶大に発揮され、地表に存在する目標群を破壊するだけに止まらず、地中まで半径500m圏内の深さ300mほどが破壊され、めくれ上がっていた。

試験時には3mという短い弾頭であったが、これほどの効果に上層部は驚愕し、配備検討を進めた。

そして、今日ようやく計画の先駆けとなる最初のコントロールシステムを搭載した衛星を飛ばす。

計画時ではおよそ6m・8mと二種類の弾頭を軌道に乗せ、発射システムから弾頭が発射される予定であったが、思いもしない素材の発見で小型化に成功したため、4mの質量弾を多数搭載した状態で宇宙圏に飛ばす。

「まさか、異世界に来てから計画が加速するとは柵から牡丹餅というのはまさしくこのことですか」

「今までの技術や素材では不可能だった超高温にも耐える金属が見つかったからな。この世界にはまだまだ新種の元素や生物も発見されているようだ。」

「この前送られて来た、確かワイバーンでしたっけ？野生のワイバーンを捕獲したとのことですが、驚くべき生態データに研究所も顔色を真っ青にしていましたからね。」

「ワイバーンか、この世界の航空戦力の主力となる兵器だな」

「はい、時速も230km程度と遅いですが、中世の世界で見れば十分な戦術兵器とも言えますね。」

「ムー帝国や神聖ミリシアル帝国ではワイバーン以外の独自の航空戦力を持っているよのだが、CIAからは何か情報が入っていないのか？」

「神聖ミリシアル帝国からはそもそも接触すらしていないのでわからない状態ですが、ムー帝国の戦闘機は複葉機とのことです。」

「複葉機か、独自の技術だけで飛行機を作ったということだから凄いことものだな…」

ワイバーンという存在が飛行機開発の推進に影響した可能性もあるな。」

「はい、この計画が成功すれば相手がいかに理不尽な魔法があっても確実に我が方の被害を少ない状態で勝利することができます。」

「そう、だな：核兵器もこれで少なくなってくれば万歳なものだ。核兵器も結局は抑止以外で使い道のない兵器だからな」

「核兵器並の攻撃力と放射能など有害物質を一切出さない新戦略兵器開発は次世代戦略兵器に直結します。」

「これでもよく実現ができたな：と驚きました。」

「最初は失敗ばかりだったからな、流石にズムウォルトのように大金をかけたものが結局使い物になりませんでしたなんて、シャレにならない」

「確かこの計画も順調に進めば4ヶ月後には運用開始だったな？」

「はい、一番の難関でした大気圏突破も順調ですし、ここからは空軍の連中が担当しますね」

「ああ、成功すればいいものだ：」

と二人はレーダー上に映るロケットを見ながら、それぞれの思いを寄せて見るのであった。

場所は変わってアメリカ合衆国バージニア州、ノーフォーク造船所

ここではアメリカ海軍の様々な軍艦が整備・修理・建造などが行われ、海軍屈指の軍

港であつた。

とある上官室

『なぜですか!!!』

と怒涛の勢いで怒鳴る将官が目の前の上層部の人間に怒鳴っていた。

「何度も言っているだろう。この世界に新型艦艇は必要ないのだ。敵国や生物も脅威となる水中兵器や宇宙兵器も確認されていない。それならこの計画を中止し、消失した戦力の補填として人材や資金、資材も回した方が遥かに効率良いだろう?」

「確かにこの世界には潜水艦や脅威となる海獣、宇宙兵器もありませんが、計画は何年も前から進められ、ようやく進水式が始まるところで建造中止など正気の沙汰ではありませんよ!」

「だから、新型艦艇を作る費用で一体どれだけの艦艇へ建造する時間が短縮されると思っている? 君の気持ちもわからなくはないが、これは政府が決定したことだ。わかってくれ」

「…進水式が始まる予定の新型艦艇はどうされるのですか?」

「そうだな、進水式まで進めた艦艇の予算を回そう、それ以外は全て計画を凍結する。今このアメリカに求められるのは汎用性の高い長距離航海を可能とする駆逐艦だ。」

例え計画の7隻が就役したとしても新型艦艇よりビートルクス級を建造した方がまだ、多くの艦艇を揃えられる。」

「し、しかし、ビートルクス級では対潜戦闘はイージスシステムと変わらない性能ですよ。万一高速で動く水中目標に遭遇した場合どうされるのですか!」

「水中を高速移動できる生物や兵器はこの世界には存在していない、と上層部は判断した。これ以上の意見は許さないぞ。」

「く、くう…」

と悔しく拳を作るが、無念にも将官が進める新型戦闘艦計画は凍結となった。

悔しながら無念にも部屋を追い出され、自分の執務室へ戻る将官

ロウリア王国戦との戦いにおいてロデニウス沖海戦を勝利へ導いたパターソン少将であつた。

「こつちの世界に来てても上層部の考えは甘すぎる!俺たちがこの世界に来てからまだ、1年くらいしか経っていない! たった1年で何がわかるというのだ! まだ衛星で調査しきれていない地域や、この惑星の全体の戦力や技術もわかっていないくせに!」

と自室で机に向かって殴るが、パターソンは異世界へ転移してからもタナトスの海獣

生物や魔法という存在を強く警戒していた、万一高速で動く水中目標が現れた場合、今のアメリカ軍ではいかにイージスシステムだろうが、空母だろうが、水中目標に攻撃できる手段は限られるし、物理法則が通用しない魔法に対しての対処方法も正確に決まっていない。

タナトス以外で大型種で水中速度30ノット以上動く物も確認されている。

生物で30ノットということはもし、この世界で水中型の生物兵器が既に存在し、その保有国が俺たちアメリカやカナダのことを理解すれば当然対策を講じる。

対策を講じられた後では遅く、相手が対策を出す前に先を見なければ戦争で不利になる可能性もある。

戦争は兵器のみで戦術的優勢に立つには少なくとも2世代以上先進んだ技術格差がなければいずれ1世代程度などすぐに追いつかれてしまい、対策を出される。

今は確かに戦列艦やワイバーンといった異世界の兵器は脅威にならないことは間違い無いだろう。

だが、将来はどうか？

この世界には魔法や地球には存在しない生物や自然環境などが多く存在する。

しかも弱肉強食と19世紀時代のヨーロッパの植民地支配より過酷な世界といっても過言ではない。

しかし、空軍も海軍の上層部やペンタゴンの連中も既存の兵器量産、新兵器開発は一時的ストップ、魔法や魔獣、海獣、異世界軍の兵器調査の結果、中央世界以外ではアメリカ軍が圧倒的に有利に立ち、既存の兵器だけで数百年は対抗できるものはいないということだ。

これに反対する筆頭もいるが、ここ一ヶ月の間に起きた出来事でロウリア王国戦やパーパルティア皇国の航空戦力・艦隊などを見事に蹴散らし、ムー帝国の兵器などを分析した結果、新兵器でなくても既存の兵器で十分優位に立てると判断され、新兵器開発は3割以上後回し、既存の兵器を再生産するに集中方針となっている。

確かに今は余裕で勝利できるかもしれないが、果たしてそうだろうか？

これが慢心にならないことを彼個人として強く祈っている。

海軍将官だけではなくアメリカ軍関係者は特に熟練した高齢層は反対するが、若年層や中年層などは完全に異世界軍などは自分達には敵わないと思う考えが蔓延し初めていた。

パターソン少将も中国戦争で活躍した歴戦の海軍少将であり、彼の功績で中国第二空母群を南シナ海でアメリカ側空母打撃群1個に対し、中国東部戦区と南部戦区を担当する2個中国艦隊を撃退しただけではなく、空母を2隻、駆逐艦5隻、潜水艦2隻を撃沈

する戦果をあげ、味方の損害は駆逐艦1隻大破のみという戦果はまさに軍神といつても過言ではなかった。

パターソン少将の他にも活躍した兵士は多くおり、経験が豊富な熟練とした兵士たちは心配する声もあった。

そもそも、転移騒動によつて消失した戦力は新兵器で導入すると議会では決まっていたものが、1ヶ月前突如方針を変えた。

これは数ヶ月前から発生する国民によるデモが原因だと思われる。

国民は当初異世界の戦争に不安な声をあげるが、ロウリア王国戦、列強国であるパーパルティア皇国の航空兵力や艦隊を蹴散らした情報が入ると軍が使っている予算を復興へ回すべき、と声をあげ始めた。

異世界には基本的には渡航に制限はかけているが、ジャーナリストや評論家なども全て遮断しているわけではない。

これがかきつけで国民に断片的な情報が渡っていた。

最初の一つの州であったことが徐々に連鎖的に広がった。

大規模な国民運動にさすがの大統領や議会も声を無視するわけにはいかず、予算を取り上げることにはしなかったが、予定されていた追加予算はなくなつた。

当然ながら軍備強化というものとはとにかく資金がかかる。

兵器を開発生産しても、兵士の育成というものは旧ソ連軍が兵士は畑から取れるように簡単ではない。

そもそも、畑から取れるというのは農民を徴兵することでソ連軍は人的資源に恵まれただけで、もし、ソ連が人道的な手段でドイツ軍と戦えば敗北する可能性もあったのだから、ある意味国を存続させるという視点においてソ連の手法は間違いではない。

一つの兵器という道具を熟知し、戦術的行動を取れ、数ヶ月以上という厳しい訓練を経てから、ようやく軍人として認められる。

その分の教育費というものも多くかかり、軍部は追加予算が出ないことを前提に計画を見直し、既存の兵器を生産することで予算を何とか予算内で収まるよう計画した。

「いくら国民の声を無視できないからといってこんなことが認められるものだろうか：断片的の情報しか認識できない国民を一体どうすればいいというのだ：せめて進水している艦艇だけでも早く就役させなければ…」

とパターソン少将は窓から見える大型戦闘艦がドックの中で溶接の光や重機から発生する音がかすかに漏れる空間で、見ていた。

アメリカ海軍戦略戦闘艦計画

クリミアーナ級駆逐艦
数日後に慣熟訓練へ入る。

32 魔王軍爆誕

グラメウス大陸南東部

広大な森林地帯が広がり、空は黒く染まっていた。

森の中には野獣の咆哮が響く

森も赤く染まり、不穏な空気を作り出す

樹海の奥地へ進むと岩山をくり抜いたような煉瓦造りの建造物があった。

建造物からは煙突や倉庫が建ち、全体的にかなり朽ち果てていた。

施設の一角で周りに化学薬品や怪しいカプセル、ホースが床に散乱している薄暗い空間に松明で照らされている影があった。

「・・・よし：いいぞ：これでやつと完成した。これらがあればあの忌まわしい星の戦士どもを駆逐できる。」

その人物は人間とは思えない重く不気味なオーラを放出し、全身が黒く、頭から赤い角が特徴で、黒い破けたマントが印象的の人型生物

魔獣を率いる魔王軍の王者

魔王ノスグーラ

魔王は数多くの魔獣生物を統括する魔獣・魔人族を率いる。

その生まれは謎に包まれ、古代歴史によれば突如としてグラメウス大陸に現れた魔人ノスグーラは大陸中の魔獣や魔人族を統制した。

一説では魔人族の中でも圧倒的実力と優れた統制能力により一気に上り詰めたとか
そんな彼は森奥深くで野望のために日々研究・実力を向上させるため、魔王は魔術を研究していた…

そこへ誰かが部屋の中へ入ってきた

「魔王ノスグーラ様、ついに完成されたのですね…」

「マラストラスか、そうだ、この新型の魔導制御装置があればあの忌まわしい星の戦士も恐るに足らない」

「さすがノスグーラ様でございます。まさか魔法帝国の魔力制御装置から発展させ魔導

制御装置を生み出すとはノスグーラ様の聡明な知識と技術力、魔術には感服いたしました。」

「ふん、二匹のトカゲどもはどうなっている？下種どもが輸送してくるはずだろ？」

「はい、二匹とも魔法帝国の拘束器具によって完全に安全な状態で輸送されております。あと数日もすればこの研究所へ転移装置で転送される予定です。」

「ふふふ、少しはあの下種どもも役には立つてはいないか。魔法帝国が復活した暁には少しは認めてやらんでもないな」

「いえいえ、あのような下種ども、所詮血は流れていようととも下級愚民との混血でございます。所詮下種はどこまでも下種の存在でしかありません」

「く、くく、くつはははははははは!!確かにな!星の戦士を蹴散らした暁には滅ぼしても良いかもしれない!」

とノスグーラは笑いながら、制御装置へ目を向ける

それは六角形の赤い、とても美しい宝石だ。しかし、その本質は対象物を強力な魔力で術者の意のままに操ることができる魔導制御装置

対象物の持っている魔力によっては死に至らすほどの強力な魔力は古代龍でさえ、勝るほどの魔力を持つ。

もし、これを人間に付けられた場合、人間の自我は消え、ただの操り人形となる。

これを解除するには術者を殺害するか、宝石そのものを破壊するしかない。

だが、術者は魔王であるノスグーラで、宝石はノスグーラが星の戦士に対抗してかなり強力な防御魔法や物理攻撃を緩和する魔法や火・水・氷などの特殊魔法にも耐性を持った強固な宝石となっている。

この宝石は制作に2ヶ月と多くかかるが、何とか2個制作することができた。

「それに新型汎用自立2足歩行型陸戦兵器の方も研究が進んでいる」

とあつちこつちに魔導線が繋がれた生物が静かに巨大な大砲を抱え静かに鎮座していた。

それは魔王ノスグーラが陸戦兵器エンシントカイザーゴーレを更に強化させた対星の戦士用決戦兵器であった。

巨大な大砲も砲身が長く、星の戦士が持つ鋼鉄の地竜を一撃で吹き飛ばす威力を持っている

ノスグーラは以前星の戦士との戦いを思い出していた

奴らは空飛ぶ船、鋼鉄の地竜、鋼鉄の海獣、巨大な爆竜を従い、魔王軍を苦しめ、幾多の戦いで彼らが持つ兵器を無力化には成功したものの結局物量と圧倒的火力を前に

惨敗するしか、なかった。

だが、今は違う。

奴らが進んでいようとこつちも技術を進化させている。

偉大なる魔帝様が持つ兵器が敗北するなど、あり得ない。

新型陸戦兵器には魔導砲を搭載した対鋼鉄の地竜用の陸上兵器や相手が鉄の弾で攻撃するのなら物理障壁魔法をオークなどに発動させれば十分耐えられる。

ゴブリンにも銃弾にも耐えられるよう装甲を身につけ、新しく開発した移動式長身魔導砲車も配備した。

さらに魔法帝国の旧式ではあるが、フォルラートや擬態能力を持つドツペルゲンガー これらも偉大なる魔帝様の技術を応用し、何とか開発できた人工生物兵器だ。

元は魔獣であるが、魔獣の遺伝子組換えを行い、人工的に生み出された対星の戦士用兵器。

たつたの数ヶ月という短い時間であつたが、何とか対星の戦士戦力を少数ながら配備することができた。

対星の戦士戦術用として既に考案されている。

忌まわしい星の戦士どもよ、我ら魔帝軍に逆らつたことを後悔するが良い。

とそこへ一人の男性が扉を開けて、入室してきた。

「来たか、下種よ、例のドラゴンは連れて来たな？」

「はい、例のものは既に搬入させております。資材も」

「ふん！下種もたまには役に立つではないか。私の気が変わらぬ内に去るが良い。」

「・・・はい」

男性はゆつくりと下がっていく

「ふふふ、これで奴らに勝利できる。例え奴らの空爆が来たとしても奴らの空飛ぶ船なので、全て地面に叩き落としてくれる！」

魔王軍の軍備強化や魔法強化も全て星の戦士がグラメウス大陸で見かけるようになってから始まったことで2ヶ月ほど実行を延期し、トーパ王国侵攻計画を立てていた。

星の戦士達の拠点もついに分からなかったが、噂ではグラメウス大陸より南部に奴らの基地があると第一次侵攻作戦の報告記録では書かれている。

そこにトカゲどもを導入すれば我ら魔帝軍に敵なし！

「いよいよですな・・・愚民どもに教育する時が」

「うはははははは!!!この世界に誰がこの世界の王者に相応しいのか、教えてやろう！偉大なる魔帝様の前にひれ伏すだろう。全ては魔帝様のために・・・」

「星の戦士はいかがいたしますか？」

「そうだな…星の戦士はどうやら我が魔王軍が侵攻した忌まわしい亜人どもが住まう大陸に拠点を持つっていると情報が入った。その拠点から艦隊が停泊していることもな。制御装置を取り付けた炎龍に襲わせれば撃退が可能だろう。」

「しかし、上空から近づいては奴らの持つ空飛ぶ船や爆裂魔法を仕込んだ砲弾で撃退されるのでは？」

「ふふふ、確かに奴らの持つ火力は大火力だ。我とで吹き飛ばすほどにな、だが、奴らの持つ地竜や銃では我の前に効かぬ、物量攻勢の前に陸戦兵器はどうかできるだろう。」

新型の陸戦兵器を開発したのだからな

要は奴らの空と海を無力化すれば良いだけだ。

奴らにも致命的な弱点がある。致命的な弱点がな」

「致命的な弱点です…か？」

「そうだ、奴らの空と海の戦力は基本的に海から攻撃して来る。ならば陸上でしか生きられない奴らを沈み込めば良い。」

我には既に忌まわしい星の戦士が持つ艦隊を滅ぼす算段はついている。」

「さすがノスグーラ様です。」

「それだけではない。奴らは召喚された強力な軍隊だが、奴らの持つ大火力には我らの

ような魔力とは違い物資が生産されなければ奴らはいずれ大火力を發揮できない。

奴らには拠点があってもあれほどの膨大なエネルギーを生産することは出来まい。

つまり、海と空を制すれば我らに刃向かうことは出来まい。

物量攻勢で攻めれば奴らを滅ぼせる。」

「戦力の方もオーク、ゴブリン、ドラゴン、陸戦兵器も…それと北にいるヴァンピーアも従順に従っています。」

「ふふふ、魔帝の奴隷にも役に立つてもらわないと困るからな…人質はどうだ？」

「はい、地下牢の方に幽閉しております。」

「よし、これで我に勝てるものはいない。例え星の戦士だろうが、奴らの兵器は破壊され、奴らを魔獣の餌にする前にこの世界の終末を見させた後、魔帝様が復活された際、処刑してやろう。愚かな人間どもめ、魔帝様の力を思い知るが良い！フハハハハハ!!!」

と狂ったような笑い声が研究所内を響き、それに応えるかのように魔獣や部下たちも応える。

魔王軍はたった一つの出来事によって軍備強化し、2ヶ月でトーパ王国へ侵攻する予定であった戦力の数倍以上にも膨れ上がった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……着いたみたいぞ？起きるのじゃ」

「……うるさい、余計なことを喋るな」

「あらあら、そんなにカツカしても何も始まらないぞ？炎龍？」

「……やつと、やつとあの星の戦士どもに復讐ができるのだ、落ちついていられない。

今すぐにも奴らを食い殺し、皆殺しにするのだ」

「それはこの『新しい主人様』に言うてからにするのじゃな、いずれその時は来るぞ」

「ふん、お主は誇り高き氷龍も人間どもに従順とは落ちたものだな」

「ほう？それなら、その人間どもにコテンパンにされた後、復讐を待っている龍は誰かの

うっ？」

「それ以上喋ればその首を搔つ切るぞ」

「ほうほう、怖い怖い、じゃが、復讐に行くのは構わないが、勝算はあるのか？前と同じ

じゃ前の二の舞になるぞ？」

「……………我だつて何も学んでいないわけではない。奴らにも弱点はあった。それを突けば奴らはお馴染みの大火力魔法を使うことができない」

「それは興味あるのう、どんな弱点かしら？」

「……………簡単なことだ。人間どもは所詮陸上でしか生きられない。それを追求すれば答えが出る」

「ほうほう、それは面白いことを言うのう、我も考えてみよう」

「……………ふん」

とこれ以上喋ることがないのか、そのまま黙った炎龍

口からは炎が漏れており、目つきも完全なる獲物を狩る、捕食者の目となっていた。

（……………まさか我も封印から解かれるとはな、離脱したいところじゃが、何か良い方法はなにかのう…流石に首に付いている制御装置を破壊するのはほぼ不可能。だからと言って我らドラゴンを助けてくれるもの好きな人間なんていない。でも、このままでは魔帝が復活した際、実験台や兵器にされるなんて、例え勇者と戦うことになっても絶対に嫌じゃ…何か良い方法…）

と思案する

その隣の檻の中で目を瞑る炎龍も考えていた

（星の戦士：俺にとって因縁の相手、人間どもや亜人どもはそれまでただの食料でしかなかった。そんな食料が牙をむいて反抗するなぞ、食料の分際で愚かな人間どもめ：この次の戦いは我がお主達を食い殺してやる…）

かつて炎龍は大陸の中で天災と人々から言われ、凶暴で惨忍な古代龍であった。

動物も人間も亜人も全て餌

破壊と戦いを好む炎龍は全てを破壊する。

炎龍一体でどれほどの生命が血を流し、文明を破壊されたか、数知れない。

そして、魔法帝国に捕獲されるまで炎龍は本能の思うままに生きた。

魔法帝国に捕獲され、制御装置で操られ、憎しみで溢れていた。

『餌』ごときに捕縛されるほど炎龍はおとなしくは捕まらず、最後まで抵抗したが、捕縛された。

それから魔法帝国軍、魔王軍と共に数々の国を滅ぼし、炎龍にとって退屈の日々でもあった。

だが、突如現れた敵勢力によって炎龍は退屈から憎しみの日々へと変わった。

それいつらは見たことがない空飛ぶ乗り物や巨大な鋼鉄の船、地を走る鋼鉄の車どれもが炎龍にとって知らないものばかりで、炎龍自身別にどうでもよかった

なぜならそいつらがどうしようと結局敗北することは知っている。

いつものように炎龍は魔王軍に操られるままにロデニウス大陸を襲った。

あの戦いで炎龍の運命は変わった。

そいつらは星の戦士

星の戦士は見たことのない攻撃方法で炎龍を苦しめ、最後には星の戦士が持つ鋼鉄の海獣との戦いで生じた魔力の暴走によって相打ちとなり、長い間炎龍は眠りについた。

長い間、炎龍は傷を癒すために眠りに付き、目が覚めると施設は廃墟となり、目の前にいた忌まわしい光の翼人ではなく、ただの人間であった。

その人間は光の翼人の末裔だと言う。

だから、大人しく従えと言われた。

最初こそただの餌如きに従わせることに怒り、暴れるが、すぐに行動を封じられた。

それは魔法帝国が取り付けた制御装置

これによってまだ、操られた。

だが、長い間で魔力が失われており、効力もなくなりつつあった制御装置を破壊しようとするが、一つの言葉で炎龍は動きを止める。

『星の戦士と再び戦いたくないか？』

と言う言葉

星の戦士を憎んでいる炎龍はその言葉に従い、星の戦士との戦いを望んだ。

炎龍とはいえ、風竜と同じく人間の言葉を理解できる知能の高い龍だ。

強き者が現れた場合、強きものが勝利する。

自然の摂理であり、弱肉強食である世界において炎龍はもし、強敵が現れたのなら戦い潔く散る

しかし、叩き落とした敵は餌である。

絶対に奴らを殲滅してやる…炎龍の力を思い知るが良い。人間どもめ…必ず奴らに地獄を見せてやる…

思い出される鋼鉄の海獣との戦い。

鋼鉄の海獣から放たれる火力は炎龍の魔力でさえ防ぐことができないう大火力

何とか接近することができたため、鋼鉄の海獣にも損傷を負わせることができた。

最後の魔力暴走によって他の鋼鉄の海獣も巻き込んで吹き飛んだはず
今度はこつちが蹂躪する番だ：

待っている、お前らが大事にするものを全部食らってやる

と憎しみの籠った視線を海上へ向ける

グラメウス大陸南東部秘密港湾基地

「くそー出来損ないの癖に調子に乗りやがって！星の戦士対策に我らが付いていなければお前達は敗走するしかない失敗作め！」

と近くにあった木箱を蹴飛ばす。

港湾施設自体それほど発展しているわけでもなく、必要最低限の荷物の積み下ろしができるよう超重機が1〜2個設置され、倉庫がある程度だ。

その施設自体も最近できたばかりで新品さの面影を残しているが、港湾に訪れる船舶は1隻だけと少ない。

停泊している船舶も鋼鉄製の100mを優に超える大型艦

この世界の船舶にあるマストや大砲はなく、近代的な艦橋、回転式砲塔を持つ主砲、船尾は何かの動力源となる青い光が漏れていた。

「まさか、あいつらから頼んでくるのだから少しは役に立つのか、と思えばとんだ失敗作でしかないじゃないか！」

一人の男は壁に拳を叩きつけながら考える。

こんなこと本国の命令でなければ絶対に失敗作などに支援はしない。

だが、かつて魔王軍を撃退した『星の戦士』の出現には正直半信半疑であった。

星の戦士は彼にとっても頭を抱える存在であった。奴らの出現によって計画が全て水の泡となった。

ロデニウス大陸を制圧した後、第3文明圏を魔王軍で掌握し、第1・第2文明圏に対し強力な兵器と物量攻勢を持って殲滅する。

そして、魔法帝国を復活させる。

これが計画していたことだった

どこかの亜人風情が星の戦士を召喚してから全てが狂った。

星の戦士はあらゆる魔王軍の攻勢を退け、あの古代龍の中で最強の種、炎龍でさえ退けた。

魔王は現地民によって封印され、魔獣も星の戦士によって撃退された。

それから我らで再び魔王を復活させ、星の戦士がいなくなった今であれば十分侵攻は問題ないだろうと思われた。

その矢先に現れたアメリカ・カナダという新興国家

彼らを持つ兵器や文明は非常に星の戦士と酷似している。

だからこそ魔王軍が援軍を求めてきた時は戦力援助した。

お互いの利害一致したからこそできたことだ。

これでアメリカ・カナダという星の戦士も屈服できるだろう。

全ては魔法帝国復活のために……

それから数日後、ロデニウス大陸へ海上から向かう一匹の龍がいた。

龍は久しぶりに会う『星の戦士』に憎しみの目でまだ、見えない地平線の彼方を見る。

行き先はとある海域に向かっていた。

そこはアメリカ海軍第2空母打撃群旗艦ジエラルド・R・フォード級3番艦エンタープライズ率いるロナルド・ウース駐留艦隊であつた。